

吉岡下ノ段遺跡第17次調査 瀬戸山Ⅰ遺跡第7次調査

発掘調査報告書

2022年

掛川市

吉岡下ノ段遺跡第17次調査 瀬戸山Ⅰ遺跡第7次調査

発掘調査報告書

2022年

掛川市

例 言

- 1 本書は、令和元年度に現地調査を実施し、令和2年度及び令和3年度に整理調査を行った、吉岡下ノ段遺跡第17次調査と瀬戸山Ⅰ遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、茶園の改植に伴う緊急調査で、国及び静岡県補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は掛川市教育委員会が主体となって、吉岡下ノ遺跡は社会教育課の夏目不比等、瀬戸山Ⅰ遺跡は同課の長井郁織が担当した。
- 4 発掘調査にあたっては、地権者・耕作者の方々の、埋蔵文化財に対する多大なるご理解とご協力を頂いた。
- 5 発掘作業及び報告書作成にあたっては、次の方々の参加を得た。(五十音順、敬称略)
太田敏子、大場永吏見、大庭鉄郎、大場幸仁、市川清、小笠原国重、加藤香子、北嶋秀雄、斉藤昭、早乙女のぞみ、設楽学、設楽公子、清水欽次、榛葉順英、鈴木猛司、鈴木光夫、鈴木良晴、竹田徳子、寺沢巧、徳川浩、中畠陽子、長尾秀雄、野中きみ子、原田静雄、深田重男、藤田弘、藤田房幸、藤田理恵、堀内幹弥、松浦良和、溝口玉緒、村松信夫、森川孝之、山崎シズ、山崎富士男、山崎行弘、山本まさみ
- 6 現地調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を頂いた。
(五十音順、敬称略)
長田友也、笹原千賀子、篠ヶ谷路人、鈴木敏則、塚本和弘、富樫孝志、平野吾郎、松本一男、向坂鋼二
- 7 現地調査写真は6×7mmブローニーモノクロフィルムカメラ、35mmカラーネガフィルムカメラ及び35mmカラーポジフィルムカメラの3台と、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズAPS-C)を併用した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラ(センサーサイズAPS-C)を使用した。
- 8 本書はInkscape、Gimpによるデジタル編集を行った。
- 9 空中写真撮影は、掛川市教育委員会の委託を受けた株式会社フジヤマが行った。
- 10 本書の編集は掛川市役所の長井郁織と戸塚和美が行い、執筆は長井郁織・戸塚和美・井村広巳(掛川市役所)、大熊茂広(掛川市教育委員会)、松本一男(大日本報徳社)が分担し、夏目不比等・柴田慎平(掛川市役所)がこれを補佐した。
- 11 調査によって得た資料は、すべて掛川市文化スポーツ振興課が保管している。

凡 例

- 1 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は座標北(G.N)である。使用した座標数値は、国家座標(世界測地系)に基づいている。
- 2 本書で使用した遺構表記は、次の意味である。
SB：竪穴住居跡 SH：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構 SK：土坑 SX：性格不明遺構 SP：小穴
- 3 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
- 4 本書で使用した柱間寸法は、柱穴中心間の距離である。
- 5 本書の図中で用いたスクリーン等使い分けについては、以下のとおりである。それ以外については、各図中で表記した。

：張り床 ：焼土・炉範囲

本文目次

例言・凡例

I	はじめに	1
1	調査にいたる経緯	1
2	遺跡をめぐる環境	1
(1)	地理的環境	1
(2)	歴史的環境	3
①	吉岡下ノ段遺跡	3
②	瀬戸山 I 遺跡	5
II	調査に至る経緯をと調査の目的	7
1	吉岡下ノ段遺跡	7
2	瀬戸山 I 遺跡	7
III	調査の方法と経過	7
IV	調査の内容	9
1	吉岡下ノ段遺跡	9
(1)	遺構	9
①	竪穴住居跡	9
②	掘立柱建物跡	20
(2)	遺物	25
①	縄文土器	25
②	弥生土器・古式土師器	27
③	土師器・須恵器	36
④	石器	36
(3)	まとめ	37

2 瀬戸山 I 遺跡	39
(1) 遺構	41
① 縄文時代	41
i 竪穴住居跡	43
ii 小穴・土坑	45
iii 性格不明遺構	45
② 弥生時代後期から古墳時代前期	48
i 竪穴住居跡	48
ii 掘立柱建物跡	78
iii 土坑・小穴	85
iv 性格不明遺構	87
③ 中世	90
i 土坑群	90
(2) 遺物	94
① 石器等の遺物	94
i 旧石器時代の石器	94
ii 縄文時代の石器	95
iii 古墳時代以降	99
② 縄文土器	99
i 遺構出土土器	99
ii 遺構外出土土器	109
③ 弥生土器・古式土師器	119
④ 山茶碗・陶器	148
(3) まとめ	146

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	吉岡下ノ段遺跡位置図・第17次調査地点グリッド配置図	4
第3図	瀬戸山Ⅰ遺跡位置図・第7次調査地点グリッド配置図	6

吉岡下ノ段遺跡第17次調査

第4図	吉岡下ノ段遺跡第17次調査遺構全体図	9
第5図	SB01実測図	10
第6図	SB03実測図	11
第7図	SB04実測図	12
第8図	SB05・07実測図	13
第9図	SB06実測図	15
第10図	SB08実測図	16
第11図	SB10実測図（1）	17
第12図	SB10実測図（2）	20
第13図	SB11実測図	21
第14図	SB12実測図	22
第15図	SH01・SH02実測図	23
第16図	SH03・04実測図	24
第17図	SH05実測図	25
第18図	出土遺物実測図（1）	26
第19図	出土遺物実測図（2）	28
第20図	出土遺物実測図（3）	30
第21図	出土遺物実測図（4）	32
第22図	出土遺物実測図（5）	34
第23図	出土遺物実測図（6）	35

瀬戸山Ⅰ遺跡第7次調査

第24図	瀬戸山Ⅰ遺跡第7次調査遺構全体図	39
第25図	SB37・63実測図	42
第26図	SP114・409実測図	43
第27図	SP689・695実測図	44
第28図	SP1205・SX03実測図	46
第29図	SX05・13～15・18実測図	47
第30図	SB01・02実測図	49
第31図	SB03実測図	50
第32図	SB04・05実測図	52
第33図	SB06・07実測図（1）	53

第34図	SB06・07実測図（2）	54
第35図	SB08・09・11・12実測図（1）	55
第36図	SB08・09・11・12実測図（2）	56
第37図	SB10・13実測図	57
第38図	SB14実測図	58
第39図	SB15・16・21・45実測図	60
第40図	SB18実測図	61
第41図	SB19実測図	62
第42図	SB22実測図	63
第43図	SB24実測図	64
第44図	SB25実測図	65
第45図	SB27実測図	65
第46図	SB29～32・34実測図（1）	67
第47図	SB29～32・34実測図（2）	69
第48図	SB38・41実測図	70
第49図	SB42・44実測図	71
第50図	SB43・61・62実測図	72
第51図	SB46実測図	73
第52図	SB48実測図	74
第53図	SB49実測図	75
第54図	SB47・50・51・57実測図	78
第55図	SB59実測図	78
第56図	SB60実測図	79
第57図	SH01・02実測図	80
第58図	SH03実測図	81
第59図	SH04実測図	82
第60図	SH05・09実測図	83
第61図	SH06実測図	84
第62図	SH07実測図	85
第63図	SH08実測図	86
第64図	SK05・08実測図	87
第65図	SP395実測図	88
第66図	SX04実測図	89
第67図	SX09実測図	90
第68図	中世土坑群実測図	91
第69図	出土遺物実測図（1）	96
第70図	出土遺物実測図（2）	98
第71図	出土遺物実測図（3）	99
第72図	出土遺物実測図（4）	101
第73図	出土遺物実測図（5）	103

第74図	出土遺物実測図 (6)	104
第75図	出土遺物実測図 (7)	107
第76図	出土遺物実測図 (8)	108
第77図	出土遺物実測図 (9)	110
第78図	出土遺物実測図 (10)	114
第79図	出土遺物実測図 (11)	116
第80図	出土遺物実測図 (12)	118
第81図	出土遺物実測図 (13)	119
第82図	出土遺物実測図 (14)	120
第83図	出土遺物実測図 (15)	122
第84図	出土遺物実測図 (16)	124
第85図	出土遺物実測図 (17)	126
第86図	出土遺物実測図 (18)	127
第87図	出土遺物実測図 (19)	129
第88図	出土遺物実測図 (20)	132
第89図	出土遺物実測図 (21)	133
第90図	出土遺物実測図 (22)	135
第91図	出土遺物実測図 (23)	137
第92図	出土遺物実測図 (24)	139
第93図	出土遺物実測図 (25)	140
第94図	出土遺物実測図 (26)	142
第95図	出土遺物実測図 (27)	144
第96図	出土遺物実測図 (28)	145

写真図版目次

- カラー図版 1 上 吉岡下ノ段遺跡 調査区遠景（南東から）
下 吉岡下ノ段遺跡 東側調査区全景
- カラー図版 2 上 吉岡下ノ段遺跡 西側調査区全景
下 吉岡下ノ段遺跡 SH01・02完掘状況（北から）
- カラー図版 3 上 瀬戸山Ⅰ遺跡 調査区遠景（南から）
下 瀬戸山Ⅰ遺跡 調査区遠景（北西から）
- カラー図版 4 上 瀬戸山Ⅰ遺跡 東側調査区全景
下 瀬戸山Ⅰ遺跡 西側調査区全景
- カラー図版 5 上 瀬戸山Ⅰ遺跡 SB29～32、SH06～08他 完掘状況
下 瀬戸山Ⅰ遺跡 SB47・49～51・57他 完掘状況

吉岡下ノ段遺跡第17次発掘調査

- 図版 1 上 SB01完掘状況（西から）
下 SB03完掘状況（南から）
- 図版 2 上 SB05完掘状況（西から）
下 SB06完掘状況（東から）
- 図版 3 上 SB07完掘状況（西から）
下 SB10東半部完掘状況（南から）
- 図版 4 上 SB10西半部完掘状況（北から）
下 SB11東半部完掘状況（東から）
- 図版 5 上 SB11西半部完掘状況（東から）
下 SB08・12東半部完掘状況（東から）
- 図版 6 上 SB12西半部完掘状況（東から）
下 SH01完掘状況（南から）
- 図版 7 上 SH02完掘状況（南から）
下 SH03東半部完掘状況（北から）
- 図版 8 上 SH04西半部完掘状況（東から）
- 図版 9 上 SB01貼り床検出状況（西から） SB03出土状況（北から）
中 SB04炉検出状況（南から） SB04炉断面（南から）
下 SB06出土状況（南から） SB06出土状況（東から）
- 図版10 上 SB10出土状況 SB11貼床検出状況（東から）
中 SB11出土状況（西から） SB12貼床検出状況（東から）
下 SP95出土状況（東から） SP97出土状況（南から）
- 図版11 上 D4区出土状況（南から）
- 図版12 出土遺物（1）
- 図版13 出土遺物（2）

- 図版14 出土遺物（3）
 図版15 出土遺物（4）
 図版16 出土遺物（5）
 図版17 出土遺物（6）
 図版18 出土遺物（7）

瀬戸山Ⅰ遺跡第7次発掘調査

- 図版19 上 SB02完掘状況（北西から）
 下 SB04・05完掘状況（東から）
 図版20 上 SB06・07完掘状況（北から）
 下 SB08・09・11・12完掘状況（南から）
 図版21 上 SB09・10・13・14完掘状況（北から）
 下 SB14完掘状況（南西から）
 図版22 上 SB18完掘状況（北西から）
 下 SB19・20完掘状況（東から）
 図版23 上 SB15・21・44・45完掘状況（東から）
 下 SB24完掘状況（南東から）
 図版24 上 SB25完掘状況（東から）
 下 SB27完掘状況（北から）
 図版25 上 SB28～32・34、SH06～08完掘状況（北から）
 下 SB38完掘状況（北西から）
 図版26 上 SB41完掘状況（北から）
 下 SB44完掘状況（南から）
 図版27 上 SB46完掘状況（東から）
 下 SB48・52～54完掘状況（東から）
 図版28 上 SB47・49～51・57完掘状況（南東から）
 下 SB60完掘状況（東から）
 図版29 上 SB61・62完掘状況（西から）
 下 SB63完掘状況（東から）
 図版30 上 SH01・02完掘状況（南から）
 下 SH03・04・05・09完掘状況（南から）
 図版31 上 SK05完掘状況（南から）
 下 SK08完掘状況（南から）
 図版32 上 SP695完掘状況（南から）
 下 SP1205完掘状況（東から）
 図版33 上 SX13完掘状況（東から）
 図版34 上 SB07出土状況（西から） SB10出土状況（西から）
 中 SB10出土状況（北から） SB19出土状況（西から）
 下 SB27炉検出状況（東から） SB37出土状況（北から）
 図版35 上 SB46出土状況（南から） SB48出土状況（東から）

	中	SB49出土状況（東から）	SB50出土状況（東から）
	下	SB60貼り床検出状況（東から）	SK08出土状況（北から）
図版36	上	SP395出土状況（南から）	SP695出土状況（西から）
	中	SP1205出土状況（南から）	SX03出土状況（南西から）
	下	SX04出土状況（南から）	SX09出土状況（東から）
図版37	上	SX18出土状況（南から）	
図版38		出土遺物（1）	
図版39		出土遺物（2）	
図版40		出土遺物（3）	
図版41		出土遺物（4）	
図版42		出土遺物（5）	
図版43		出土遺物（6）	
図版44		出土遺物（7）	
図版45		出土遺物（8）	
図版46		出土遺物（9）	
図版47		出土遺物（10）	
図版48		出土遺物（11）	
図版49		出土遺物（12）	
図版50		出土遺物（13）	
図版51		出土遺物（14）	
図版52		出土遺物（15）	
図版53		出土遺物（16）	
図版54		出土遺物（17）	
図版55		出土遺物（18）	
図版56		出土遺物（19）	
図版57		出土遺物（20）	
図版58		出土遺物（21）	
図版59		出土遺物（22）	
図版60		出土遺物（23）	

I はじめに

1 調査にいたる経緯

静岡県の中西部は、全国有数の緑茶生産地としてつとに著名である。その要因としては、当該地域の温暖湿潤な気候と自然環境が緑茶生産に適していることがあげられ、くわえてより付加価値をもつ要因として当該地の緑茶生産において特有の伝統的農法が近年注目を集めている。「茶草場農法」と呼ばれる当該地特有の農法は、世界的にも重要な地域かつ農法として認知され、2013年「静岡の伝統的な茶草場農法」として世界重要農業遺産システムに認定された。いわゆる、世界農業遺産である。

茶草場農法とは、秋から冬にかけ茶園周辺の採草地である「茶草場」で刈り取った草を茶樹の根元や畝間に敷く伝統的農法で、その歴史は150年余に及ぶとされる。その農法により緑茶としての風味と香りはより芳醇なものとなることに加え、農薬等に頼らない自然循環に依存する農法であり、その結果、多様性かつ希少性の高い動植物の持続的生存が維持されている。

県中西部域のなかでも掛川市は、茶処として全国有数の生産量を誇っており、市内でも和田岡地区には二級河川原野谷川が形成した河岸段丘上に広大な茶園が展開している。この河岸段丘上では、広大かつ平坦な地形が展開する地形的好条件に加え、地層としてかつて河床にあった大小の円礫を多く含んだ土層と、場所によっては粘土層が互層となって地山を形成しており、そのため水はけと水持ちがいいことが植物栽培に適した土壤環境ともなっている。さらに緑茶栽培に適するように土壤改良が続けられるとともに、和田岡地区においても茶草場農法が取り入れられ良質な緑茶が生産されている。

広大な茶園が展開する和田岡地区の段丘上において、人跡は縄文時代早期に求められ、その後、原始、古代、中世、近世に至る遺跡が数多く遺されており、とりわけ弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡が広範に分布、場所によっては高い密度で展開する。そのため、茶園下はほとんどが遺跡と言っても過言ではなく、幸いにもこれまで茶園により遺跡が保護されてきた。ところが、緑茶生産においてより良質かつ生産性向上を図るため伝統的な農法の継続とともに、茶樹の老朽化への対応ならびに生産性の高い優良な品種への植え替えのため、茶樹の経済的寿命を勘案して約30年ごとの改植が必要となる。この改植は天地返しとも呼ばれ、老朽化した茶樹の撤去とともに、土壤の柔軟性保持と水はけを良くする目的で地中深く地山まで掘り返すため、遺跡の破壊が避けられない場合が多い。

掛川市では、改植により遺跡破壊が避けられなくなった場合の措置として、文化財保護法に則り記録保存を目的とした発掘調査が実施されている。今回調査対象となった地点においても、茶生産農家から茶樹の改植計画を受け協議、確認調査を経て本発掘調査に至ったものである。

2 遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

掛川市は静岡県の中西部に位置し、その市域として北には赤石山脈から連なる丘陵の最南端に位置する標高832mの八高山を擁し、田園風景豊かな平野部を経て中央には古大井川の扇状地の隆起により形成された小笠山丘陵をはさみ、南には太平洋に面した海浜遠州灘が展開、山から海に至る恵まれた自然環境の中にある。

今回発掘調査が実施された瀬戸山Ⅰ遺跡と吉岡下ノ段遺跡は、市の北西、袋井市と隣接する和田岡地区に立地する。八高山を源流とする原野谷川は、上流域では蛇行を繰り返しながら北東から南西へと流れ、流域では小規模な河岸段丘や開析谷が形成される。中流域では流路を南に変え、和田岡地区に至ると西岸に和田岡原と呼ばれる東西約1.2km、南北約2.2km、標高40～60m、比高差20～40mを測



- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 吉岡下ノ段遺跡 | 10 春林院古墳 | 19 花ノ腰遺跡 |
| 2 瀬戸山Ⅰ遺跡 | 11 吉岡下ノ段古墳群 | 20 瀬戸山Ⅲ遺跡 |
| 3 東原遺跡 | 12 宮脇行人塚古墳 | 21 高田遺跡 |
| 4 今坂遺跡 | 13 吉岡原遺跡 | 22 藤六古墳群 |
| 5 溝ノ口遺跡 | 14 吉岡原古墳群 | 23 東登口古墳群 |
| 6 中原遺跡 | 15 林遺跡 | 24 女高遺跡 |
| 7 高田上ノ段遺跡 | 16 西村遺跡 | 25 行人塚古墳 |
| 8 吉岡大塚古墳 | 17 瀬戸山Ⅱ遺跡 | 26 高田古墳群 |
| 9 高田上ノ段古墳 | 18 瀬戸山古墳 | |

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

る河岸段丘が形成される。また、和田岡原の南東には南北約2km、東西約1kmの岡津原と呼ばれる独立段丘を呈し、かつては原野谷川がこの段丘の東側を流れていた。

瀬戸山Ⅰ遺跡と吉岡下ノ段遺跡が位置する和田岡原段丘について、仔細に見ていくと標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘と、標高40～50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘に分けられる。両遺跡はどちらも上位段丘の吉岡原に位置する。

瀬戸山Ⅰ遺跡は、標高50～60m程を測る南北方向に緩やかに傾斜する地形で、遺跡の東西には小谷が入り込み遺跡の東西限界となっている。ちなみに小谷を隔て東に瀬戸山Ⅲ遺跡、西に瀬戸山Ⅱ遺跡が展開し、周囲は茶園を主体とした眺望の中に住宅が点在する。

上位段丘に位置する吉岡下ノ段遺跡の地形をさらに仔細に見ていくと2段の段丘に分けられ、吉岡下ノ段遺跡は遺跡名にあるように下位段丘に位置し、今回の調査範囲は遺跡範囲の東端にあたる。標高50～55m程を測る南東方向に緩やかに傾斜する地形である。段丘の東眼下には原野谷川の流れとともに田園地帯を擁す沖積平野が望め、西に目を移せば広大な茶園の中に和田岡古墳群の一つ大塚古墳が望める。

（２）歴史的環境

瀬戸山Ⅰ遺跡と吉岡下ノ段遺跡をめぐる歴史的環境については、当該遺跡をはじめとする和田岡原で実施された発掘調査報告書内において、それぞれの成果を基に和田岡原での歴史的環境が概観されている。そのため、屋上屋を架すことを避ける意味でもここでは、これまでに実施されてきた瀬戸山Ⅰ遺跡と吉岡下ノ段遺跡内での調査成果を中心に歴史的環境について言及してみたい。

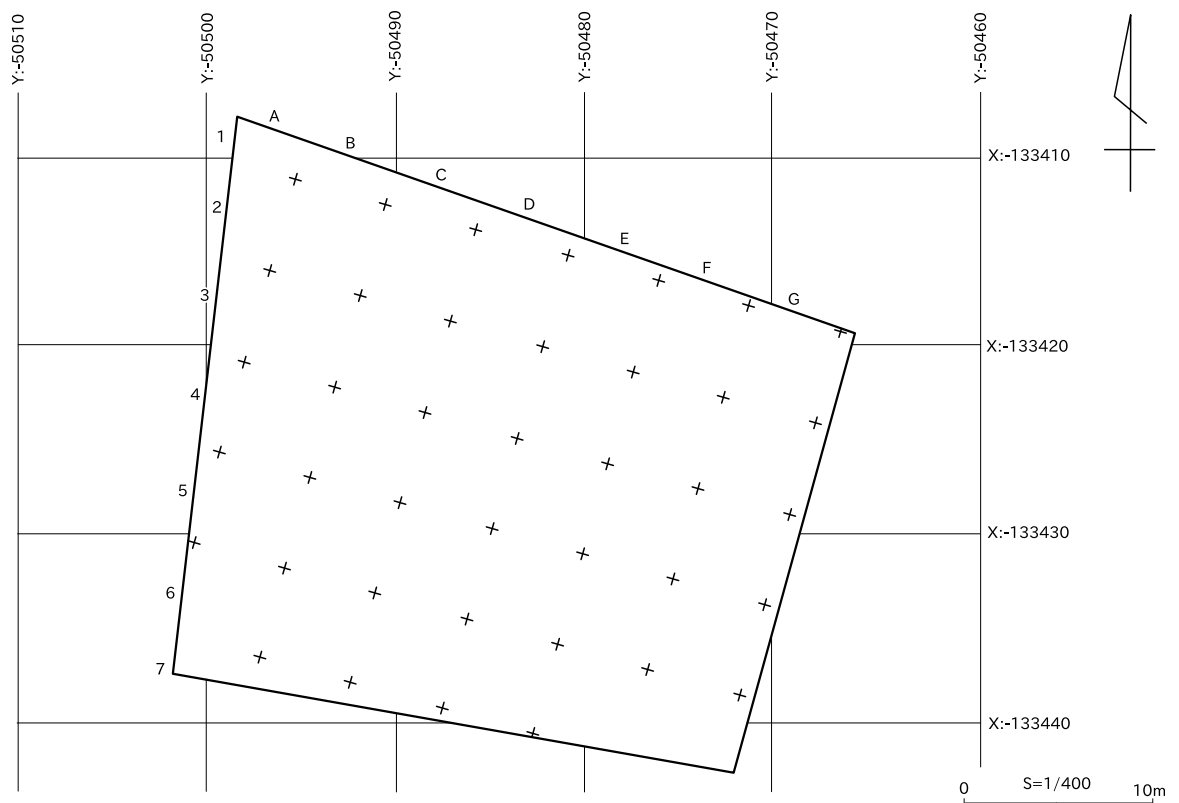
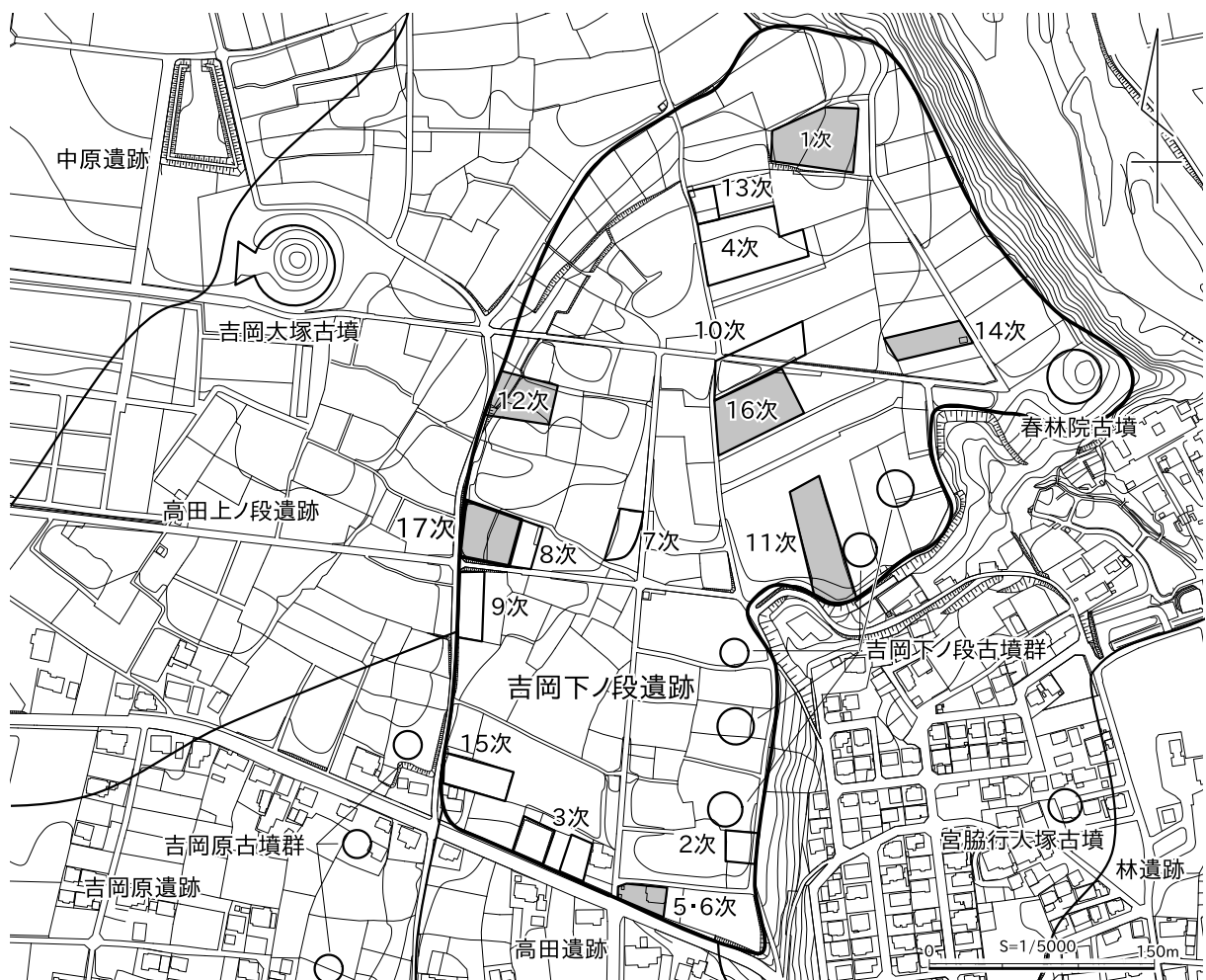
①吉岡下ノ段遺跡

吉岡下ノ段遺跡では、これまでに本発掘調査だけでなく確認調査を含め16次にわたる発掘調査が実施されている。これまでの16次調査の内、本発掘調査は6次調査（2006年調査）、11次調査（2014年調査）、12次調査（2014年調査）、14次調査（2017年調査）の4調査である。

6次調査（2006年調査）は、段丘東縁辺に近い部分が調査された。調査面積は90㎡の狭小な範囲であったが、弥生時代後期の方形周溝墓の隅角部が検出されており、竪穴住居跡等の居住を示す遺構が検出されていないことから、周辺域において方形周溝墓による墓域が形成されていたと想定される。

11次調査（2014年調査）は、6次調査地点とは距離的に離れるものの段丘東縁辺に位置する。縄文時代早期に比定される押型文土器片が出土しており、吉岡原での出土事例は未だ少なく希有な遺物ではあるが、吉岡原での人跡の端緒となる遺物と捉えてよかろう。縄文時代において遺構は検出されなかったが、中期の土器片も出土しており、当該期の集落の存在が示唆される。遺構ならびに遺物としてのまとまりをみせる弥生時代後期から古墳時代中期にかけての竪穴住居跡は、平面形が明確なもの、他、炉跡や床面の残存状況から竪穴住居跡と想定されるものを含めると20軒が検出されている。重複関係の中での遺構の認識には問題、課題もあるが、古墳時代前期から中期にかけての遺物は比較的充実しており、吉岡原での当該期の土器編年を検討する上では看過できない資料群と言える。また、段丘縁辺に位置することから縁辺付近では遺構が粗になっており、往時の土地利用を考える上でも興味深い。

12次調査（2014年調査）は、段丘内部の調査である。同時期と想定される古墳時代前期の竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1軒が検出されている。これらは住居2棟と小型倉庫1棟から成る、家族的集団（現在の家族とは概念が異なる）が所有するいわゆる単位建物群と想定されている。弥生時代後期の土器片も認められるが、他の遺跡に見られるような著しい重複はないため、弥生時代後期から断続



第2図 吉岡下ノ段遺跡位置図・第17次調査地点グリッド配置図

的に営まれた遺跡ではなく古墳時代前期の一定時期の集落として、集落動態を考える上での好資料と言える。

14次調査（2017年調査）は、丘陵縁辺からやや内部にかけての調査である。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2軒が検出されている。12次調査同様、著しい重複は見られない。14次調査の特筆すべき成果は、縄文時代中期の遺物を伴った住居跡と思しき遺構が検出されたことと、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての静岡県中西部（牧之原台地）から愛知県南東部にかけて分布する土器群の特徴を有した資料が比較的まとまって出土しており、当該地域での土器編年を考える上でも良好な資料が提示されたと言える。

17次調査（2019年調査）は、段丘のほぼ中央部での調査である。古墳時代前期の竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2軒、16世紀後半の中世墓1基が検出されている。12・14次調査同様、遺構の重複は見られず、軸を同じくする竪穴住居跡と掘立柱建物跡の関係は単位建物群を示唆させる。また、少数ではあるが、布留式土器と大廓式土器の外来系土器の出土が特筆される。これまで和田岡原での中近世の様相は、発掘調査に限ってみると当該期の様相に言及できる遺構・遺物ともに検出されていなかったが、周溝を伴い一石五輪塔を造立していたと想定される中世墓が検出されている。部分調査にとどまり全体像を把握できるものではないが、13世紀前半から14世紀後半にかけ展開する塚墓とは一線を画すもので、戦国期の当該地域、とりわけ和田岡原での墓制を考える上では重要な資料である。

②瀬戸山Ⅰ遺跡

瀬戸山Ⅰ遺跡では、これまでに本発掘調査だけでなく確認調査を含め8次にわたる発掘調査が実施されている。これまでの8次調査の内、本発掘調査は3次調査（2008年調査）である（昭和に実施された調査を含めると10次にわたる発掘調査が実施されている）。

昭和61年（1986年調査）の調査は今回の調査区の東に近接する箇所、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡が確認された。今回の調査区同様、遺構の重複が著しく高い密集を示している。

同年に実施されたもう1カ所の調査は今回の調査区から北西へ200m程離れた段丘内部に位置する地点で、遺構の在り方が粗になることから集落の限界、とりわけ弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の北西限界を示す箇所と想定される。

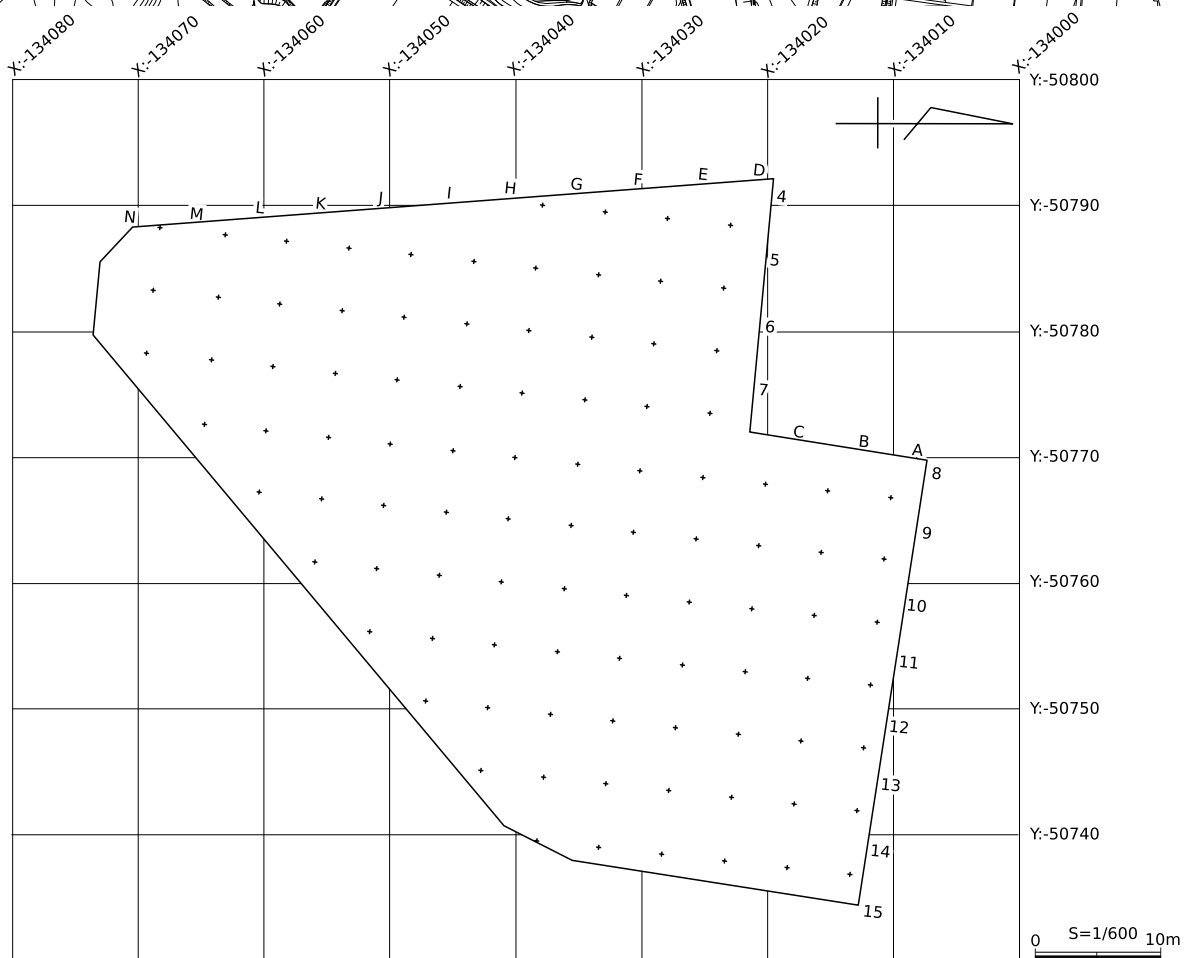
3次調査（2008年調査）は、段丘内部の調査である。全体に遺構の遺存状態が悪いものであったが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡と掘立柱建物跡が比較的密集する地区であることが判明した。ただし、攪乱による遺構の遺存状態が悪いことに加え、遺構の重複関係が著しく集落内の単位構成などの分析は難しい。特筆すべき遺構・遺物としては、弥生時代後期に比定される土器棺が出土している。胴上半が割取られた壺を身としていた。また、古墳時代前期の竪穴住居跡から赤色顔料（ベンガラ）を入れた壺が出土している。縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文中期初頭から晩期にかけての土器片が一定量（コンテナケース1箱）みられ、とりわけ中期後半の土器が多くみられることが特徴としてあげられる。

参考文献

掛川市教育委員会 1987『瀬戸山Ⅰ－a 遺跡発掘調査概報』

掛川市教育委員会 1987『瀬戸山Ⅰ－b 遺跡調査報告書』

掛川市教育委員会 2008『市内遺跡発掘調査報告書 高田遺跡第17・19・20次調査、吉岡原遺跡第6・7次調査、女高Ⅰ遺跡第10・11次調査、吉岡下ノ段遺跡第6次調査』



第3図 瀬戸山 I 遺跡位置図・第7次調査地点グリッド配置図

掛川市教育委員会 2010『瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査・古明遺跡 市内遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会 2017『吉岡下ノ段遺跡第11・12次 発掘調査報告書』
掛川市教育委員会 2019『吉岡下ノ段遺跡第14次・吉岡原遺跡第14次 発掘調査報告書』

Ⅱ 調査に至る経緯と調査の目的

1 吉岡下ノ段遺跡

吉岡下ノ段遺跡は、平成29年度に掛川市吉岡1414、1413-1及び1405にて茶園改植の計画があることを把握し、平成30年3月15日に確認調査を実施した。調査の結果、地表下約40～60cmから竪穴住居跡等の遺構及び遺物を検出し、茶園改植対象地に埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。確認調査の結果を基に耕作者と協議を行った結果、保護層を確保した上で茶園改植を行うことは困難であるとの結論に達し、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

耕作者より令和元年6月14日、静岡県あてに「埋蔵文化財発掘調査の届出書」が提出されたため、市教育委員会で記録保存のための本発掘調査が適当との副申をつけ、これを進達した。

これに対し、令和元年7月4日に静岡県から耕作者あてに、本発掘調査の実施を旨とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

2 瀬戸山Ⅰ遺跡

瀬戸山Ⅰ遺跡は、平成30年度に掛川市高田753-4、754及び1618にて農地造成の計画があることを把握し、平成30年6月26日・27日に確認調査を実施した。調査の結果、地表下約40～60cmから竪穴住居跡等の遺構及び遺物を検出し、茶園改植対象地に埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。確認調査の結果を基に耕作者と協議を行った結果、保護層を確保した上で茶園改植を行うことは困難であるとの結論に達し、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

耕作者より平成31年3月25日、静岡県教育委員会あてに「埋蔵文化財発掘調査の届出書」が提出されたため、市教育委員会で記録保存のための本発掘調査が適当との副申をつけ、これを進達した。

これに対し、令和元年5月7日に静岡県から耕作者あてに、本発掘調査の実施を旨とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

Ⅲ 調査の方法と経過

両遺跡とも調査方法は同じで、対象地の地形に合わせ5m方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ及び実測の基準とした。瀬戸山Ⅰ遺跡のグリッドは南北方向をアルファベットの昇順、東西方向を数字の昇順で表し、交点をA-1区、A-2区等と呼称し、北西に位置する杭にグリッドを代表させた。吉岡下ノ段遺跡は南北方向を数字の昇順、東西方向をアルファベットの昇順で表し、交点をA-1区、A-2区と呼称し、北西に位置する杭にグリッドを代表させた。

現場での図面作製は遺構図を20分の1、微細図を10分の1とした。

瀬戸山Ⅰ遺跡の調査経過について、調査は廃土置き場確保の必要性から調査区を2分割し、令和元年5月7日から東半面の掘削を開始した。同年10月16日から西半面の掘削を開始し、同年12月27日に現地調査を終了した。

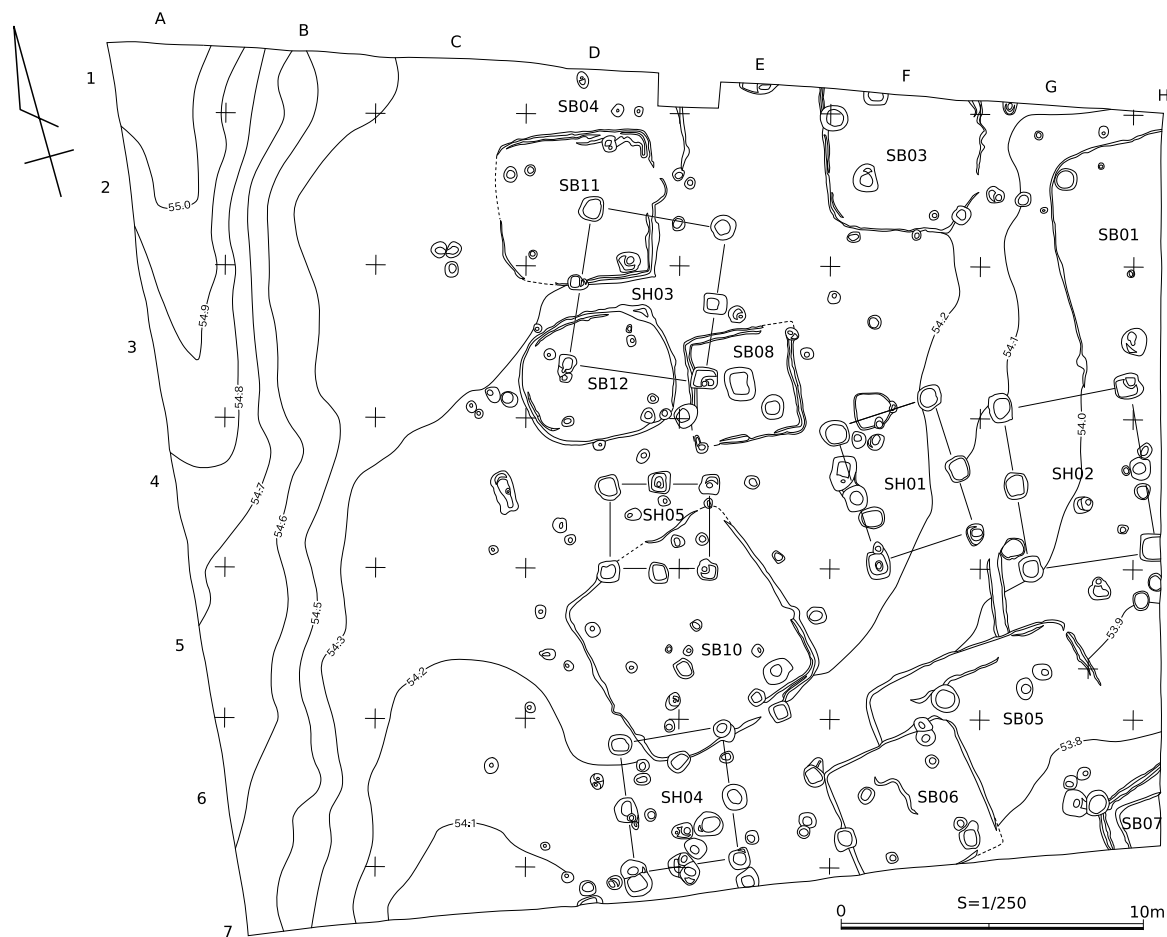
吉岡下ノ段遺跡の調査経過について、調査は廃土置き場確保の必要性から調査区を2分割し、令和元年7月29日から東半面の掘削を開始した。同年11月11日から北半面の掘削を開始し、同年12月12日に現地調査を終了した。

両遺跡とも検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために基準点測量を実施した。

Ⅳ 調査の内容

1 吉岡下ノ段遺跡

調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡5棟の他、小穴、不明遺構を検出している。



第4図 吉岡下ノ段遺跡第17次調査遺構全体図

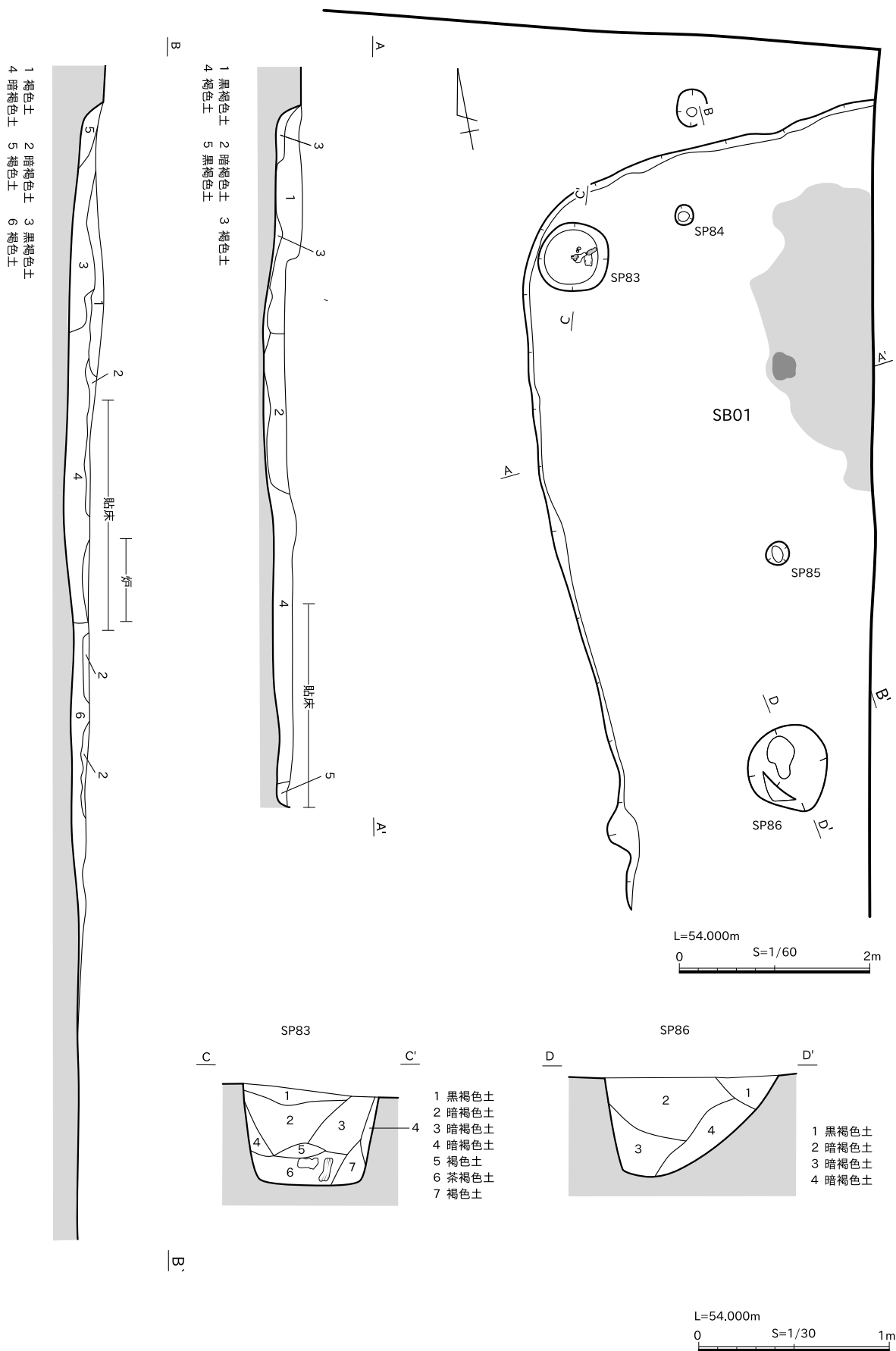
(1) 遺構

①竪穴住居跡

遺構検出面付近まで茶畑の深耕が進んでいたため竪穴住居跡の残存状況は悪く、検出されたのはわずかな高さの壁と床面もしくは掘り方であった。

SB01 (第5・18図)

調査区北東のG・H-2・3区に位置する。検出したのは住居跡西辺1/4で、その多くは東側調査区外に及んでいる。規模は、推定で南北8.7mを測る。形状は隅丸方形を呈すると推測される。覆土は40cmを測り、今回の調査では、遺構の残存状況は良好であった。床面の北半部では、貼床、炉跡が確認された。炉跡は40cm大、厚さ5cmであった。北西の支柱穴は明確ではないが、南西の支柱穴はSP86と考えられる。北西角に位置するSP83からは、炭化材や焼土ブロック、弥生時代後期の壺胴部(10)が出土している。SB01の時期は、この他の出土した遺物である壺肩部(9)、高坏脚部片(12)から弥生時代後期であるといえる。

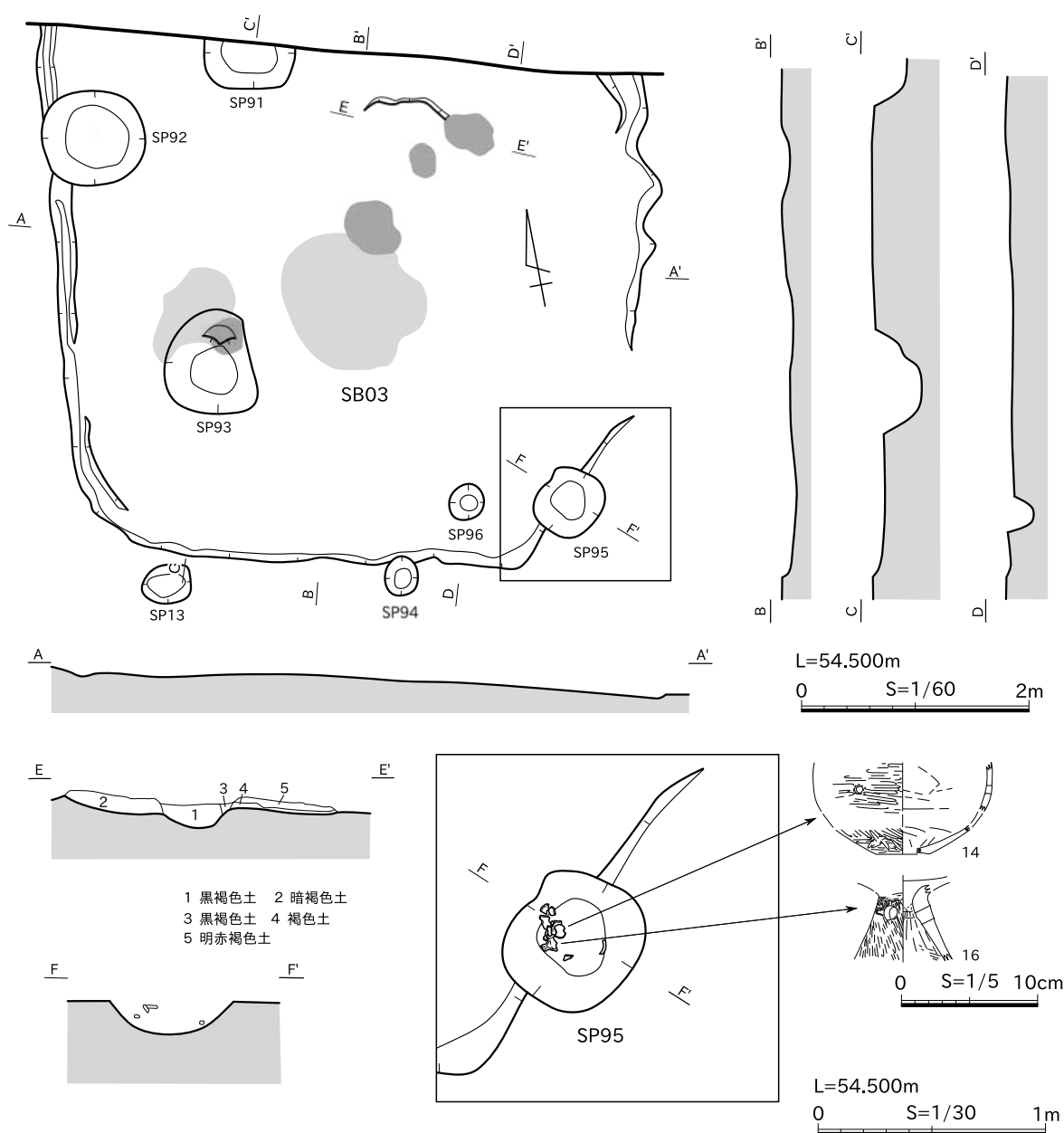


第5図 SB01実測図

SB03（第6・18図）

調査区北辺のF-1、F-2区に位置する。住居跡の北辺部は、調査区外に及んでいる。掘り方の壁はほとんどが削平されており、検出面は住居跡の床面直上であった。規模は、東西5.5mを測り、形状は隅丸方形を呈する。西辺部の一部に壁溝が確認された。中央付近には貼床が確認され、炉跡は4か所で確認された。しかし、南西の炉跡は支柱穴SP93に近すぎるため、単なる焼土とすべきかもしれない。支柱穴は、SP91、93と考えられるが、東側の2本は不明である。

SB03の支柱穴と考えたSP93からは弥生時代後期の折返し口縁の壺片（13）が出土しているが、南西角のSP95からは古墳時代前期の壺胴部（14）と高坏脚部（16）が出土しており、SB03はSP95に先行すると考えられる。

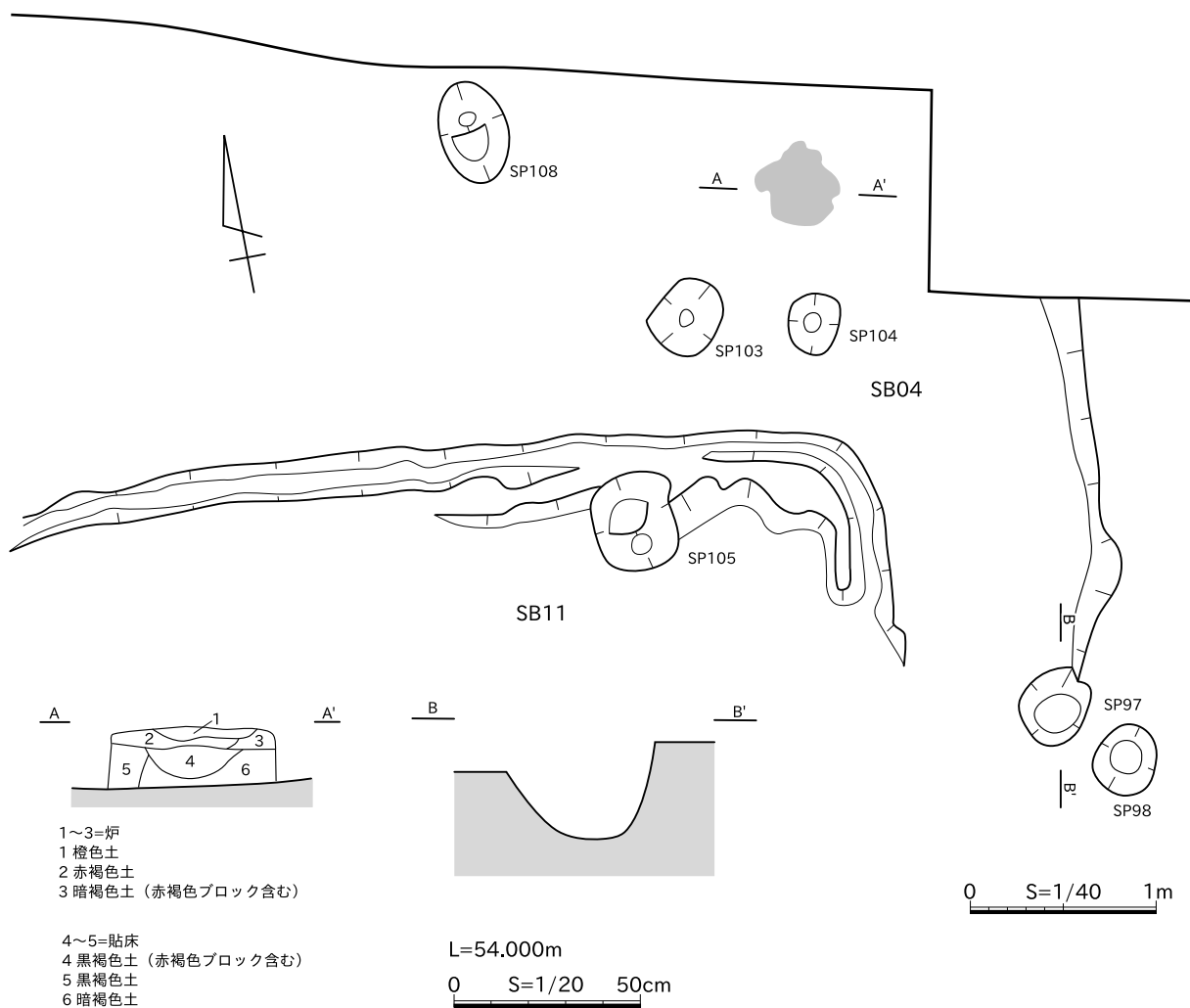


第6図 SB03実測図

SB04 (第7・18・21図)

調査区北辺のD-1、D-2区に位置する。掘り方の東辺の一部と炉跡を確認したのみで、規模、形状は不明である。炉跡は長径60cm大で、厚さ5cmであった。また、どの小穴が支柱穴だったのかもはっきりしない。SP97からは、台付甕の台部片(122)が出土している。

出土遺物は第18図の18から23で、弥生時代後期と古墳時代前期が混在しており、SB04の時期を決定することができなかった。SB11との新旧関係は不明である。



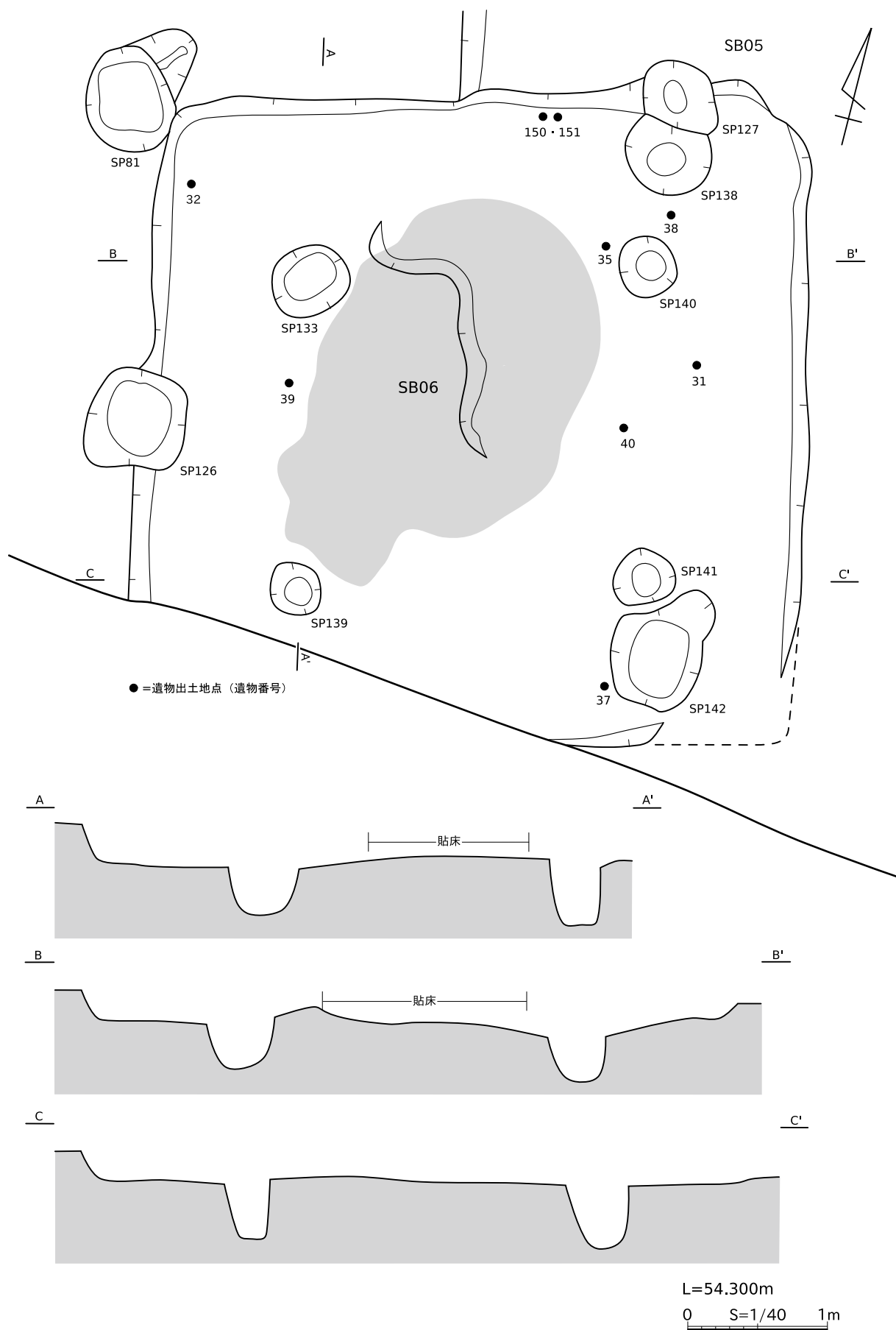
第7図 SB04実測図

SB05 (第8・18・21図)

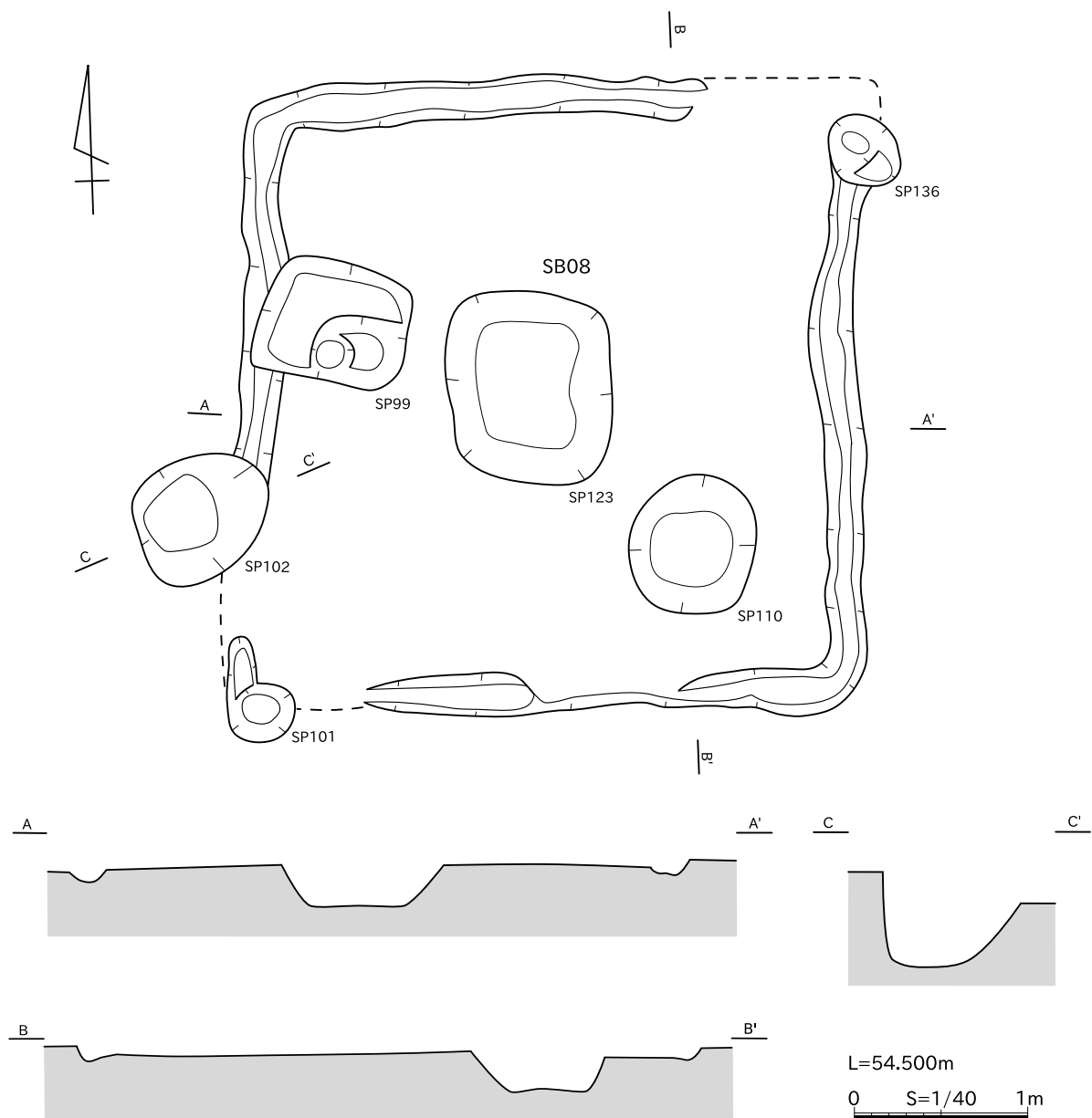
調査区南東のF・G-5・6区に位置する。住居跡掘り方の北側部分を確認した。SB05は廃絶後、SB06に切られていることが確認された。SB07との新旧関係は不明である。規模は、東西7.5mを測り、形状は隅丸方形と推定される。北東の一部に壁溝が確認された。床面中央からみて北東に炉跡が長径70cm大、厚さ5cmで確認された。支柱穴は、SP124、74、141、127、あるいは125、73、142、138であり、2時期の支柱穴が確認できる。掘り方との関係から、前者か先行し、後者は建替えに伴う支柱穴と推定される。それが正しいとすると、建替えに伴い東側の2本は南西方向に、西側2本は南側に移動したと見られる。

覆土からはS字状口縁台付甕(以下S字甕)(24)、北陸系の高坏坏部(25)、高坏脚部(26)が出

折込図（別ファイル）



第9図 SB06実測図



第10図 SB08実測図

土しており、SB05の時期は古墳時代前期と考えられる。またSP78からは高坏脚部（120）が、SP79からは小型鉢（121）が出土している。

SB06（第8・9・18・19図）

調査区南東のE-6、F-5、F-6、G-6区に位置する。住居跡の南側部分は、調査区外に及んでいる。SB06は、SB05を切っていることが確認された。規模は、東西、南北4.5mを測り、やや小型の竪穴住居跡であり、形状は隅丸正方形を呈する。掘り方西半部の残存状況は良好で、覆土は40cmあった。主柱穴はSP140・141・139・133であり、これら主柱穴の内側で貼床が確認された。この床面上から炭化材と土器片（31・32・35・38・39・40）が出土している。炉跡は確認されなかった。

出土遺物は多数あり、第19、20図の27～43がSB06に該当する。これらからSB06の時期は、古墳時代前期といえる。

折込図（別ファイル）

SB07（第8図）

調査区南東角のG－6区に位置する。住居跡掘り方の北西角部分を確認したのみで、その大半は南東側調査区外へ及んでいる。規模は不明であるが、形状は隅丸方形を呈すると推定される。壁溝は確認された。中央部分に平坦面を残し、周囲は掘り下げられていたと考えられる。出土遺物は小片の土器だけで、図示可能なものはなかった。

SB08（第10・19図）

調査区中央のE－3、E－4区に位置する。北辺と南西部の一部を確認できなかったものの、ほぼ全形が判明した。規模は、東西、南北3.5mを測る小さな住居跡で、形状は方形に近いものの、隅に丸みを有することから隅丸正方形といえる。壁溝は認められるものの、支柱穴は確認されなかった。SH03との切り合い関係は不明である。

S字甕の脚部（45）、高坏脚部（46）、小型丸底土器（47）が出土していることから、SB08の時期は古墳時代前期といえる。

SB10（第11・12・19・20図）

調査区中央南のD・E－4・5・6区に位置する。規模は、東西南北ともに5mで、形状は方形に近い隅丸正方形を呈する。支柱穴は、SP121・128・212・206、あるいはSP50・129・210（北東の柱穴は未検出）と考えられる。前者のSP128は、他の柱穴とは規模、深さが異なる。中央付近に80cm×60cmと30cm×20cmの二つの炉跡が確認された。貼床は南東部分で確認され、張床面上から小型丸底土器（75）と小型台付甕（61）が、SP132検出面からS字甕（63）が出土した。壁溝は、南東部分で確認された。SH04やSH05と切り合っているが、その新旧関係は不明である。

出土土器は多数あり、第19、20図の49～77までがSB10に該当する。これらの出土土器からSB10の時期は、古墳時代前期といえる。

SB11（第13・20図）

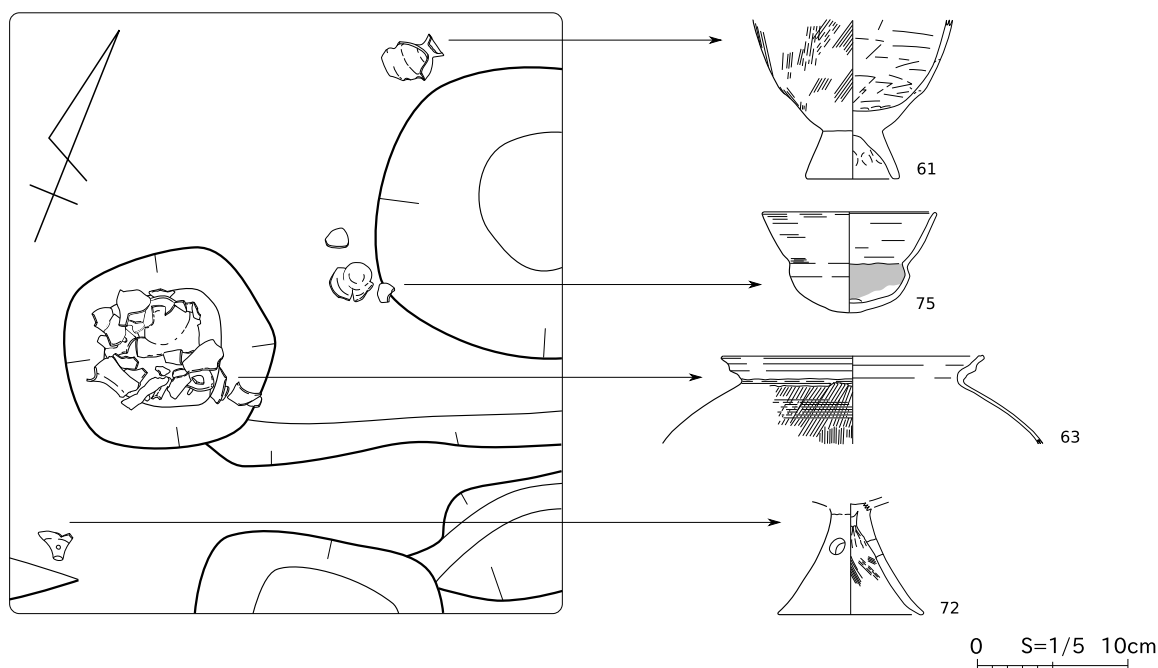
調査区北側のC・D－2・3区に位置する。耕作による削平が進んでおり、遺構検出面はほぼ住居跡床面の直上であった。規模は、東西南北ともに5mを測り、やや小型の堅穴住居跡で、形状は隅丸正方形を呈する。支柱穴は、西側のSP188と186があるものの、東側では確認されなかった。焼土は中央やや北よりに3カ所あり、北側と中央付近に貼床が確認された。掘り方の東側には炭化材と長径10～15cm大の礫が出土している。炭化材の出土状況から焼失家屋と推定される。SP100からは、小型丸底土器（82）が出土している。SH03の柱穴であるSP118の上面にSB11の焼土、貼床が確認されたことから、SB11はSH04より後出であるといえる。

出土土器は第21図の78～83で、これらからSB11の時期は、古墳時代前期であるといえる。

SB12（第14・20図）

調査区中央のC－3、D－3、D－4区に位置する。規模は、東西5.1m、南北4.2mを測り、平面形状は小判形を呈する。他の住居跡とは異なり、平面的には古相を呈した形状である。支柱穴としたのは、SP113（または114）、119・205・190である。その内側において焼土2カ所と貼床が確認された。北辺と西辺の一部で壁溝が確認された。SB12の床面に掘り込まれていたSP191はSH03の柱穴である。

出土土器は第20図の84～96である。これらは弥生時代後期から古墳時代前期の土器が混在している



第12図 SB10実測図 (2)

が、前述したように竪穴住居跡の平面的な形状は古相であることから、SB12の時期は、弥生時代後期であると考ええる。また遺構外で出土しているS字甕（134）は、竪穴住居跡の掘り方より高い位置で出土していることから、上位に古墳時代前期の遺構が存在していた可能性も想定される。遺構の切り合い関係や出土土器から考えるとSB12→SH03→SB11の順に建てられたと推定される。

②掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は5棟分を確認したが、柱間はいずれも梁間1間×桁行2間であった。そのうち4棟は、南北方向に棟をもつ建物である。

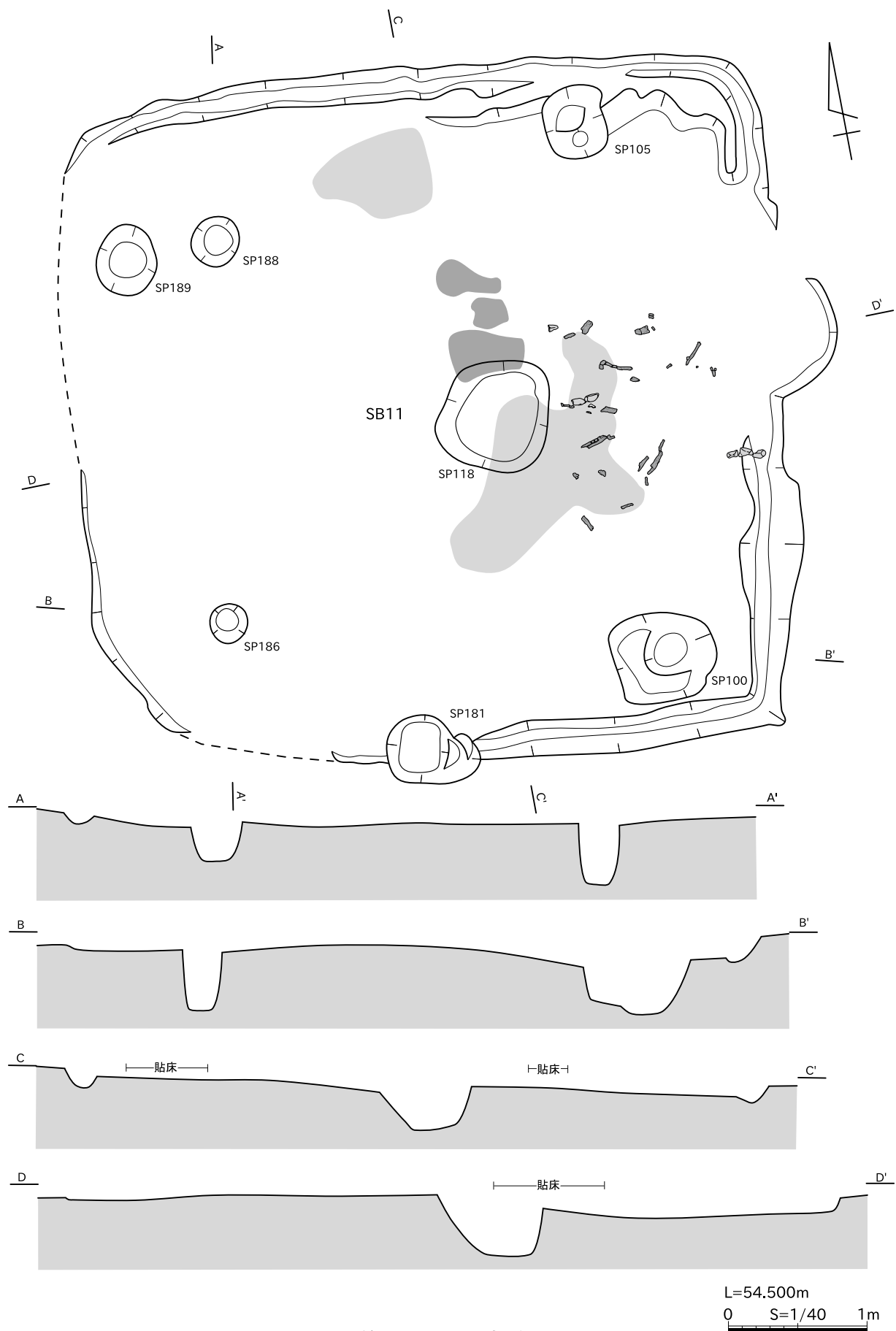
SH01（第15・21図）

調査区F-3、F-4区に位置する。梁間1間×桁行2間で、主軸方位は、N-7°30'-Wを測る。規模は、3.8×4.7mである。建物の規模は、SH04と近似している。柱穴は直径0.7～1.0mである。SP37では、柱痕が確認された。SH02と近接しているが、規模はやや異なる。出土遺物は、SP28からS字甕の接合部（100）、SP32から小型鉢（99）、高坏脚部（101）、SP38から小型鉢（98）である。

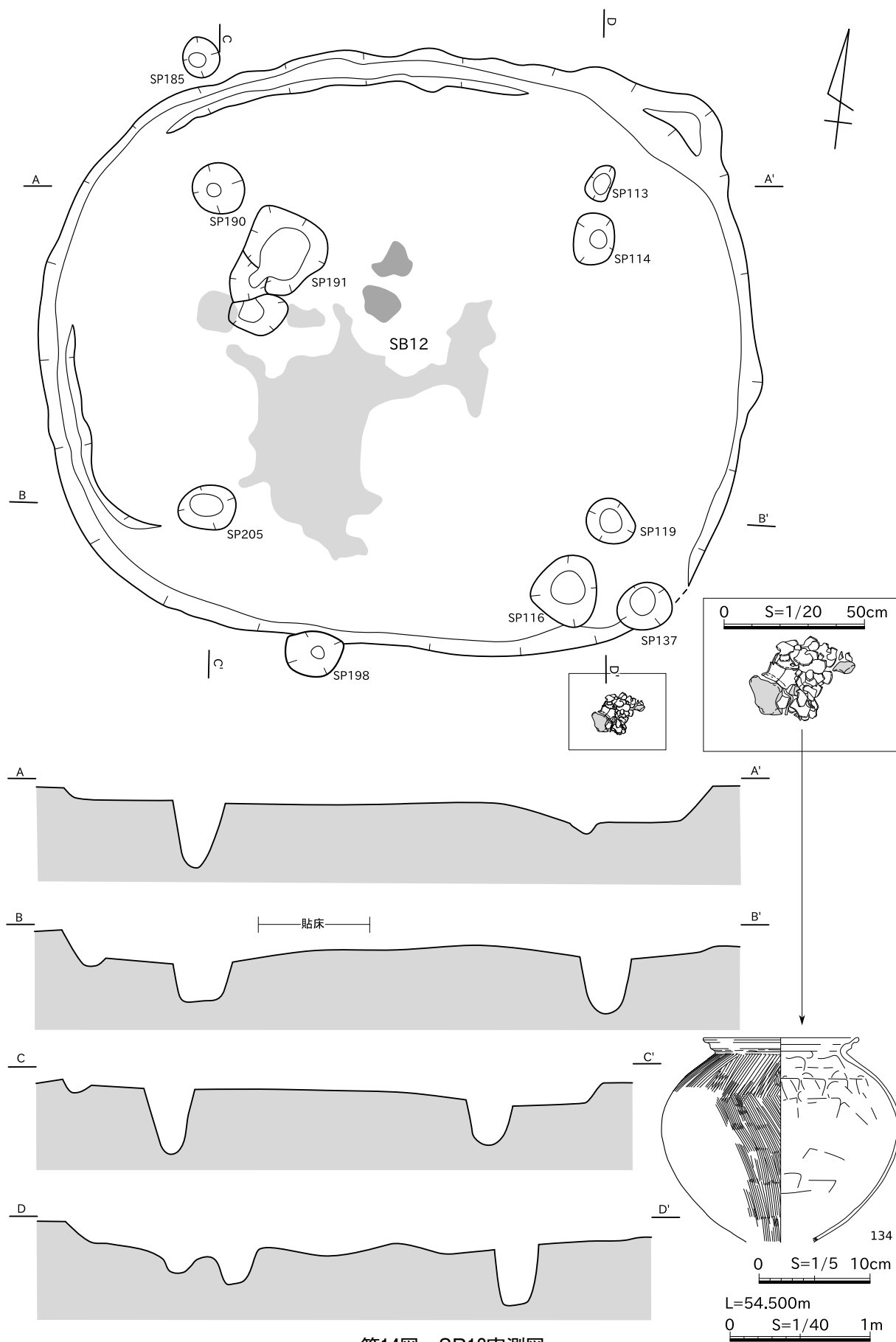
SH02（第15・21図）

調査区G・H-3・4、G-5区に位置する。梁間1間×桁行2間で、主軸方位は、N-12°30'-Eを測る。規模は、4.45×5.6mである。建物の規模、方位は、SH03と近似している。柱穴は直径0.7～1.0mである。南東部の柱穴であるSP47の一部は、東側調査区外に及ぶ。SB01とSP89は平面的に重なるが、新旧関係は不明である。

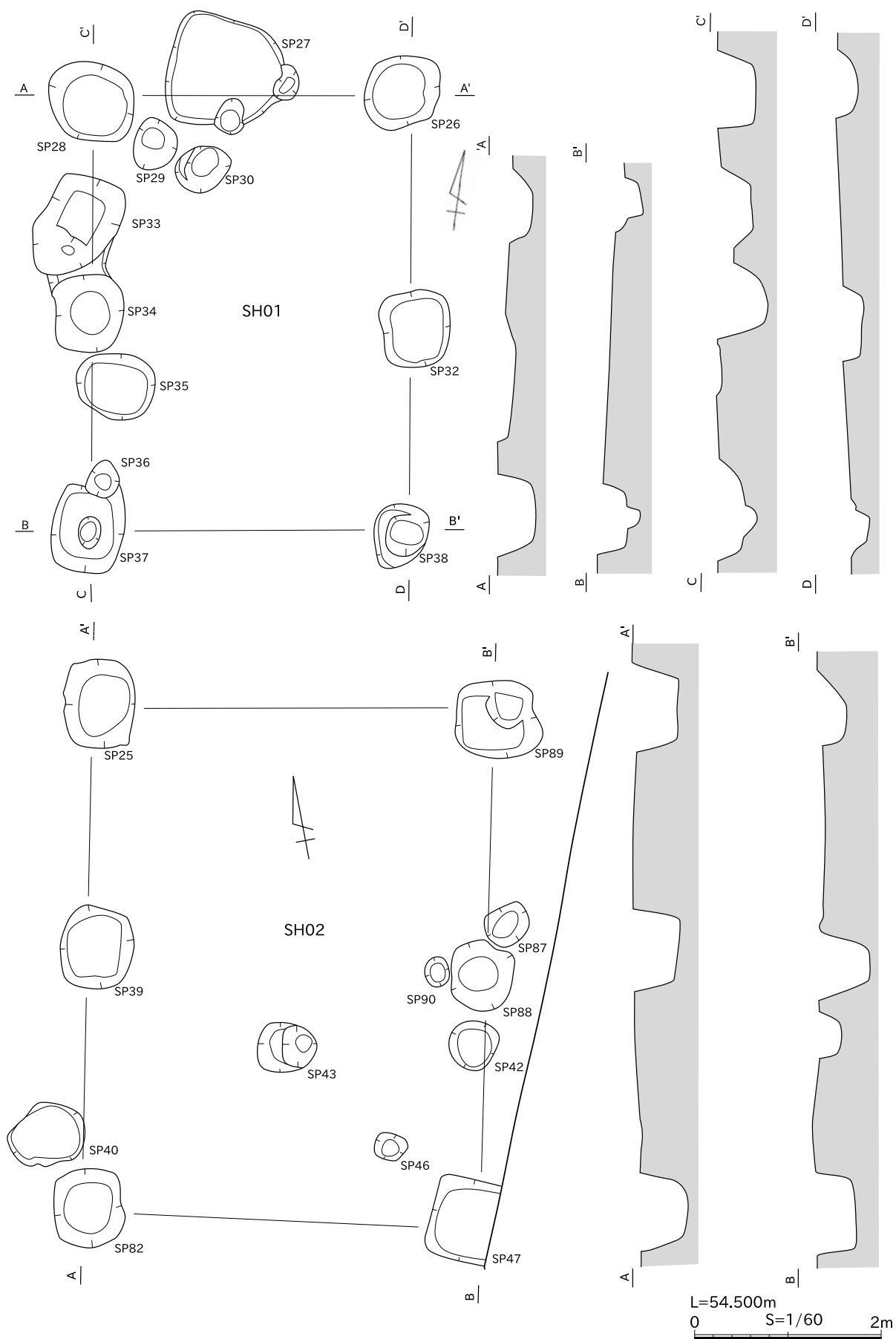
出土遺物は、SP47から壺底（102）、SP82から高坏脚部（104）、SP88から壺底（103）である。



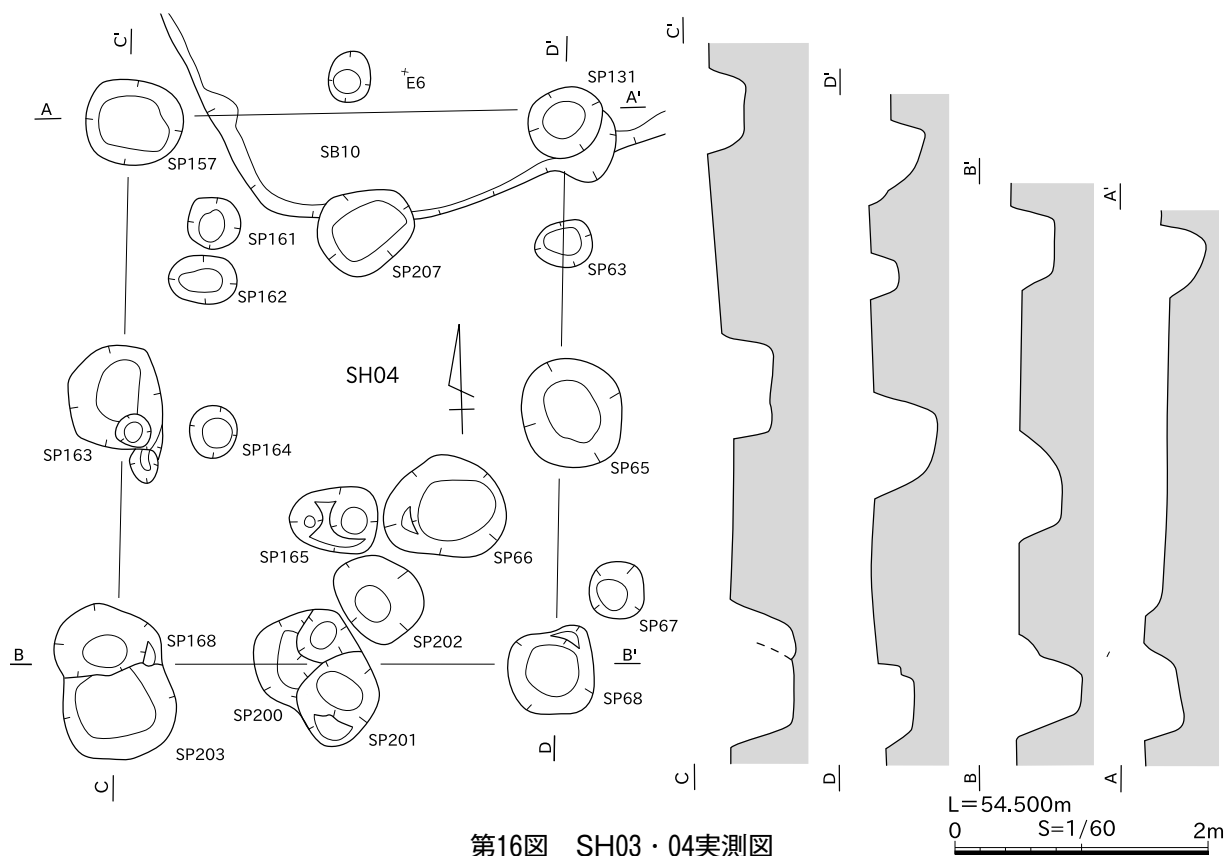
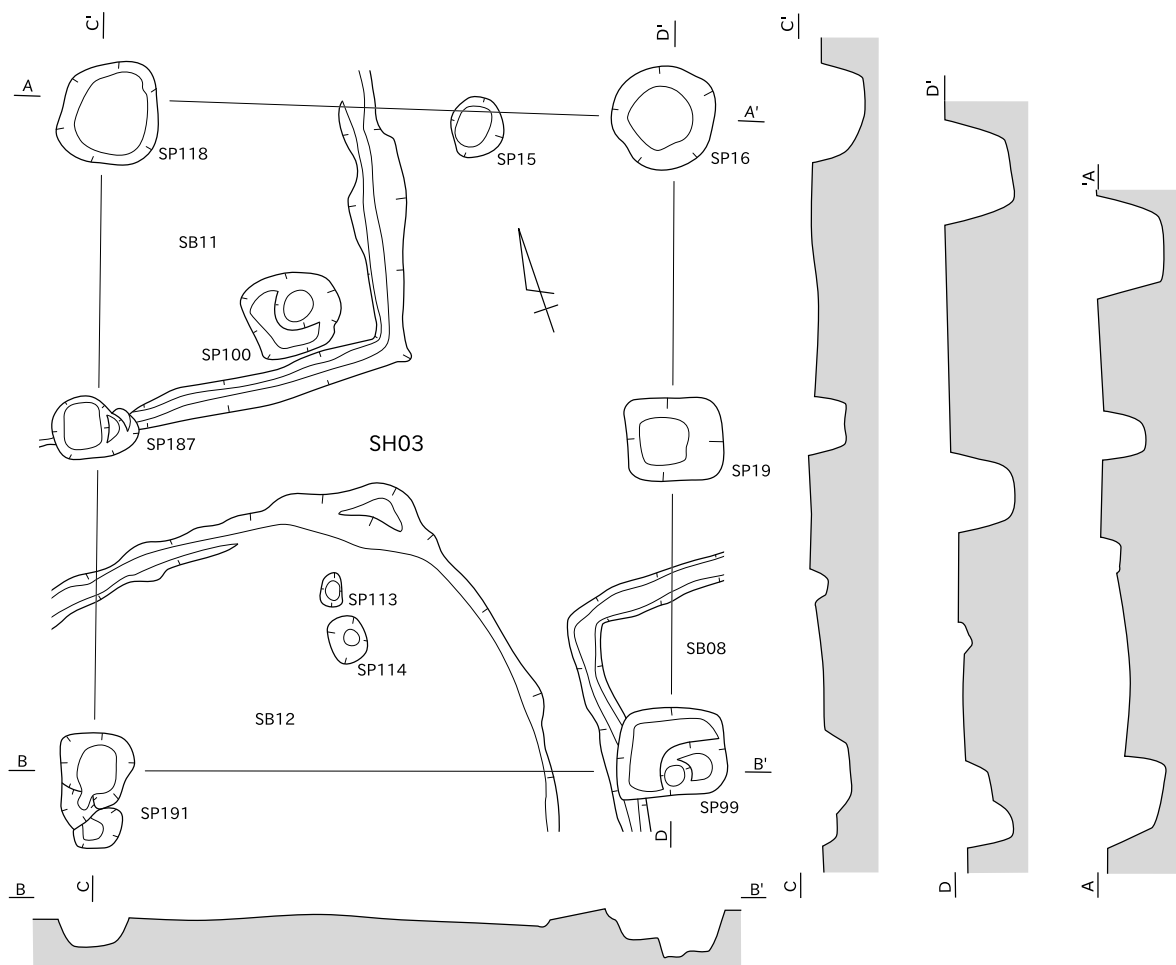
第13図 SB11実測図



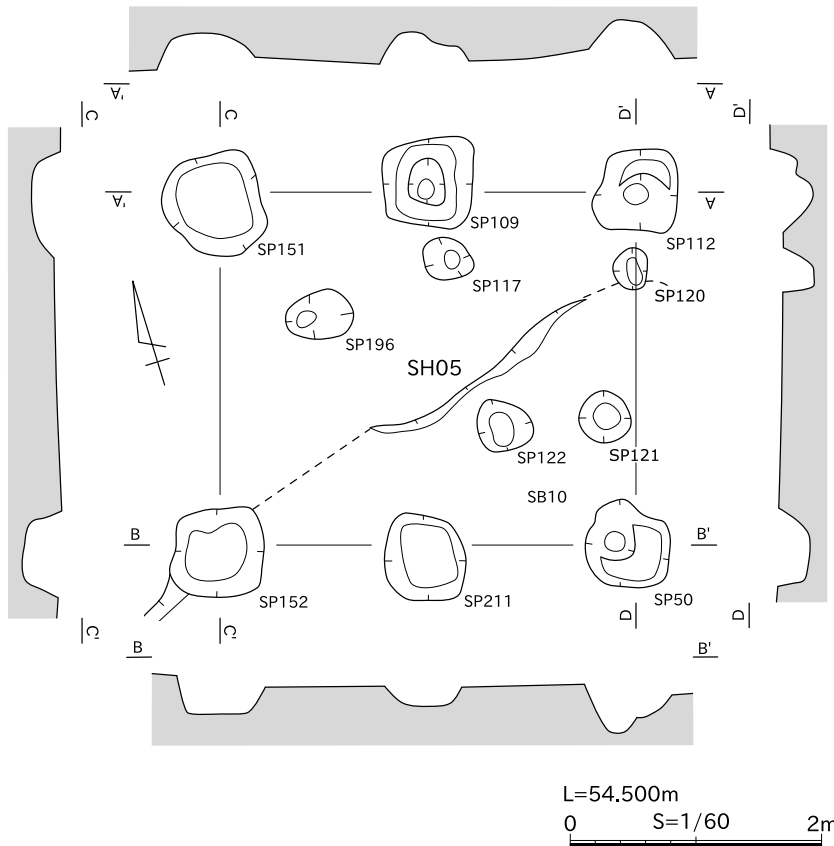
第14図 SB12実測図



第15図 SH01・02実測図



第16図 SH03・04実測図



第17図 SH05実測図

SH03 (第16・21図)

調査区D・E-2・3区に位置する。梁間1間×桁行2間で、主軸方位は、 $N-19^{\circ}00'-E$ を測る。規模は、 4.35×5.25 m、柱穴は直径0.5~0.8 mである。SB08・11・12と重複するが、検出状況からSB12→SH03→SB11であることが確認された。しかし、SB08との新旧関係は不明である。

出土遺物は、SP99からS字甕(106)、SP118から壺肩部片(105)、SP191から台付甕の台部(107、108)である。

SH04 (第16図)

調査区D-6・7、E-6区に位置する。梁間1間×桁行2間で、主軸方位は、 $N-2^{\circ}00'-E$ を測る。規模は、 3.45×4.45 mである。柱穴は直径0.55~0.8 mである。SB10と平面的に重なるが、新旧関係は不明である。図示できる出土遺物はなかった。

SH05 (第17・21図)

調査区中央のD・E-4・5区に位置する。梁間1間×桁行2間で、他の4棟とは異なる棟方向である。主軸方位は、 $N-72^{\circ}45'-W$ を測る。規模は 2.8×3.3 mで、最も小規模である。柱穴は直径0.6~0.8 mである。SH05の南側(桁側)がSB10と平面的に重なるが、新旧関係は不明である。

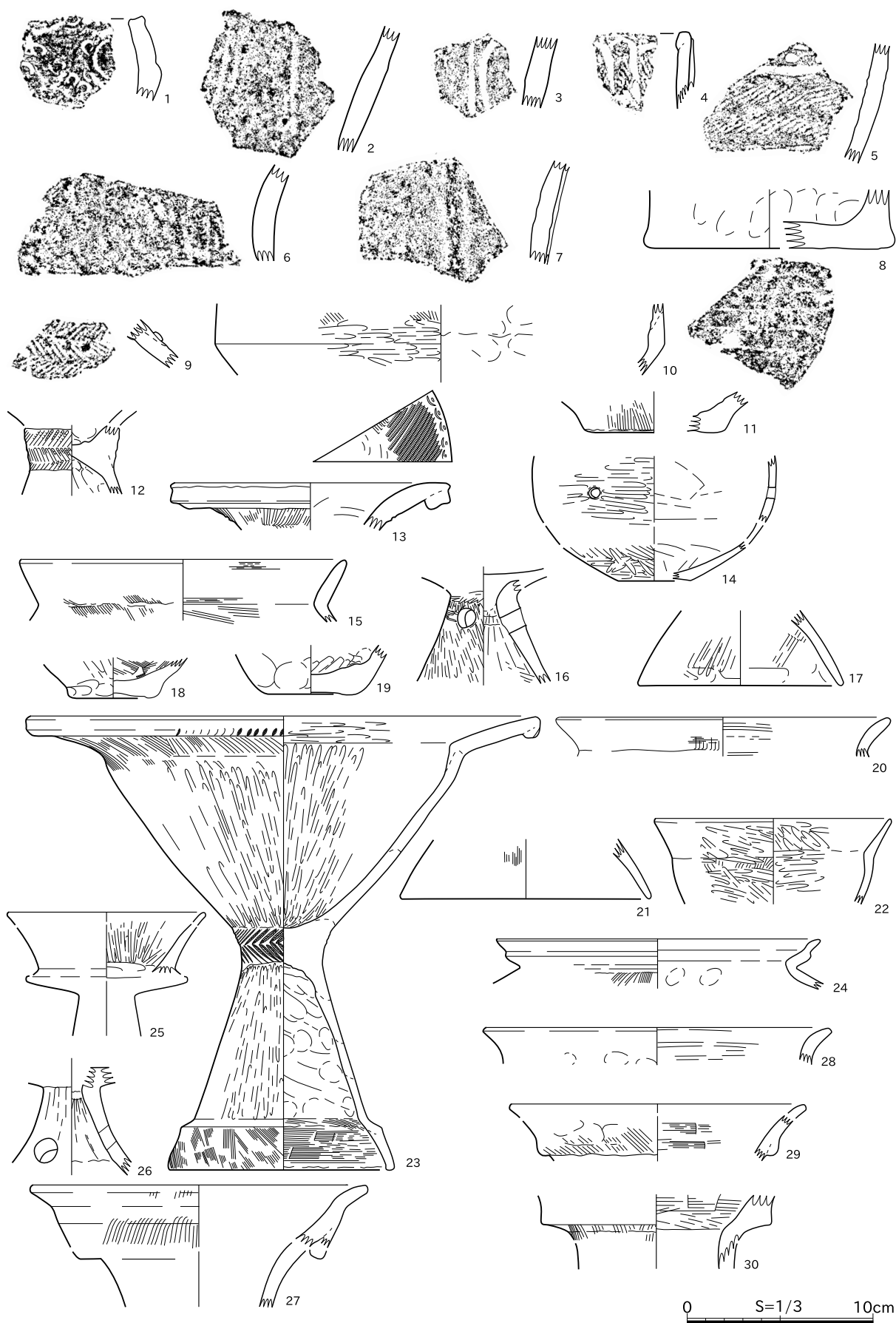
出土遺物は、SP109から器台(111)、SP151からS字甕の脚部(109)、台付甕の台部(110)、不明土製品(112)である。

(2) 遺物

① 縄文土器

調査で出土した縄文土器はすべて破片で、竪穴住居跡等の遺構覆土内からの出土もあるが、いずれも弥生時代等の後世遺構への流れ込みであり、当該期の遺構に伴うものではない。図示可能な8点を報告する。

1は、内彎する口縁部の破片である。口縁は緩い波状を呈している。斜位及び弧状の断面三角形の貼り付け隆帯があり、隆帯沿いと口唇に半截竹管の端面による刺突文が施される。色調はにぶい橙褐



第18図 出土遺物実測図（1）

色で、胎土には石英が含まれる。

2は、深鉢土器の胴部下半と思われる破片である。器面は摩耗しているが、縦位の浅い沈線文が2本みられる。色調は赤褐色で、胎土には石英が含まれる。

3は、胴部の破片である。地文は無文、半截竹管の外側による浅い沈線文が2本施される。色調は褐色で、胎土には石英、長石が含まれる。

4は、深鉢土器の口縁部の破片である。口縁部は内側に折り返されている。断面アーチ型の縦位の貼り付け隆帯があり、器面と隆帯に縄文を施したのちに、隆帯の両側にヘラ状の施文具もしくは半截竹管の端部を用いた沈線文がみられる。色調は褐色で、胎土には石英と金雲母が含まれる。

5は、深鉢土器の胴部の破片である。地文に縄文を施し、2条の横位の沈線文を施している。沈線の間には浅い楕円形の凹みがみられ、刺突文の可能性がある。また、下端部にも横位の沈線が確認できる。なお、この破片は、文様の構成からみると不自然と思われるが、下の割れ口が粘土の継ぎ目であることから向きを判断した。色調はにぶい黄褐色で、胎土には石英、長石、金雲母、黒雲母が含まれる。

6は、深鉢土器の胴部上半の破片である。外反しており、括れ付近の破片と考えられる。無文である。色調は褐色で、胎土には石英と長石が含まれる。

7は、深鉢土器の胴部の破片である。器面は摩耗している。低い貼付文がみられ、逆U字形の区画文の一部と思われる。色調は黄褐色で、胎土には石英と長石が含まれる。

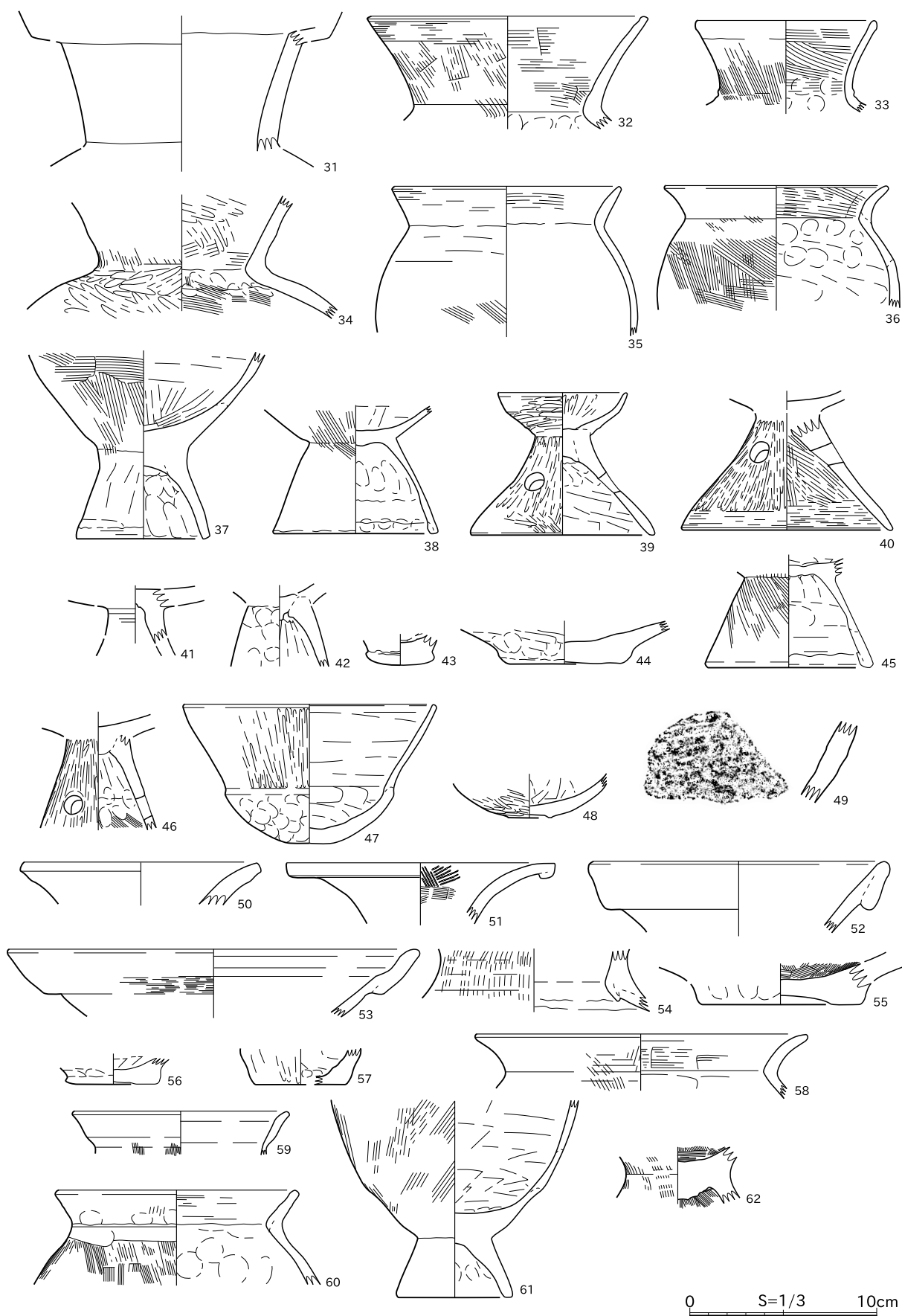
8は、深鉢の底部の破片である。器面は摩耗しているが、無文であると思われる。内外面に指頭痕が残り、底には木葉痕がみられる。色調は橙褐色で、胎土には石英と長石が含まれる。

②弥生土器・古式土師器

9～12は、SB01出土である。9は壺の肩部片で、櫛刺突羽状文と円形付文（3個単位）が施される。10は、壺の胴下半の屈曲部片である。外面には横方向のミガキが施され、一部にミガキ前のハケ目が認められる。内面にはヘラ状工具と指頭によるナデが施される。11は壺の底部片で、外面にはハケが施される。12は高坏の脚部片で、やや膨らんだ接合部には櫛刺突羽状文が施される。

13～17は、SB03出土である。13は折返口縁壺の口縁部片である。口縁端部を折返し、面取りをしている。外面にはハケ、内面には櫛扇文と縄文が施される。14は小型壺の胴部片で、平底の底部から球体の胴部に至る。外面上半には横方向のミガキが施され、下半から底部にかけては斜方向のミガキが施される。胴中位に焼成前の穿孔がある。内面は摩滅しているが、ヘラ状工具によるナデが認められる。15は台付甕の口縁部片で、内外面とも摩滅しているが、頸部外面には縦位のハケ、内面には横位のハケが認められる。16は高坏の脚部片で、外面はやや摩滅気味であるが、丁寧にミガキが施されており、三方に円窓をもつ。内面にはナデが確認できる。17は高坏の脚部片で、内彎して開く。外面にはミガキ、内面にはハケ→ナデが確認できる。

18～23は、SB04出土である。18・19は壺の底部片で、18の外面にはナデ、内面にはハケが施される。19は内外面ともナデが施される。20は台付甕の口縁部片で、内外面ともに摩滅が著しいが、ハケ目が確認できる。21は、高坏の内彎する脚部片である。22は小型壺の口縁部片で、丸味を帯びた胴部から屈曲して口縁が立ち上がり、口縁部を最大径とする。内外面とも斜位のミガキが比較的丁寧に施されている。23は高坏で一部を欠損するが、ほぼ完存する。口縁は鐔状を呈し、脚端部は段を有する。口縁端部にはキザミ、坏部はミガキ、接合部には櫛刺突羽状文がそれぞれ施される。脚部外面にはミガキ、内面にはナデ、端部内面には斜位のハケ、外面は横ナデがそれぞれ施される。



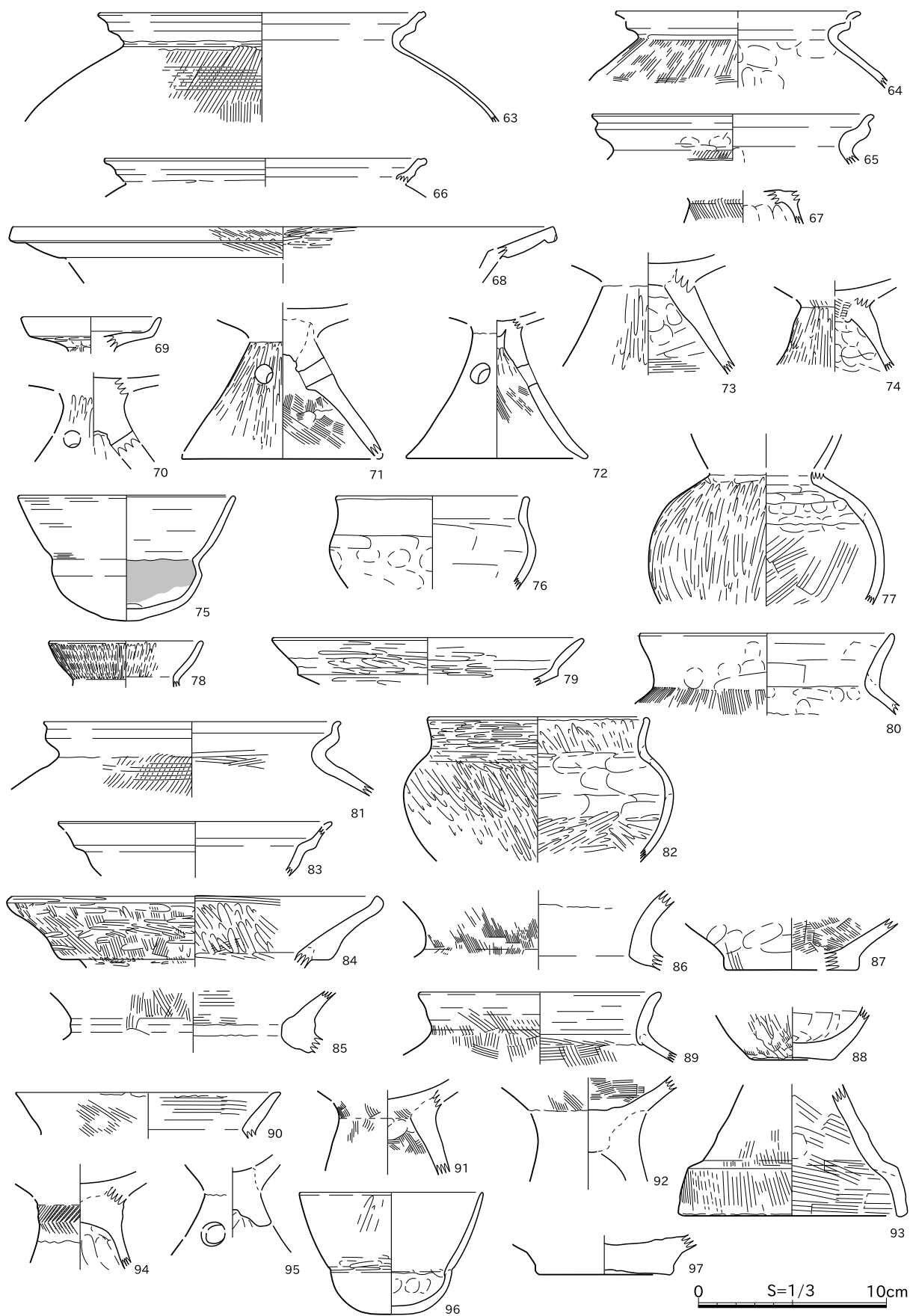
第19図 出土遺物実測図（2）

24～26は、SB05出土である。24はS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部第2段の外反は顕著であるが、端部の肥厚がみられないことからC類の古相に相当するものと考えられる。25は器台の口縁片で、推定復元ではあるが、器台に坏を載せたいわゆる特殊器台と想定される。内面は摩滅しているが、ミガキが確認できる。26は高坏の脚部片で、外面はやや摩滅気味であるが、丁寧にミガキが施されており、三方に円窓をもつ。

27～43は、SB06出土である。27は複合口縁壺の口縁部片で、内彎気味に立ち上がり口唇部付近で外反する。折返し下部で粘土を折返して複合部を形成している。内外面とも摩滅が著しいが、外面にはハケ目が確認できる。28は、台付甕の口縁部片である。29は複合口縁壺の口縁部片で、外面にはハケとナデ、内面には横ナデが確認できる。30・31は、壺の頸部片である。どちらも推定復元ではあるが、一旦垂直気味に伸びた頸部は屈曲し外反して立ち上がる、いわゆる二重口縁壺と考えられる。32～34は、いずれも中型の壺の口縁から頸部片である。32は口唇部付近が横ナデ、頸部にかけてはハケが施される。内面には横位のハケが施される。33は口唇部付近が横ナデされ、頸部にかけてはハケが施される。34は頸部片で、肩部が張る。頸部外面にハケ、胴部外面にはミガキが施される。口縁部内面にミガキ、胴部にはナデとハケが施される。35と36は台付甕の胴部片で、35には横ナデとハケが確認できる。36には胴部外面と口縁内面にハケ、胴部内面には工具と指頭によるナデが施される。37は台付甕の胴下半から脚台部片で、胴部外面にはハケ、脚部外面には工具によるナデが施される。比較的薄手で端部が内側に折返されることから、S字状口縁台付甕であろう。胴部内面は工具によるナデ、脚部内面には指頭によるナデが施される。38はS字状口縁台付甕の脚台部片で、端部が肥厚する。外面にはハケ、内面にはナデが施される。39と40は、器台である。39は一部を欠損するが、ほぼ完存する。中位で屈曲する坏部と大きく開いた脚部から成り、三方に円窓をもつ。外面と器内面は丁寧にミガキが施され、脚内面は工具によるナデが施される。40は三方に円窓をもち、内面は丁寧にミガキが施され、端部が横ナデされる。内面はハケ、端部が横ナデされる。41と42は高坏脚部片で、42は、エントシス状の脚を呈す。43は、小型壺の底部片である。

44～48は、SB08出土である。44は壺の底部片で、外面にはナデが施される。45はS字状口縁台付甕の脚部で、端部が肥厚し、外面には細かいハケが施される。46は器台の脚部で、三方に円窓をもつ。外面は丁寧にミガキが施され、内面は絞り、ナデ、ハケが施される。47と48は、小型丸底壺である。47はほぼ完存、半球状の胴部と大きく開いた口縁部から成る。口縁は丁寧にミガキが施され、胴部には細かいナデが施される。口縁内面は横ナデ、胴部内面はナデが施される。48は底部片で、底部はわずかに窪み、外面はミガキ、内面はナデが施される。

49～77は、SB10出土である。49は器種不明で、摩滅が著しいが沈線が確認できる。50は壺の口縁部片で、端部が面取りされる。51は折返口縁壺の口縁部片で、外面が摩滅しているが、内面には縄文とハケ目が認められる。52と53は複合口縁壺の口縁部片で、52の折返しに比べ53の折返しは弱い。54は壺の頸部片で、外面はハケをナデ消しており、内面にナデが施される。55は壺の底部片で、外面にはナデ、内面には細かいハケが施される。56と57は小型壺の底部片で、いずれもナデが施される。58～60は台付甕の口縁部片で、58は外反して立ち上がり、59と60は直線的に立ち上がる。いずれも横ナデが施され、60は胴部外面にハケ、内面にはナデが施される。61は、台付甕の胴部から脚台部片である。胴部外面にはハケ、内面には工具によるナデが施される。62は台付甕の底部片で、内外面とも細かいハケが施される。63～65はS字状口縁台付甕の口縁部片で、いずれも口縁部第2段の外反が顕著であるC類に比定されるものであるが、端部の肥厚がみられないことから、C類の古相に比定されるものと考えられる。65は、胎土から在地産と考えられる。67は、S字状口縁台付甕の底部片である。



第20図 出土遺物実測図（3）

68は高坏の口縁部片で、鐔状を成し口縁端部にはキザミとハケが施される。69は器台の坏部片で、口縁部が段状に開く。70～74は高坏の脚部片で、70～72は三方に円窓をもつ。70・71・73・74の外面には細かいミガキ、内面にはハケとナデが施される。75は小型丸底土器で、ほぼ完存する。球形状の胴部からやや内彎気味に広がりながら立ち上がる。外面は摩滅気味であるが、口縁部ではナデ認められる。内面も横ナデが施され、胴部には炭化物の付着がある。76は小型丸底土器で、胴上半に最大径をもち、そこからやや外反気味に立ち上がる。内外面ともにナデが施される。77は小型丸底壺の胴部片で、球形を呈す。外面は丁寧にミガキが施され、内面は工具と指頭によるナデが施される。

78～82は、SB11出土である。78は小型丸底土器の口縁部片で、内彎気味に立ち上がる。内外面とも丁寧にミガキが施される。79は二重口縁壺の口縁部で、二次口縁下部は明瞭に屈曲し、内外面にミガキが認められる。80は台付甕の口縁部片で、胴部外面には細かいハケ、内面には工具と指頭によるナデが認められる。81はS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部第2段の外反がみられないことから、B類に比定されると考えられる。82は小型丸底土器の口縁から胴部片で、内外面とも比較的丁寧にミガキが施される。胴上部内面にはナデが施される。83は小型丸底土器の口縁部片で、丸味を帯びた胴部からクランク状に屈曲して口縁部が立ち上がる。

84～96は、SB12出土である。84は複合口縁壺の口縁部片で、口縁端部が丸味を帯び、下部で粘土を折返し複合部を形成している。外面にはミガキ前のハケが確認でき、内面にもミガキ前のハケがわずかに確認できる。85と86は壺の頸部片で、85の屈曲部はわずかに凸状になり、内外面にハケが認められる。86の外面には細かいハケが施される。87は壺の底部片で、外反して立ち上がり、外面はハケ→ナデ、内面はハケが施される。88は小型丸底壺で、平底の底部からやや内彎して立ち上がり、外面はハケ→ナデ、内面は工具によるナデが施される。89と90は甕の口縁部片で、どちらも外面にはハケ、内面にはハケ→ナデが施される。91と92は台付甕の底部片で、摩滅気味であるが、ハケ目が認められる。93は高坏の脚部片で、端部に段を有す。外面には細かいハケ、内面には粗いハケが施される。94は高坏の接合部片で、櫛刺突羽状文が施される。95は高坏の脚部片で、円窓がある。96は小型丸底土器で、半球状の胴部から口縁がやや外反して大きく開く。摩滅が著しいが、外面にはミガキ、内面にはナデが認められる。

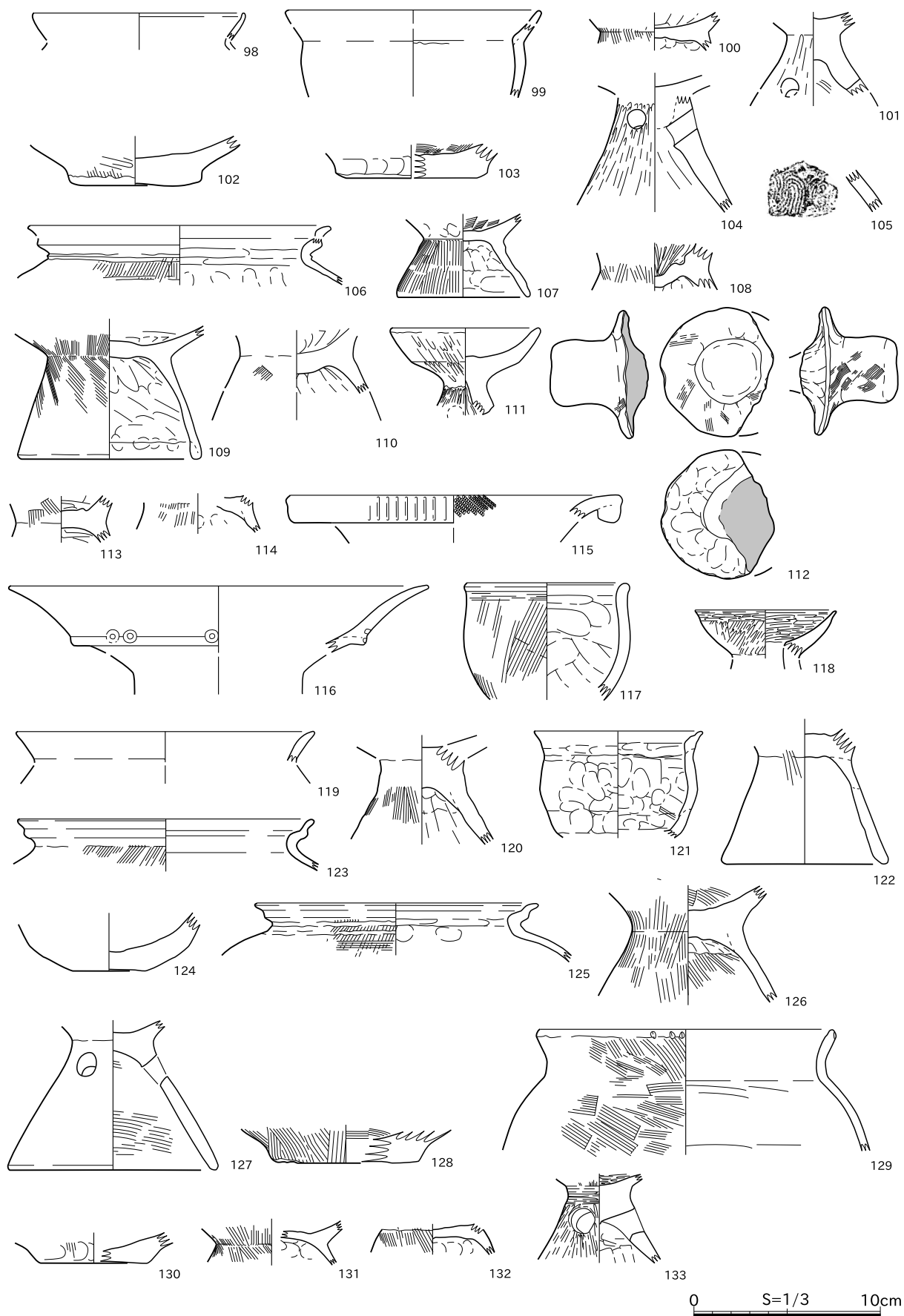
97は、SD01出土の壺の底部片である。

98～101は、SH01出土である。98と99は、小型丸底土器の口縁部片である。98は口縁端部でやや玉縁状を呈し内彎する。100は、S字状口縁台付甕の底部片である。101は器台の脚部片で、円窓を有しミガキが認められる。

102～104は、SH02出土である。102と103は壺の底部片で、102の外面にはハケ目とミガキが認められる。103の外面にはナデ、内面にはハケ目が認められる。104は高坏の脚部片で、三方に円窓があり、外面は比較的丁寧にミガキが施されている。

105～108は、SH03出土である。105は壺の胴部片で、櫛描流水文が施される。106はS字状口縁台付甕の口縁部片で、口唇部を欠損するが、C類に比定されるものと考えられる。107と108は台付甕脚台部片で、107の外面にはハケ、内面にはナデが施される。108は底面が窪み、内外面ともハケが施される。

109～112は、SH05出土である。109はS字状口縁台付甕の脚台部片で、外面には細かいハケが施される。110は台付甕の底部片で、外面にハケ目、内面にナデが確認できる。111は小型器台の坏部で、屈曲して口縁に至る。外面にはミガキが施される。112は用途不明の土製品で、径6.5cm程の円錐円盤に径3cm、高さ3cm程の乳頭状の突起物に取り付く。突起のない反対面では円錐状に伸びるが欠落し



第21図 出土遺物実測図（4）

ている。手こねと工具による細かい整形痕があり、整形前の細かいハケ目も確認できる。

113と114は、SP16出土の台付甕の底部片である。どちらも外面にハケ目が確認できる。

115はSP49出土の折返口縁壺の口縁部片で、折返された端面には棒状付文の痕跡が認められ、内面には縄文が施される。

116～118は、SP57出土である。116はSP57出土の二重口縁壺の口縁部片で、二次口縁は外反気味に立ち上がり、口縁下部に端面を造り出し2個単位の円形浮文の痕跡が認められる。117は小型丸底土器で、底部を欠損する。胴上半から直線的に立ち上がり口縁端部が玉縁状を呈す。胴部外面にハケ、内面にはナデが施される。口縁部は内外面ともに横ナデが施される。118は小型器台の坏部片で、口縁端部は鋭く立ち上がり、内外面ともに丁寧にミガキが施される。

119はSP59出土で、台付甕の口縁部片である。

120はSP78出土の高坏の脚部片で、接合部が太い。

121はSP79出土の小型壺で、底部を欠損する。口縁に最大径をもち頸部の屈曲は緩やかである。口縁部をのぞき内外面とも工具と指頭によるナデが施される。

122はSP97出土の台付甕の脚台部片で、外面にハケが確認できる。

123はSP90出土のS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部第2段が外反するが、端部の肥厚はみられないC類古相に比定できる。

124と125は、SP109出土である。124は、丸底土器の底部片である。125はS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部第2段が外反するが、端部の肥厚はみられないC類古相に比定できる。

126はSP111出土の台付甕の底部片で、内外面ともハケが施される。

127と128は、SP117出土である。127は高坏の脚部で、円窓があり、内面にはハケ目が確認できる。128は壺の底部片で、内外面ともハケが施される。

129～149は、遺構外出土である。129～135は、D－4区の出土である。129は台付甕の口縁部片で、頸部の屈曲は弱く、口縁端部のキザミも小さい。外面には斜位のハケが施される。

130は壺の底部片で、外面にはナデが確認できる。131と132は台付甕の底部片で、接合部の屈曲具合、比較的薄い器壁から判断してS字状口縁台付甕と考えられる。133は高坏の脚部片で、円窓があり、内外面とも丁寧なミガキが施される。134はS字状口縁台付甕で、底部から脚台部を欠損する。S字状の口縁から肩を張らせ胴上半部に最大径をもつ。頸部から肩部にかけ縦位のハケ、肩部から底部にかけては斜位のハケが施される。内面は、工具によるナデが施される。肩部に横ハケが施されないことと、口縁部第2段の外反が顕著かつ端部が肥厚することからD類に比定される。135は高坏の口縁部を欠く坏部片である。坏部は、底部に明瞭な屈曲を設け脚部につながる。全体にシャープなつくりであるが、摩滅が著しく調整痕は確認できない。

136～138は、E－4区出土である。136は広口壺の口縁部片で、内外面ともミガキが施され、ミガキ前のハケ目が目立つ。137は台付甕の底部片で、外面にはハケ、内面にはハケとナデが確認できる。138は高坏の口縁部片である。

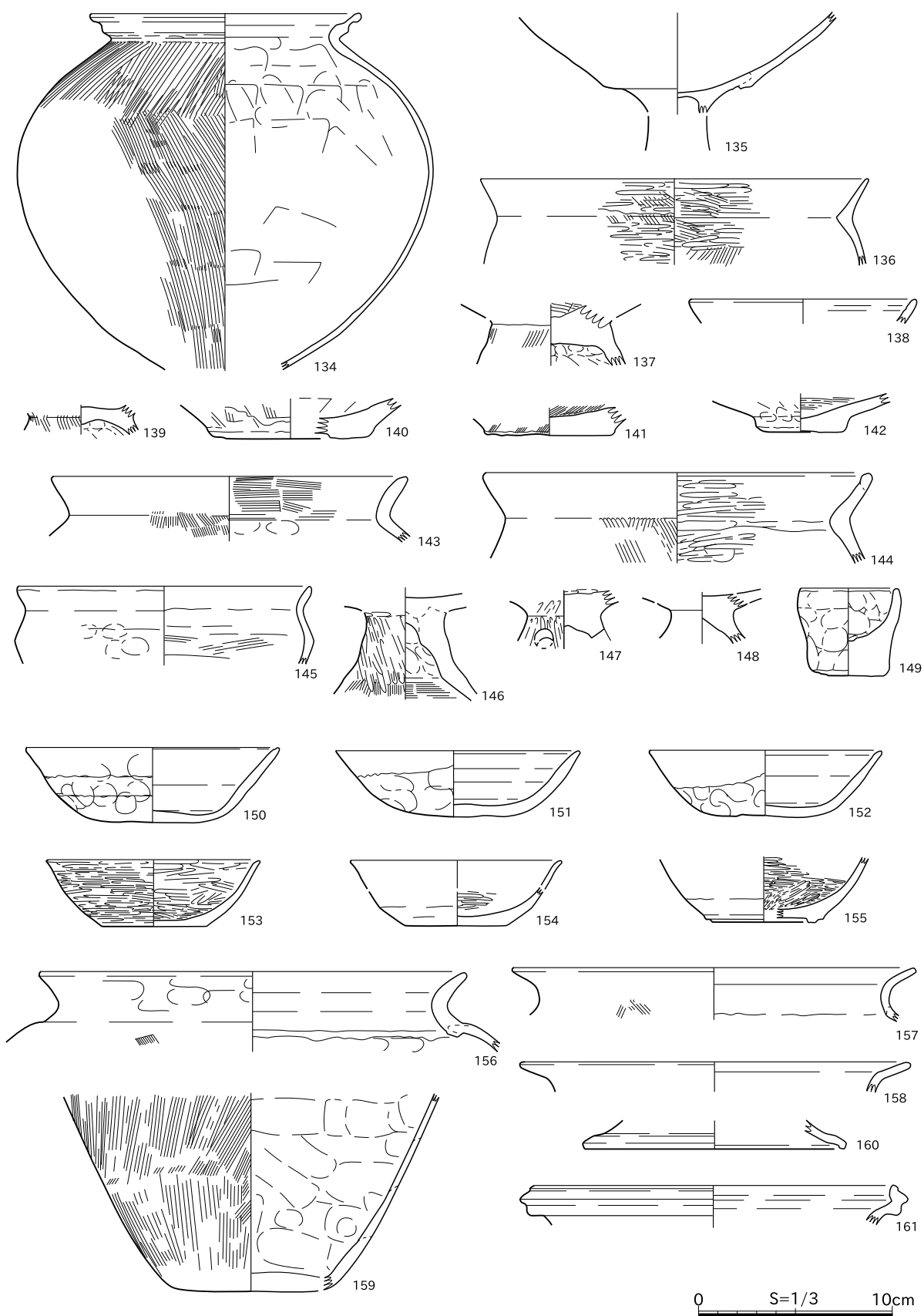
139は、E－5区出土のS字状口縁台付甕の底部片である。

140はE－6区出土の壺の底部片で、外面にはハケ、内面にはナデが施される。

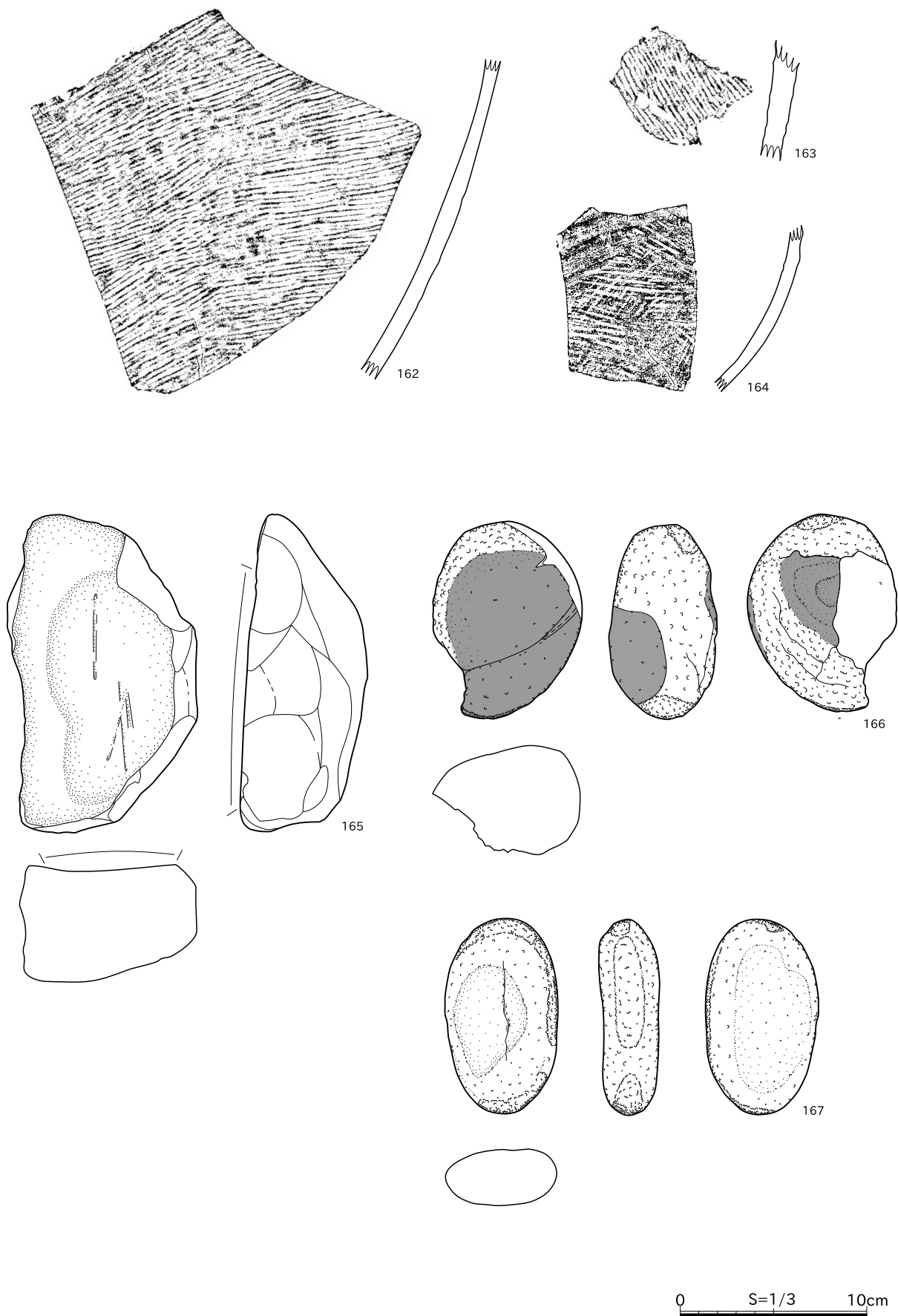
141はG－6区出土の壺の底部片で、内外面ともにハケが施される。

142～149は、重機による表土掘削時等での出土である。142は壺の底部片で、底部から胴部には屈曲があり、外面にはナデ、内面にはハケが施される。

143は台付甕の口縁部片で、内外面ともハケが施される。144は広口壺の口縁部片で、口縁端部を内



第22図 出土遺物実測図（5）



第23図 出土遺物実測図（6）

側に玉縁状におさめる。胴部外面と内面にはミガキが確認できる。145は台付甕の口縁部片で、胴上半に比較的明瞭な屈曲があり、外面にはナデ、内面にはハケとナデが確認できる。146は高坏の脚部片で、接合部が比較的太く、外面はミガキ（一部にハケ）、内面はナデが施される。147は円窓をもつ高坏で、内外とも丁寧にミガキが施される。148は、高坏の底部片である。149は手捏ね土器で、完存する。底部が厚く、わずかに内彎しながら口縁部に至る。内外面とも指頭によるナデが施される。

③土師器・須恵器

150～152はSB06出土の土師器坏であるが、SB06に帰属するものでない。ただし、竪穴住居以外の帰属する遺構は確認できなかった。150は完形で、平底に近い底部から緩やかに立ち上がり口縁部でわずかに外半する。外面胴下半にはナデが施され、内面は横ナデが施される。151も完形で、底部は150に比しさらに明瞭でなく緩やかに口縁部につながる。外面胴下半にはナデが施され、内面には横ナデが施される。152は、150同様平底に近い底部から緩やかに立ち上がる。外面胴下半にはナデが施され、内面には横ナデが施される。

153～155は土師器坏で、いずれも薄手かつ内外面にミガキが施された、いわゆる甲斐型坏である。出土地点は、153と155が遺構外、154がSB08で、先の150～152の土師器坏と同様、竪穴住居に帰属するものではなく、帰属する遺構は確認できなかった。153は完形品で、平底の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。内外面ともに丁寧にミガキが施され、内面は黒色処理されている。154は口縁部を欠くが153と同形態と考えられる。内面はミガキと黒色処理が施される。155は口縁部を欠く。153と154とは異なり低い高台がつき、やや内彎気味に立ち上がる。内面はミガキと黒色処理が施される。

156～158は土師器甕の口縁部片で、156と158は小穴、157はSB08出土である。156は弱く屈曲する頸部から肩部にわずかな陵をもち胴部にいたる。外面にはナデ、一部にハケが認められる。口縁内面は横ナデが認められる。157の頸部の屈曲も緩やかで、端部の外反が強い。外面にわずかにハケが認められ、内面は横ナデが施される。

159は、SB08出土の土師器甕の胴部片である。外面にはハケ、内面には工具によるナデが施される。

160は、SB08出土の須恵器坏蓋の口縁部片である。

161は遺構外出土の須恵器壺もしくは甕の口縁部片で、内彎しながらくの字状を呈す。

162～164は遺構外出土の須恵器甕の胴部片で、タタキが施される。

⑤石器

165はSB01出土の砂岩製の砥石で、長径16.9cm、短径9.9cm、最大厚6.0cm、重量1,320 gを測る。使用面は1面のみで、浅い皿状を呈し、数本の幅5 mm程の線状擦痕がある。

166と167は、砂岩製の敲石である。166は小穴出土で、長径10.3cm、短径9.0cm、最大厚5.8cm、重量530 gを測る。使用面は両面にみられる（スクリーントーン）。

167は遺構外出土で、長径10.7cm、短径6.1cm、最大厚3.2cm、重量192 gを測る。長径両端部に敲打痕があるほかに、表裏両面に不正楕円の擦痕が認められることから、敲石と磨石の両機能を併せ持つものである。

(3) まとめ

今回の調査における成果と課題をあげ、まとめとしたい。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居と掘立柱建物から成る集落で、建て替え等による概ね3時期にわたる継続が想定される。しかし、詳細な分析を行っていないため、現段階では集落3時期の具体様相には言及できない。

立地としての集落のあり方をみると、南北グリッドのCグリッドを境にCグリッド以西では竪穴住居と掘立柱建物はおろか小穴等の遺構は全く検出されていない。地形を仔細にみていくと、Bグリッド以西では標高が少しずつ高くなっており、AグリッドとCグリッドとの比高は約1.5mを測る。調査区の西には高田上ノ段遺跡が展開しており、高田上ノ段遺跡はその名称が示すとおり、吉岡下ノ段遺跡に比し段丘が高くなる遺跡で、今回の調査区はこの段丘境界にあたる。したがって、今回の調査区は、吉岡下ノ段遺跡に立地する一集落の段丘を地形的境界とする西境界をとみてよいだろう。

前述のように集落動態について詳細な分析は行っていないが、遺物の出土傾向としては古墳時代前期が多くを占めることは明らかである。また、竪穴住居跡については、SB12を除けば平面形は隅丸方形もしくは方形であり、遺構においても古墳時代前期を主とする集落と見てよいだろう。調査区で見る限り、遅くとも弥生時代後期に開始されたであろう集落は、古墳時代前期に拡大していったことがわかる。

遺物の出土量は決して多いものではないが、古墳時代前期については在地産ではない、S字状口縁台付甕はじめ、特殊器台や二重口縁壺などのいわゆる外来系、搬入品とされる土器が、これまで和田岡原で調査されてきた遺跡に比し少なからず見受けられることも特徴である。S字状口縁台付甕については、在地産の模倣品も見られる。外来系、搬入土器の出土と集落の拡大、展開には相関性が示唆される。その具体背景を含めた相関性の究明が課題である。

9世紀後半代に比定される土師器坏・甕の出土は、和田岡原ではこれまでこれほどまとまった出土事例はなかった。和田岡原において、6世紀以降、近世に至る遺跡がほとんど見られなくなることから、奈良平安時代には和田岡原から人跡そのものがなくなるとさえ考えられてきた。それ故、当該期の土器の出土は非常に稀有であるばかりか、新発見と言っても過言ではない。加えて搬入品であるミガキ調整と黒色処理が施された甲斐型坏の出土は、和田岡原はおろか遠江においても稀有な事例と言える。和田岡原においては、時代的にも稀有であることに加え、さらに稀有な搬入品の出土背景の究明は大きな課題と言える。残念ながら遺構は検出することはできなかったが、今回の場合、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構覆土を掘り込んで遺構が構築されていた可能性が高いことから、遺構検出には注意を払う必要がある。

2 瀬戸山Ⅰ遺跡第7次

遺構の時代と種類の概要を示すと、縄文時代後期の竪穴住居跡2軒、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡55軒、掘立柱建物跡8棟、鎌倉時代の土坑22基が主な遺構で、その他、多数の小穴、土坑、性格不明遺構がある。全体として重複が著しく、特に竪穴住居跡と掘立柱建物跡はほとんどが重複しており、単独で検出されたものは非常に少ない。以下、遺構及び遺物の属する時期と種類ごとに報告する。

(1) 遺構

①縄文時代の遺構

i 竪穴住居跡

SB37 (第25・72図)

I-10区に位置する。掘り方は、約2.0×1.5mの範囲で残存しており、南側及び西側を弥生時代以降の遺構により欠損している。残存する遺構は、全体の1/4程度と推定される。検出面からの深さは10～20cmを測り、壁溝は確認していない。

遺構の規模及び形状は推定の域を出ないが、検出された石敷石囲炉が、北西側立ち上がりから約1.1m、北東側立ち上がりから約1.9mの位置にあることから、竪穴の中心は石敷石囲炉より南東に存在していたと考えられる。仮に立ち上がりが確認された北東側と同距離に南西側立ち上がりがあったと想定すると、住居の規模は東西約2m弱と推定される。炉の位置関係から、南西側に出入口を設ける楕円形の竪穴住居が想像される。

検出された石敷石囲炉は、東西約50cm、南北約40cmの規模で、南東側を他の遺構により欠損している。炉の構築にあたっては、底に約10～20cm大の円礫を据え、そのまわりに石を皿状に配置している。礫は掘り方に直接設置することなく、5～10cm程度の土を覆った上に配置している。また、遺構内からは10～30cm大の礫が複数検出されている。一部被熱による赤化が認められる礫もあることから、石敷石囲炉として使用していたものと考えられる。

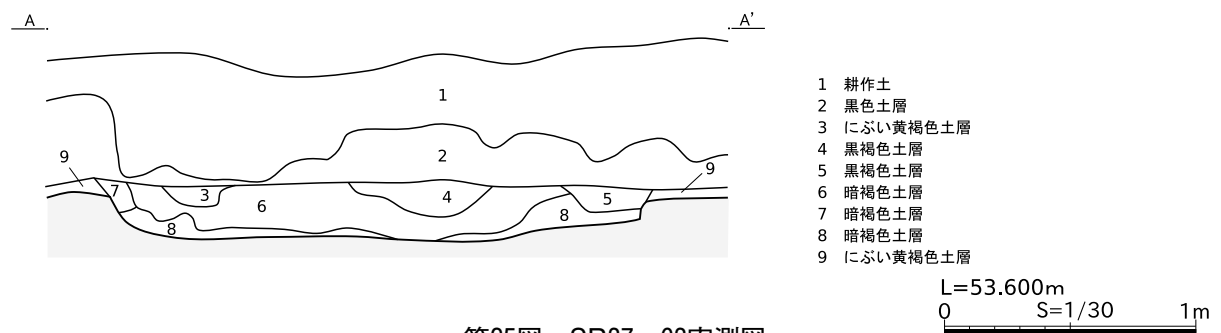
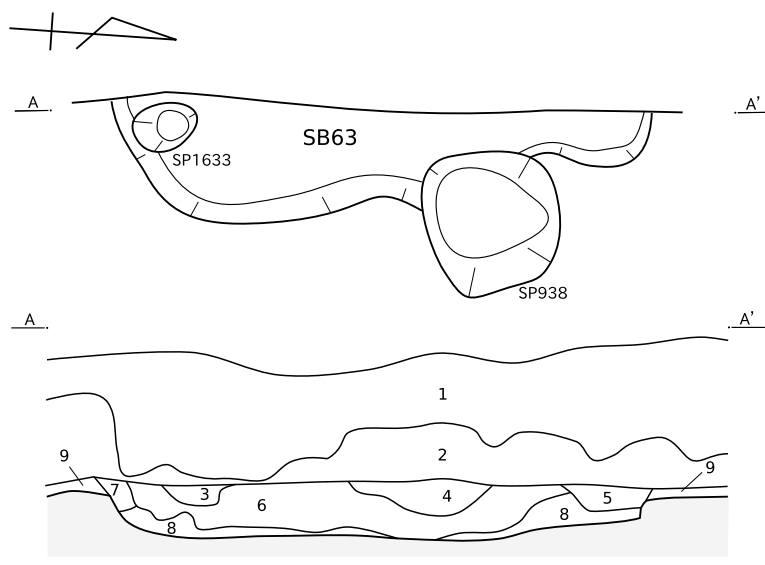
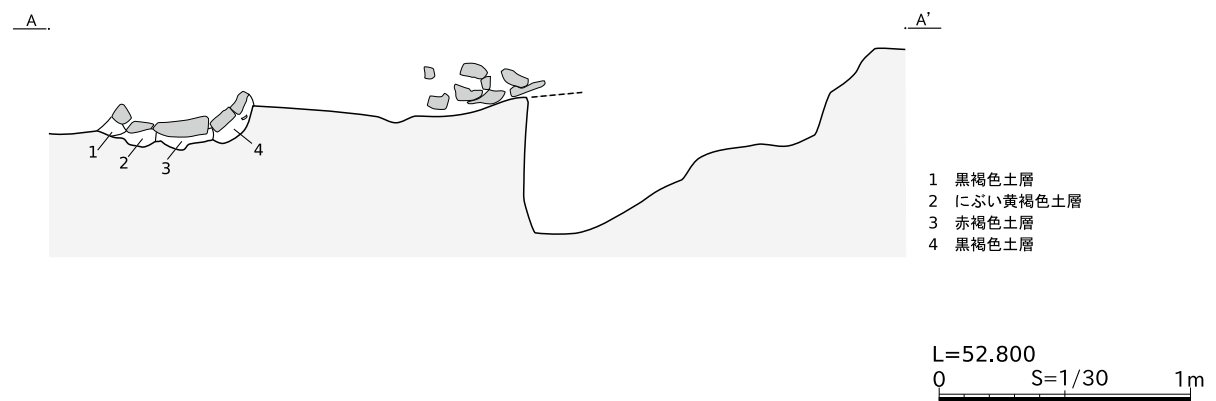
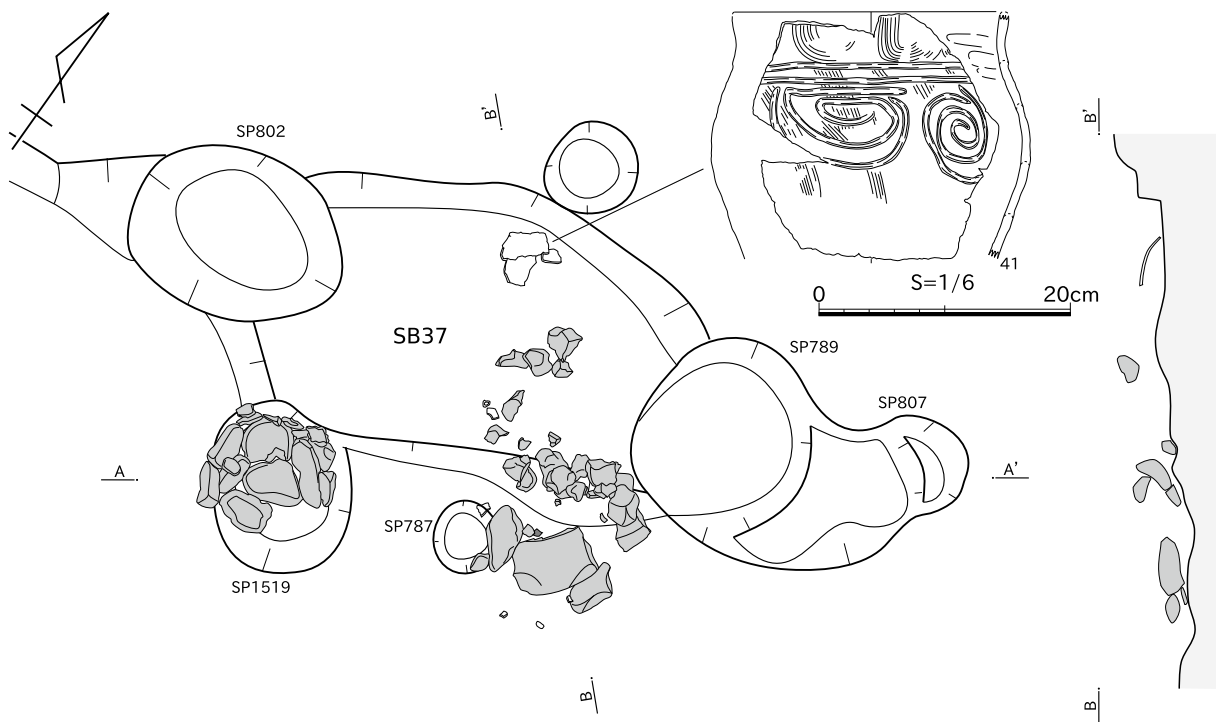
出土遺物は第72図41で、北側立ち上がり付近、掘り方の直上から出土した、後期初頭から前葉に比定される深鉢形土器の胴部破片である。

SB63 (第25図)

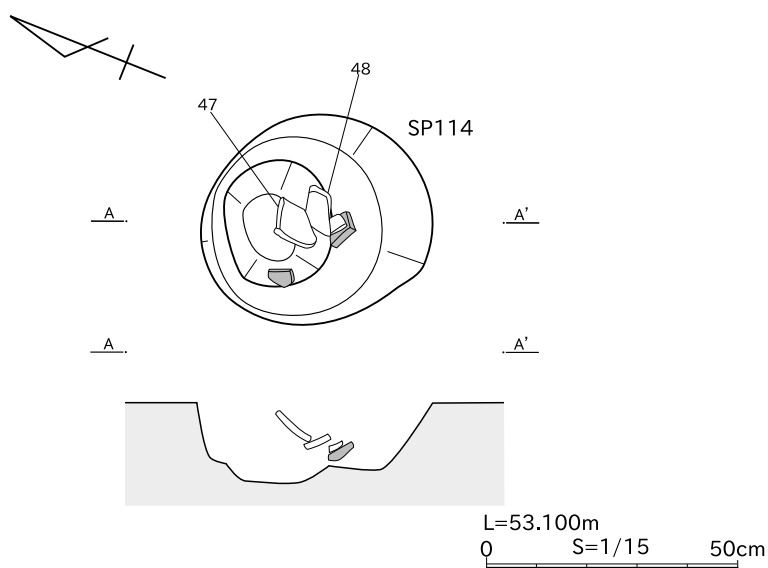
E-4区に位置する。土層断面図に示す8層にやや硬化が認められ、床面と考えられるが、炉等の要素が確認されていないことに加え、一般的な竪穴住居に比べ小規模であることから、竪穴住居以外の性格を持った遺構である可能性を否定できないが、現地で住居跡として扱った。

調査区限界にあることから平面規模は定かではないが、確認できる最大幅は2.15mを測り、深さは検出面から掘り方まで約15～25cmである。S P 1633は、長径25cm、深さ10cm、下場の径12cmを測る平面楕円形の小穴で、この遺構に伴う小穴と考えられる。

出土遺物は取り上げが困難なほどの縄文土器微細片のみのため、時期不詳であるが、弥生時代以降の遺構の覆土とは明らかに異なる褐色の強い色調の覆土であることから、縄文時代の遺構として判断した。



第25図 SB37・63実測図

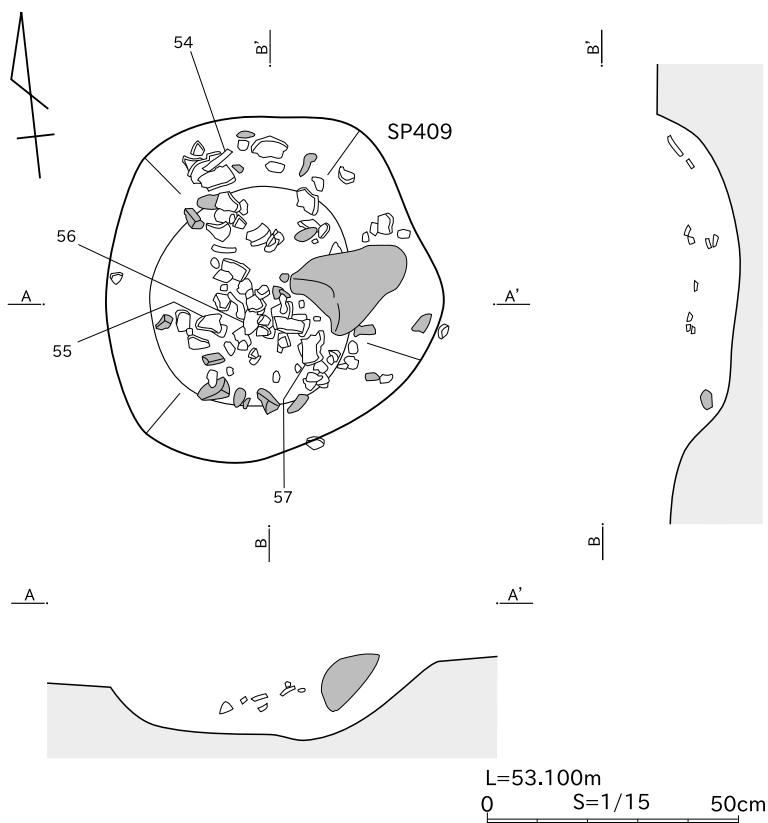


ii 小穴・土坑

SP114 (第26・72図)

C-10区に位置する。平面形は円形を呈し、長径45cm、短径40cm、深さ13cmを測る。底は平らで壁はしっかり立ち上がり、底には長径25cm、短径20cm、深さ3cmの落ち込みがある。

遺物は第72図47・48で、縄文時代中期後葉に比定される、同一個体の深鉢形土器の口縁部破片である。



SP409 (第26・72図)

A-11区に位置する。平面形はやや角がある台形に近い不整形を呈する。長径約75cm、短径65cm、深さは約15cmを測る。底部からの立ち上がりは緩やかであり、浅いボウルのような断面形である。

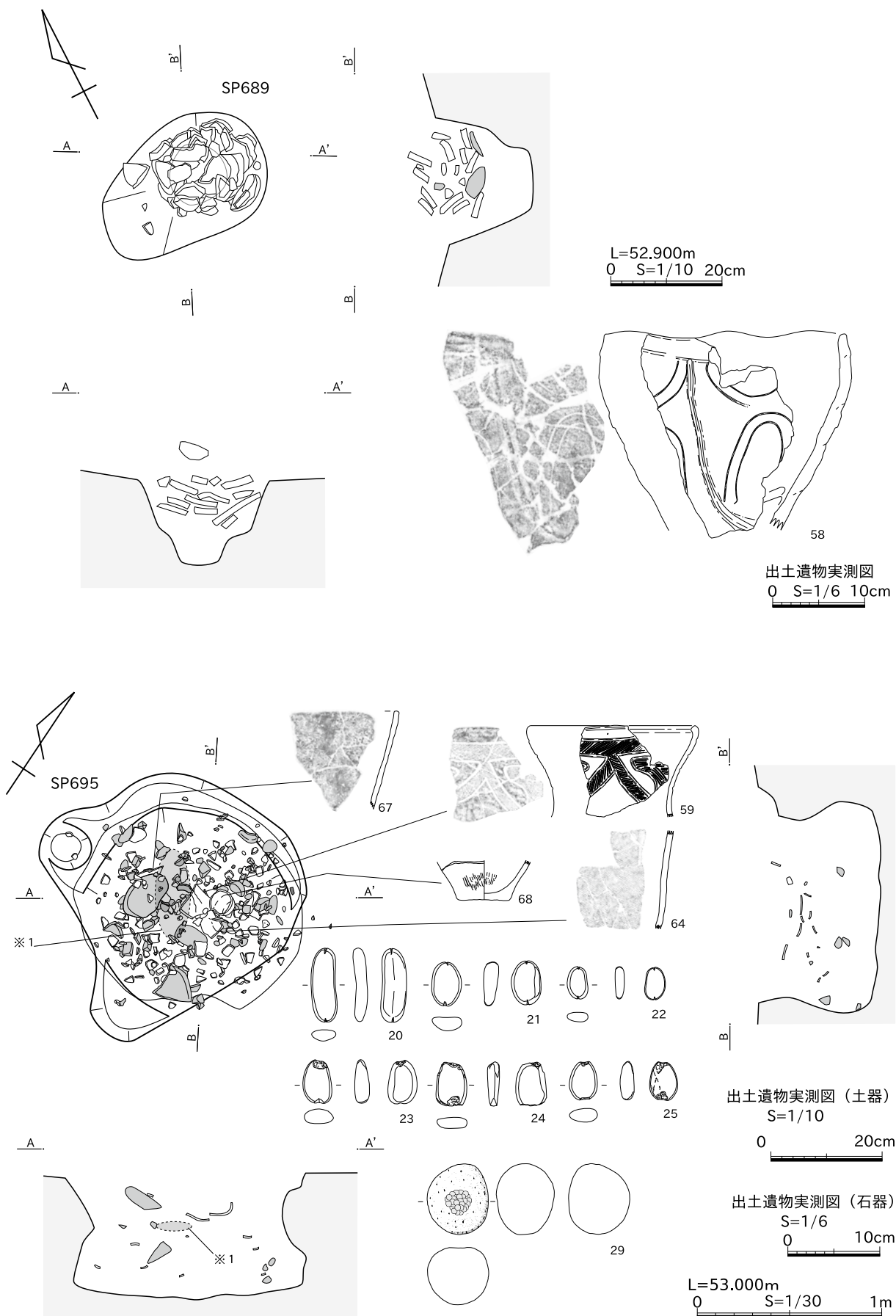
出土遺物は第72図54～57で、その他多数の縄文土器片が出土している。しかし、出土状態断面図に示すとおり、確認面から約5cm下層から弥生時代後期に比定される土器微細片の出土を確認していることから、少なくともこれより上層は後世の掘削を受けていることは間違いない。後世の掘削がこれより下層に及ぶのか、調査では明らかにならなかったが、出土遺物と合わせ、縄文時代の遺構として報告する。

第26図 SP114・409実測図

SP689 (第27・72図)

E-10区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径33cm、短径23cmを測る。底は径約10cm、深さは15cmを測る。

出土遺物は第72図58で、ピット内から出土した土器片はすべて同一個体の破片である。出土状況は、覆土上層から中層まで、つぶれたように土器片が重なって出土している。ピット内から他の個体の土



第27図 SP689・695実測図

器片が出土していないことを勘案すると、廃棄土坑に類するものではなく、何らかの意図をもって土器を土坑に収めたものと考えられる。出土遺物から、遺構の時期は中期末葉に比定される。

SP695（第27・73図）

G-11区に位置する。上部に対し下部から底部にかけ広がる掘り方をもつ、いわゆるフラスコ状ピット（土坑）である。平面形は円形を呈し、確認面での最大径は1.15m、中段部分は幅約1mを測る。底の平面形は円形を呈し、最大径は1.23mを測る。確認面から底までの深さは約65cmである。

断面形は、開口部及び底部で最大径を有し、中段付近でくびれる「く」の字状を呈する。検出状況から、開口部付近に後世の掘削は認められていない。したがって、廃絶時点での形態を留めていると考えられる。

出土遺物は第73図59～70に示す深鉢形土器の破片と、最大で30cm程度の石や礫が重なるように出土している。また、覆土から石錘が6点、凹石が1点出土している。

なお、土坑内の覆土の内※1で示す範囲には、被熱により赤化した赤褐色ブロックを含む土層が確認された。ただし、暗褐色土内に赤褐色ブロックが散乱する様相であることから、当該部分で火を使用した事によるものではなく、外部から流入したものと考えられる。

遺構の性格について、遺物の出土状況から、貯蔵穴として利用された後、廃棄土坑として使用されたと考えられる。出土遺物から、後期初頭から前葉に比定される。

SP1205（第28・74・75図）

K-6～7区に位置する。平面形は不整形であるが台形に近い。確認面での規模は約1.15m四方を測り、深さは約20cmである。底面は概ね平らに掘られており、下場での規模は東西方向、南北方向とも約0.9mを測る。

出土遺物は第74図79～85、第75図86～96である。79は、中心からやや北西に寄ったところから、口を西側に向け、横臥状態で出土している。この土器は底部及び縦方向の中心から丁度半分程度を欠損している。残存部の状態は良好で、欠損部分が遺構確認面と重なることから、後世の掘削により、遺構の上面ごと欠損したと考えられる。検出段階では意図的な埋納の様相も想定されたが、その他の出土遺物が小片であること、不規則に散乱していることから、廃棄土坑としての性格を考えている。出土遺物から、後期初頭に比定される。

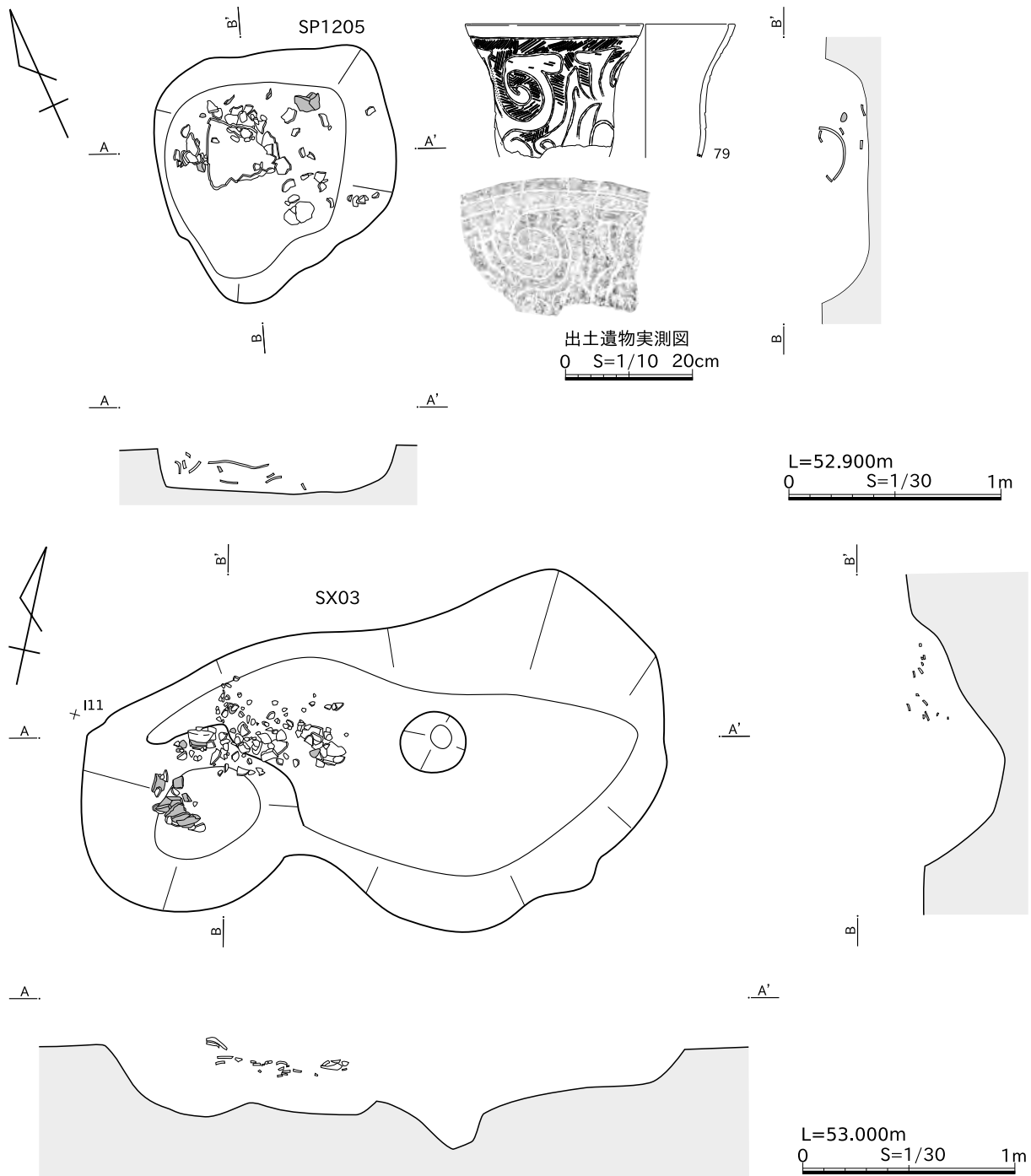
iii 性格不明遺構

SX03（第28・75図）

H・I-11区に位置する。平面形は不整形な長円形の土坑である。確認面での長さ2.8m、幅1.5mを測り、西側は長径1m、深さ40cmの平面楕円形の土坑状を呈する。また、中心よりやや東の底部には小穴があり、長径30cm、深さ15cmを測るが、西側の上場は明瞭でなく、小穴というより、窪みといった様相である。底面は斜面及び凹凸があり、平面があまり見られない。

出土遺物は第75図97～100で、遺構の西側、覆土上方の1.0×0.8mの範囲で礫と共にまとまって出土している。

不整形な平面形状、安定しない底の様子から、風倒木痕である可能性があるが、出土遺物と合わせて不明遺構として報告する。

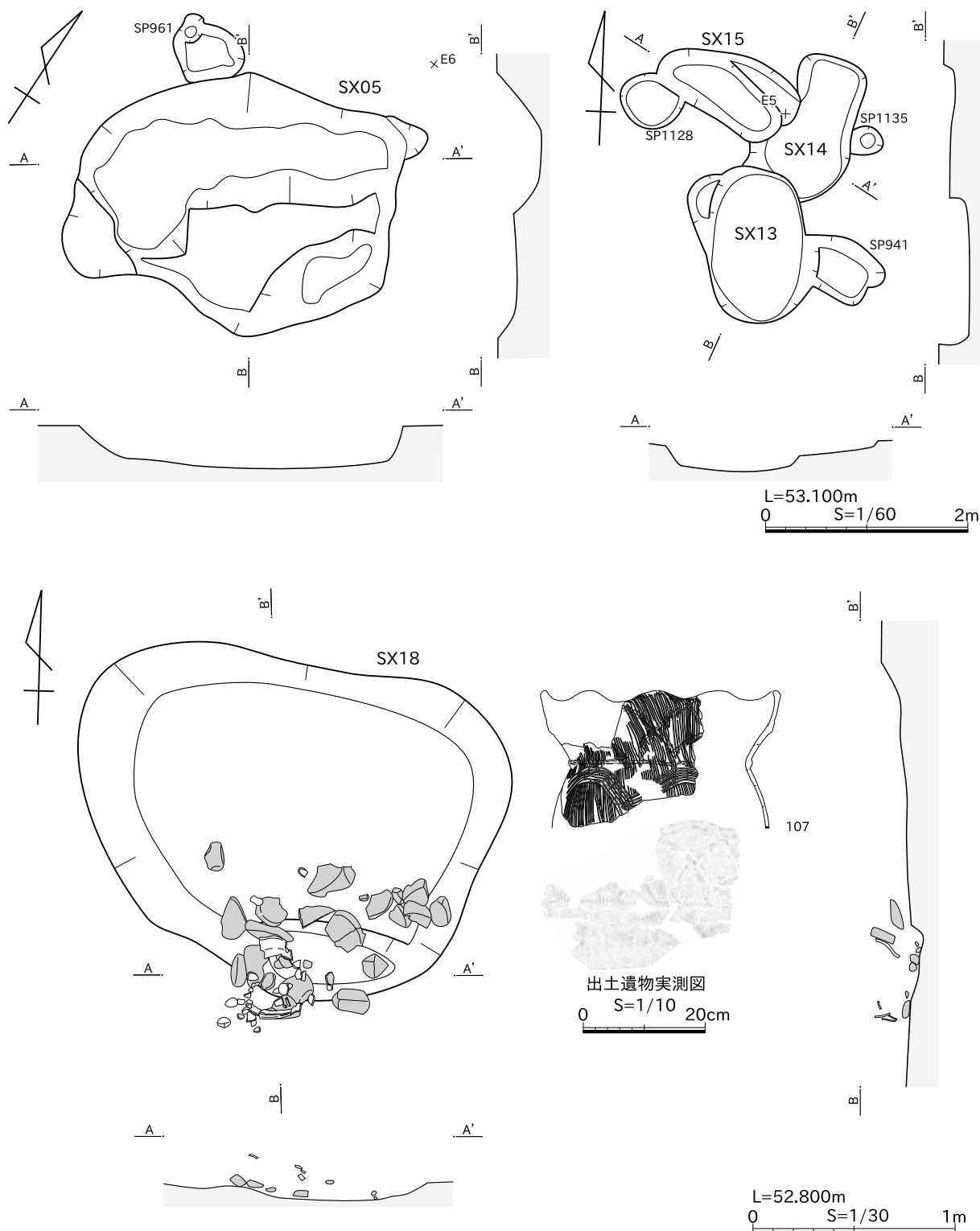


第28図 SP1205・SX03実測図

SX05 (第29・75図)

E-5・6区に位置する。平面形は不整形で、崩れた五角形を呈する。確認面での規模は、長さ3.2m、幅2.6mを測る。深さは、南東側の高い底面では約10cm、北西側の深い底面では約40cmを測る。それぞれの底面は概ね平らである。

出土遺物は第75図101～105で、その他、微細片が多数出土している。出土遺物から中期後葉に比定される。



第29図 SX05・13～15・18実測図

SX13・14・15 (第29図)

D・E-4・5区に位置する。SX14は、覆土に弥生時代後期～古墳時代前期の土器微細片を含み、覆土は黒色土である。平面形は歪な長方形で、長さ1.5m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。弥生時代後期以降の性格不明遺構であるが、重複関係の便宜上、本章で報告する。

SX13は楕円形を呈する長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.3mの土坑で、側壁は袋状に膨らむ。覆土は褐色

～暗褐色で、弥生時代後期以降の遺構とは明らかに異なる。また、縄文土器微細片を含むことから、縄文時代の遺構と判断した。掘り方は丁寧で、土坑墓としての性格が想定される。

SX15は平面長円形の土坑である。確認面での長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.25mを測る。底面は緩やかに弧を描き、断面は船形を呈する。覆土は褐色で、縄文土器微細片を含む。

SX18（第29・76図）

J-8区に位置し、地山にまで至る後世の攪乱により、掘り方をかろうじて検出した程度である。後述するとおり、本遺構は住居としての性格を有する可能性があるが、規模等が不明のため、不明遺構の項で報告する。

遺構の平面形は不整形な長楕円形で、長さ2.1m、幅1.7mを測る。深さは10cm程度を確認している。

出土遺物は第76図107で、遺構の南側、1.3×0.8mの範囲から最大25cm程度の石・礫と土器がまとまって出土している。礫の一部は遺構の掘り方に直に接しており、土器は礫に寄りかかるように、口縁開口部を上に向け出土している。残存していた口縁部は、ちょうど向かい合う位置関係にあり、出土時の口縁部間は約40cmを測る。これは、図上復元した土器の口縁部径と同等であることから、掘り方直上の礫と向かい合う口縁部は、原位置を留めていると考えられる。また、同一個体の土器底部は周辺を含め確認できていない。したがって、出土状況からこの土器は、「底部を欠いた状態で、開口部を上に向け、周囲を礫に密着させて」埋納されたと考えられる。いわゆる埋甕石囲炉としての性格がうかがえる。これは同時に、当該地が住居遺構内であることを示唆するものである。しかし、住居の立ち上がりや、支柱穴に類するものは検出されていない。

④弥生時代後期から古墳時代前期

i 竪穴住居跡

当該期の竪穴住居跡の実数としては60軒に上ると推定されるが、重複が著しい箇所においては各々の掘り方の形状さえ困難な状態であった。さらに個々の全容はおろか、明らかに複数の竪穴住居跡が重複している箇所においては、その軒数の認知さえ困難な箇所もある。そのため、現地にて竪穴住居跡と認知し付番したものの、その後の整理で不明瞭なものについては本報告書内で欠番となっている。

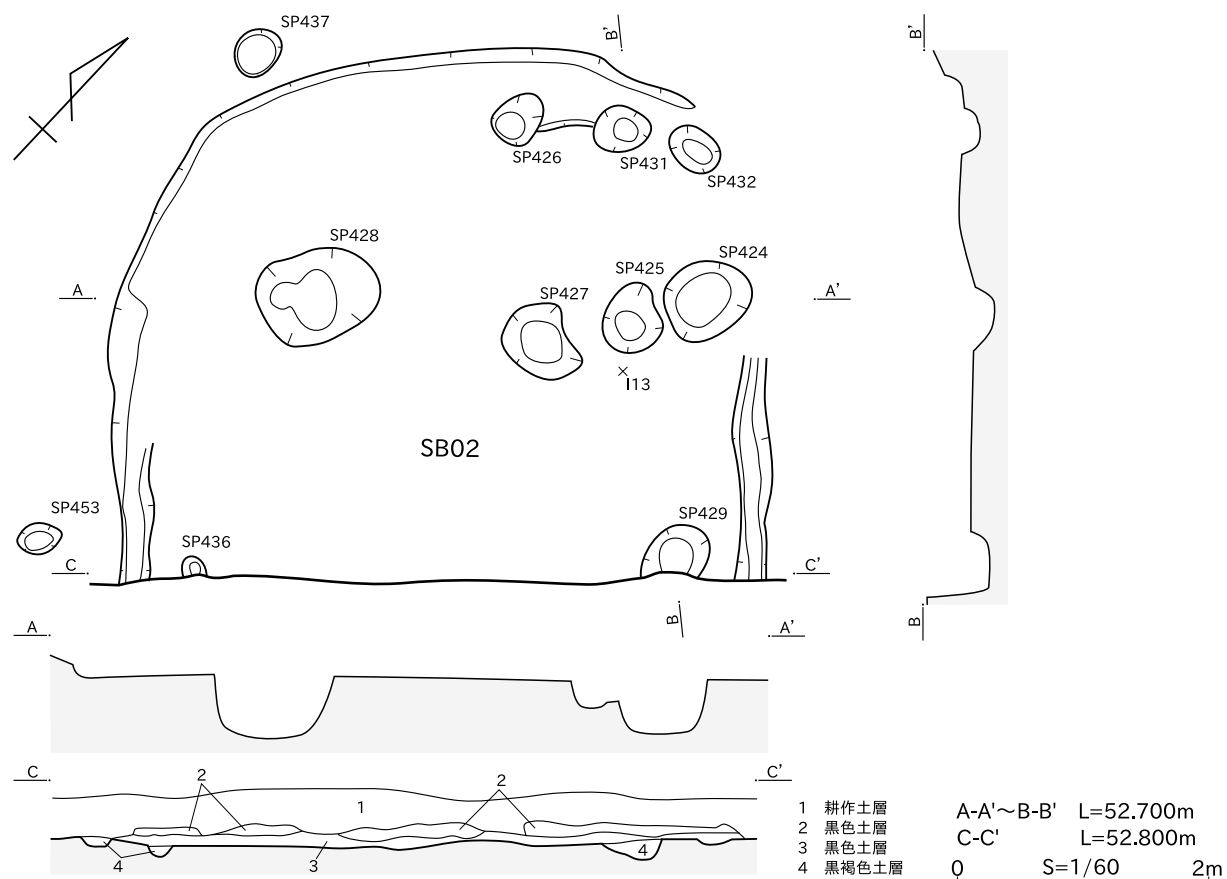
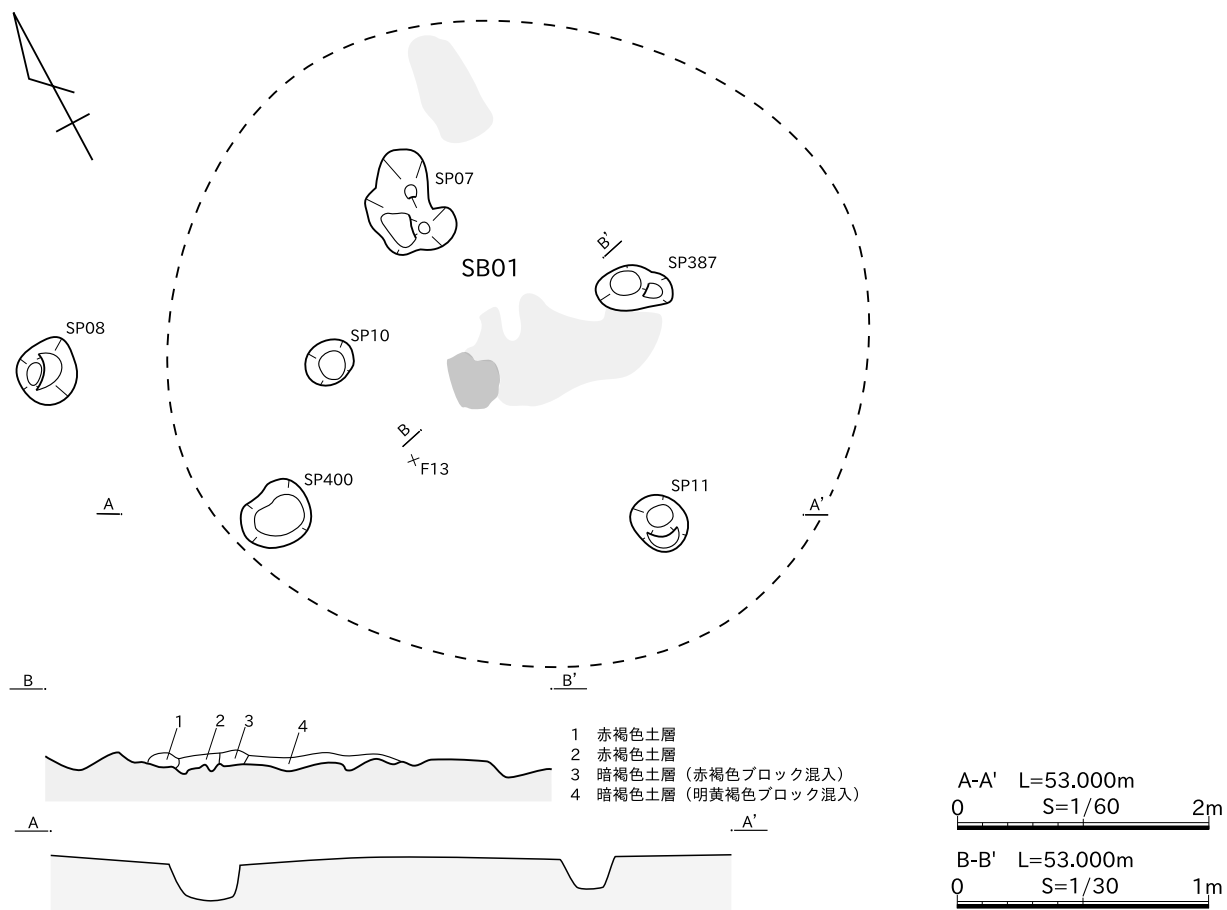
SB01（第30図）

E・F-12・13区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は確認できなかったが、長径40cm大の炉跡とその東側と北側に貼床が検出されたこと、またその周囲に支柱穴と考えられる小穴が確認されたため、竪穴住居跡と認めた。支柱穴としたのは、南辺のSP11・400である。この竪穴住居跡からの出土遺物は小片であり、図示可能なものはなかった。

SB02（第30・82図）

H・I-12・13区に位置する。住居跡の南辺部は、調査区外に及んでいる。規模は東西5.2mを測り、北東部角が確認されなかったが、形状は小判形を呈していたと推定される。掘り方の東辺と西辺の一部に壁溝が確認された。貼床と炉跡は、確認されなかった。支柱穴はSP425（もしくは424）、429、428と考えたが、SP424は掘り方に近すぎるため、該当しないかもしれない。南西部の支柱穴は確認できず、調査区外にあると考えられる。

出土遺物は、第82図のS字状口縁部台付甕（以下S字甕）（301）・壺底（302）・台付甕の台部（303）である。また覆土からは、黒曜石の剥片が出土している。

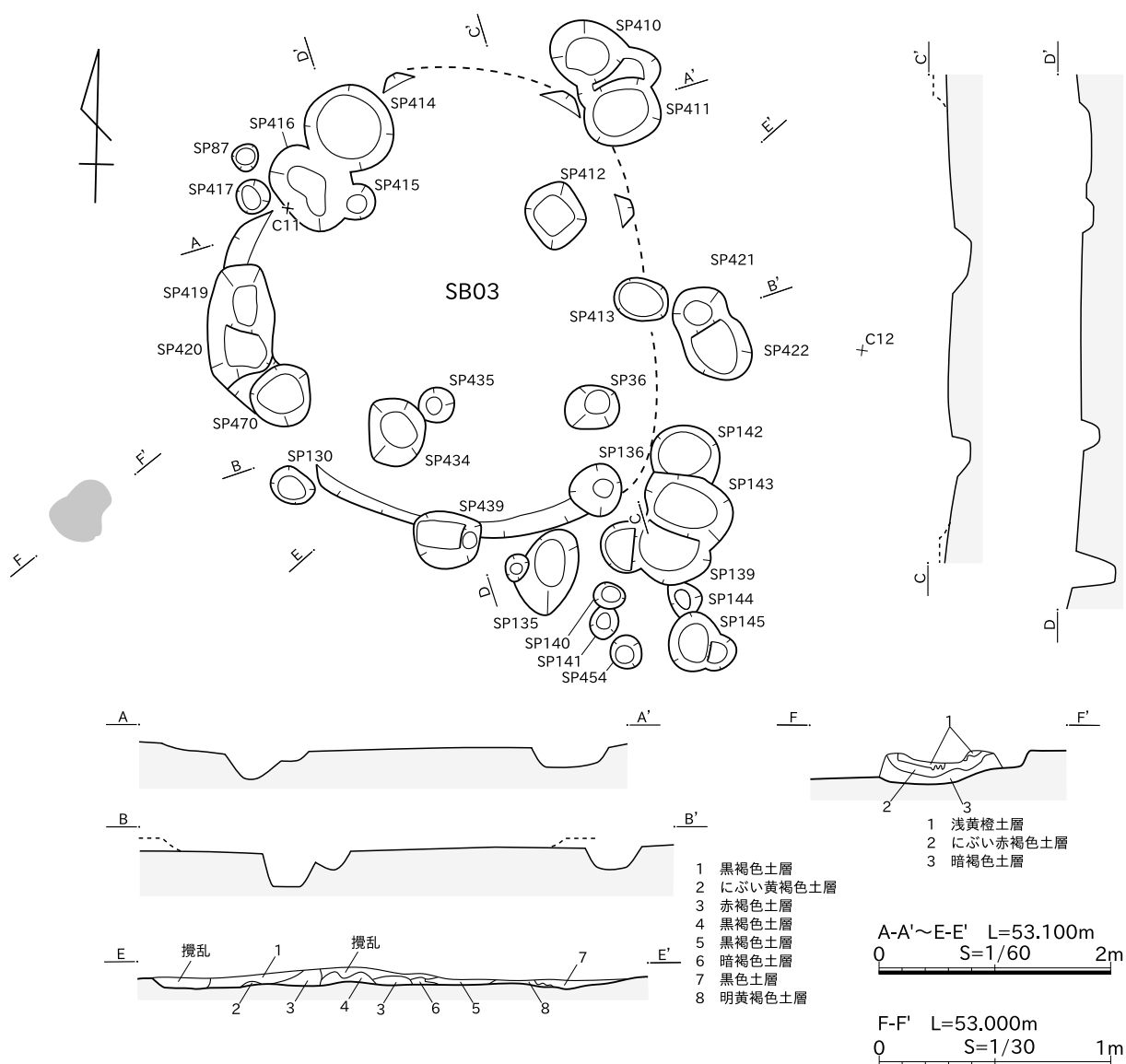


第30図 SB01・02実測図

SB03 (第31・82図)

B・C-11・12区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、西辺部と東辺の一部を確認したのみで、覆土もわずかであった。規模は東西推定3.8m、南北4mを測り、形状は小判形を呈していたと推定される。貼床と炉跡は確認されなかった。支柱穴は西側のSP415・435を検出したが、これに対応する東側の柱穴は確認できなかった。SB03の範囲外であるが、SP411・421・434・416も建物の支柱穴と考えられ、掘り方は確認できなかったが、竪穴住居跡であった可能性がある。またSB03の西側では長径50cm大の炉跡が単独で確認されており、ここにも竪穴住居跡が存在した可能性がある。

出土遺物は第82図の304～308があり、折返口縁壺(304)・壺体部(305)・台付甕の口縁部(306)・高坏脚部(308)である。SP416出土の307は弥生時代中期丸子式の壺であるが、流れ込みで、その他の遺物からSB03の時期は弥生時代後期と考えられる。



第31図 SB03実測図

SB04（第32・82図）

B・C－8・9区に位置する。住居跡の西半部は、調査区外に及んでいる。規模は不明であるが、形状は隅丸方形を呈していたと推定される。竪穴住居跡の掘り方からは、炉跡と貼床は認められなかった。また、支柱穴も確認できなかった。土層の堆積状況からSP503に切られていることが確認されたが、SB05との新旧関係は不明である。

土器は多数出土しており、第82図の309～319に示した折返口縁壺（309、310）・壺底（312）・台付甕（313～316）・高坏脚部（317～318）がある。SB05から出土している高坏脚部（321）の形状と比較して、SB04出土の高坏脚部は形態が古相であることから、弥生時代後期でもSB04が先行すると考えられる。

SB05（第32・79図）

B－8、C－8・9区に位置する。西側の約1/3はSB04と重複している。規模は、東西推定2.7m、南北2mを測り、形状は小判形を呈している。竪穴住居跡としたが、貼床と炉跡は確認されず、土坑であった可能性もある。土層の堆積状況からSK04を切っているが、SP503には切られていることがわかる。北東角で土器が集中して出土した。出土遺物は、第79図の高坏片（320・321）である。SB05の時期は、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

SB06（第33・34・71・82図）

C・D－9・10区に位置する。覆土はわずかであり、検出面において炉跡が確認された。規模は東西6.5m、南北5.3mを測り、形状は小判形を呈する。壁溝は南東と西辺において確認された。炉跡は中央やや西寄りに存在した。支柱穴としたのは、SP1622・174・175・548である。南東部分はSB07と切り合い関係にあるが、その新旧は不明である。

出土遺物は、第82図の折返口縁壺（322）と複合口縁壺（323）、第82図の大型の折返口縁壺（324）、壺体部（326）、SP560から小型壺（325）等の弥生時代後期を主体とし、弥生時代中期の丸子式の壺（327）も見られるが、混入品である。その他には、第71図のガラス小玉（33）と黒曜石の剥片がある。

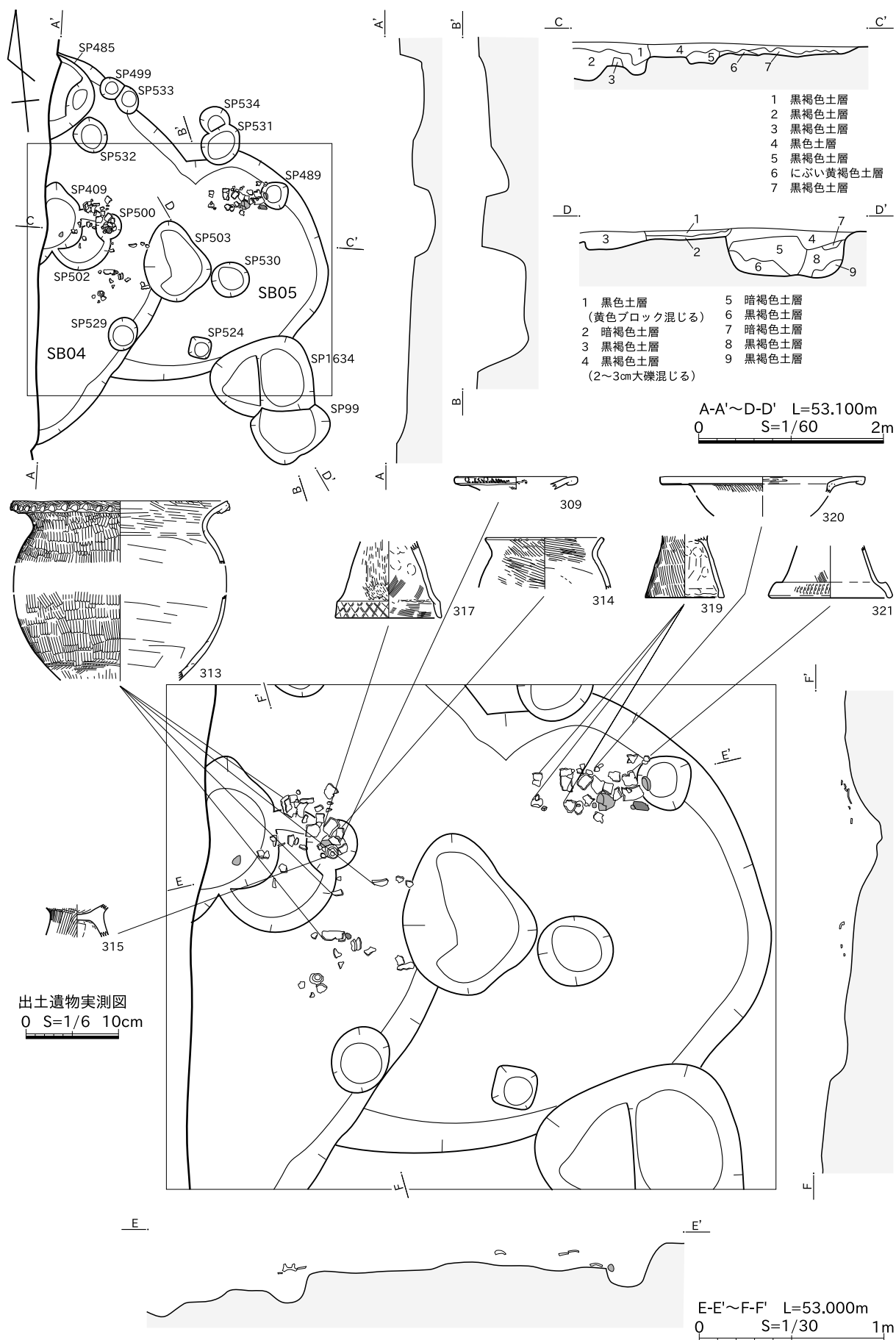
SB07（第33・34・83図）

D－9・10区に位置する。竪穴住居跡の残存状況は非常に悪く、東、西、南辺部のわずかな部分の掘り方しか確認できなかった。規模は推定東西5m、南北4mを測り、形状は小判形を呈していたと推定される。炉跡は、中央からやや東寄りで確認された。支柱穴は、東辺のSP584と180とした。南辺の掘り方肩部直上から平底甕が出土した。

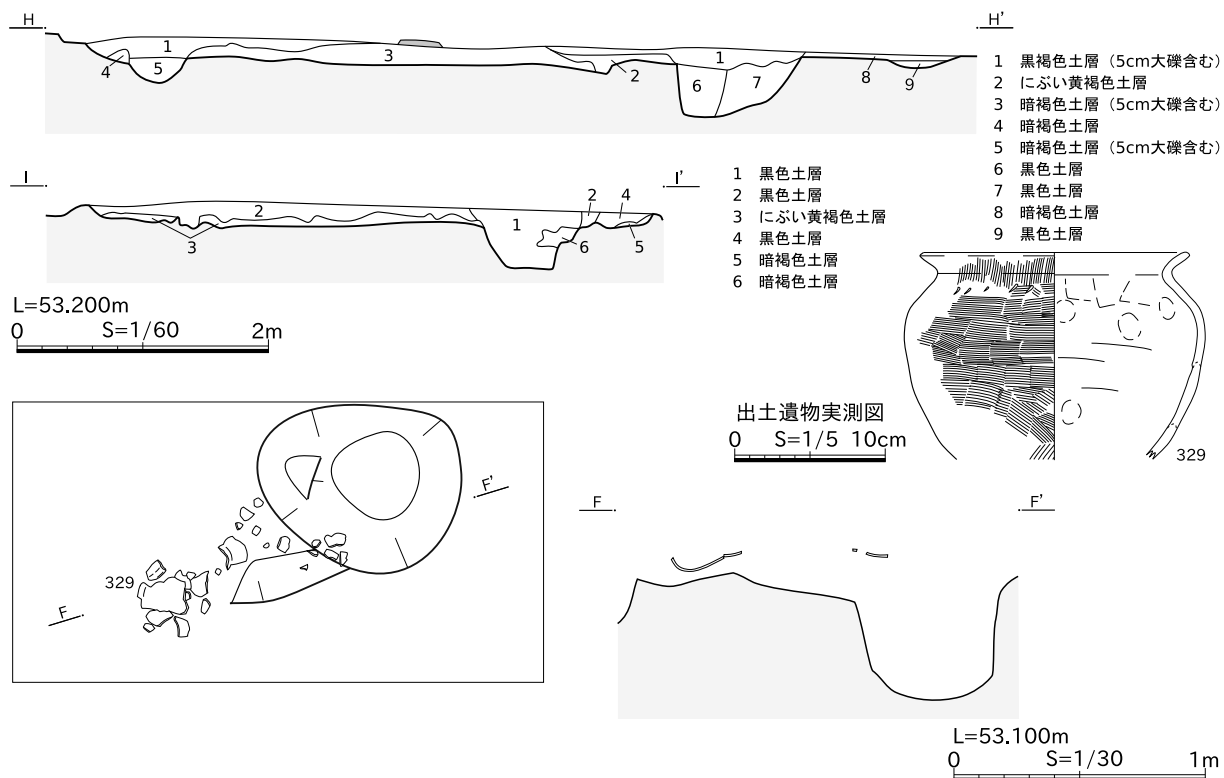
出土遺物は、第83図の壺口縁部（328）と平底甕（329）である。329は形状と胎土から近江もしくは伊勢方面からの搬入品と考えられる。

SB08（第35・36・83図）

E－9区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、覆土をわずかに確認したのみである。掘り方は、西辺部を確認した。規模は、東西推定5.5m、南北4mを測り、形状は小判形を呈していたと推定される。貼床と炉跡は確認されなかったが、SP619に破壊されていた焼土は、SB08に伴うものであった可能性がある。支柱穴は確認できなかった。掘り方の南東部分は、SB09と重複しているが、土層の堆積状況からSB08がSB09より先行するといえる。



第32図 SB04・05実測図



第34図 SB06・07実測図 (2)

出土遺物には第83図の折返口縁壺 (330)・壺肩部 (331)・壺底 (332) があり、これらからSB08の時期は、弥生時代後期と考えられる。その他、黒曜石の剥片が出土している。

SB09 (第35・36・83図)

E・F-9・10区に位置する。規模は東西5.5m、南北6mを測り、形状は小判形を呈していた。SB08・11・12と重複している。SB09はSB08を切っているが、SB11や12との新旧関係は不明である。SB09内からは焼土、炉跡、貼床を認められた。南西部分 (SP664の上層) の炉跡は貼床面から15cmほど高いことから、掘り方は確認できていないが、上層に存在した別の竪穴住居跡に伴っていた可能性がある。貼床面上には5カ所において焼土が確認されたが、主柱穴と考えた柱穴を覆っていることから、この貼床をもつ竪穴住居跡は、主柱穴を認めたSB09とは異なるものと考えられる。SP619の北側の焼土は、SP619に破壊されていた。また掘り方の中央付近は掘り下げられており、その上を覆う貼床は顕著な硬化面をなしていた。また、南東部には白色粘土およびシルト質土が集中する範囲が認められた。SB09の主柱穴は、SP620・610・664・619の4つである。

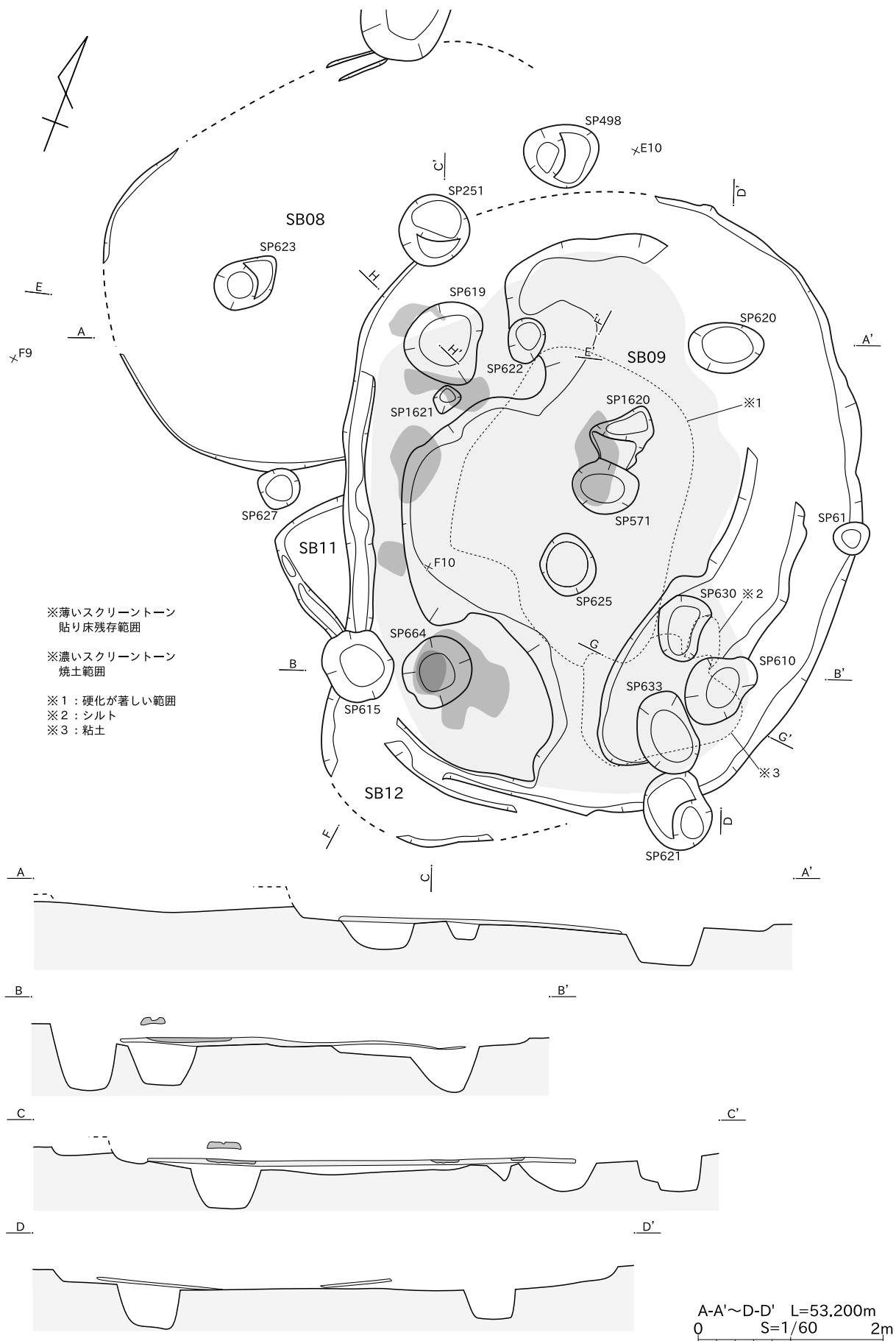
遺物は第83図の壺体部 (333～334)・壺底 (335)・台付甕 (336～338) で、これらからSB09の時期は、弥生時代後期と考えられる。

SB11・12 (第35・36図)

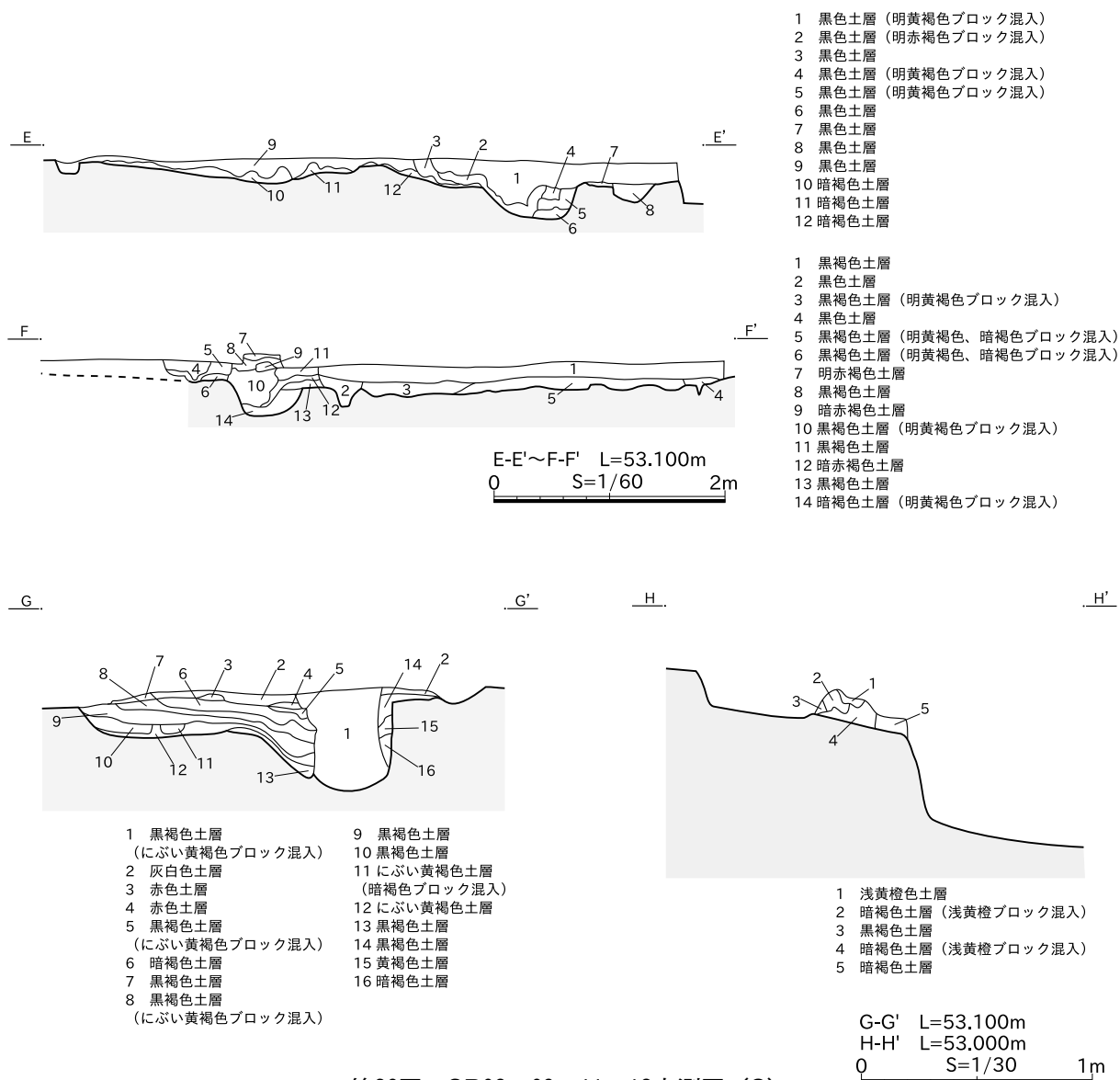
E-9、F-9・10区に位置する。SB09と重複し掘り方の一部のみを確認した。規模や形状は不明である。出土遺物はなかった。

SB10 (第37・83・84図)

E-10・11区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、南東部付近の掘り方のみが確



第35図 SB08・09・11・12実測図（1）



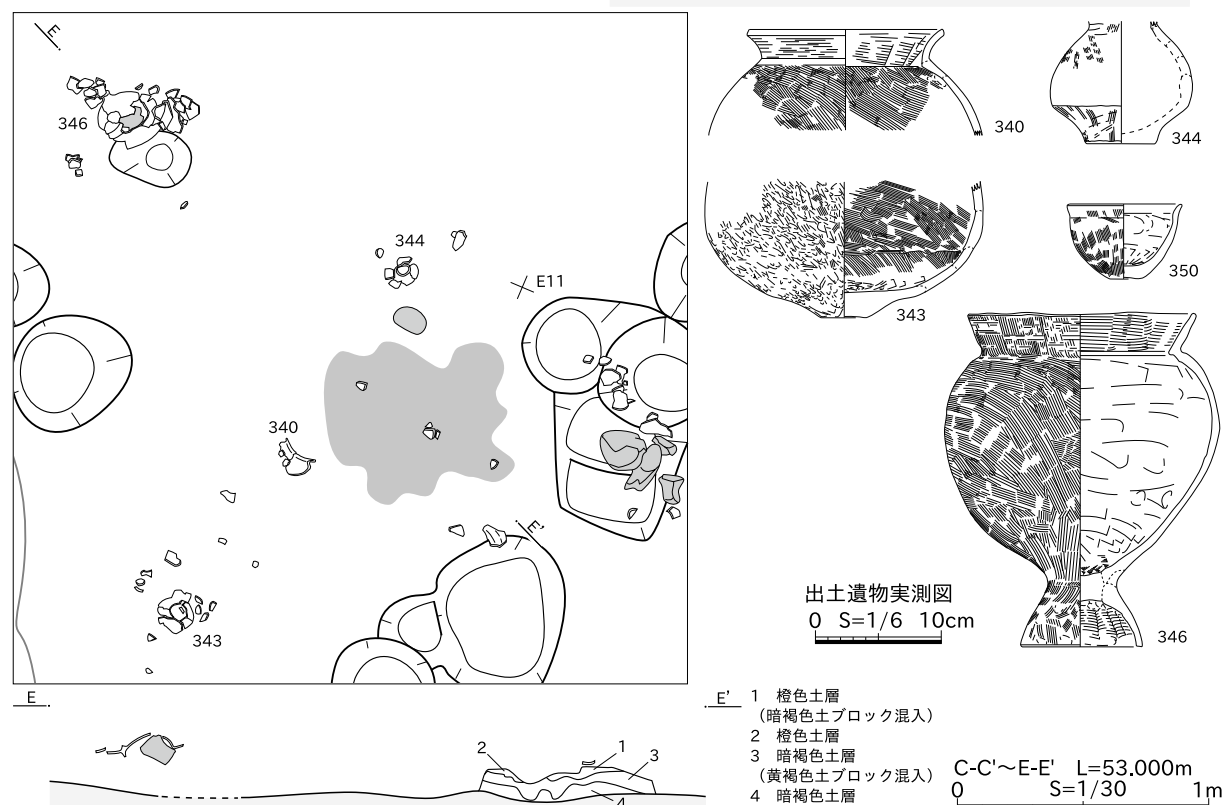
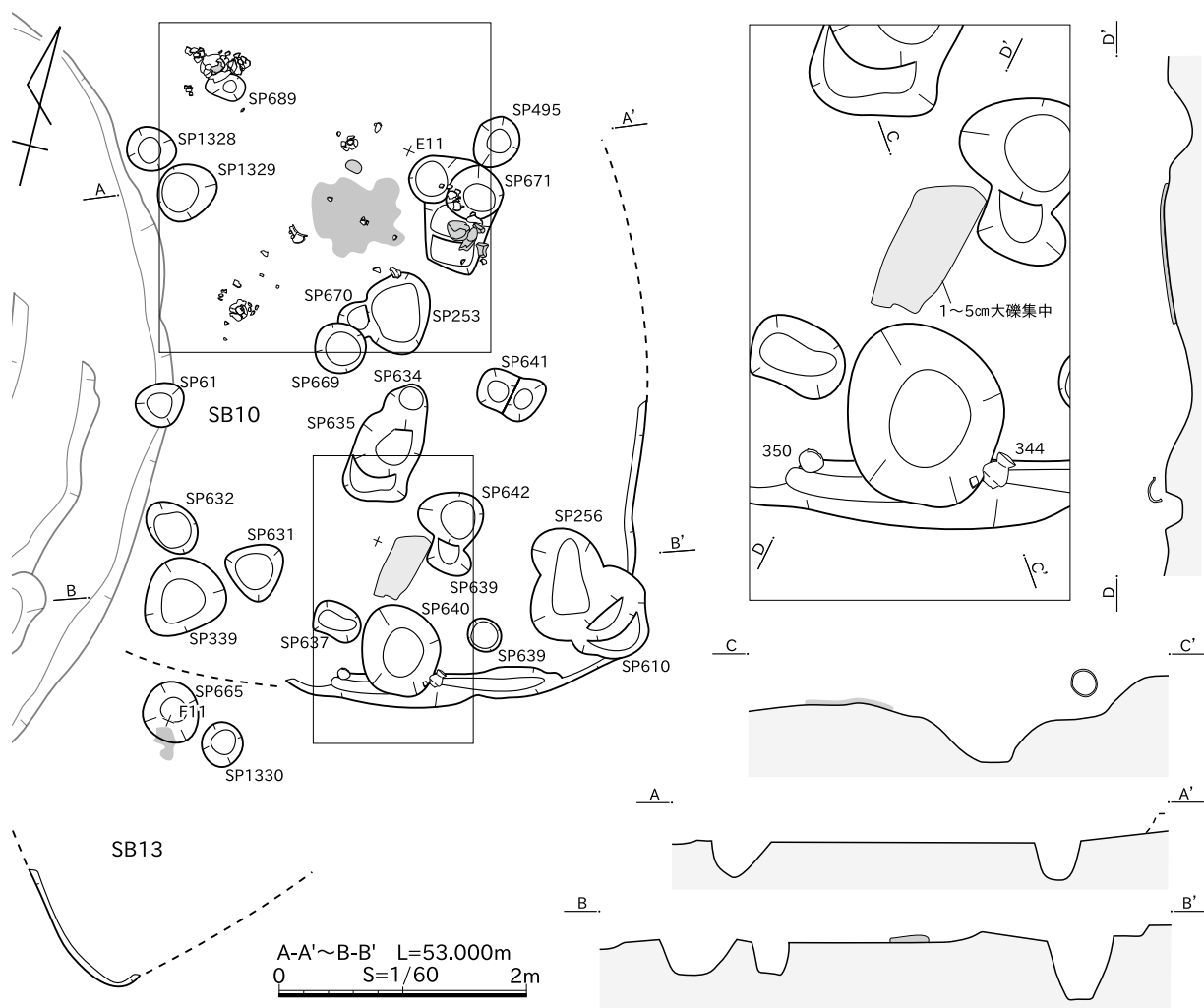
第36図 SB08・09・11・12実測図 (2)

認された。したがって規模は不明であるが、形状は隅丸方形を呈していたと推定される。掘り方の南辺で壁溝が確認された。SB09・13と切り合い関係にあり、SB09の平面形状が小判形で古式と考えられることから、SB13が後出と推定される。SB13との新旧関係は不明である。北側で炉跡と土器が集中して認められた。主柱穴は、SP256・339・1329で北東部の柱穴は確認できなかった。SP639と640の間には30×50cmの範囲で、小礫が集中していた。

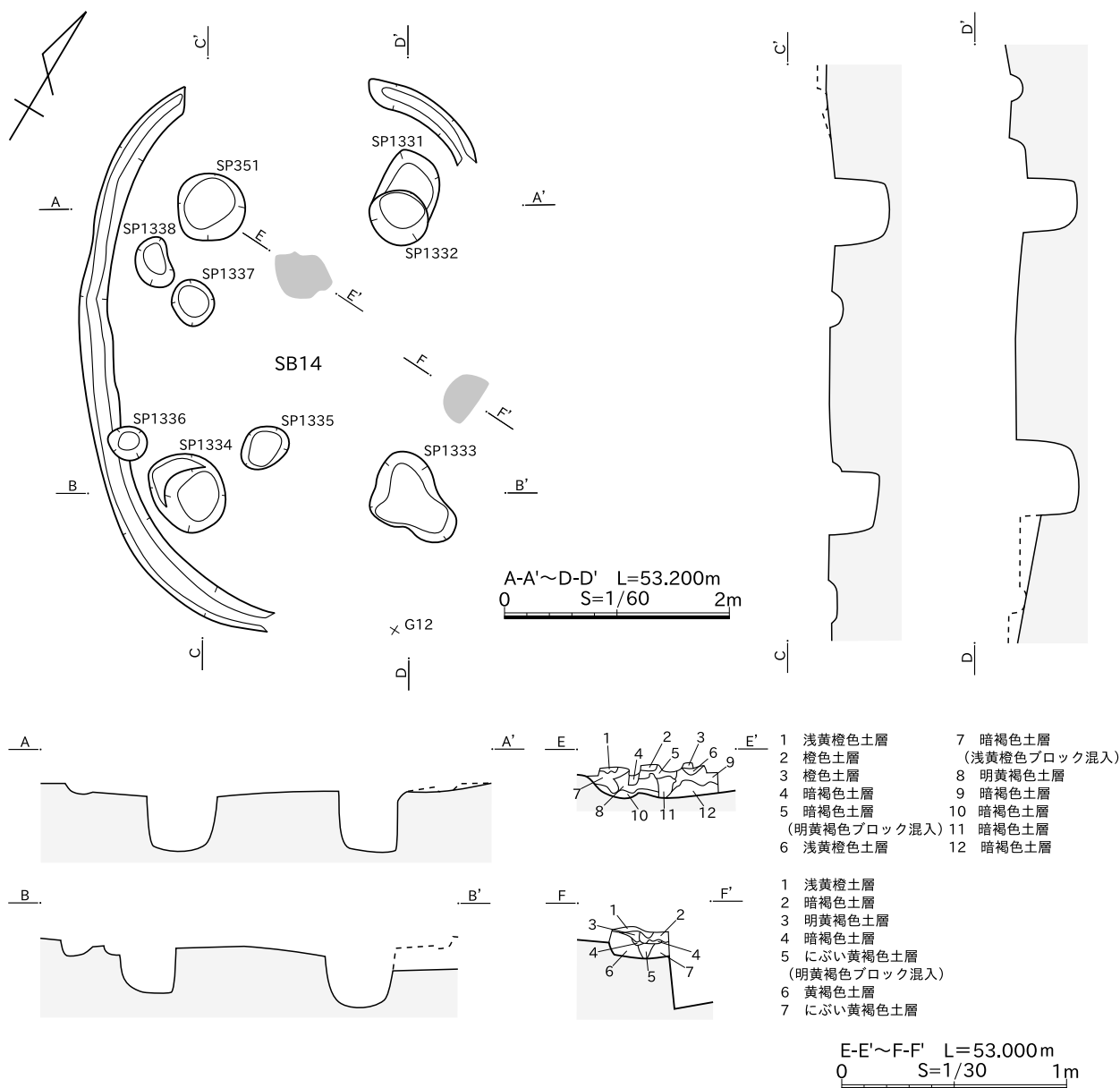
出土遺物は多数あり、第83図339～341、第84図342～350に示した。広口壺 (339～341)・パレススタイル模倣の壺 (342)・台付甕 (346)・有稜高坏 (347)・小型高坏脚部 (349)・小型鉢 (350) があり、SB10の時期は古墳時代前期と考えられる。

SB13 (第37図)

E・F-10・11区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、床面南西角の一部分を検出ただけである。そのため、規模や形状は不明である。SB09・10・14と切り合い関係にあるが、その新旧関係は不明である。床面で焼土が確認された。出土遺物は小片で、図示できる遺物はなかった。



第37図 SB10・13実測図



第38図 SB14実測図

SB14 (第38・84図)

F・G-11区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、覆土はわずかで、西辺と北東部角を確認したのみである。規模は、東西推定3.8m、南北5mを測り、形状は小判形である。壁溝は掘り方に沿って確認された。支柱穴はSP1332・1333・1334・351の4本である。炉跡は、床面の中央北と南東の2カ所で確認された。SB13と北側部分が重なるが、新旧関係は不明である。

出土遺物には、第84図の壺肩部(351)がある。平面形状と出土土器からSB14の時期は、弥生時代後期と考えられる。

SB15・16 (第39・84図)

E-8、F-7・8区に位置する。竪穴住居跡は削平が進んでおり、SB15は南東部付近の掘り方のみが、SB16はわずか2m程度の掘り方のみが確認された。したがって規模は不明であるが、SB15の形状は隅丸方形を呈していたと推定される。SB15では壁溝が確認された。SB21と切り合い関係にあ

るが、新旧関係は不明である。SB15の掘り方の外においても炉跡が確認された。別の竪穴住居跡が存在した可能性がある。主柱穴は南辺のSP678と996を検出したが、北辺は確認されなかった。

出土遺物は、第84図に示すSB15掘り方内のSP699から出土した鉢口縁部（352）と、SP678から出土した広口壺（480）、SB16から出土した353～356である。ともに弥生時代後期と考えられるが、これらの出土土器からはSB15と16の新旧関係を明確にすることはできない。

SB21（第39・86図）

D・E-6～8区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、覆土をわずかに残すのみであった。規模は東西7.2m、南北7.2mで、形状は隅丸正方形である。SB15と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。掘り方の南西部で2カ所の炉跡、北辺の一部と西辺で壁溝が確認された。主柱穴は4つで、SP1313・1317・944・932である。

出土遺物は、第86図380～391であり、折返口縁壺（380・381）・在地産S字甕（387）、S字甕台部（388）・鐙状口縁高坏の脚部（390）・器台（391）がある。小型鉢（382）はSP950から、二重口縁壺（383）はSP943から、在地産のS字甕（386）と直口壺口縁部（389）はSP925から出土した。出土遺物は、弥生時代後期と古墳時代前期のものが混在しているが、SB21の時期は竪穴住居跡の平面形状から推定して古墳時代前期と考えられる。

SB45（第39図）

D-7区に位置する。竪穴住居跡のほとんどが調査区外に及んでおり、南辺部の一部分のみが確認された。SB21と切り合っているが、新旧関係は不明である。規模や形状も不明である。

出土遺物はいずれも小片で、図示できるものはなかった。

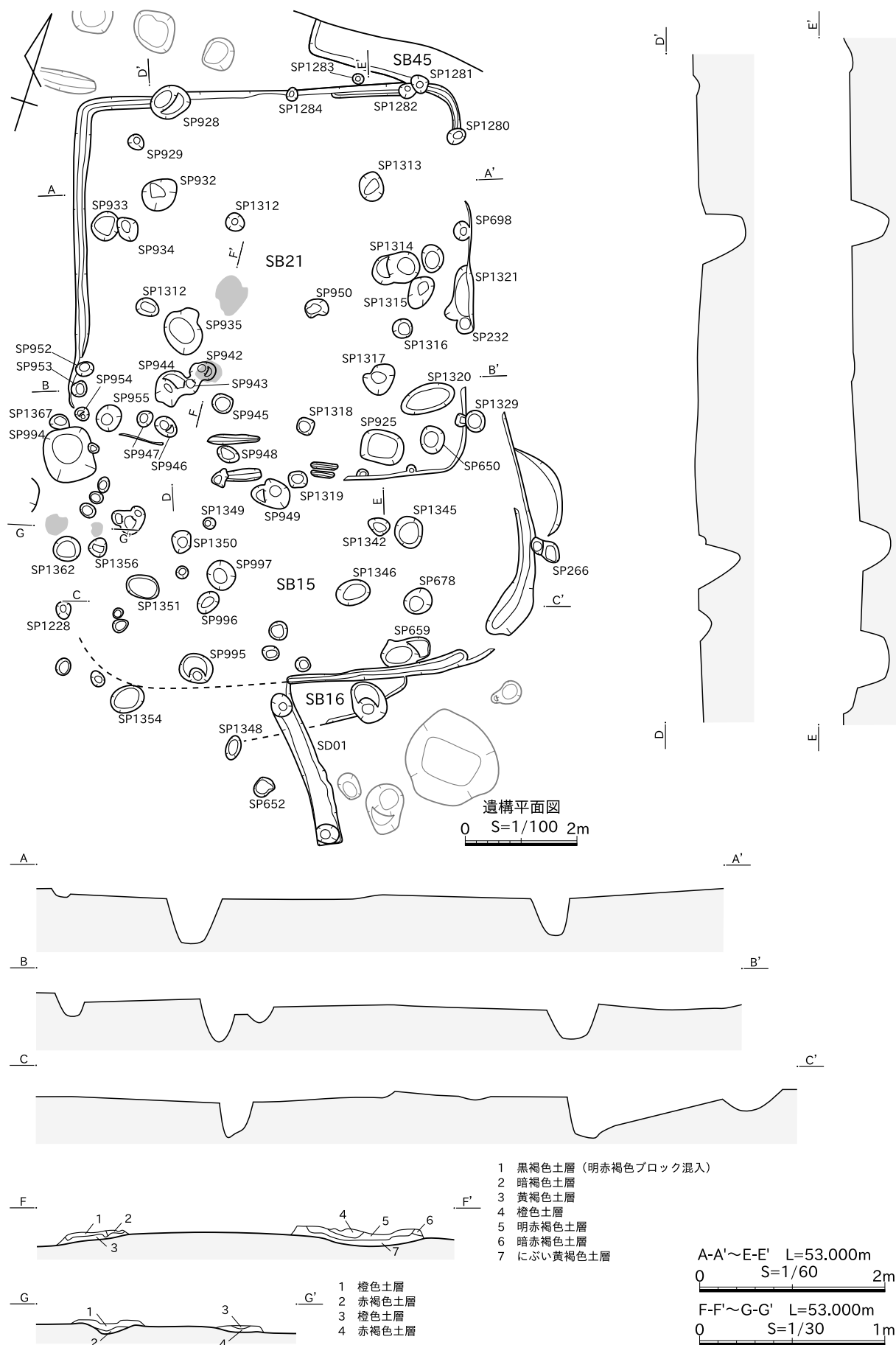
SB18（第40・85図）

F-7、G-6～8、H-7・8区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、覆土をわずかに確認しただけである。掘り方の北西角はSX09と切り合い関係にあり、東辺と南辺の一部は確認できなかった。SX09との新旧関係は不明である。南東角でSB19と重複しており、SB19の平面形状が小判形で古式の様相であることから、SB18が後出と考えたいが、出土土器ではSB19との新旧関係を明確には出来ない。規模は東西5.9m、南北5.8mを測り、形状は隅丸正方形を呈する。掘り方の北東部と南東部で、壁溝が確認された。床面中央からみて南西に炉跡が確認された。主柱穴は、SP1029・1061・1406、あるいは1030・646・1050・1058であり、2時期の主柱穴が確認できる。また、SP1050・1051からは10～15cm大の礫が検出された。

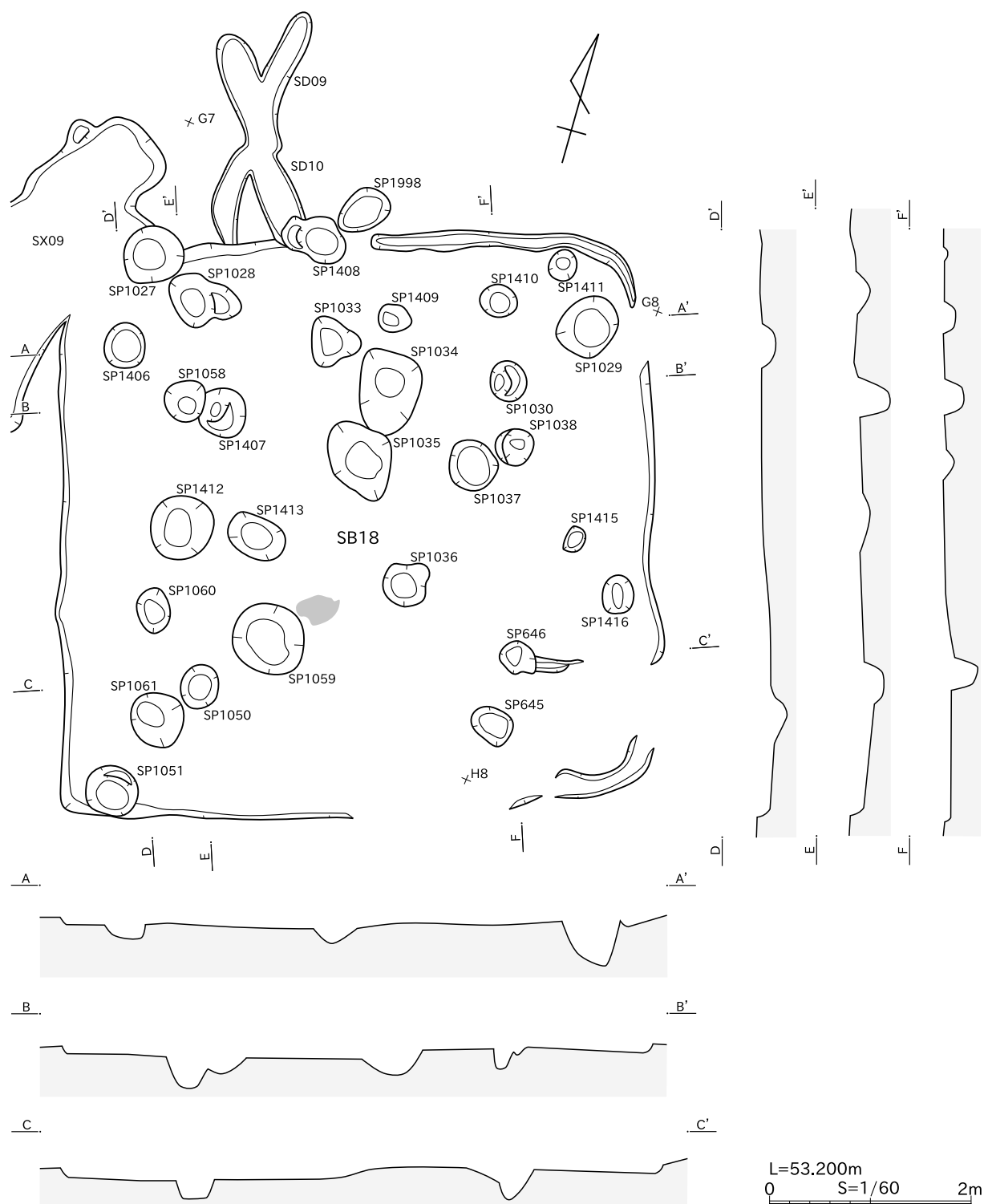
出土遺物は第85図358～363・495で、すべて壺片である。362はSB18の北西部から出土した壺の体部であるが、SB19の覆土（G-8区）から出土した壺片（図示していない）と同一個体であった。495は、SP1050から出土した。これらの土器からSB18の時期は、弥生時代後期といえる。

SB19（第41・85・86図）

G・H-8・9区に位置する。竪穴住居跡の掘り方は削平が進んでおり、覆土はわずかであった。規模は、東西5m、南北6.2mを測り、形状は小判形である。壁溝は掘り方に沿って確認された。主柱穴はSP694・1441・649で、南東部の柱穴は確認できなかった。炉跡は、中央からやや北で確認された。北西部分はSB18の掘り方と重なる。

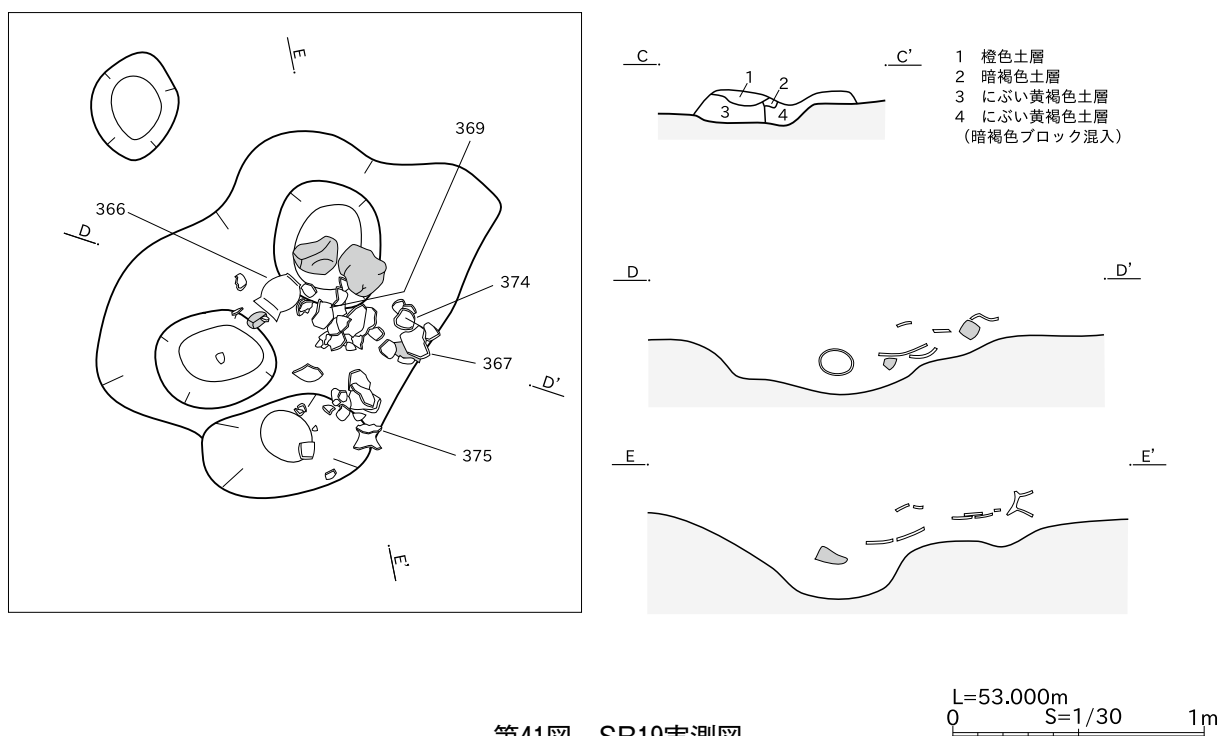
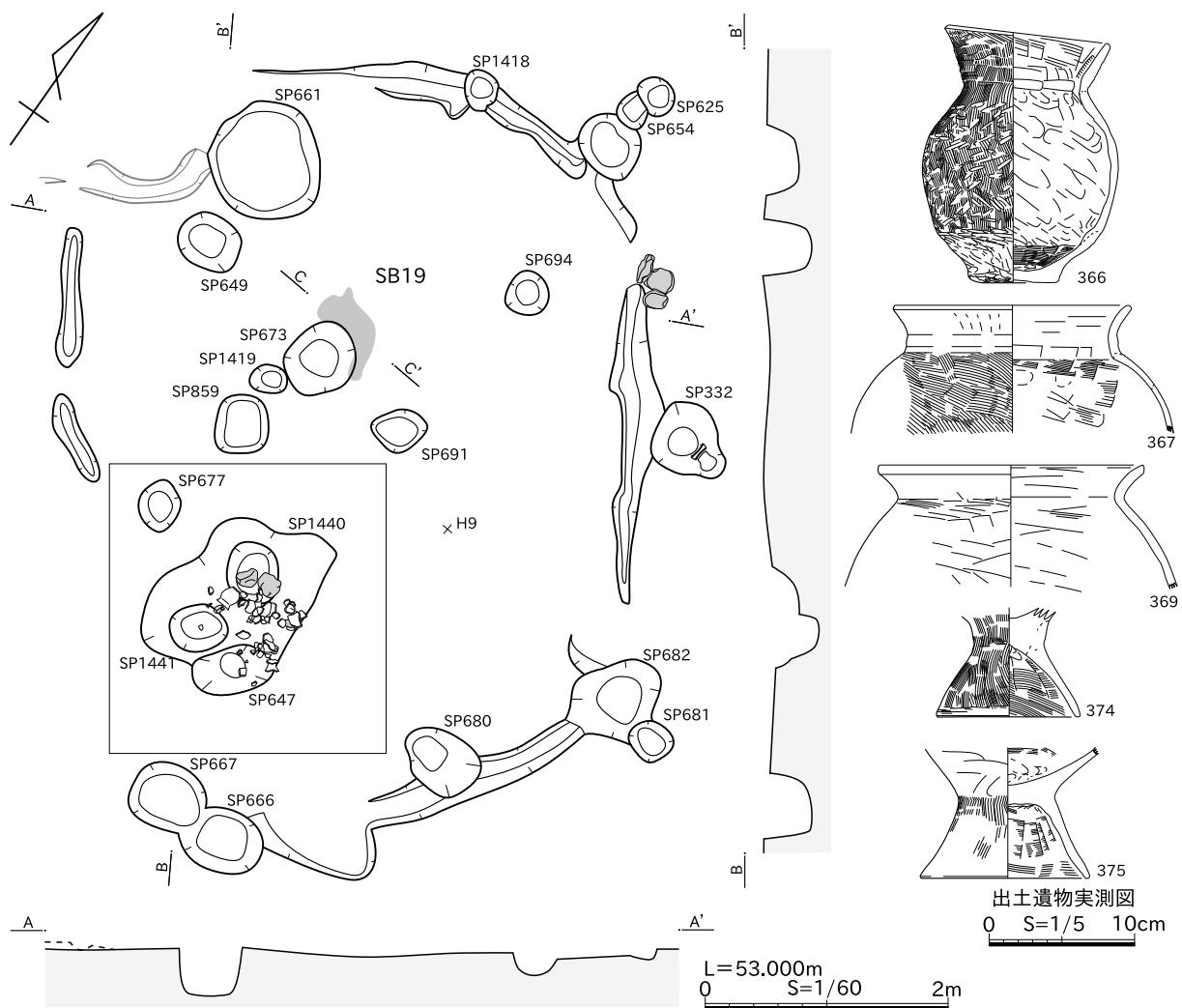


第39図 SB15・16・21・45実測図



第40図 SB18実測図

出土遺物は第85図364～376、第86図377～379である。SB19の覆土から出土したものは371・372・377・379、SP647・SP1440・SP1441からの出土は364・366～370・373～375・378、SP680からの出土は365・376である。小穴からの出土遺物はほとんどが古墳時代前期に位置づけられるが、弥生時代後期のものも混入している。竪穴住居跡の平面形状からみれば、SB18よりSB19が古相と考えられるが、出土土器は必ずしもこれに対応していない。SB18で述べたようにSB18とSB19から出土した土器には同一個体があり、この2軒の新旧関係は明確にできなかった。



第41図 SB19実測図

SB22（第42・86図）

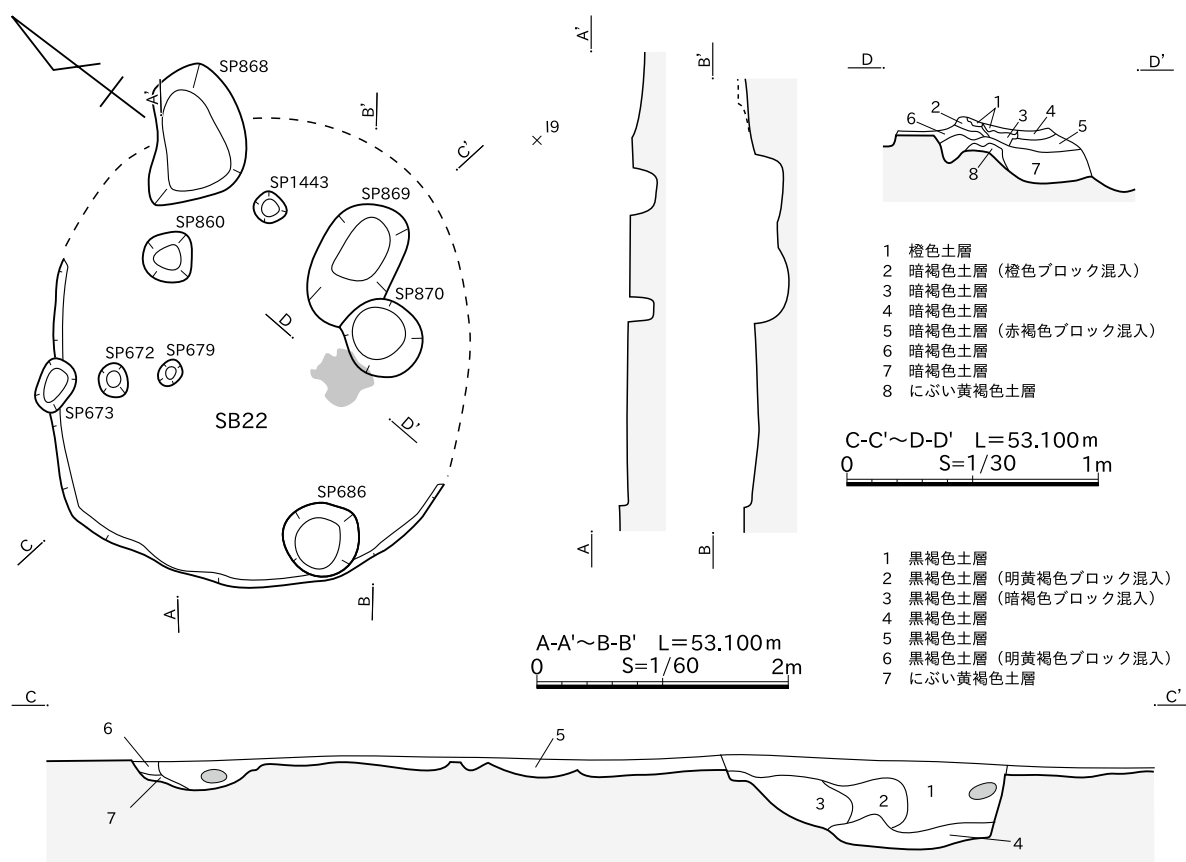
H・I-8・9区に位置する。掘り方は浅く、覆土はわずかであった。また、住居跡の東半部は確認できなかった。SB22は、他の竪穴住居跡とは重複することがなく単独で存在した。規模は長軸推定2.6m、短軸2.3mを測り、形状は小判形を呈する小型の竪穴住居跡である。支柱穴はSP869・860の北側2本を確認した。床面の南東部で、炉跡を確認した。

出土土器は、第86図の壺片（392・393）・甕口縁部（394）である。392は搬入品の柳ヶ坪型壺、393は外面に結節縄文が施された壺片である。出土土器には、古墳時代前期と弥生時代後期のものが混在している。

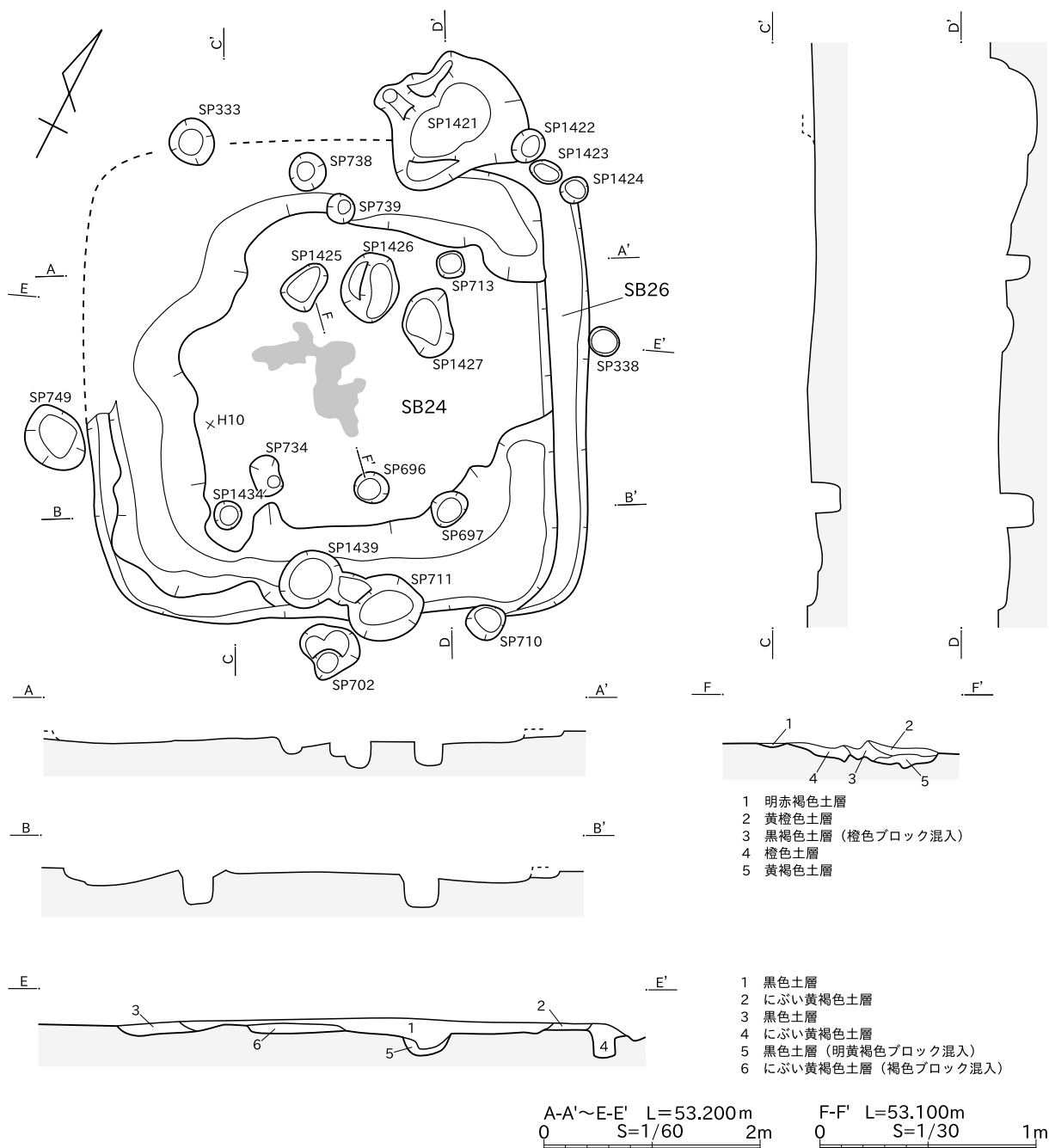
SB24・26（第43・86・87図）

G・H-9・10区に位置する。竪穴の東辺において掘り方が2つ確認されたことから、2軒分の竪穴住居跡が存在したと考え、内側をSB24、外側をSB26とした。覆土はわずかで、北西角の掘り方は確認できなかった。SB24の規模は東西4.3m、南北推定4.4m、SB26の規模は南北推定4.4m、形状はともに隅丸正方形を呈する。残存する部分はわずかではあるが、中央部分に平坦面を残し、周囲は掘り下げられていたと考えられる。床面の中央付近で炉跡が2カ所確認されたが、南北に広がる炉跡の方が上位に存在した。炉跡の位置と高低差から、南北の炉跡がSB26、東西に広がる炉跡がSB24に伴うものといえる。支柱穴はSP713・697・1434で、北西部の柱穴は確認できなかった。

出土遺物は第86図395～398、第87図399～401で、SB24からの出土である。広口壺（395～397）・小型台付甕（401）の存在から、SB24の時期は古墳時代前期と考えられる。



第42図 SB22実測図

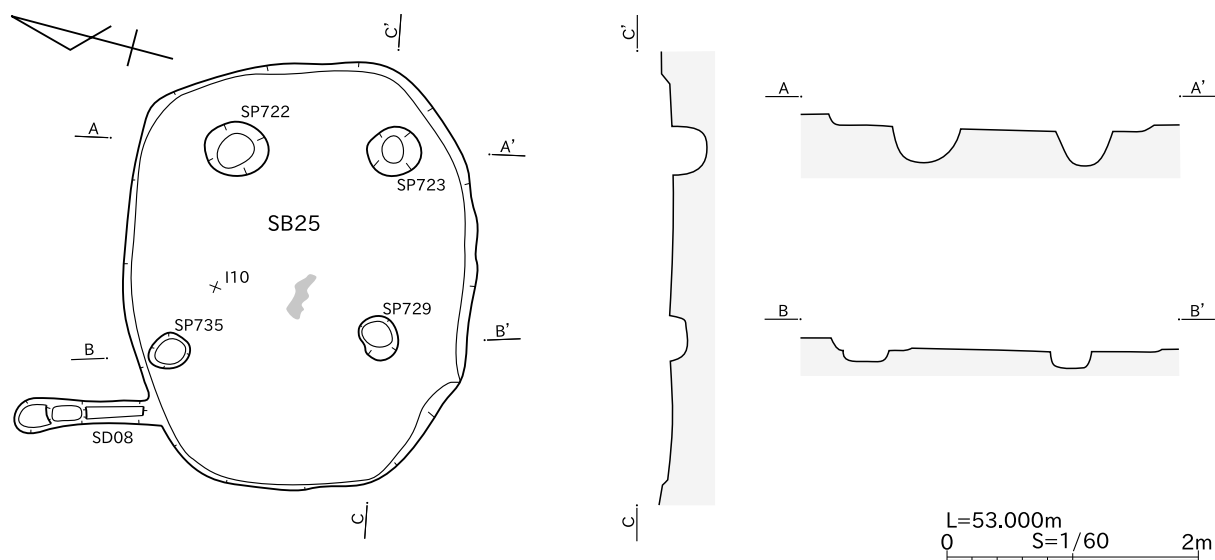


第43図 SB24実測図

SB25 (第44・87図)

H・I-9・10区に位置する。他の竪穴住居跡との重複はなく単独で存在し、ほぼ全形が判明した。規模は、東西3.4m、南北2.8mを測る小さな住居跡で、形状は小判形を呈する。床面の中央付近で、小さな炉跡が認められた。支柱穴はSP723・729・735・722としたが、SP735は掘り方の西辺に近すぎることから該当しないかもしれない。

出土遺物には、第87図に示す台付甕の台部(402)がある。この土器からSB25の時期を確定することはできないが、SB25の平面形状が古相であることから考えて、弥生時代後期の竪穴住居跡と推測できる。



第44図 SB25実測図

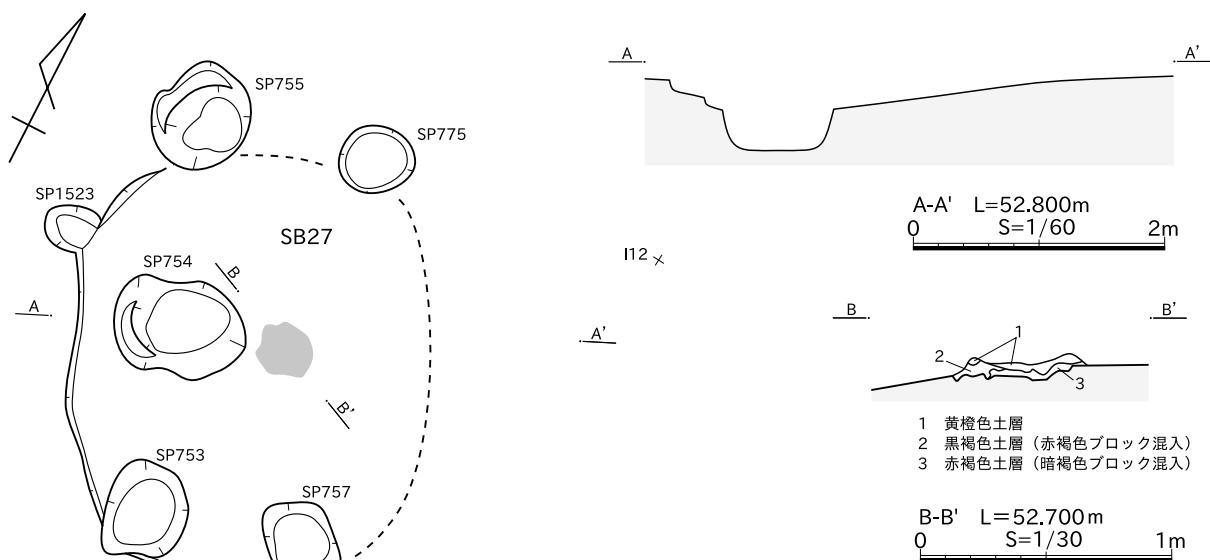
SB27 (第45・87図)

I-11区に位置する。残存状況は悪く、掘り方の西辺のみを確認した。規模は、東西推定2.8m、南北推定3.5mと小さく、形状は小判形を呈すると推定される。床面中央付近から炉跡が確認された。主柱穴は、確認できなかった。SH07と切り合っているが、新旧関係は不明である。

出土土器は第87図に示した、くの字甕 (403)・壺底 (404)・台付甕の台部 (405) である。

SB29 (第46・47・87図)

I・J-9・10区に位置する。数軒の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が重なり合う地点である。掘り方は削平が進んでおり、覆土はわずかである。掘り方の東側はSB30、西側はSB32、SH06と切り合い関係にあるが、SB30と32との新旧関係は不明である。東辺と西辺の一部は、確認できなかった。規模は、東西5.3m、南北5.4mを測り、形状は隅丸正方形を呈する。中央付近に炉跡が確認された。主柱穴は、SP808b・723・796・876である。



第45図 SB27実測図

出土遺物は第87図406～409で、有稜高坏（408）と高坏脚部（409）は古墳時代前期の土器である。

SB30（第46・47図）

I・J-10・11区に位置する。SB29、SH06・07・08と切り合い関係にある。竪穴住居跡より、すべての掘立柱建物跡が後出であることが、遺構検出時に確認された。覆土はわずかしかなかった。覆土はわずかしかなかった。しかも南東部とSB29が重複する北西部では、掘り方が確認できなかった。規模は東西5.6m、南北6.6mを測り、形状は小判形を呈する。主柱穴は、SP791・780・789・1530である。貼床と炉跡は確認できなかった。壁溝は東辺と南西部において確認された。

出土遺物はいずれも小片で、図示できるものはなかった。

SB31・34・35・36（第46・47・87図）

J・K-8・9区に位置する。SB31・32・34・35・36・43の6軒の竪穴住居跡が重なり合っている。覆土はわずかしかなかった。掘り方の残存状況は悪い。この中で最も掘り方が残存していた竪穴住居跡がSB31である。規模は東西5.3m、南北7mで、形状は小判形である。南西部の掘り方は、確認できなかった。貼床や炉跡も確認できなかった。主柱穴はSP824・893・832・843の4つである。SB34は掘り方の北西部と東辺の一部が確認された。規模は東西約5.3m、形状は小判形であったと考えられる。主柱穴は、SP828・891・830・1568の4つである。SB35と36はSB31の検出時において、南東部の掘り方のみを確認した。SB31の完掘時にはSB34～36の掘り方は残っておらず、SB31→SB36→SB35→SB34の順に建て替えが行われたと考えられる。

出土遺物は、第87図の壺肩部（410）と壺底（411）である。SB34・35・36の出土遺物はいずれも小片で、図示できるものはなかった。

SB32・33（第46・47・87図）

J・K-8～10区に位置する。SB29・31・32・34・35・36の竪穴住居跡が重なり合っている。現地調査では2軒分の遺構としたが、実際は1軒の竪穴住居跡の可能性が高い。掘り方は北辺と南東部を確認した。規模は、東西8m、南北推定6mを測り、形状は小判形を呈する。貼床と炉跡は確認できなかった。主柱穴はSP792・890・1537で、南東部の柱穴は確認できなかった。

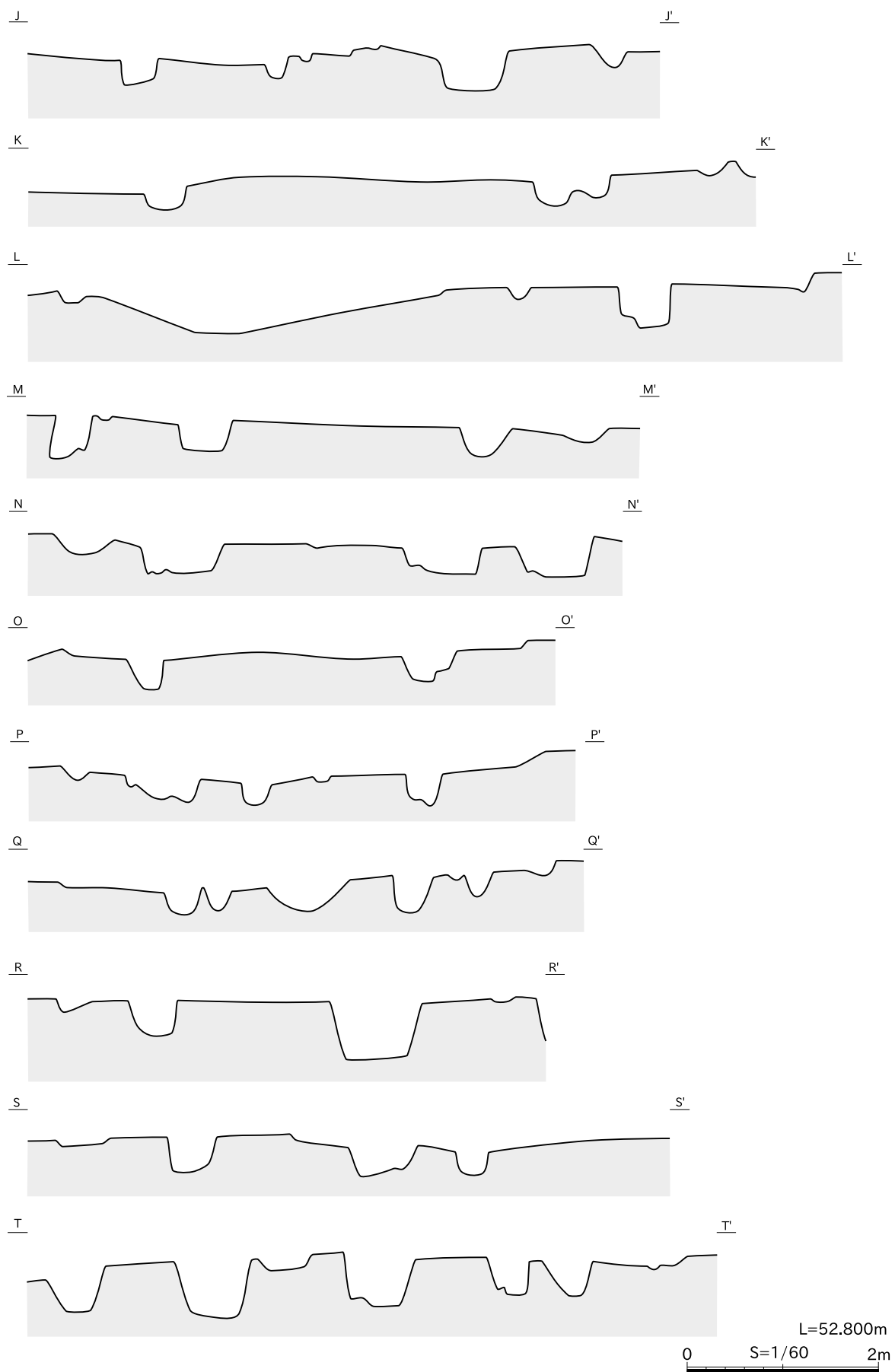
出土遺物は第87図の412・413である。

SB29～36の竪穴住居跡の時期は、出土遺物が少なく詳細な時期と前後関係を推定することは難しい。しかし、SB29は古墳時代前期の土器を確実に伴っていることから、これらの竪穴住居跡の中では最も新しい可能性がある。

SB34（第46図）

J・K-8区に位置する。SB31・32の竪穴住居跡と重なり合っている。SB31に切られていることは明白であるが、SB32との新旧関係は明確にできない。SB31に大半を切られており、遺存していたのは西壁の一部を含めた幅約1.2m、長さ約5m程の範囲の掘り方で、平面形は小判型もしくは円形を呈すと考えられる。主柱穴は、SP828・830・891・1568の4つである。出土遺物はいずれも小破片で、できるものはなかった。

折込図（別ファイル）

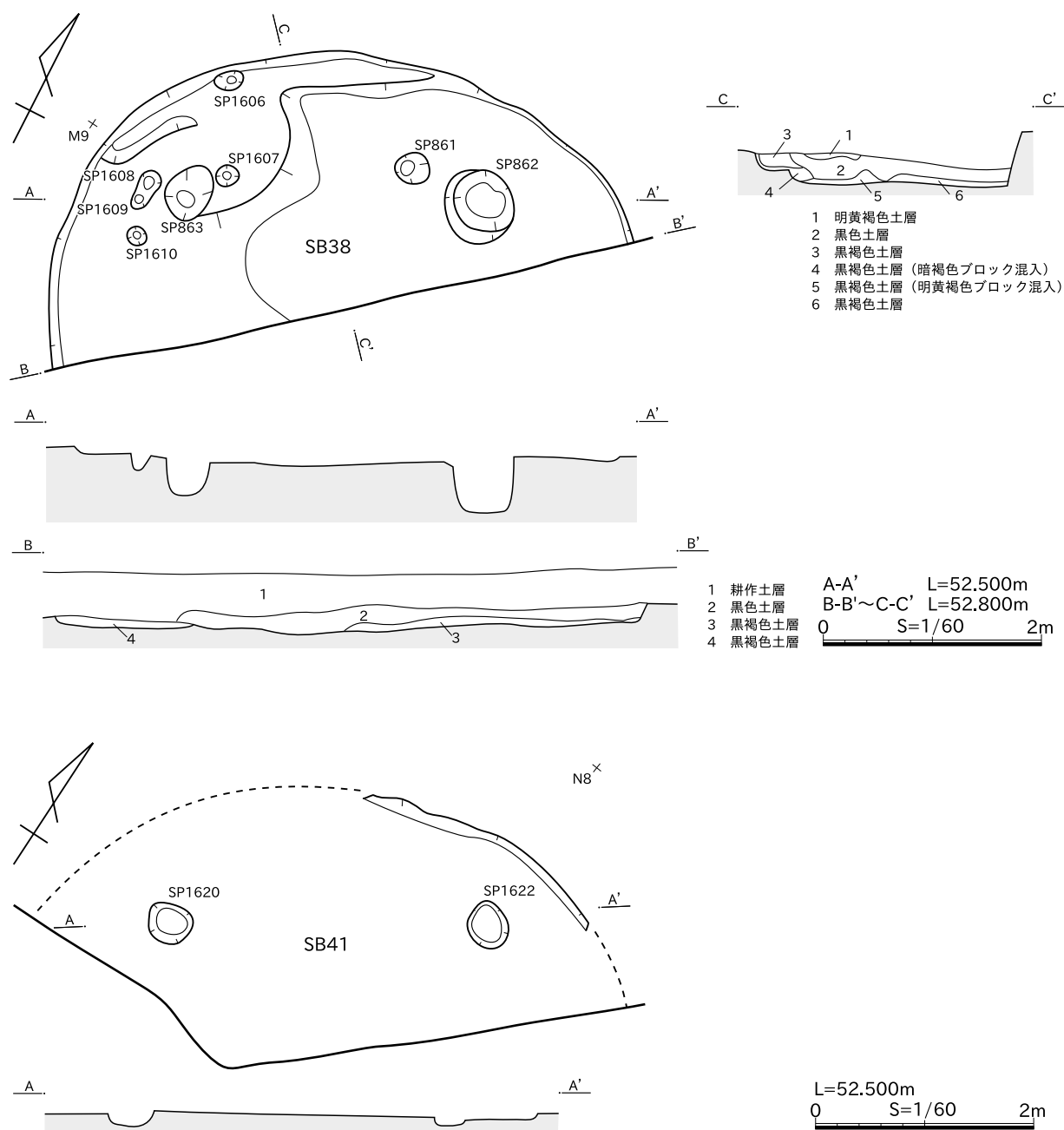


第47図 SB29~32・34実測図 (2)

SB38 (第48・87図)

L・M-9・10区に位置する。住居跡の南半部は、調査区外に及んでいる。規模は不明であるが、形状は小判形を呈していたと推定される。支柱穴は、北側のSP862・863を確認した。炉跡と貼床は、確認されなかった。

出土遺物は、第87図の414～426に示している。SP861出土の鉢（416）、SP862出土の壺肩部（417）で、418は弥生時代後期のものであり、柳ヶ坪型壺（414）・二重口縁壺（415）・器台脚部（424）、SP862出土の高坏脚部（426）は、古墳時代前期のものである。出土遺物から、竪穴住居跡の時期を判断することはできない。



第48図 SB38・41実測図

SB41 (第48・87図)

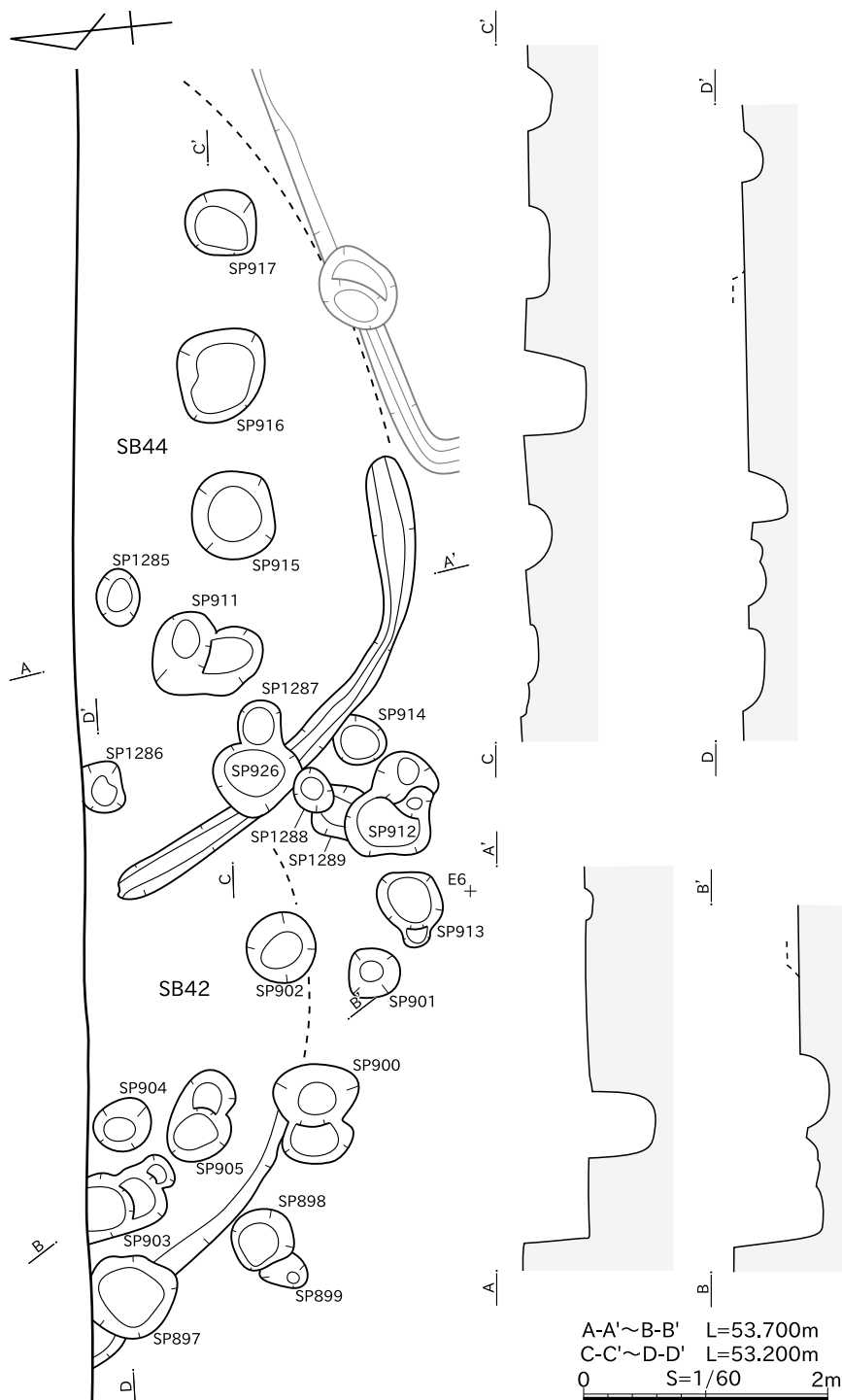
N-7・8区に位置する。後世の攪乱を大きく受けており、確認できたのは掘り方の北東部の一部分のみである。規模や形状は不明であるが、北側の支柱穴と考えられるSP1622・1620が確認された。

出土遺物は、第87図の壺底(427)である。

SB42 (第49・87図)

D-5区に位置する。竪穴住居跡の北半部は、調査区外に及んでいる。残存状況も悪く、掘り方の南西部の一部を確認しただけである。SB44と切合っているが、新旧関係は不明である。規模や形状は不明である。炉跡と貼床も確認されなかった。南側の支柱穴はSP904・1286である。

出土遺物には、覆土から出土した第87図の複合口縁壺(428)と壺底(432)があり、SP903から出土した複合口縁壺(429)・壺肩部(430、431)がある。これらの土器からSB42の時期は、弥生時代後期末と考えられる。

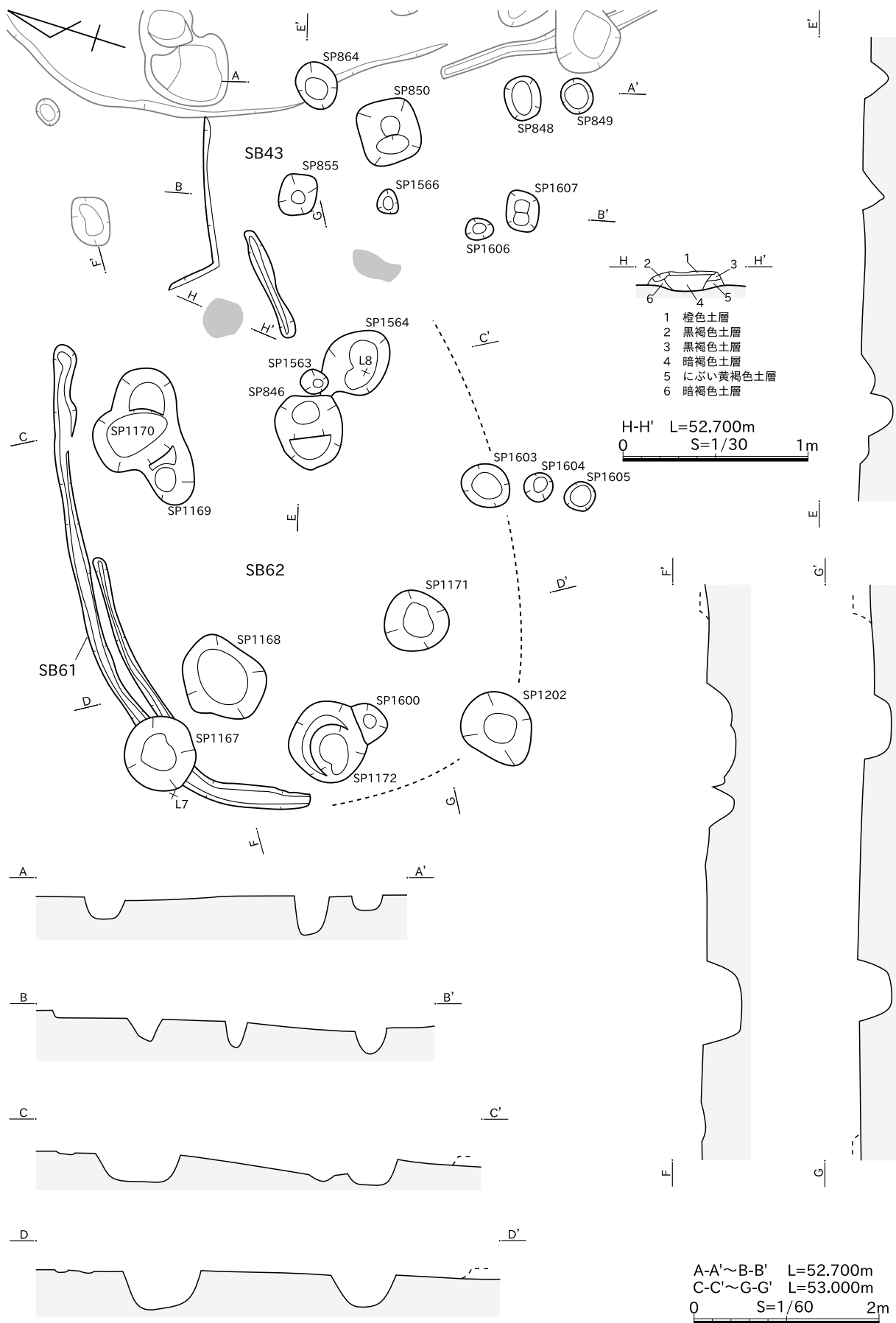


第49図 SB42・44実測図

SB44 (第49・88図)

D-6区に位置する。竪穴住居跡の北半部は、調査区外に及んでいる。残存状況も悪く、南西部の一部の掘り方と壁溝のみが確認された。SB42・21と切り合っているが、新旧関係は不明である。規模や形状は不明である。炉跡や貼床も確認されなかった。

出土遺物には、第88図の壺肩部(434)・壺底(435)がある。

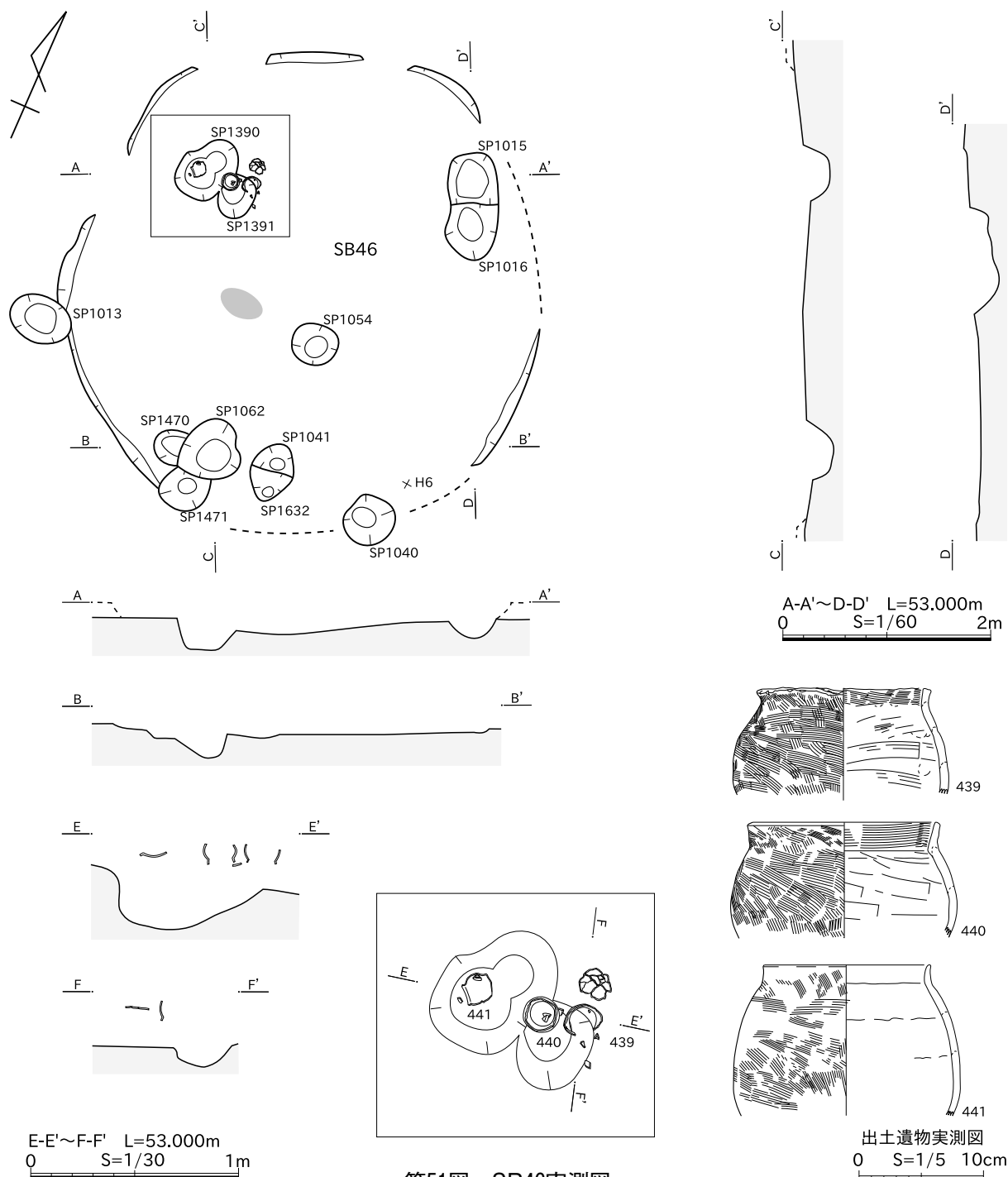


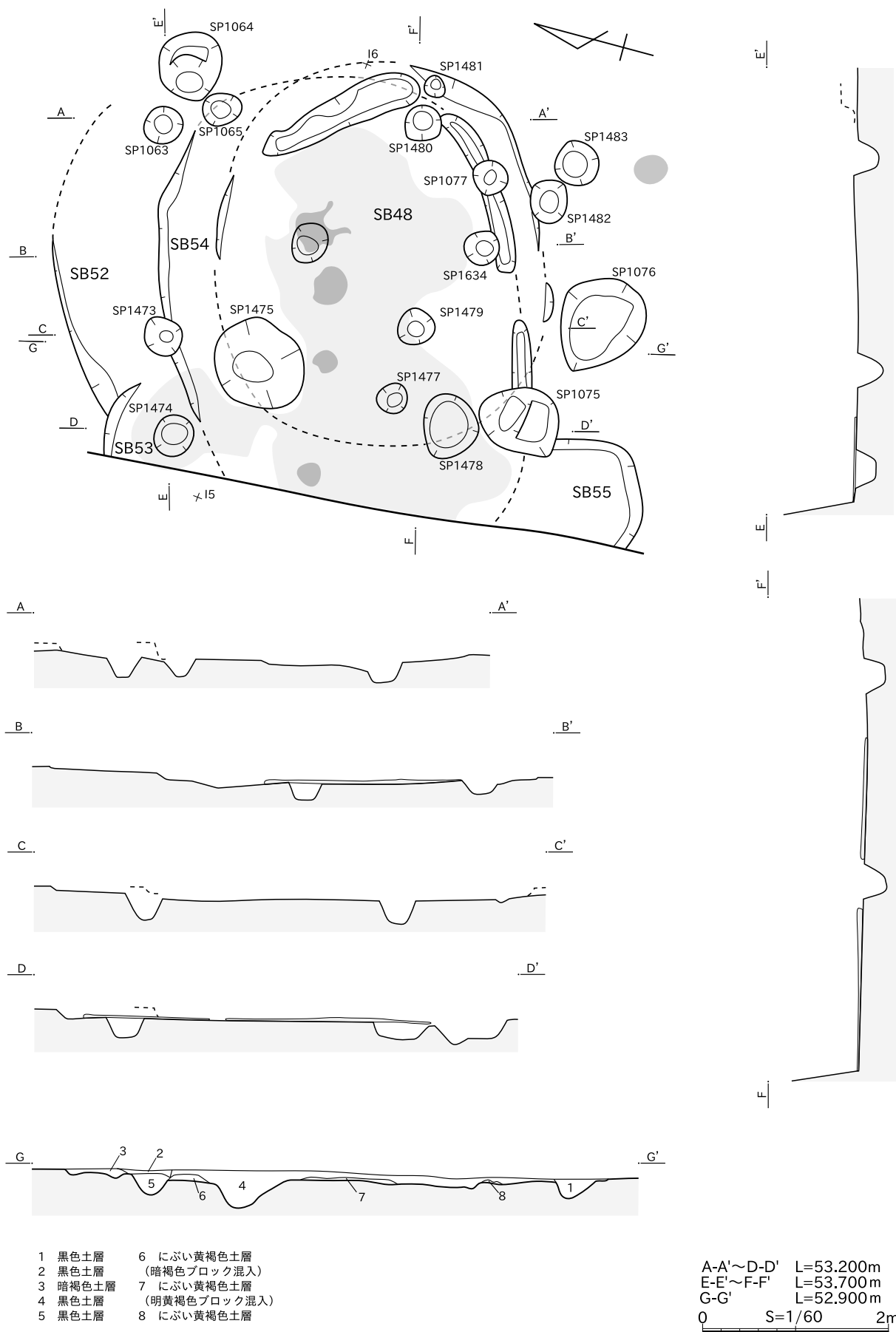
第50図 SB43・61・62実測図

SB43 (第50・88図)

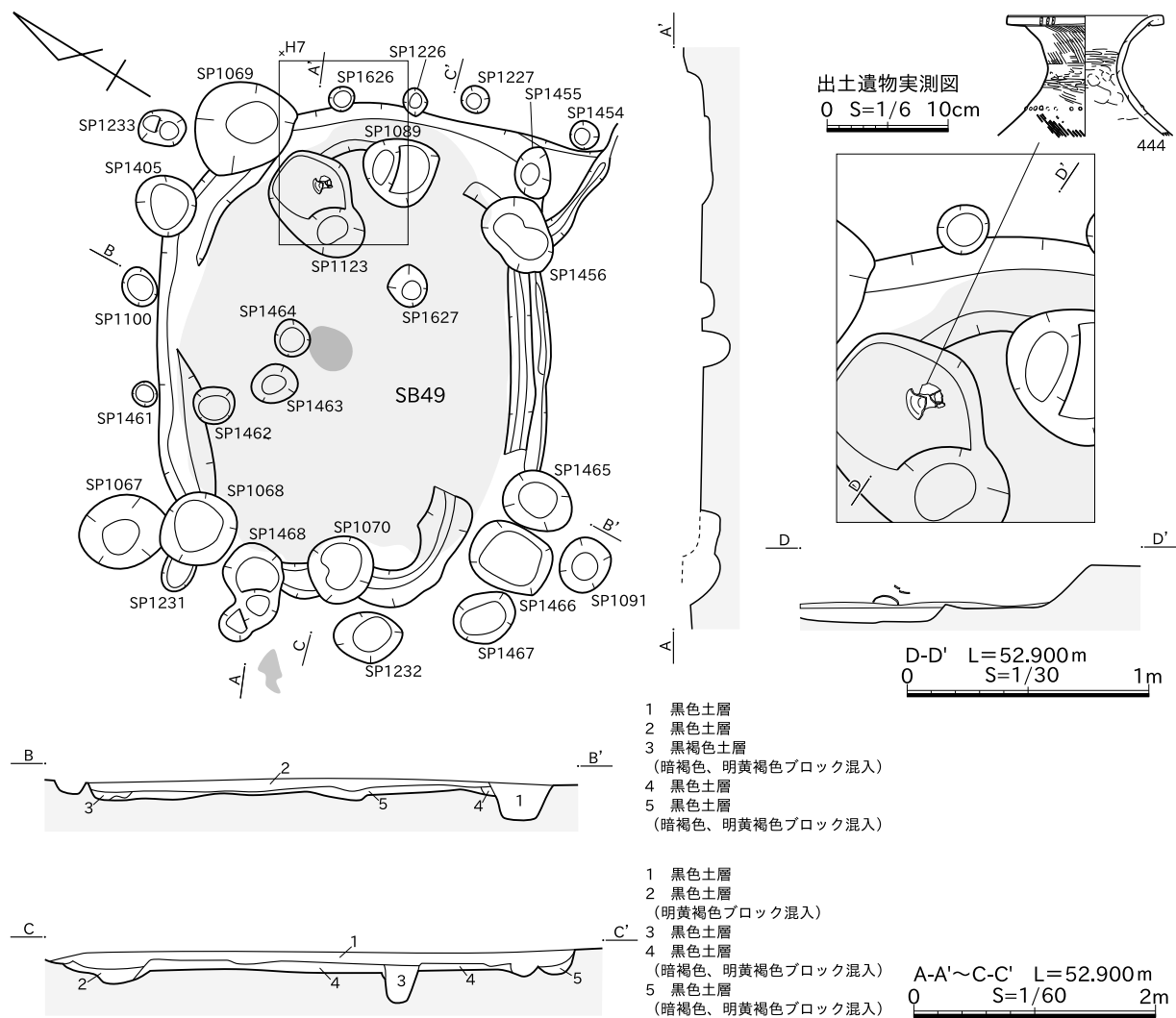
K・L-7・8区に位置する。東側はSB34と、西側はSB61・62と重複しており、竪穴住居跡の掘り方のほとんどを確認することができなかった。確認できたのは、北側一部のみである。規模や形状は不明である。SP1566の西側で確認された焼土は、SB43の炉跡の可能性はある。主柱穴はSP864・848あるいは849・846で、南西部の柱穴は不明である。遺構検出時にSB34・61・62に切られていることが確認された。

出土遺物は第88図の鉢口縁部(433)であるが、SB61・62と重なり合う部分からの出土で、SB43に伴う土器とは断定できない。





第52図 SB48・52~55実測図



第53図 SB49実測図

SB61・62 (第50図)

H・L-7区に位置する。残存状況は悪く、北側の掘り方のみ確認された。2軒は建て替えが行われた竪穴住居跡で、壁溝をもつ掘り方が2軒分確認された。規模は推定長軸5.8m、短軸4.8mで、形状は小判形を呈していたと考えられる。掘り方の北側に近い位置で、炉跡が確認された。支柱穴は、SP1564・1171・1168・1170である。

出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB46 (第51・88図)

G・H-5・6区に位置する。他の住居跡と重複することなく単独で存在した。覆土はわずかしが残っておらず、掘り方の残存状況は悪い。規模は東西、南北4.4mを測り、形状は隅丸正方形を呈していたようである。炉跡が中央からやや西よりで確認された。支柱穴はSP1015・1062・1390で、南西部の柱穴は確認できなかった。SP1390・1391の上面からは、甕3個体が出土した。439と440は、伏せたような状態で出土した。

出土遺物は第88図の437～441で、437・438は覆土から出土した。

SB48・52～55（第52・88図）

H・I-5区に位置する。5軒の竪穴住居跡が重複して検出された。SB52～55は、調査区外に及んでいる。SB48は掘り方の東辺、南辺、北辺の一部を確認した。東辺と南辺は、壁溝をもつ。規模は東西推定4m、南北推定3.2mと小さく、形状は、小判形を呈していたようである。SB52・53・55は掘り方の一部分が確認されただけで、規模や形状は不明である。SB54はSB48を拡張した形状で、規模は南北4.1mを測り、小判形を呈している。竪穴住居跡の床面には、炉跡1、焼土3があり、その周辺で貼床が確認された。これらの竪穴住居跡の新旧関係は不明である。SB52の主柱穴としたのは、SP480・1479・1473・1063である。

出土遺物はSB48に伴う第88図442と443、SP1075から出土した大型壺口縁（449）がある。442と443は、弥生時代中期の丸子式の壺片である。他に小片で図示できなかったが、弥生時代後期の土器も出土していることから、この2点は流れ込みと考えられる。SB52と53からの出土遺物はなかった。

SB49（第53・88図）

H-6・7区に位置する。SB51と重複している。規模は東西4.2m、南北3.3mを測り、形状は小判形を呈する。貼床は床面の広い範囲で確認され、炉跡はほぼ中央で検出された。貼床はSP1123を覆っており、その直上から折返口縁壺（444）が出土している。主柱穴は確認できなかった。またSB49の西側において20×10cm程の炉跡が確認されており、掘り方は確認できなかったが、竪穴住居跡が存在した可能性がある。

出土遺物は、第88図の444～447である。床面及び覆土から出土した折返口縁壺（444）・複合口縁壺（445）・鐙状口縁高坏の坏部（447）と、SP1089から出土した（446）である。

SB47・51（第54図）

H-7区に位置する。SB50と重複している。覆土はわずかししか残っておらず、掘り方の残存状況は非常に悪い。SB51は北東部分の掘り方と、SB47は北東部の壁溝角を50cm程を確認したに過ぎない。規模は不明である。貼床、炉跡、主柱穴は確認されなかったが、壁溝は確認された。新旧関係は、不明である。

出土遺物はいずれも小片で、図示できるものはなかった。

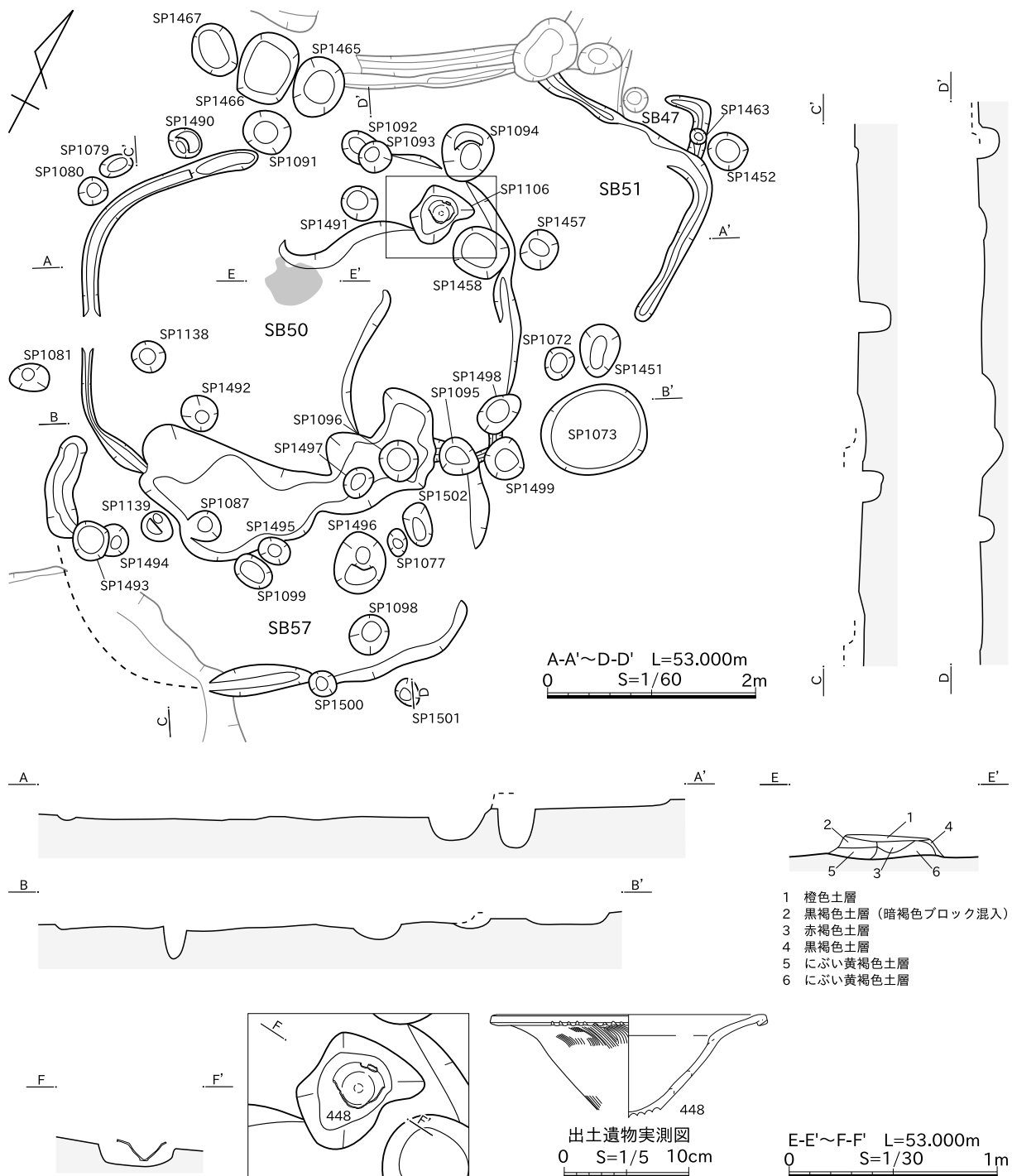
SB50・57（第54・88図）

H・I-6・7区に位置する。南東ではSB51と、南西ではSB59と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土はわずかにしか残っておらず、掘り方の残存状況は非常に悪い。規模はSB50は東西6.5m、南北3.5m、SB57は東西4.3m、南北推定2.7mを測り、形状はともに隅丸長方形を呈する。SB50の炉跡は、50cm程中央からやや北にずれて確認された。主柱穴は確認できなかった。西辺において、壁溝が確認された。

出土遺物は、第88図のSP1106内から出土した鐙状口縁高坏の坏部（448）である。覆土からの出土土器はいずれも小片で、図示できるものはなかったが、弥生時代後期に位置づけられる。

SB58・59（第55・88図）

I・J-6・7区に位置する。北側はSB57と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土はわずかにしか残っておらず、掘り方の残存状況は非常に悪い。現地調査では外側の掘り方（SB59）と内側



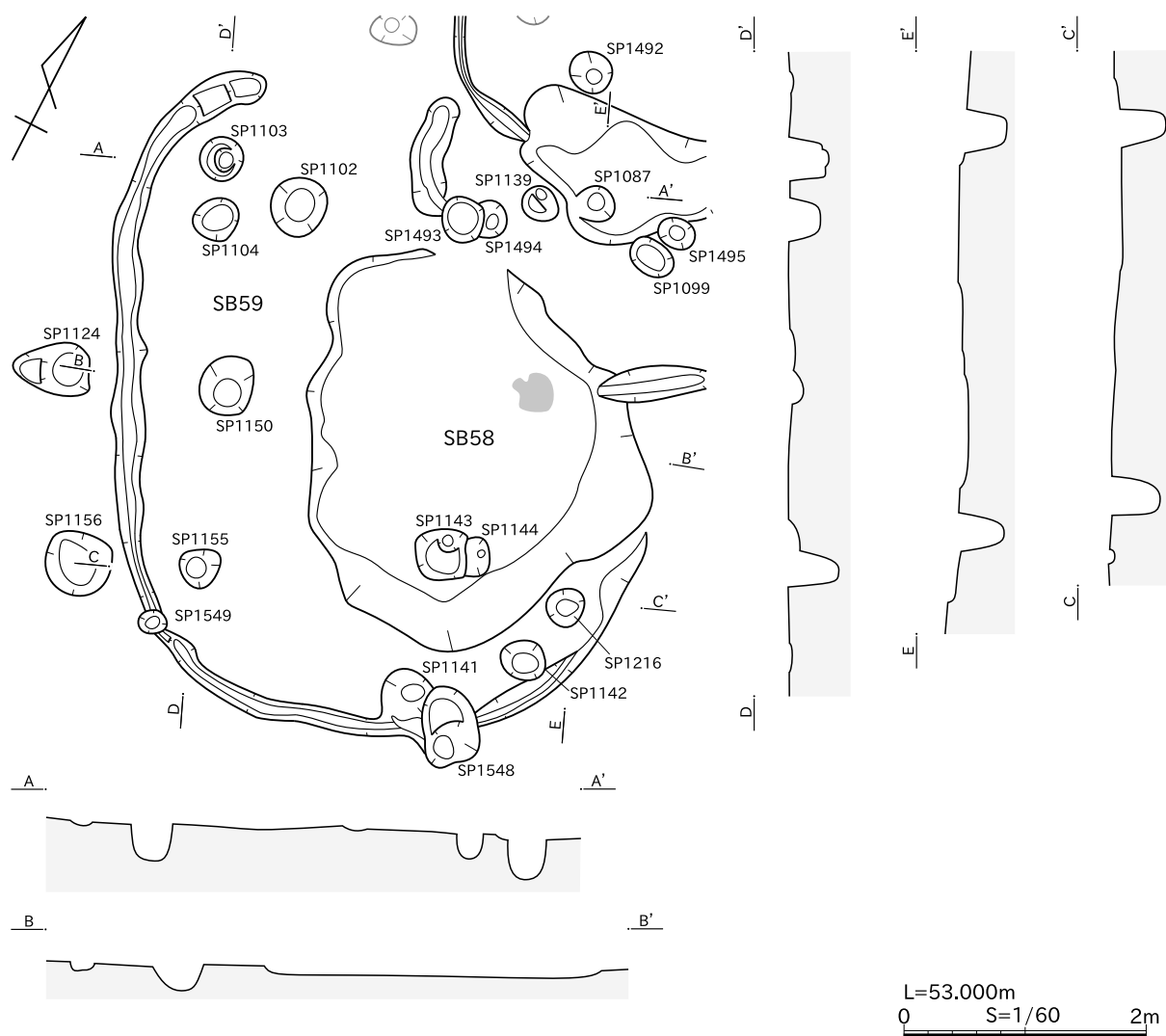
第54図 SB47・50・51・57実測図

の掘り方 (SB58) を2軒分の遺構と考えたが、実際は1軒の竪穴住居跡 (SB59) と見た方がよい。規模は東西5.6m、南北4.7mを測り、形状は小判形を呈する。炉跡は、SB58中央から北よりで確認された。主柱穴は4つで、SP1087・1216・1155・1103である。

出土遺物は、第88図の折返口縁壺 (450) である。

SB60 (第56・88図)

J~L-5・6区に位置する。他の住居跡と重複することなく単独で存在した。竪穴住居跡の西辺部



第55図 SB59実測図

は、調査区外に及んでいる。規模は不明であるが、南北6mを測り、形状は隅丸方形を呈している。貼床は広範囲で確認され、炉跡は大小2つが確認された。主柱穴は、SP1107・1212・1213・1165の4つである。壁溝は全周していたと思われる。

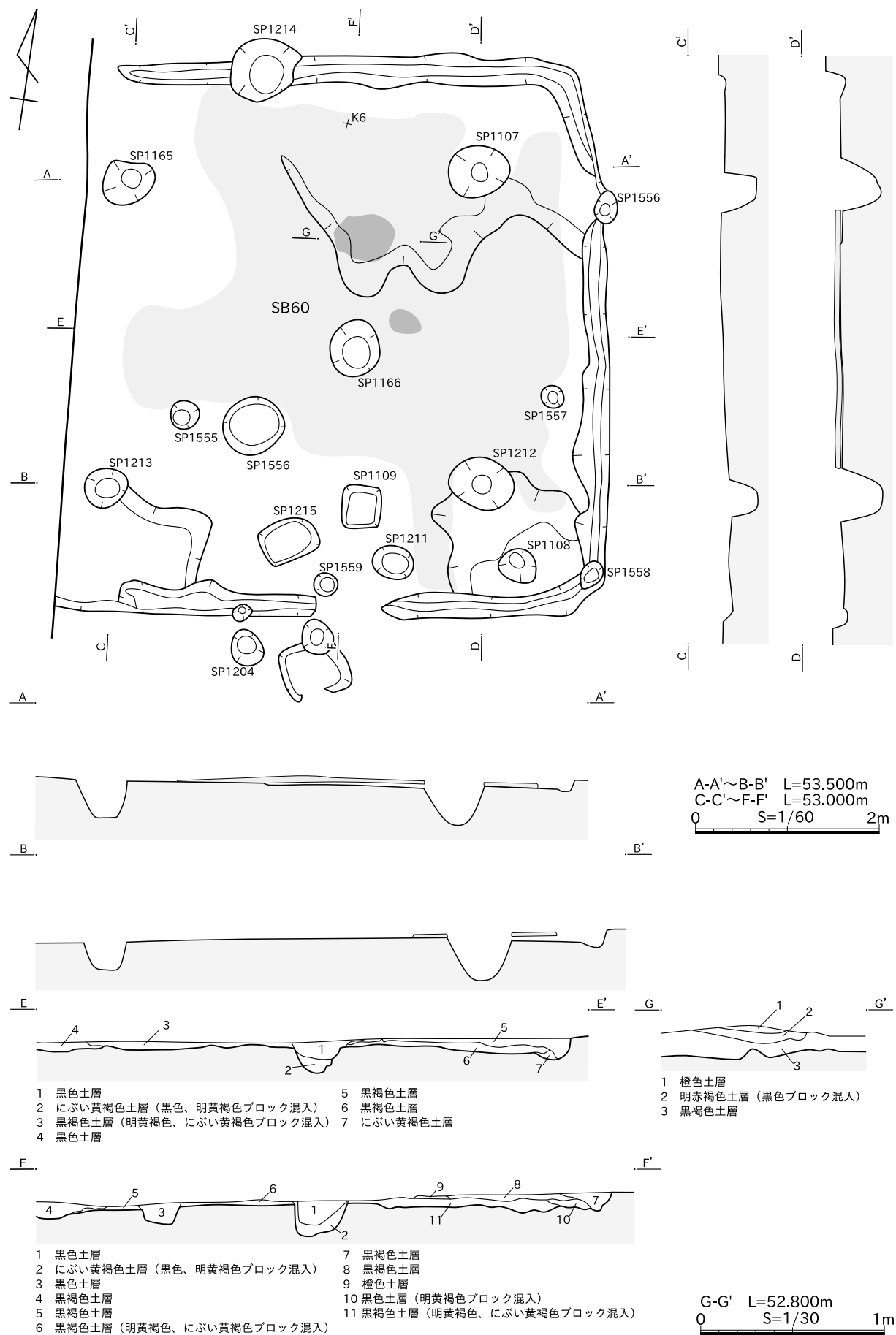
出土遺物は、第88図の在地産S字甕（451）、小型高坏（452）である。その他小片のため図示していないが、古墳時代前期と弥生時代後期の土器が混在して出土しているが、SB60の時期は、竪穴住居跡の平面形状から推定して古墳時代前期と考えられる。

ii 掘立柱建物跡

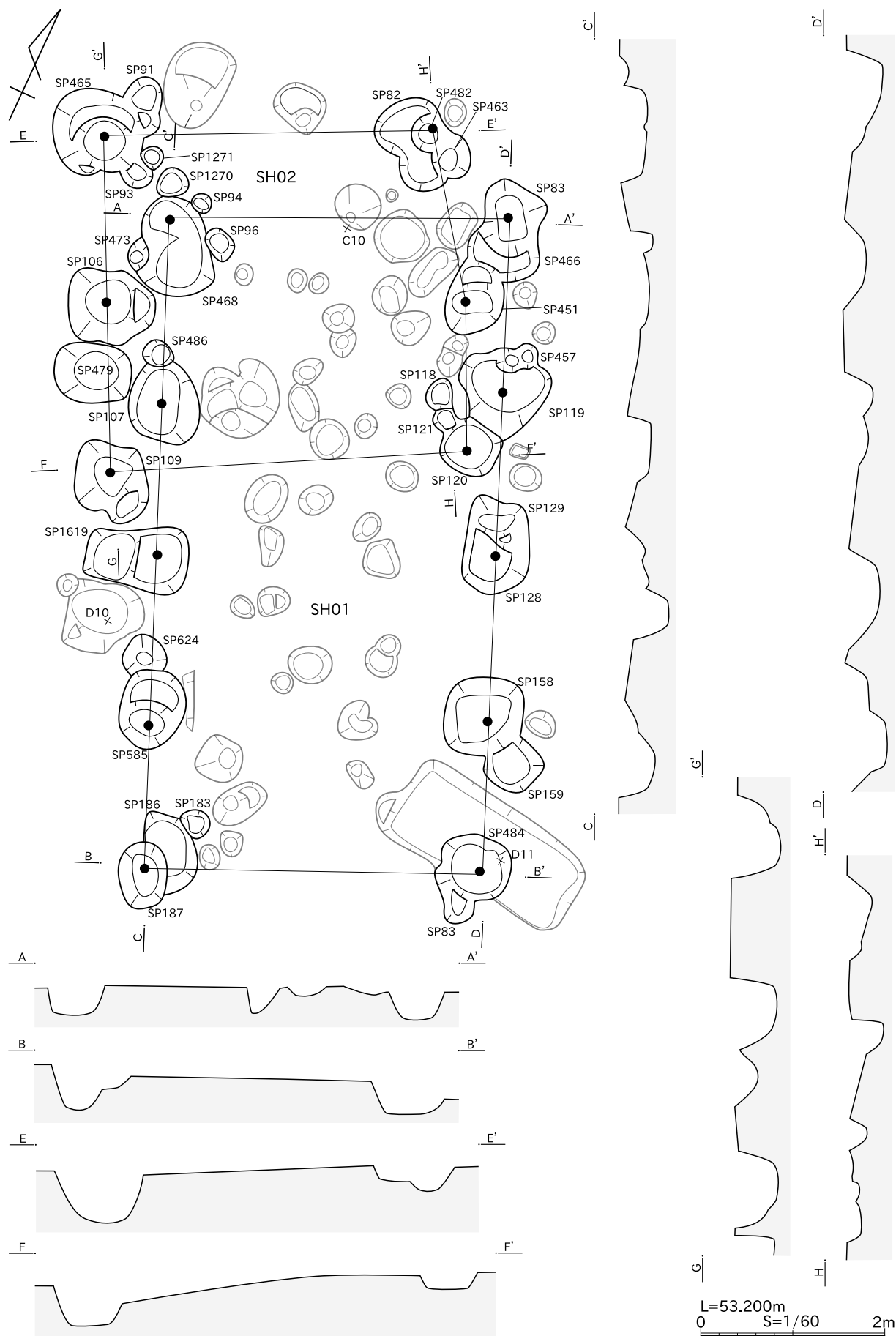
掘立柱建物跡は9棟分を確認し、その9棟は3地点において2～4棟が重複して検出された。SH01・02を除き、ほぼ同一規模である。その内訳は1間×2間が2棟、1間×4間が1棟で、すべて北西－南東方向に棟をもつ建物である。集落内における倉庫地区として代々建て替えが行われていたと考えられる。

SH01（第57図）

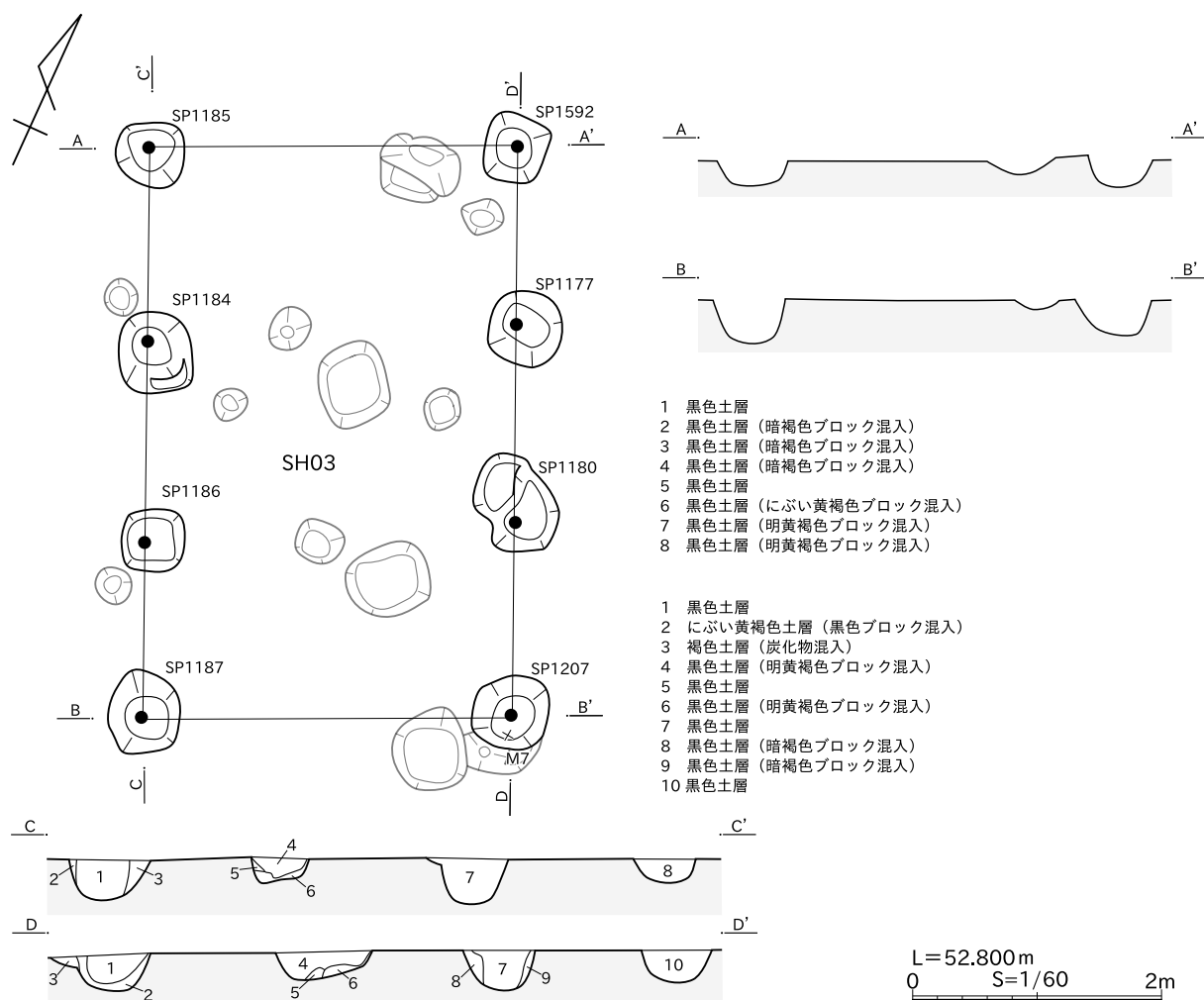
B-10、C・D-9・10区に位置する。規模は梁間1間×桁行4間で、主軸方位はN-34°30'-W



第56図 SB60実測図



第57図 SH01・02実測図



第58図 SH03実測図

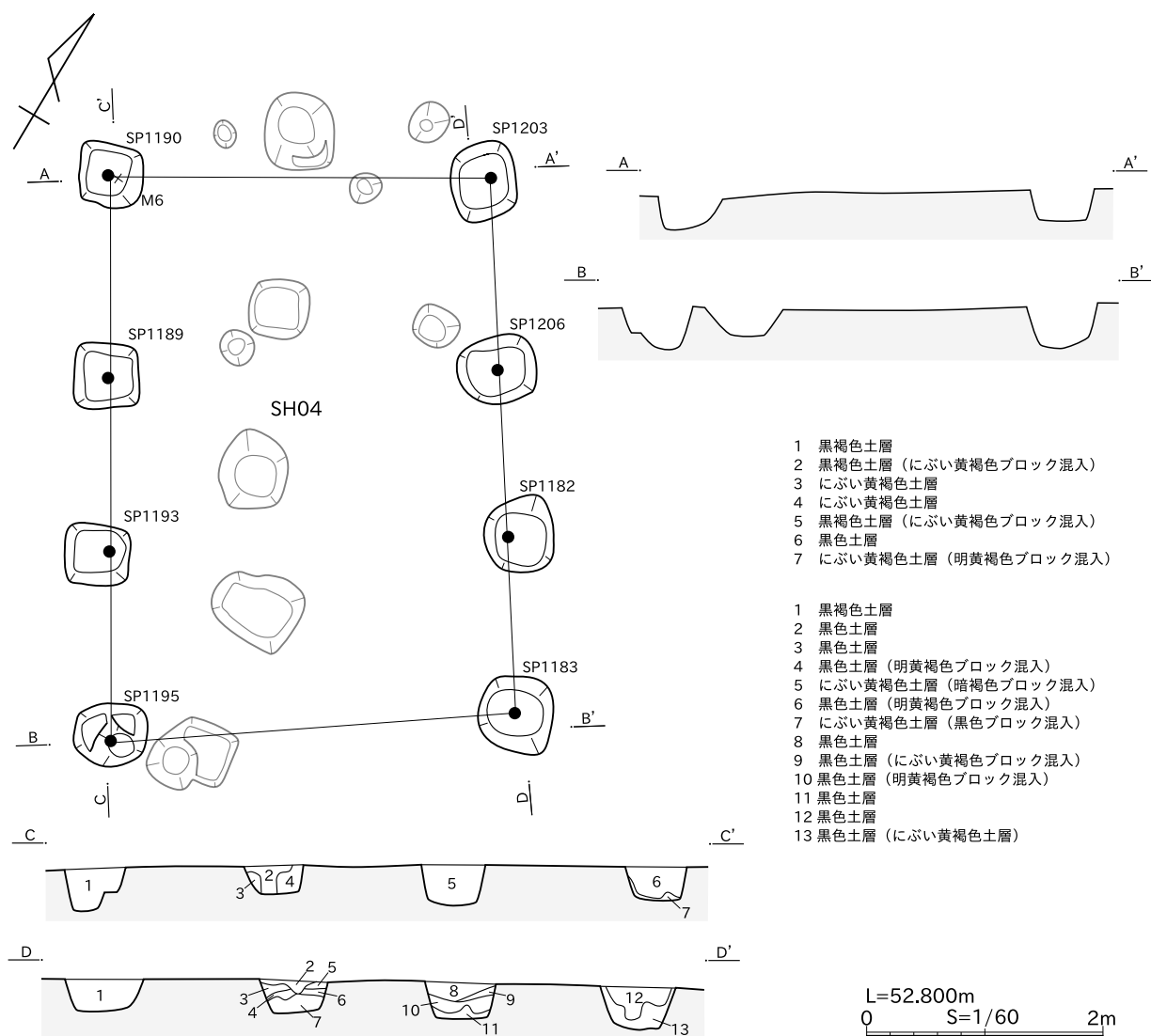
を測る。建物の規模は、 $3.6 \times 7.0\text{m}$ で、今回の調査では最も大きい。柱穴は直径 $0.7 \sim 1.0\text{m}$ の大きさである。SH02と重なり合うが、新旧関係は不明である。各柱穴から土器は出土しているものの、いずれも小片で図示できるものはなかった。

SH02 (第57図)

B-10、C-9・10区に位置する。規模は梁間1間×桁行2間で、主軸方位は $N-38^{\circ}30'-W$ を測る。建物の規模は、 $3.8 \times 3.8\text{m}$ である。建物の長軸が南側にもう一間分伸びることも考えたが、柱間の間隔が狭くなるため1間×2間とした。柱穴は、直径 $0.7 \sim 0.9\text{m}$ の大きさである。出土遺物はいずれも小片で、図示できるものはなかった。

SH03 (第58図)

L-5・6、M-6・7区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間で、主軸方位は、 $N-35^{\circ}30'-W$ を測る。建物の規模は、 $3.0 \times 4.6\text{m}$ で、柱穴は直径 $0.5 \sim 0.7\text{m}$ の大きさである。SH04と重複するが、新旧関係は不明である。SP1592以外では土器が確認されているものの、いずれも小片で図示できるものはなかった。



第59図 SH04実測図

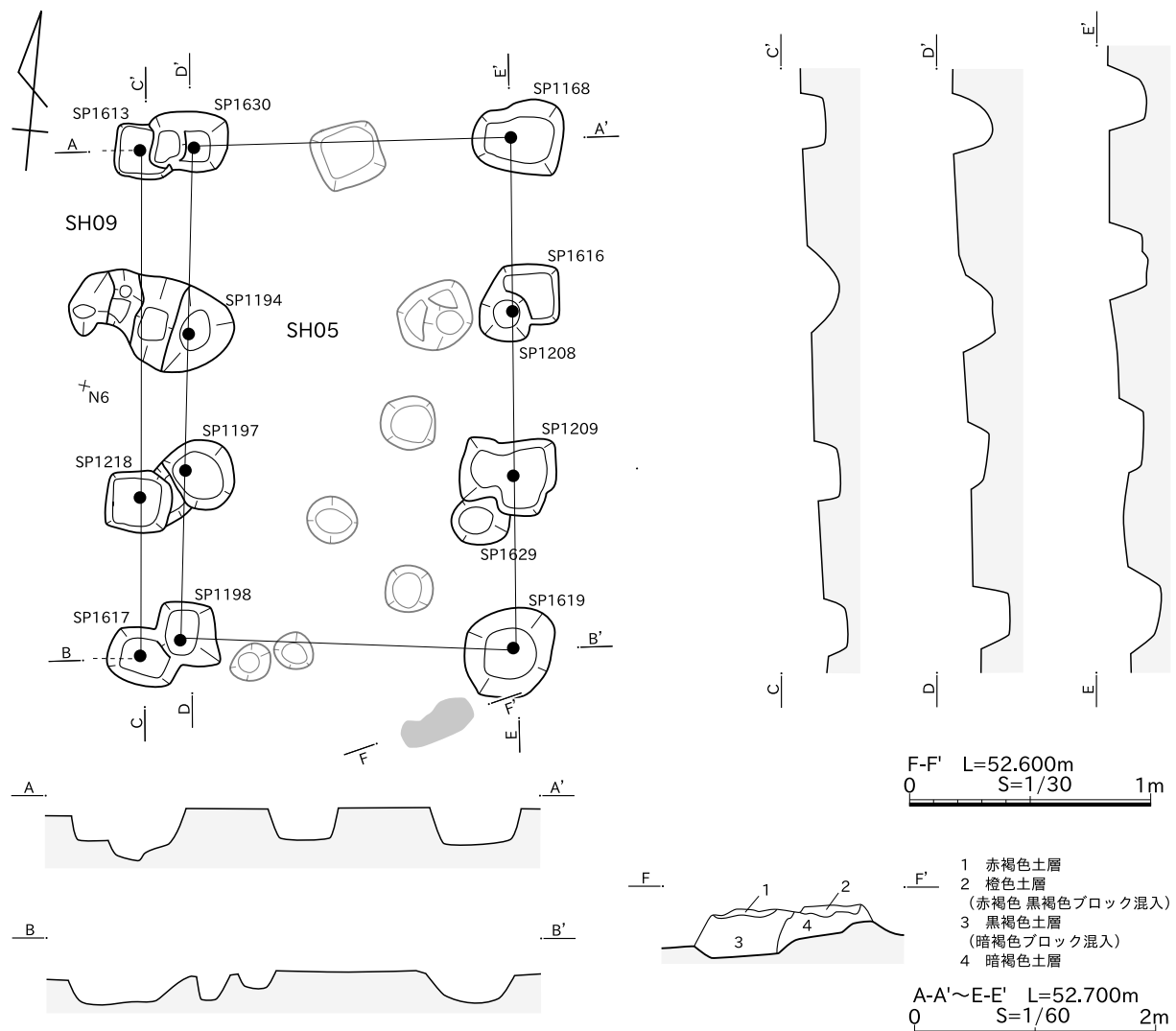
SH04（第59図）

L-5・6、M-5・6・7区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間で、主軸方位はN-45°45'-Wを測る。建物の規模は3.2×4.5mで、SH03とほぼ同規模である。柱穴は直径0.5～0.6mの大きさである。すべての柱穴から土器が出土しているものの、いずれも小片であり図示できるものはなかった。なお、SP1183からは小片ながらS字甕の脚部を確認した。

SH05（第60図）

M-6区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間で、主軸方位はN-18°15'-Wを測る。規模は2.65×4.3mで、SH03・04よりやや梁間が小さい。柱穴は直径0.6～0.8mの大きさである。SH04と平面的に重なるが、新旧関係は不明である。SP1619の南では、炉跡が単独で確認されており、掘り方は確認されなかったが、竪穴住居跡が存在した可能性がある。

SP1168・1197・1198・1209から土器が出土しているが、いずれも小片で図示できるものはなかった。SP1198からは、赤彩された壺の体部片が出土した。出土遺物から掘立柱建物跡は、古墳時代前期の建物と推定される。



SH09 (第60図)

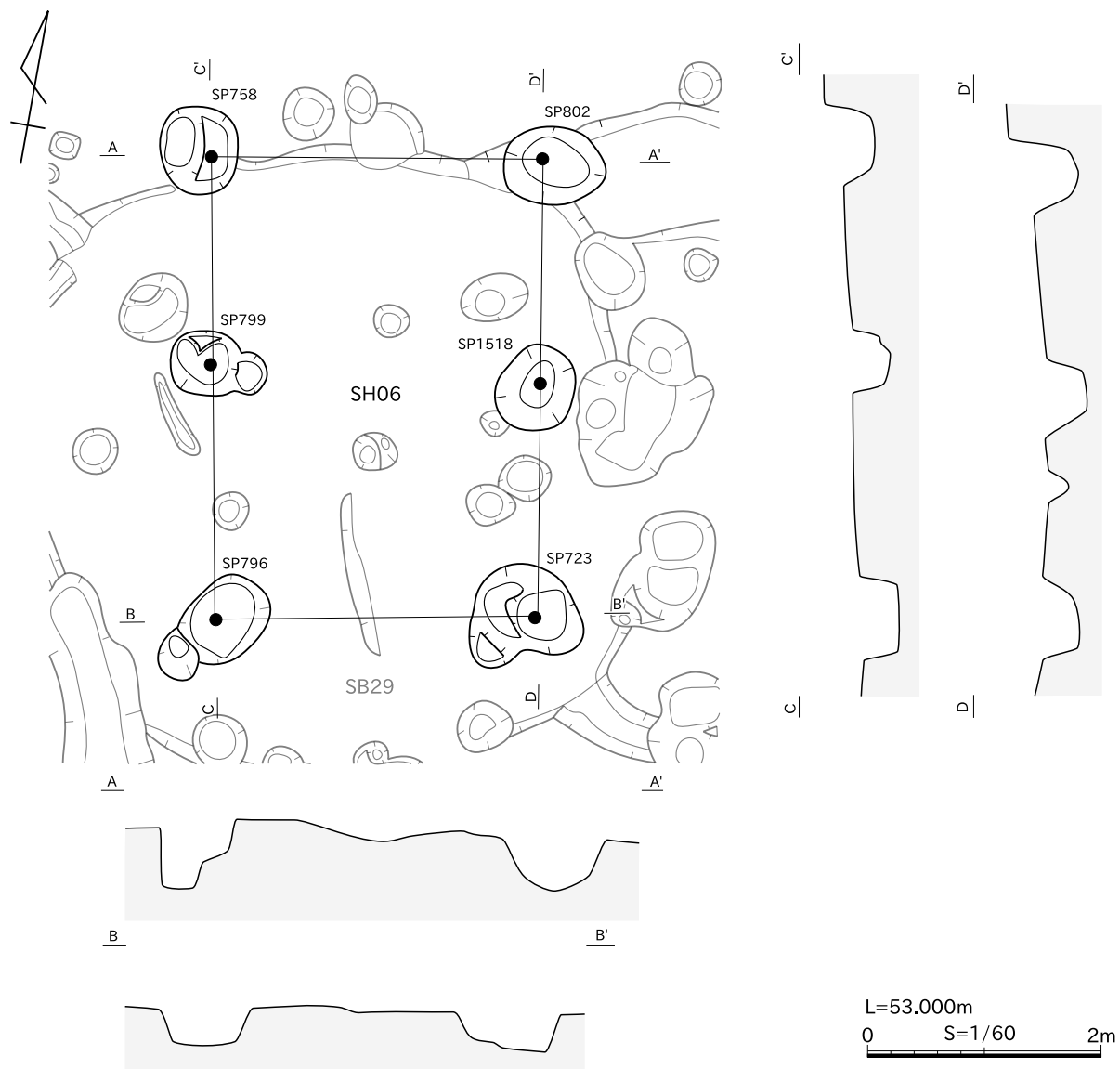
M・N-5・6区に位置する。西側の柱列は、調査区外へ及ぶと推定した。梁間1間×桁行3間で、主軸方位は、N-18°15'-Wを測る。建物の規模は、桁行4.3mである。SH05と同方向で柱穴の位置から、SH05の建て替えと思われるが、新旧関係は不明である。SP1218から土器が出土しているものの、いずれも小片で、図示できるものはなかった。

SH06 (第61図)

I・J-9・10区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間で、主軸方位はN-32°30'-Wを測る。建物の規模は、2.8×4.0m、柱穴は直径0.7~0.8mの大きさである。SB29と平面的に重なるが、切り合い関係からSH06が後出と確認された。SP796・799・802から土器が出土しているものの、いずれも小片で図示できるものはなかった。

SH07 (第62・89図)

I・J-10・11区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間で、主軸方位はN-45°45'-Wを測る。建物の規模は、3.2×5.4mである。柱穴は直径0.6~1.0mの大きさである。SB27・30、SH08と平面的に重



第61図 SH06実測図

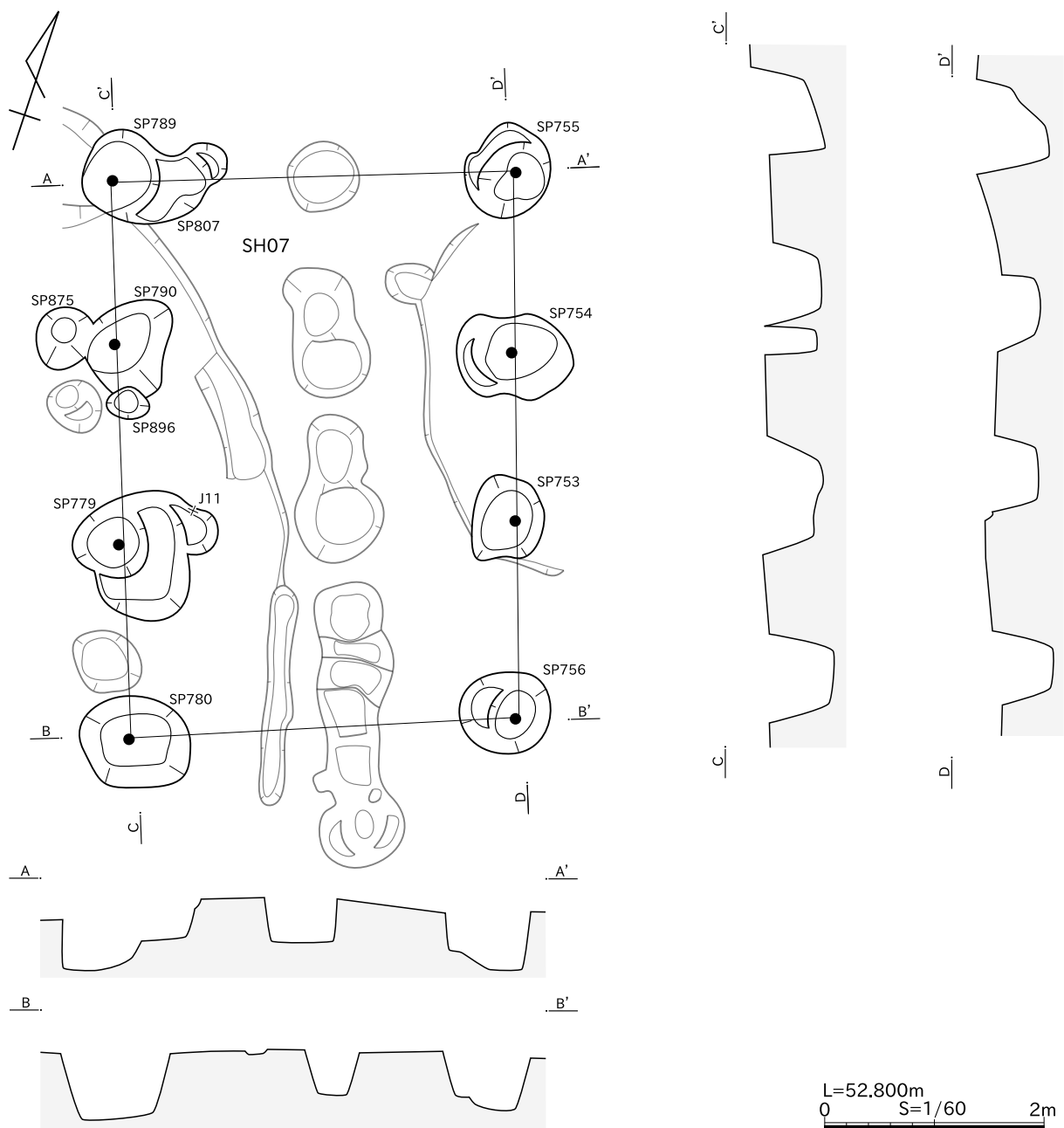
なり、SB27・30より後出であるが、SH08との新旧関係は不明である。

出土遺物は第89図壺体部（456）、鉢口縁部（459、460）がSP755から、甕口縁部（457）がSP780から出土している。

SH08（第63図）

I・J-10・11区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間で、主軸方位はN-39°3'-Wを測る。建物の規模は3.2×4.7mである。SB30、SH07と重複するが、SB30より後出である。柱穴の土層の堆積状況からほぼ同一地点で、建て替えが行われていたことがわかる。

SP787・809・810・812・814・815・816・841から土器が出土しているが、いずれも小片で図示できるものはなかった。



第62図 SH07実測図

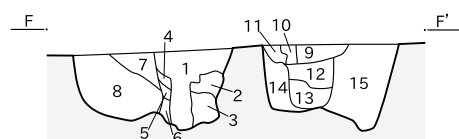
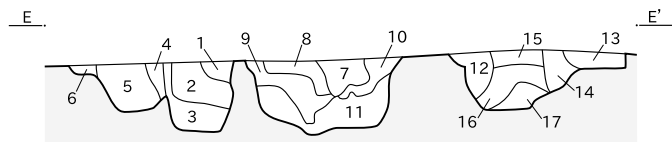
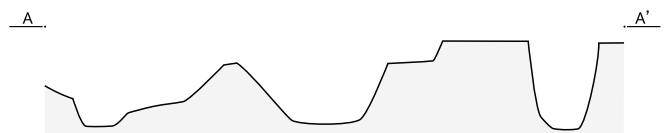
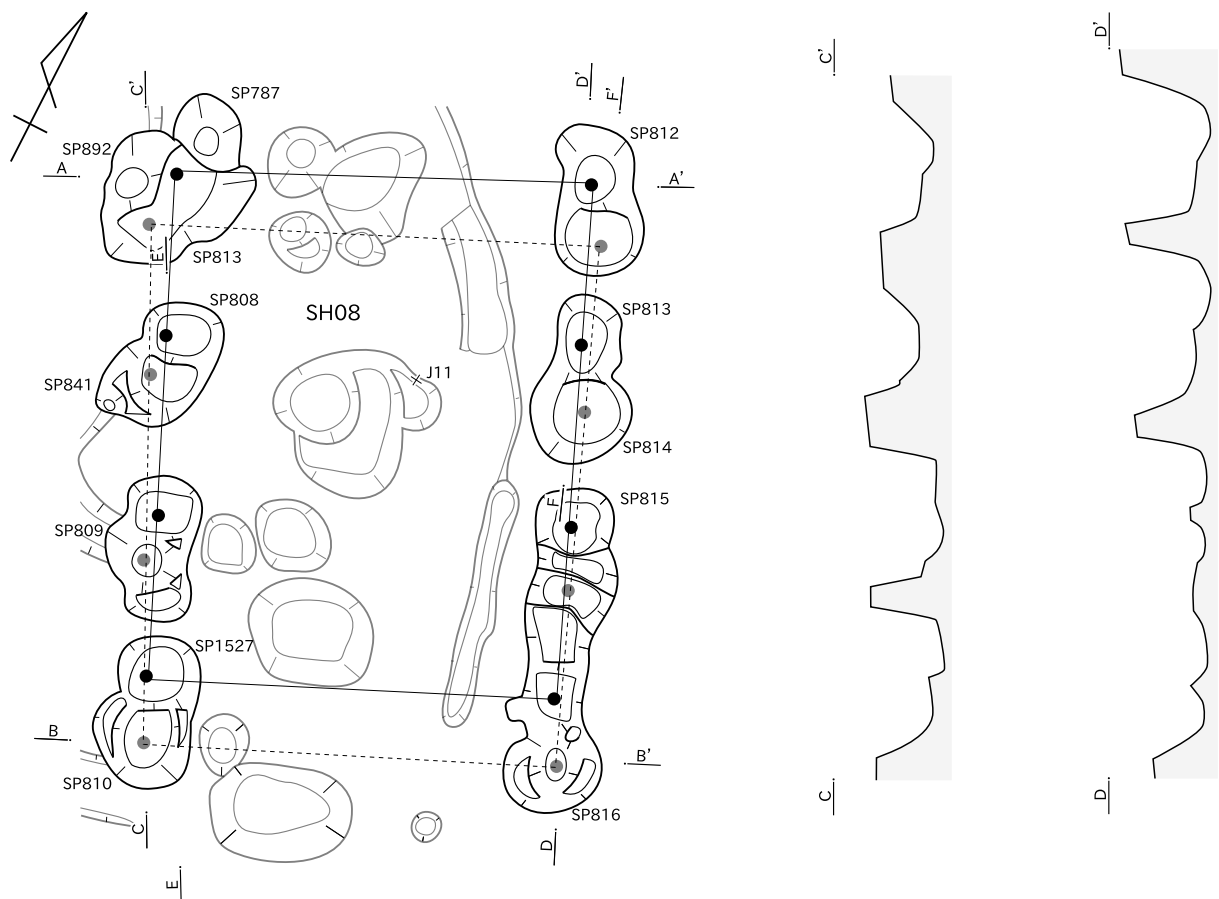
iii 土坑・小穴

SK05 (第64・89図)

C・D-10・11区に位置する。平面形は長径2m、短径1mの長方形を呈す。深さ20cm程を測り、ほぼ平坦な底面からやや傾斜して側壁が立ち上がる。南側でSP484とSP483を切っている。人骨片等の墓坑を裏付ける遺物は検出されていないが、形状から土坑墓と考えられる。覆土中から第89図の壺(462)をはじめ463～465が出土しており、古墳時代前期に比定できる。

SK08 (第64図)

I-9区に位置する。平面形は長径2m、短径0.9mの長方形を呈す。深さ20cm程を測り、ほぼ平坦な底面からやや傾斜して側壁が立ち上がる。中央西寄りの箇所には、長径25cm、深さ17cm程の小穴が

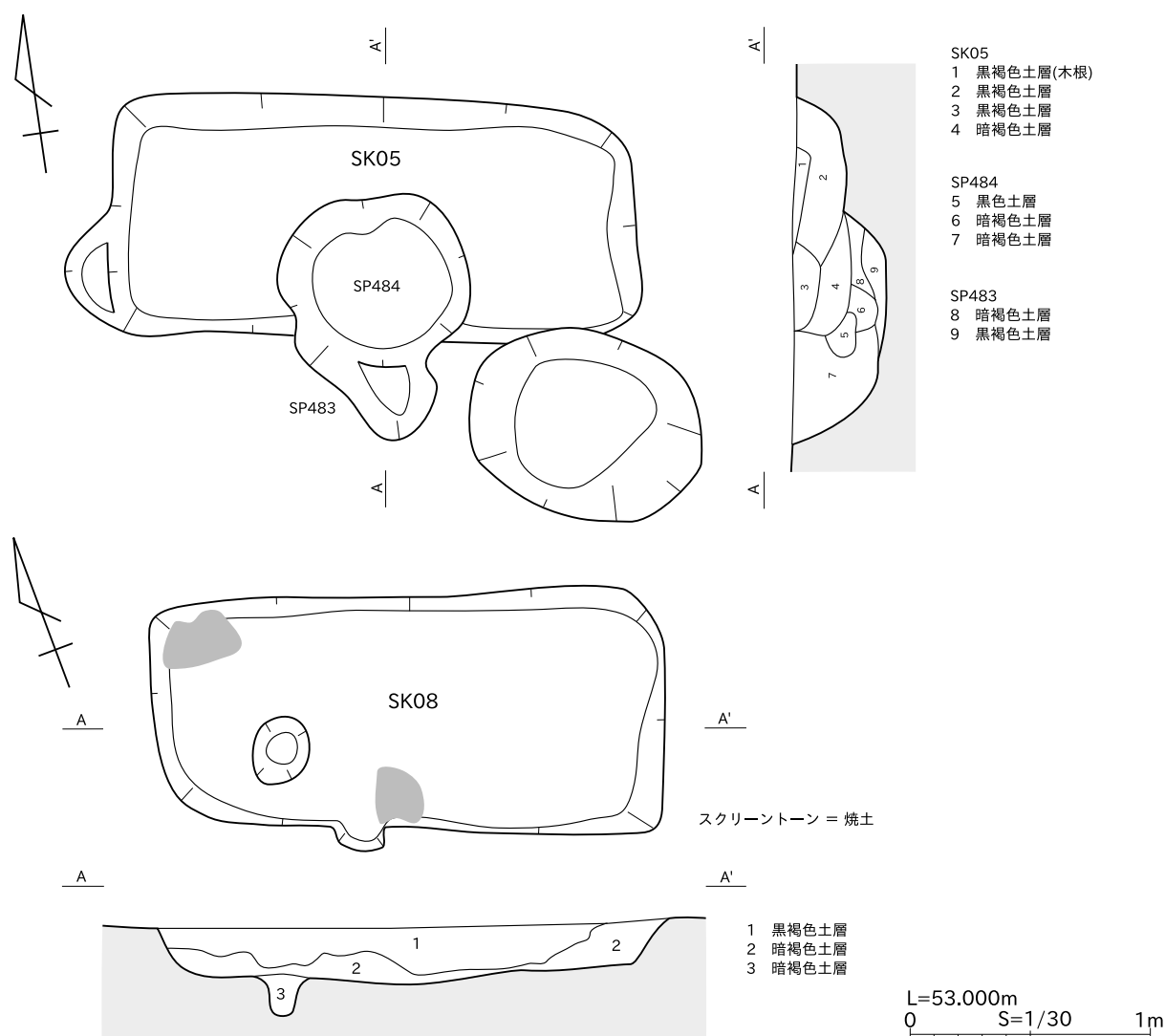


- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色土層
(赤褐色ブロック混入) | 9 黒色土層
(明黄褐色ブロック混入) |
| 2 暗褐色土層
(にぶい黄褐色ブロック混入) | 10 黒色土層
(明黄褐色ブロック混入) |
| 3 暗褐色土層 | 11 黒褐色土層 |
| 4 暗褐色土層 | 12 黒色土層 |
| 5 暗褐色土層
(にぶい黄褐色ブロック混入) | 13 黒褐色土層 |
| 6 暗褐色土層 | 14 黒色土層 |
| 7 黒色土層
(明黄褐色ブロック混入) | 15 黒褐色土層 |
| 8 黒色土層 | 16 黒色土層
(にぶい黄褐色ブロック混入) |
| | 17 にぶい黄褐色土層 |

- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色土層 | 9 黒褐色土層 |
| 2 にぶい黄褐色土層 | 10 黒褐色土層
(にぶい黄褐色ブロック混入) |
| 3 黒褐色土層
(にぶい黄褐色ブロック混入) | 11 黒褐色土層 |
| 4 黒褐色土層
(にぶい黄褐色ブロック混入) | 12 黒褐色土層
(にぶい黄褐色 赤褐色ブロック混入) |
| 5 黒褐色土層 | 13 黒褐色土層 |
| 6 にぶい黄褐色土層 | 14 黒褐色土層 |
| 7 黒褐色土層
(明黄褐色ブロック混入) | 15 黒褐色土層
(明黄褐色ブロック混入) |
| 8 黒褐色土層 | |

L = 52.800m
0 S=1/60 2m

第63図 SH08実測図



第64図 SK05・08実測図

ある。土器の小破片が出土しているが、図示可能なものはなかった。SK05同様、その形状から同時期の土坑墓と考えられる。

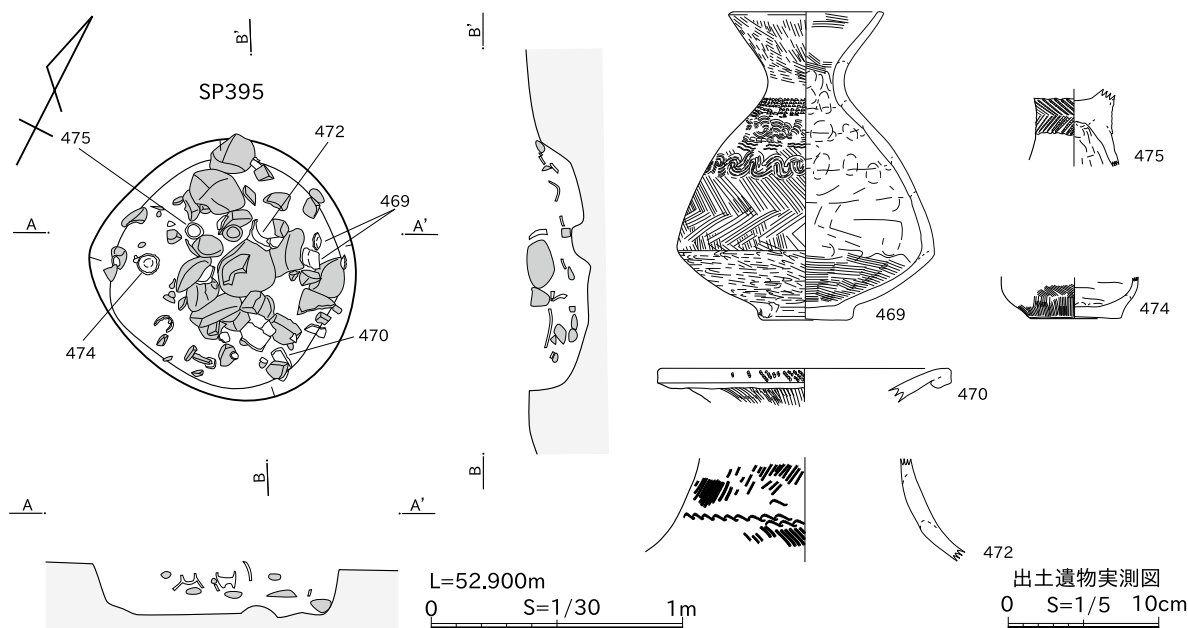
SP395 (第65・89図)

F-14区に位置する。平面形は、長径1mを測る円形を呈す。断面形は逆台形で、深さ20cm程を測る。底面はほぼ平坦であるが、一部地山の円礫による凹凸がみられる。拳大から人頭大の円礫に混じって、胴部の一部を欠損する第89図の壺(469)、壺破片(470・472・474)、高坏接合部片(475)などが出土している。比較的完形率の高い遺物の出土を勘案すると、自然堆積による流れ込みではなく、円礫とともに遺棄されたものと考えられ、弥生時代後期に比定できる。

iv 性格不明遺構

SX04 (第66・91~93図)

D-4区に位置する。平面形は長径1.8m、短径1.1mを測る不正円形を呈す。断面形は不明瞭で、不正円形の土坑の中に2つの小穴があり、そのため底面では凹凸と高低差が著しい。



第65図 SP395実測図

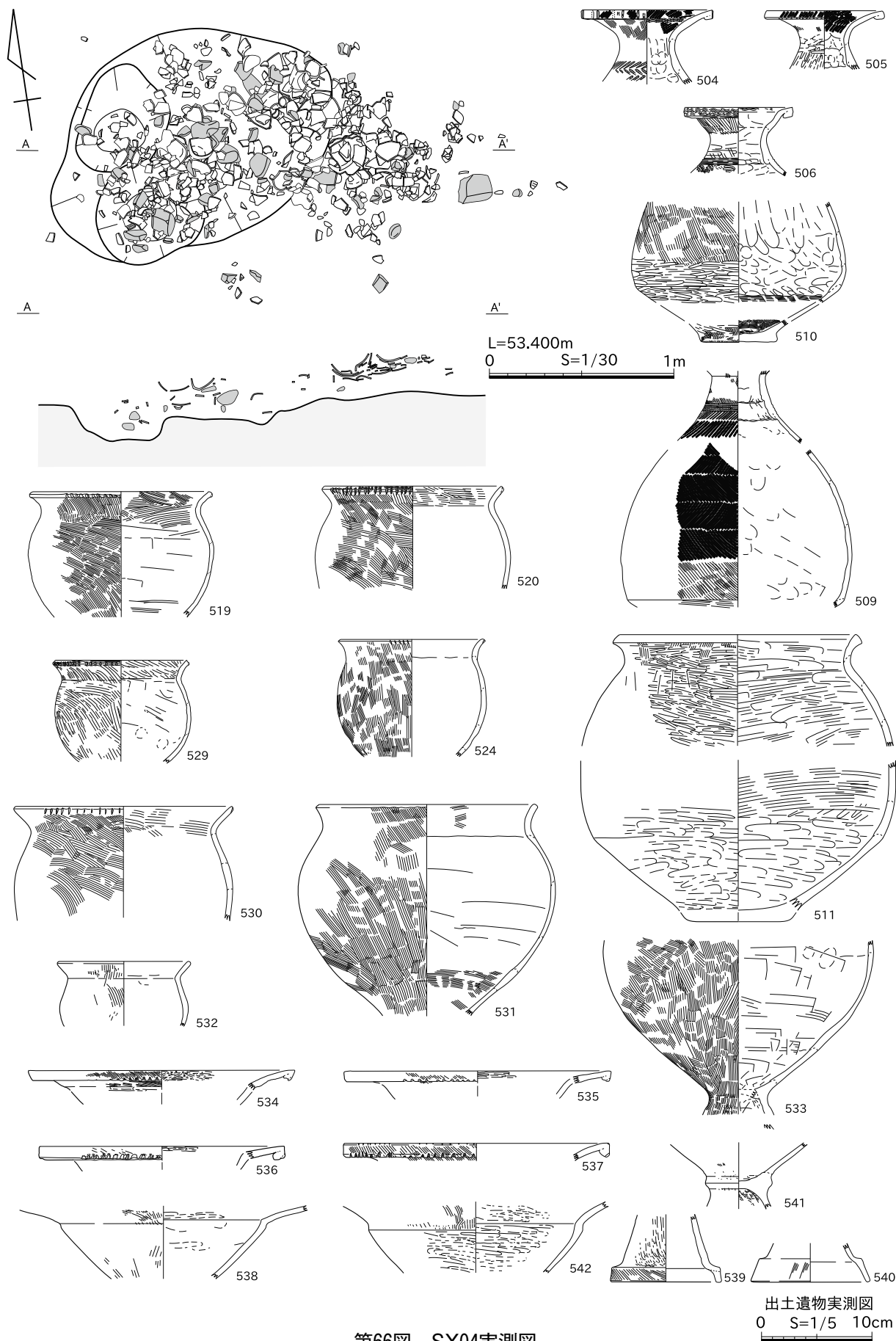
大小の円礫・角礫に混じって大量の土器片が出土している。土器片並びに礫の出土状態を見ると、面的には北、南、西では掘方内にはほぼ収まっているが、東では80cm程掘方外に散乱している。出土状態としては底面直上もしくは底面よりやや浮いた状態で出土しており、密集度が高いことに加え、層序としては間層がなく土器片同士、礫同士が密着するように出土していることから、一括性が指摘できる。

その出土量はテンバコ（543×340×200mm）6杯にも及び、今回の調査において一遺構の出土量としては非常に多いもので、図示したものだけでも第91～93図の504～542の39点を数える。器種は壺・台付甕・高坏で、台付甕が大半を占める。相対的に図示可能なものが多いが、決して完形率が高いとは言えず、台付甕ではすべて口縁部から胴部片で、脚台部は全く出土していない。弥生時代後期に比定できるものであるが、形式的には口縁部のキザミの有無、キザミの密度・大きさ等の差異による型式差が見られる。出土状態からは一括性を指摘したが、型式差からはある程度の時間幅も考慮する必要があるだろう。

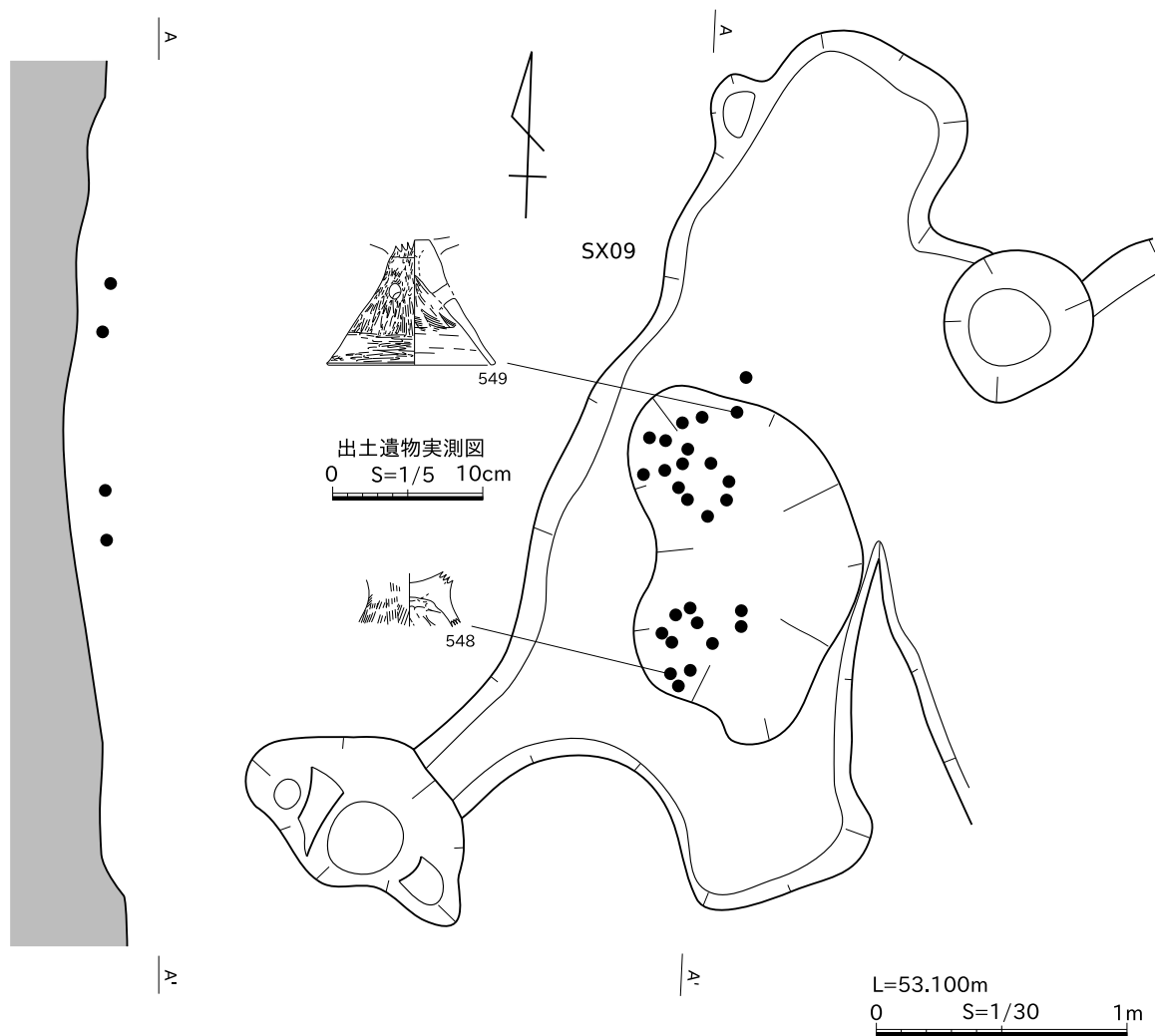
遺構の性格としては、掘方の不明瞭さから簡易的な掘削による土坑に、礫とともに器種としては台付甕を中心に破損した土器等を廃棄した土坑、いわゆる廃棄坑と考えられる。

SX09（第67・94図）

G-6区に位置する。平面形は長径3.8m、最大幅1.5mを測る不定形を呈す。複数の方形土坑や小穴が重複した遺構とも見えるが、切り合い関係は明確にできなかった。掘方にも凹凸がみられ、中央南がすり鉢状にやや深くなっており、その最深部は20cm程を測る。その箇所から土器片が比較的集中して出土している。第94図の高坏（549）・台付甕（548）が主なもので、いずれも破片であり遺棄されたものと考えられる。遺構の時期としては、出土遺物から古墳時代前期に比定できる。



第66図 SX04実測図



第67図 SX09実測図

③中世

i 土坑群（第68・96図）

SP172・176・178・179・240～243・245・246・248・249・252・254・260・341・
342・345・347・352・492・497

C-9、D・E-9～11、F-10・11区に位置する土坑群である。土坑の平面形は、長径0.9～1.1m程の円形もしくは楕円形を呈す。断面形は深さ15～45cm程の矩形を呈し、ほぼ平坦な底部から側壁が垂直して立ち上がる。いずれの土坑も形態・規模は類似しており、いわゆる同一規格を意識して掘削されていることがわかる。そのような同一規格を意識した土坑22基が群在する。その在り方（配置）には明確な規則性は見られないものの、ランダムに掘削されているものでもなく、重複関係（切り合い）はなく近接して掘削されていることを勘案すると、その配置には少なからず意識が読み取れる（切り合い関係にあるSP244は、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土坑）。

強いてその在り方（配置）を表現するならば、最北端にあるSP172から最南端にあるSP345までの11基が、比較的近接しながら途中クランク状に屈曲して南北方向に連なる。さらに、その内のSP240から東に6基がほぼ一直線に配置され、SP178の東西に1基ずつ配置され、最南端のSP345の東にも2基が近接して配置されている。前述のように土坑は同一規格であることに加え、配置には明確な規

折込図（別ファイル）

則性は見られないものの、切り合いがなく比較的近接すること、加えて列もしくは並びと認識できる配置関係からは、土坑相互の位置を意識した掘削ならびに配置による作為性が読み取れるとともに何らかの規制の存在が示唆される。

土坑の内、SP241・245には底面に被熱による赤化部分が認められ、SP245・248・252からは山茶碗片が出土している。

これらの土坑の性格として、まず単体としてみるならば、人骨等の埋葬を積極的に首肯できる遺物は検出されてはいないが、土坑内の被熱の痕跡は示唆的であり、茶毘等の葬送に関わる施設を含め、13世紀後半代の山茶碗を副葬する土坑墓もしくは葬送関連施設と考えたい。土坑群としての性格については、具体相にまでは言及できないが、上記のように何らかの作為性と規制を伴って配置されていることは間違いなからう。

(2) 遺物

①石器等の遺物

瀬戸山Ⅰ遺跡の調査では、多数の石器が出土しており、その総量はテンバコ（543×340×100mm）2箱分である。なかでも黒曜石の小片は、調査準備の踏査段階においても数点が表採され、本発掘調査においても多数が出土している。ただし、そのほとんどは未製品ないしは剥片である。

本発掘調査にて出土した石器について、製品を中心に抽出を行った。以下属する時期、器種ごとに報告する。

i 旧石器時代の石器（第69図）

1は珪質頁岩の縦長剥片を使用した二側縁加工のナイフ形石器で、H-9区の出土である。下半分を欠損している。素材剥片が薄いため、側縁の加工は微細である。旧石器時代の石器であるが、遺構に伴うものではない。法量は最大長2.51cm、最大幅1.75cm、最大厚0.92cm、重量2.0gである。

2はシルト岩製の石器で、C-9区の出土である。縦長剥片の一侧縁に、連続した微細な剥離がある。剥片の打面側を欠損している。縦長剥片を使用していることから、旧石器時代の石器の可能性はある。法量は最大長2.92cm、最大幅1.9cm、最大厚0.41cm、重量2.4gである。

3は頁岩製のスクレーパーで、掘削土中の出土である。刃部の調整は片面のみで、微細な調整を施している。法量は最大長5.8cm、最大幅7.95cm、最大厚1.95cm、重量83gである。

4は頁岩製の不定形剥片を使用した微細な剥離のある剥片で、G-11区SP695出土である。実測図左側の面の左側縁に微細な剥離が入り、その部分に挟りが入ったようになっている。また、実測図左側の面の一部に摩滅した部分が見られる。法量は最大長4.6cm、最大幅4.05cm、最大厚0.9cm、重量18gである。

5・6は、石核である。5はシルト岩の円礫を使用した石核で、L-9区SB38の出土である。円礫の一端（実測図では上からの見通し図）に、複数の剥離面からなる打面を形成し、実測図の正面を作業面として、不定形剥片を剥離している。実測図の下からの見通し図には、これよりも前の作業面があり、不定形剥片を剥離している。なお、この石核は赤く変色していることから、熱を受けた可能性がある。法量は最大長6.8cm、最大幅7.1cm、最大厚4.5cm、重量256gである。

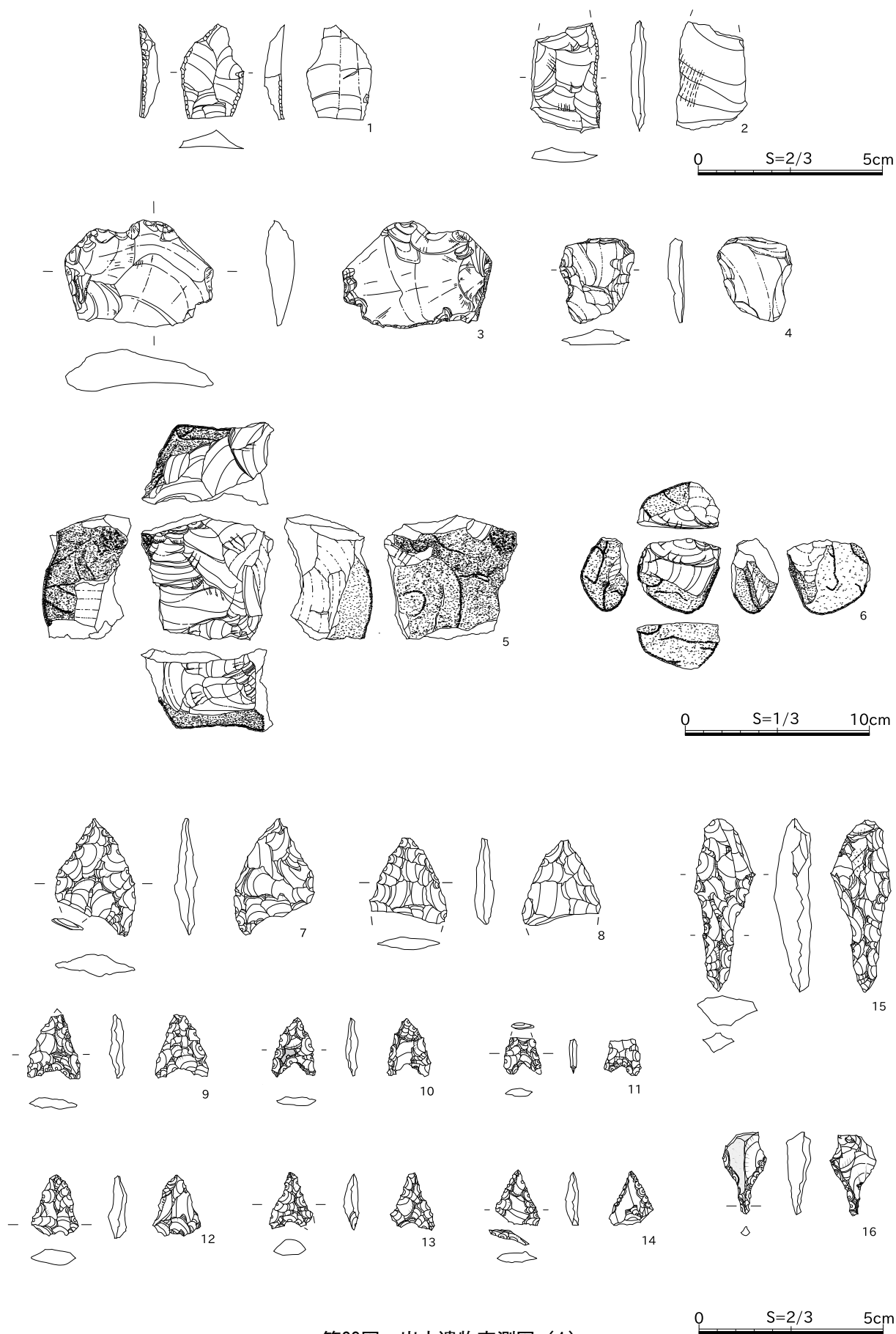
6はチャートの円礫を使用した石核で、D-4区SX04の出土である。自然面を打面にして不定形剥片を剥離している。法量は最大長4.05cm、最大幅4.58cm、最大厚2.6cm、重量は54gである。

ii 縄文時代の石器（第69図～第71図）

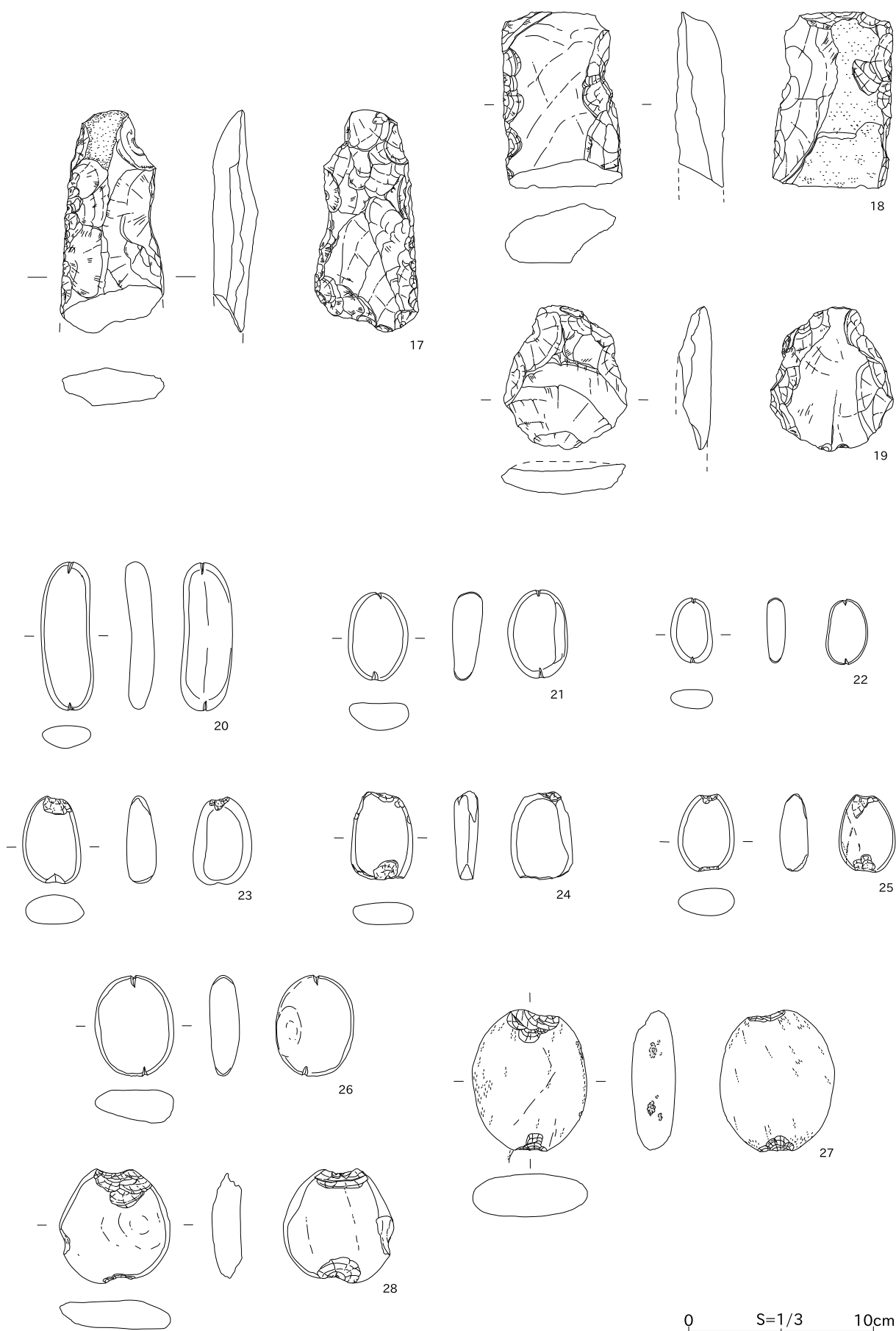
7～14は、石鏃である。7は頁岩の凹基式の石鏃で、掘削土中の出土である。片方の基部を欠損しており、側縁部は基部に向けて大きく彎曲する。法量は最大長3.1cm、最大幅2.1cm、最大厚0.7mm、重量2.5gである。

8はメノウ製の石鏃で、G-5区SB46内の出土である。基部を欠損している。法量は最大長2.35cm、最大幅2.1cm、最大厚0.55cm、重量3.0gである。実測図左側の面に残る剥離面には打点が残っており、実測図右側の面に残る剥離面には打点が残っていない。このことから、実測図右側の面を先に加工し、その後に実測図左側の面を加工したことがわかる。

9は黒曜石製の凹基式の石鏃で、B-9区の出土である。先端部をわずかに欠損している側縁部は、片側が基部に向かいわずかに彎曲するが、反対側は直線的である。法量は最大長1.72cm、最大幅1.5cm、最大厚0.43mm、重量0.7gである。



第69図 出土遺物実測図 (1)



第70図 出土遺物実測図 (2)

10は黒曜石製の凹基式の石鏃で、E-10区の出土である。側縁部は基部に向かい彎曲する。法量は最大長1.6cm、最大幅1.18cm、最大厚0.39cm、重量0.4 gである。

11は黒曜石製の凹基式の石鏃で、I-8区の出土である。先端部及び片側の基部を欠損している。側縁部は基部に向かいやや彎曲するが、直線的である。法量は最大長1.0cm、最大幅1.0cm、最大厚0.21cm、重量0.15 gである。

12は黒曜石製の凹基式の石鏃で、掘削土中の出土である。凹基式としたが、基部の窪みは幅、深さ共に小さく特徴的である。側縁部は基部に向かい直線的である。法量は最大長1.63cm、最大幅1.25cm、最大厚0.51cm、重量0.6 gである。

13は黒曜石製の凹基式の石鏃で、掘削土中の出土である。片側の基部を欠損している。側縁部は先端部付近で反り、基部付近で彎曲する。法量は最大長1.5cm、最大幅1.15cm、最大厚0.43cm、重量0.4 gで、厚みのある石鏃である。

14は黒曜石製の平基式の石鏃で、C-12区の出土である。基部の一部を欠損しており、側縁部は基部に向かい直線的である。法量は最大長1.51cm、最大幅1.2cm、最大厚0.39cm、重量0.4 gである。

15・16は、石錐である。15はシルト岩製の石錐で、K-7区の出土である。つまみと錐の境界部分で最大厚となり、先端部は菱形の断面形を呈する。法量は最大長4.65cm、最大幅1.64cm、最大厚1.1cm、重量5.0 gで、錐部の長さは2.09cmである。

16は黒曜石製の石錐で、B-8区の出土である。つまみ部分と先端部に明瞭な境を有し、先端部の断面形は三角ないし菱形である。つまみ部分の3面のうち、1面は無加工で素材の自然面が確認できる。法量は最大長2.19cm、最大幅1.2cm、最大厚0.69cm、重量1.0 gで、錐部の長さは0.91cmである。

17・18は、打製石斧である。17は砂岩を使用した打製石斧で、掘削土中の出土である、基部の一部に自然面を残し、両側加工により成形される。先端部を欠損している。法量は最大長11.9cm、最大幅5.69cm、最大厚2.45cm、重量171 gである。

18は砂岩を使用した打製石斧で、F-8区の出土である。基部から欠損部まで広い範囲に自然面を残し、両側加工により成形される。先端部を欠損している。法量は最大長9.5cm、最大幅6.2cm、最大厚2.7cm、重量217 gである。

19は砂岩製の石器剥片で、E-6区SP972の出土である。下部を欠損する打製石斧ないし打製石鏃の可能性が考えられる。法量は最大長7.75cm、最大幅6.65cm、最大厚1.8cm、重量95 gである。

20～28は、石錘である。このうち、20～25はG-11区SP695の出土である。いずれも小円礫を素材としており、20～22は礫の両端に、擦切具により切込みを施す。23～25は、礫の両端を直接打撃により加工する。

20は、細長く僅かに湾曲した礫を素材としている。法量は最大長8.0cm、最大幅2.6cm、最大厚1.38cm、重量46 gである。上下先端に切込みが確認できる。

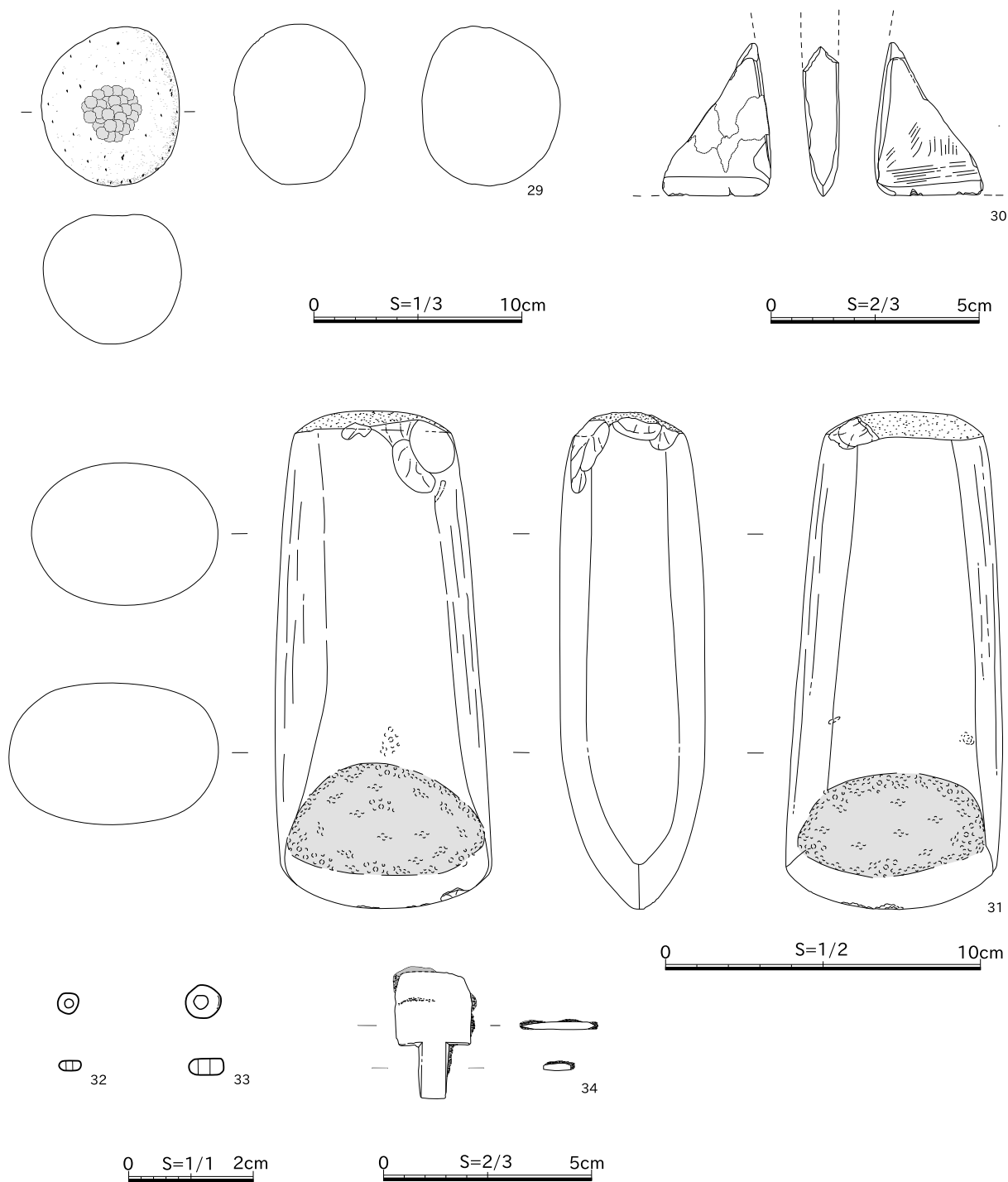
21は切込みが不明瞭で、下部の切込みは自然面の溝を利用し、人為的な切込みはごくわずかである。法量は最大長4.78cm、最大幅3.24cm、最大厚1.6cm、重量32 gである。

22の法量は最大長3.55cm、最大幅2.3cm、最大厚1.0cm、重量13 gと小型、軽量の石錘である。

23は上部にのみ直接打撃による加工を施し、下部は自然面の溝である。法量は最大長4.7cm、最大幅3.1cm、最大厚1.61cm、重量36 gである。

24は歪な円礫を使用し、紐掛け部以外の側縁部にも加工が見られる。紐掛け部の溝は、ごくわずかである。法量は最大長4.71cm、最大幅3.38cm、最大厚1.3cm、重量は31 gである。

25は表面からの加工はごくわずかで、主に裏面からの直接打撃で加工を施す。法量は最大長4.19cm、



第71図 出土遺物実測図 (3)

最大幅3.17cm、最大厚1.55cm、重量27 gである。

26は、K-8区SP844内出土である。小円礫を使用し、擦切具により切込みを施す。法量は最大長5.5cm、最大幅4.3cm、最大厚1.6cm、重量56 gである。

27は、H11区SP881内出土である。小円礫を使用し、直接打撃により紐掛け部を加工する。法量は最大長7.7cm、最大幅6.2cm、最大厚2.39cm、重量160 gである。

28は、E-5区SP908出土である。小円礫を使用し、両側からの直接打撃により紐掛け部を加工する。

法量は最大長6.2cm、最大幅6.0cm、最大厚1.59cm、重量78 gである。

29は砂岩製の凹石で、G-11区SP695の出土である。使用痕は石材の平坦部にのみ認められ、側面部に使用痕は認められない。法量は最大長7.61cm、最大幅6.61cm、最大厚6.29cm、重量413 gである。

30は、K-9区出土の磨製石斧である。定角式石斧に分類されるもので、基部を欠損している。法量は最大長3.65cm、最大幅2.6cm、最大厚0.9cm、重量9.0 gである。

31は、H-8区SB19内出土の磨製石斧である。太型蛤刃石斧に分類されるもので、基部に剥離面を残す。法量は最大長16.0cm、最大幅6.8cm、最大厚4.6cm、重量922 gである。

iii 古墳時代以降（第71図）

32・33は、ガラス製の小玉である。32はE-9区SB09内出土である。法量は最大径0.39cm、最大厚0.19cmで、透明度の高い空色を呈する。

33は、D-8区SB06内出土である。法量は最大径0.59cm、最大厚0.28cmで、瑠璃色を呈し、透明度は低い。

34は、E-11区SB10内出土の鉄製品である。茎部及び刃部の一部を残し、先端を欠損している。法量は最大長3.08cm、最大幅1.89cm、刃部最大厚0.21cm、茎部最大厚0.2cm、重量1.9 gである。

②縄文土器

今次発掘調査で出土した縄文土器の総量は、テンバコ（543×340×100mm）35箱であるが、縄文時代後の弥生時代後期から古墳時代前期の時期に大きな集落が形成されたため、後世の攪乱が広範囲に及ぶにも関わらず多量の土器が出土している。

出土した土器を観ると、概ね3期に仕分けられる。詳細分類はしないが1期＝早期後葉、2期＝中期中頭から中葉、3期＝中期後葉から後期中葉、それぞれの時期に属するものと認識している。図版に従い説明するが、図版は遺構出土土器、遺構外出土土器、確認調査出土土器の順に並べ、遺構は竪穴住居跡（SB）、小穴（SP）、性格不明遺構（SX）の順で付番した。また、遺構外出土土器については、時代順に並べ、その中でも器形の口縁部から胴部、底部破片の順に付番した。以下、付番順に説明する。

i 遺構出土土器（第72図～第76図）

41はSB37出土の深鉢形土器で、口径が内径で20cm、外径で22cmを測る。胴下半部から底部までを欠損しているので器高はわからないが、土器残存部で測ると高さ約20cmを測る。胎土は赤黄褐色で、焼成よく仕上げられている。

口縁部は肩部から外反して立ち上がる器形で、口唇部は丸みを持って単純に仕上げられている。また口縁部は一見無文帯のようであるが、櫛描き状の工具により横に連続するJもしくはU字状のモチーフで文様が薄く描かれている。櫛による整形の後、撫でにより調整したものと思われる。

土器肩部には、棒状工具による並走する沈線が2条巡っており、その下位の胴部が膨らむ辺りにかけて同じ棒状工具による沈線で渦巻くように逆J字と渦巻く文様が描かれている。文様の下地として、斜位に櫛描きした調整痕が確認できる。

土器の器形は胴部上半部で最大径となって、そのまま真直ぐに底部に向かう器形と思われる。属する土器の時期は形状、胎土、器厚、文様のあり方から、後期中頭から前葉にかけての時期と理解する。

42は、SP32出土の深鉢形土器で口縁部文様帯の部位破片である。半截竹管による沈線区画内を縄文充填する土器。器厚10mmとやや厚手の土器である。中期後半期に属すると観る。

43は、SP33出土の深鉢形土器胴下半部の破片。細い半截竹管による平行沈線が条痕状に地文として残っている。器厚は8mmとやや薄い土器である。

44は、SP47出土の深鉢形土器の口縁部文様帯下部破片である。くの字状に屈折する土器で、屈折部に半截竹管による刻みが施されている。その上部には、半截竹管による沈線が巡っている。器厚は10mm前後とやや厚手の土器。器形から後期中葉頃の時期のものと観る。

45はSP47出土の深鉢形土器の胴部破片で、器厚8mm前後でやや薄手の土器で、赤褐色の焼成の良い土器片である。やや反りのある土器で、器面には半截竹管による平行沈線で縦位、横位に文様が描かれている。

46はSP63出土の深鉢形土器の胴部破片で、器厚10mm前後で、やや激しく摩滅が進んでいる。器面には、縦位に沈線が垂れ、沈線によりU字状の文様が描かれている。

47・48はSP114出土の同一個体の土器で、深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部断面は、内傾する平坦な面を形成し、口唇縁に半截竹管状工具により刻みが見られる。半截竹管状工具による沈線により横位に区画が施され、文様帯を構成する。無文地文に結節縄文のS字が垂下する。中期後半のS字縄文を連想させる文様である。器厚は1cm前後とやや厚手で、器形はキャリパー状になると思われる。

49はSP371出土の深鉢形土器口縁部破片の土器で、口唇部は剥離しているが丸みのある形状を呈す。口縁直下に半截竹管による沈線が巡る。器厚8mmの土器である。

50もSP371出土の深鉢形土器の胴部破片で、器厚8mmとやや薄い土器である。地文に撚りの細い縄文施文が見られ、棒状工具による沈線が認められる。

51もSP371出土の深鉢形土器の胴部破片で、器面が非常にもろくボロボロしている。棒状工具による沈線が1条垂下するのを確認できる。

52・53はSP406出土の深鉢形土器の胴部破片である。52は口縁部破片で、口唇部を平坦に仕上げているのが特徴的である。無文の地文に棒状工具による沈線で、U字状の文様が描かれる。器厚は、口唇部で7mm、胴部で9mmのやや薄手の土器である。

53は、器面がよく撫でられた土器で、半截竹管状工具による縦位の沈線が認められる。器厚は、7～8mmである。どちらも中期後半期に属するものと観ている。

54～57は、いずれもSP409出土の深鉢形土器の胴部破片である。54は、器厚6mm前後と薄手の土器で、雲母粒を含有する特徴的な胎土である。器面は、無文地に半截竹管状工具による沈線を3条認められる。

55は、器厚が6mm前後と薄く、器面に半截竹管による沈線文が施されている。

56も器厚が6mm前後と非常に薄い土器。器面には半截竹管による沈線が認められるが、特に深く明瞭な沈線である。沈線間には節の細かな縄文が施文されている。

57は粗い胎土の土器であるが、焼成よく堅緻である。器面は、全面に縄文が施されている。器厚は、11mmと厚く、中期後葉の特徴をよく示している。

58はSP689出土の深鉢形土器の口縁部から胴下半部にかけての大型破片で、器形の大きさを推測できるものである。口縁の口径は、内径で26cm、外径で27.8cmの大きさを測る。残念ながら器高までは掴むことができないものではなかった。器厚は、口縁部が11mm、胴部が12～14mmで厚手の土器である。器面の文様は口縁部文様帯は無く、無文が一周する。低い隆帯が口縁に沿って一周し、同じ低い隆帯が縦位に貼り付け区画している。区画内には、幅の広い半截竹管による上にU字文と逆U字状文が描



第72図 出土遺物実測図 (4)

かれる。器形と文様のあり方から中期末葉の時期の土器と理解する。

59～70は、すべてSP695出土の深鉢形土器の破片である。59は口縁部を最大径にした器形で、口縁部直下で内側に湾曲する深鉢形土器である。棒状工具もしくは半截竹管外皮面使用による沈線で、J字の文様を描く、後期初頭の特徴的な土器で、口縁直下を無文帯にして、その下にJ字文をモチーフにして描出している。このJ字文様の中側には細い縄文により丁寧に充填されており、この縄文以外の周辺部分は、撫でによって綺麗に仕上げられている。胴下半の文様の様子が明確でないが、この文様のモチーフは一段組で仕上げられていると思われる。土器の形状、胎土の厚さ、文様のあり方等から、この土器だけを観ると後期初頭の時期の土器と判断する。

60は59と同じような口縁部の土器破片で、器面には半截竹管外側による深く明瞭な沈線により区画が観られ、沈線内には磨り消し縄文が施される。口唇部は厚みを持ち、外に大きく内彎する器形。内側、外側は磨きが施され、器厚11mmと厚手である。59と同じように後期初頭の特徴的な土器である。

61には半截竹管の外側による深く明瞭な沈線が認められ、沈線内側には磨り消し縄文が施されている。口唇部は厚く仕上げられ、内側、外側ともに横方向の磨きが施されている。器厚は10mmとやや厚手で、同様に後期前半の土器である。

62は器面半截竹管による沈線区画が施され、内側には縄文が充填されている。縄文の施文方向はランダムで、沈線は深くないが、はっきりと描かれている。波状口縁のある土器で、胴部上半にくびれをもつ。わずかにスガが付着している。同じように後期前半の土器と判断する。

63も胴部に対し厚みを持ち内彎する口縁部破片である。口縁に沿って縄文施文した後、半截竹管による深く明瞭な沈線が施されている。沈線は少なくとも2条施され、間はミガキにより調整している。堅緻な胎土で、焼成良く仕上げられている。器厚は、8mmとやや薄手である。いずれも、後期前半の時期に属す土器である。

64は器面全体に縄文が施されている深鉢形土器の胴部破片で、胴上半部から下半部にかけての部位破片である。下半部から上半部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部に至る。器厚は10mm前後を測る。

65の器面には、半截竹管による平行沈線がランダムに施されている。逆U字状のモチーフが想定されるが、かなり崩れていて判別し難い。器厚は、9～10mmを測る。焼成は、良好である。

66は半截竹管による2本の横位平行沈線があり、沈線の上下には磨り消し縄文が確認でき、沈線の内部は磨かれている。胎土は粗いが、焼成が良く、強く締りのある土器で、器厚9mm前後を測る。くびれがなく外反する器形で、後期前半の土器であると認識する。

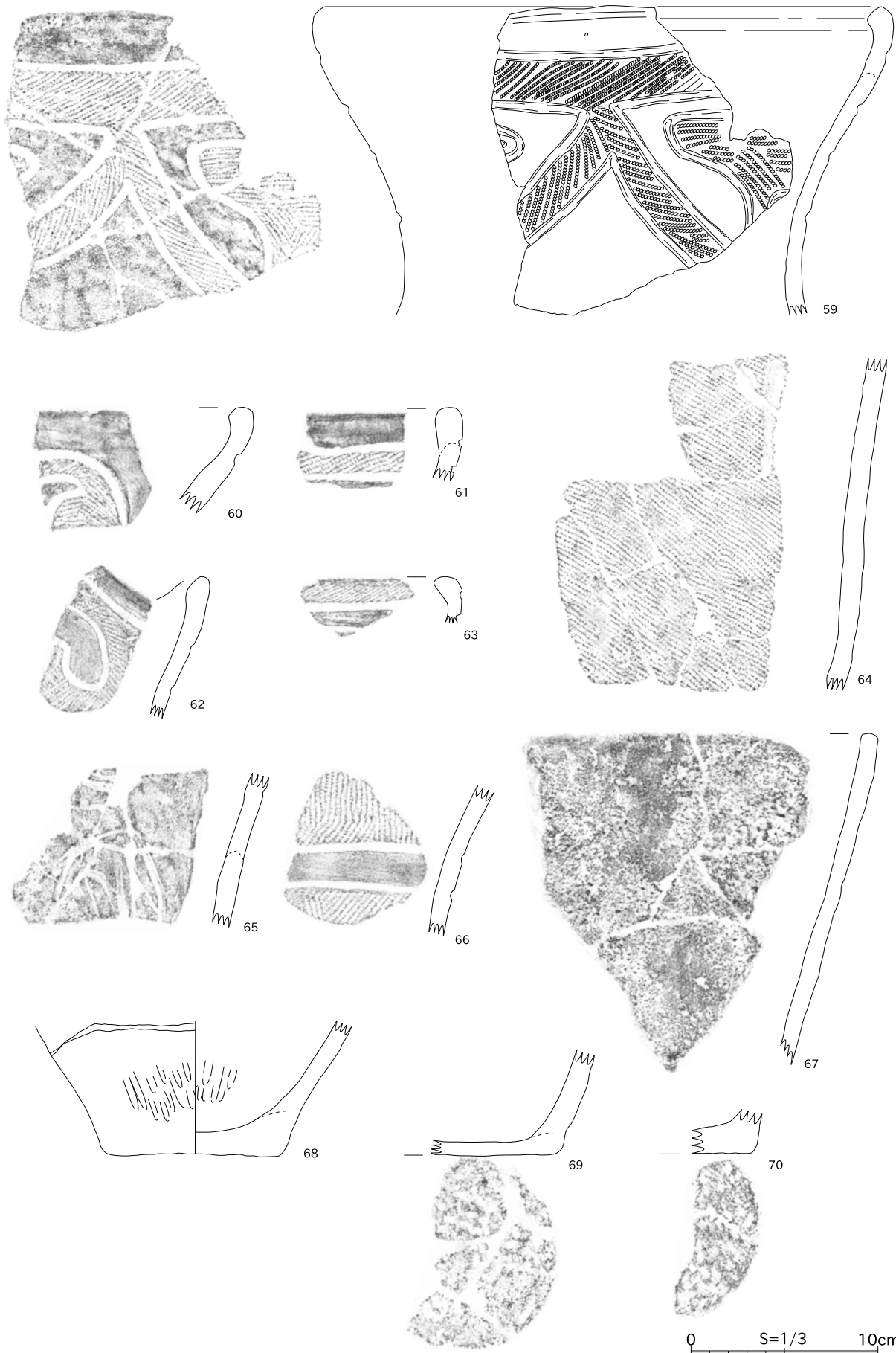
67は口縁から胴部に至る比較的大きな土器破片で、器面が無文で粗製土器とも言える土器である。器厚は7mm前後と薄手で、胎土が粗く脆い。同部から真直ぐ口縁に至る器形で、口唇端面を丸く仕上げている。

68～70は、深鉢形土器の底部破片である。68は底部から胴下半部までを残す土器破片で、形状から深鉢形土器の底部破片である。底部の器厚は12mmと厚く、立ち上がった胴下半の厚さは8～9mmである。器厚と器形から中期末から後期初頭の時期に収まる土器であると考える。

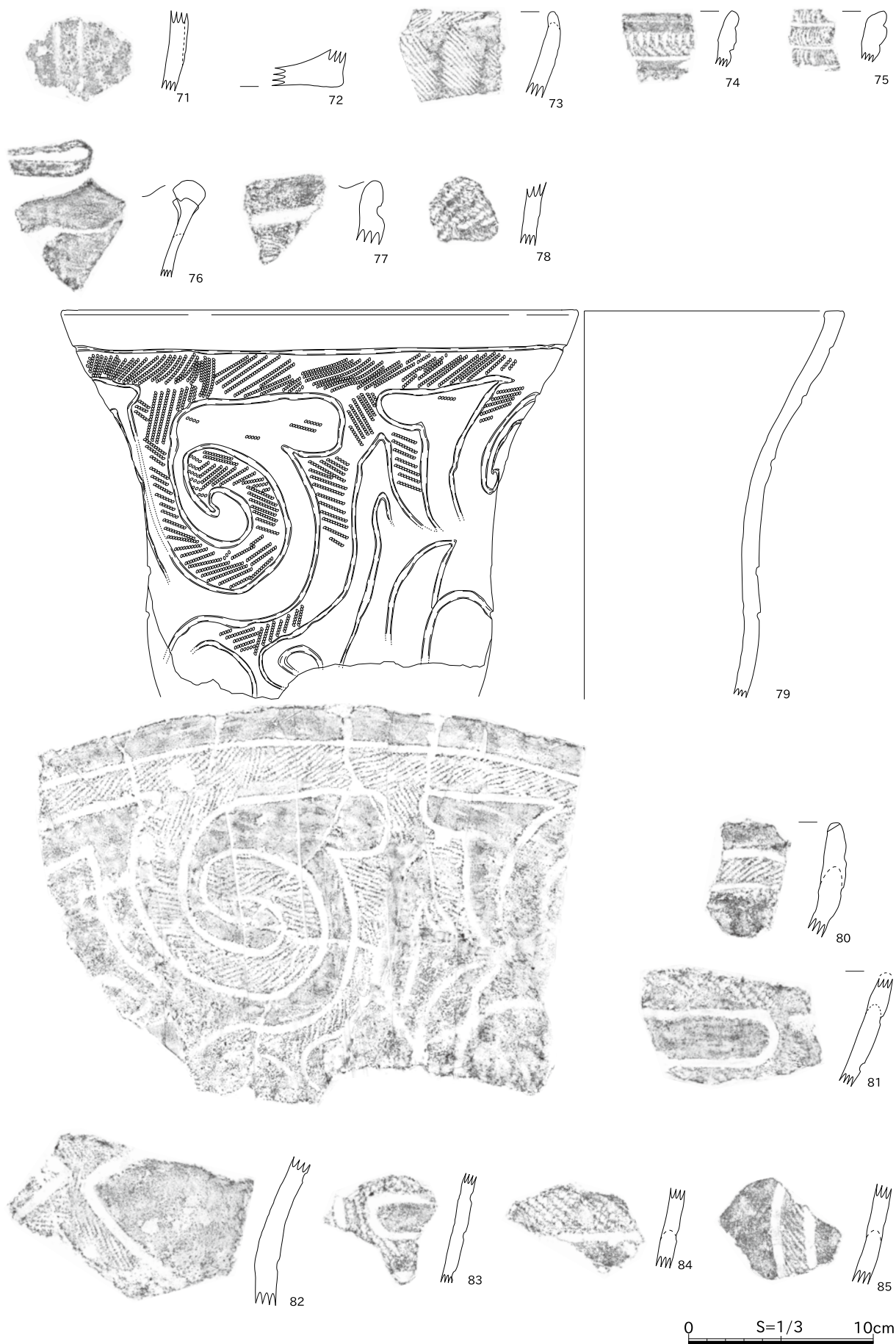
69は底部表面に網代痕が確認できる深鉢形土器底部破片で、底部の厚さは8mm、胴部の厚さは10mmとやや厚手になる。

70は、底部表面に網代痕のある深鉢形土器の底部破片である。底部の厚さは12mm、胴部の厚さは6～7mmとやや薄手の土器で、胎土の様子を考え合わせ、中期の東海系の土器だと認識する。

71はSP716出土の深鉢形土器胴部破片で、器面に粘土紐貼付けによる低い隆帯が縦位に貼付けられ



第73図 出土遺物実測図 (5)



第74図 出土遺物実測図 (6)

ている。底部近くまで隆帯が伸び、底部付近で隆帯が消えていく文様モチーフを描く。中期末葉の時期に観られる土器と同じである。

72もSP716出土の深鉢形土器底部破片である。状態の悪い土器で、器面もザラザラしていて脆い土器である。

73はSP1113出土の深鉢形土器口縁部破片で、胴部から口縁部にかけ真直ぐに立ち上がり、櫛描きの観られる口唇部が緩やかに内彎する。器面には4条の櫛目状条痕が施されており、縦位に磨り消されている。中期後葉の時期に比定される土器と観る。

74は、SP1132出土の深鉢形土器口縁部破片である。口唇部は、半截竹管内面を用いて断面を丸く仕上げている。口唇部に沿って縄文施文後、半截竹管外皮面を用いた爪形状の連続押し引き（キャタピラ）文が施される。その下位には、半截竹管内面を用いての平行沈線が認められる。器厚が5mmとかなり薄手の土器にも拘わらず、堅緻な焼成となっている。中期中葉の東海的な特徴のある土器である。

75は、SP1133出土の深鉢形土器口縁部破片の土器である。口唇部に沿って、少なくとも3段の半截竹管内側による連続爪型文が並走する。観察から2段目を施文後、1段目を施文している。なお、2段目と3段目の施文順は定かでない。器厚は6mmと薄手の土器で、中期初頭の時期に属す、東海的な特徴を示す土器である。

76は、SP1163出土の深鉢形土器口縁部破片の土器である。口唇部に厚みを持たせて、やや内彎させている。波状の突起を持つ土器で、口唇部の先端面にヘラ状工具による沈線が巡っている。内側面には横位にナデの痕がよく残っている。口縁部上部外側は無文で磨かれている。胴部にかけての器厚は5mmで、極めて薄い仕上がりとなっている。口縁の形状から後期中葉の時期の土器をイメージする。

77は、SP1174出土の深鉢形土器口縁部破片の土器である。無文の口唇部がやや厚みを持つ土器で、口縁に並行して半截竹管外側による沈線を施し、その下位に縄文施文が観られる。器厚は10mmでやや厚手の土器である。

78はSP1179出土の深鉢形土器胴部破片の土器で、器面全体に縄文を施す土器である。器厚が9mmで、胎土や土器の質感から東海的な土器である。

79～96は、すべてSP1205出土の土器である。79は一括出土の土器で、整理作業により器形が復元できた貴重な土器である。器形は、口縁直下を最大径にして、胴部上半で彎曲し、胴部中程で下部に向かって彎曲して膨らみ、底部に向かって最小径になる深鉢形土器である。器面に描かれた文様は、棒状工具もしくは半截竹管の外皮面を使用した沈線によって逆J字文と渦巻文のモチーフを描出している。口縁から少し下がった位置に沈線を一周させ、その下に逆J字文などのモチーフを展開している。沈線により描かれた文様の内側には、細い縄文を転がして丁寧に充填しており、この縄文施文した以外の部分は、ナデによって無文化させている。無文にすることによって、縄文を充填した部分を浮き上がらせて、全体を綺麗に仕上げている。なお、文様は胴下半部にまで沈線によって描き出しているが、沈線の内側を細い縄文で充填しているかどうかは判然としない。土器の形状、胎土の厚さ、文様のあり方等から、後期初頭の時期に属す土器である。

80は深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部は平坦面を呈し、半截竹管による沈線状の刻みが見られる。口唇部直下は無文帯で、その下は縄文施文後に半截竹管による平行沈線で口縁部文様帯を形成している。器厚は10mm前後と、やや厚手の土器である。

81は深鉢形土器の口縁部破片で、器面に縄文施文後、口縁部文様帯として半截竹管による楕円形の区画を描く。区画内は無文となっている。器厚は口唇部で10mm前後、胴部で7mmと比較的薄手に仕上げられている。口唇部は、薄く剥げ落ちている。後期初頭の特徴ある土器79と共伴していることを考

え合わせて、同時期の土器と捉えている。

82は深鉢形土器の胴部破片で、断面から外反する器形であることがわかる。器厚は10mm前後で、重量感のある土器である。器面は縄文を地文にして、文様モチーフがわからないが、半截竹管によって文様を描いている土器である。

83は深鉢形土器の胴部破片で、断面真直ぐに立ち上がる器形を呈す。器厚は、7mm前後と比較的薄い土器である。器面は地文に縄文が施され、そこに半截竹管による沈線で文様が描かれているが、文様のモチーフはよくわからない。雰囲気から後期初頭の時期の土器のように思われる。

84・85は共に深鉢形土器の胴部破片で、器厚8mm前後の土器である。縄文地文に半截竹管による沈線で文様を描く。文様モチーフはよくわからないが、曲線を描いている。後期初頭の時期の土器と捉えている。

86～91は深鉢形土器の胴部破片の土器で、縄文を地文にして磨り消しする土器群である。これらの内86・88・89には、半截竹管による沈線によって文様を描くが、破片が小さいことから文様のモチーフはよくわからない。器厚は86～89が10mm前後で、90・91が6mm前後と比較的薄い土器である。総合的に観て、後期初頭の時期に属するものと考えられる。

92は深鉢形土器の胴部破片で、断面から外反する胴部上半に位置する土器である。器面には、単位がはっきりしないが、櫛状工具による縦位の条痕が地文をなしている。器厚は8mm前後の土器で、器形から後期初頭の時期のものと認識している。

93～96は深鉢形土器の胴部下半部破片で、器面無文の土器である。器厚はいずれも7～8mmで、大きさの割に薄い土器である。なお、95・96は同一個体である。

97～100はSX03出土の土器群で、97は深鉢形土器の口縁部破片である。口縁に沿って沈線による横位長方形の区画が描かれ、内側にも横位沈線が描かれている。また区画内にはヘラ状工具により刺突が施される。また区画の横には、指頭圧痕のような圧痕が確認できる。器厚は8mmとやや薄手の土器である。

98は、深鉢形土器の胴部破片。縄文地文に縦位に半截竹管による2条の平行沈線により区画され、その内側に工具不明だが、縦位に連続する刺突が確認される。器厚は10mmとやや厚い土器である。文様のあり方、土器の胎土から中期後半期に属すると観る。

99・100は、いずれも比較的厚い深鉢形土器と思われる土器底部破片である。内面には、コゲ（炭化物）が付着しており、底面には作成時に付いた木葉痕が確認できる。

101・102・103・105は、SX05出土土器でいずれも深鉢形土器破片である。101は、口縁に横位の微隆帯が貼付けられている。微隆帯に沿って上部に沈線が施文され、下部には、細い棒状工具により縦位の沈線が施される。胎土は堅緻で、施文が良好に残っている。器厚は、7～8mmを測る。

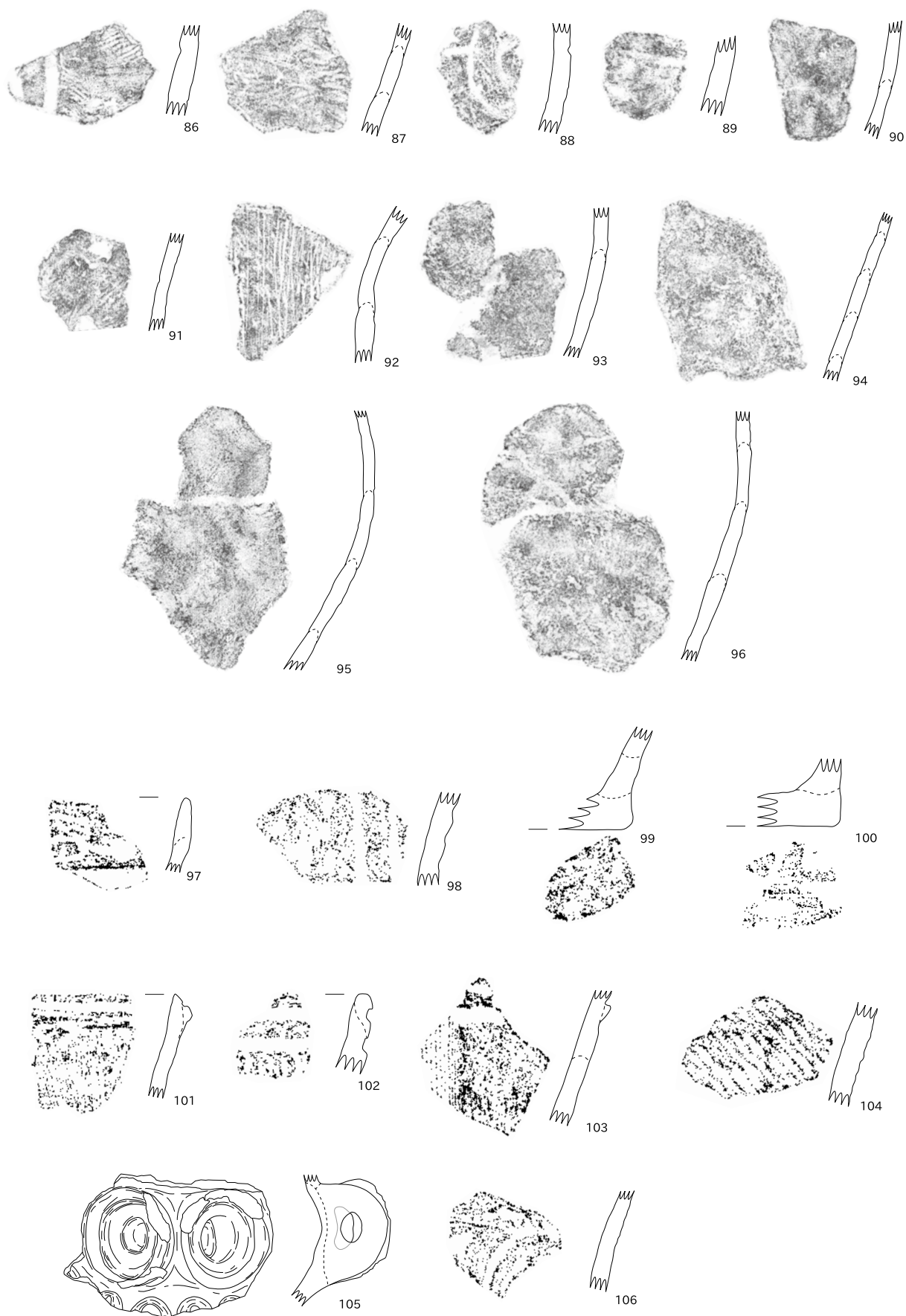
102は、口縁に沿って2条の沈線が横位に巡る。その下部に幅5mmの半截竹管による竹べら状の工具による縦位平行沈線が施文される。器厚は13mmと厚手の土器で、中期中葉に比定する。

103は口縁直下に沈線が巡り、わずかに隆起した隆帯が貼り付けられている。その下には、櫛状工具により真直ぐに描かれた条痕が確認できる。器厚は下部で10mm、上部で8mmを測る。

104は深鉢形土器の胴部破片で、縄文が施されている。器厚は14mmと厚く、中期後葉に比定する。

105は双環状把手の付く深鉢形土器の口縁部直下の胴部破片で、把手の下部に半截竹管外皮面による懸垂文が描かれる土器である。焼成は良好で、大きな把手を有するが、器厚8mm前後と意外と薄い土器である。中期後葉の特徴ある土器である。

106はSX13出土の土器で、深鉢形土器の胴部破片である。断面はやや外反する器形の土器で、竹管



0 S=1/3 10cm

第75図 出土遺物実測図 (7)

による沈線で文様を描いている。器厚は7～9mmで、やや薄い土器である。器形と文様から後期初頭か前半の時期に属す土器であると観る。

107はSX18出土の深鉢形土器で、住居跡内で形を留めた状態で出土したもので、整理作業時の復元により器形が判明した。波状口縁の深鉢形土器の口縁部から胴上部の大型土器の破片である。土器の胎土は黄褐色を呈しており、長石が含まれていることが特徴的で、非常によく焼き上がっており、堅緻に仕上がっている。器形は口縁が丸い波状口縁で、土器肩部から彎曲しながら立ち上がる。頸部でくびれて胴部に至り、胴部上半で膨らんで、そのまま胴下半部に向かう器形になると思われる。施文は、波状口縁と胴部を繋ぐくびれ部分に低い隆帯が一周し、口縁部にも低い隆帯によって横位に半円形もしくはX字状の図柄が横位に連続している。その後、口縁部から胴部にかけて7条の櫛状工具（断面四角）により縦方向に櫛描きしている。その後に頸部のくびれに沿うように7条の櫛状工具により、波状文が横位に描かれている。口縁部に高さの低い隆帯で連続する山形（もしくはX字状）の模様が施されていること、櫛描き状文が横でなく縦位方向に施されていること、胴上半部に連続する波状の



第76図 出土遺物実測図（8）

櫛描き文が施されていること等を勘案し、中期中葉の船元式の新しい時期に属する土器と判断する。

ii 遺構外出土土器（第77～81図）

次に遺構外出土土器について報告する。報告にあたっては、冒頭述べたように時代順に報告していく。

108～115は早期押型文土器で、全体的に胎土に小石など含有するものは無く、ザラザラしている。焼成具合は良好で、器面はしっかりと残っている。いずれも深鉢形土器の胴部破片で、器厚が7～8mmと薄い土器である。

108・109・110ははっきりとした市松文の格子目文で、111～114は、格子目が崩れ、菱形のように潰れた楕円形のような押し型になる。総じて、大川式から神宮寺式に属するものと考え。115は唯一山形文をした土器で、大川式の新しい段階の土器の口縁直下に観られるものを想定する。

116～125は、中期初頭の時期に属す土器を並べた。116は深鉢形土器の口縁部破片で、縄文施文の後に一部縄文を残しながら、口唇部に沿って半截竹管内面を使って蒲鉾状の平行沈線を施し、沈線に沿って三角形の印刻を施す。器厚5mmと薄い土器である。

117～120はいずれも深鉢形土器の胴部破片で、縄文地文に半截竹管内面による並行沈線を引き、そこに三角形の印刻を施す土器群である。器厚が5～6mm前後と薄い土器である。中期初頭の時期に比定する。

121は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁に沿って半截竹管内面を被せるようにして沈線を引く。器厚が6～7mmと比較的薄い土器である。

122は深鉢形土器の口縁部破片の土器で、口唇を平坦に仕上げ、その下に半截竹管内面を使って断面蒲鉾状の平行沈線を引く。口唇部には、半截竹管を用いた連続刻みが確認できる。器厚が5mmと非常に薄手の土器である。

123は、深鉢形土器の胴部下半部の土器破片である。器厚が9mmの土器で、器面は無文である。少し新し目の中期前葉の土器と認識する。

124は深鉢形土器の底部破片で、底部面に木葉痕と思われる痕跡がある。底部の厚さは6～7mmで、胴部立ち上がりで5mmと薄い土器である。状況から中期初頭の時期に比定される。

125は深鉢形土器の底部破片で、底部近くの胴部に半截竹管内面による断面蒲鉾状の平行沈線が引かれている。その上に同工具による印刻が観られる。胴部の器厚が5mmと薄く、器厚の薄さから中期初頭の時期に比定する。

126は、深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部位に半截竹管内面を押し引いて表出する連続爪形文を2段構えで設えた土器で、東海地方に観る中期初頭から前葉の土器に相当するものである。器厚が5mmと薄いことも特徴的である。

127も126土器のように、口縁部に半截竹管内面を押し引く連続爪形文を2段に設える土器で、連続する爪形の流れから波状口縁となるようである。器厚は7mmと薄手の土器である。属す時期は中期初頭から前葉の時期の土器と判断する。

128は、深鉢形土器の口縁部に近い部位の胴部破片。器厚が11mmと厚い土器で、表面に厚い粘土による隆帯が貼り付けられており、帯状に半截竹管内面による間隔の開く押し引きがあり、裏面には同じ半截竹管による並行沈線が矢羽状に描かれている。中期中葉に属するものと観ている。

129は深鉢形土器胴部上半部位の破片で、器厚が5mmと薄手の土器である。断面三角形の隆帯により文様帯が区画されているようで、下部の無文帯と縄文施文後に半截竹管による平行沈線が描かれる



第77図 出土遺物実測図 (9)

文様帯に分かれている。中期前葉から中葉の時期に属するものと思われる。

130は、深鉢形土器の口縁部直下の胴部破片。半截竹管内面を使用した横位の平行沈線の下に同じ半截竹管内面による縦位並行沈線が連続して描かれる。器厚は、上部5mm、下部6mmと薄手の土器である。中期中葉の時期に比定する。

131は、深鉢形土器の口縁部に近い部位の胴部破片と思われる。器厚が7mm前後とやや薄手の土器で、表面には二枚貝のようなもので、横位に押し引いた沈線が3条引かれている。中期中葉の時期を想定している。

132～136は、いわゆる中期中葉の北屋敷式に属する土器群と捉えているものである。

132～134はいずれも深鉢形土器の口縁部破片で、口縁直下に半截竹管外皮面を連続押し引きするキャタピラ文を施しており、口唇縁に同じ半截竹管による刻みを付している。器厚は、いずれも5mm程度と薄手の土器である。

135・136は深鉢形土器の胴部破片で、隆帯上に竹管状工具による刺突が観られる。

137～139は深鉢形土器の口縁部破片の土器で、口唇部端面に半截竹管状工具による刻みが付けられている。胴部にかけて櫛状、もしくは半截竹管による並行沈線が斜位に施文されている。器厚は、137が6mm、138・139が9mmである。

140・141は深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部を無文で丸く仕上げる土器である。口唇直下に半截竹管外皮面による横位の沈線を引き、その下に同じ半截竹管外皮面を押し引いた沈線を繰り返し施している。中期中葉の時期に比定される。

142は深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部に粘土を横位に貼付け肥厚させている。その上部に半截竹管外皮面による押し引き文が観られる。胴部にかけ、ヘラ状工具による縦位沈線を描く。器厚は8～9mmとやや厚めになっている。東海地方に観られる土器に類似する。中期中葉の時期に比定する。

143は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部直下に断面三角状の粘土貼付けがあり、その上下を櫛状工具による押付かナデが施されている。器厚は5mmと薄手である。東海的な中期中葉の土器に比定される。

144は深鉢形土器の胴部破片で、縄文地文に半截竹管状工具を押し当てて刺突と縦位に沈線を施した土器である。器厚9mmと比較的厚手である。中期後葉に属す可能性もある土器である。

145は深鉢形土器の口縁部破片の土器で、口唇部を丸く仕上げている。口縁部に隆帯を貼付けて文様帯を形成し、そこに撚りの細かい縄文を施している。隆帯の縁を半截竹管により調整して仕上げている。器厚は9mmを測る。中期中葉に比定される。

146～149は隆帯を横位に貼付け、その下位に櫛状工具による沈線が縦位に施されている土器群である。中期に比定するものと捉えている。

146は、深鉢形土器の口縁部に近い部位の胴部破片である。太く高さのある隆帯が横位に貼り付けられる土器で、隆帯の縁はナデにより調整仕上げしている。隆帯下部には、3条1単位の櫛描きが縦位に観られる。器厚が10mm前後とやや厚い土器である。

147は深鉢形土器の口縁部に近い部位の胴部破片で、隆帯下部に半截竹管による沈線を隆帯に沿って巡らした後、縦位に櫛状工具による櫛描きが施されている。

148は深鉢形土器の胴部破片で、胴部でも上方に位置する部位の土器である。隆帯を横位に貼り付けた後、隆帯上に半截竹管内面を押し引いて刻みを付けている。器厚は10mmの土器で、中期中葉に比定するものと捉えている。

149は深鉢形土器の口唇部付近の口縁部破片で、そこに断面三角形状に粘土が貼り付けられて、横

位隆帯を形作っている。

150は、深鉢形土器の口縁部に近い部位の胴部破片である。断面三角形状の横位隆帯が付けられ、その下に縄文が施文されている。中期中葉の時期に属するものと捉えている。

151は深鉢形土器の胴部破片で、器厚は9mmを測る。地文に細い縄文を施し、半截竹管によると思われる縦位の平行沈線を引き、沈線の間は擦り消している。

152は深鉢形土器の胴部下半の土器で、器厚11mmと厚さのある土器である。縄文施文後、幅11mmの半截竹管による平行沈線が縦位方向に引かれている。中期後半に位置づけている。

153・154はよく似た土器で、深鉢形土器の胴部下半の土器である。どちらも器厚10mm前後の土器で、表面に幅10mmの半截竹管による平行沈線が縦位に描かれている。この縦位平行沈線の両側は無文となっている。器厚は10mm前後の厚さのある土器である。

155は深鉢形土器の胴部破片で、縦位に低い隆帯を断面三角形状に貼り付けている。隆帯の左右は、無文で仕上げられている。器厚が11mm前後とやや厚手の土器である。中期後葉の時期のものと観ている。

156は深鉢形土器の胴部破片で、器面には隆帯が縦位に貼り付けられている。隆帯貼り付け後、ナデにより無文となっている。器厚10～11mmと厚手である。

157～164は深鉢形土器の胴部破片で、器面に櫛状工具による条線が直線状に描かれている土器である。器厚はそれぞれ、157が8mm、158が6～8mm、159が9～11mm、160が7mm、161が8mm前後、162が8mm、163が8～11mm、164が8～9mmと全体的にやや薄手の土器である。

165～167は深鉢形土器の胴部破片で、器面に櫛状工具による条線が曲線を持って描かれている土器である。それぞれの器厚は、165が6～7mm、166が6mm、167が7～8mmと全体的にやや薄手の土器である。

168は深鉢形土器の胴部破片で、貼り付けた隆帯によって区画する文様が特徴的な土器である。隆帯に沿って半截竹管による沈線が施されており、隆帯上には平行沈線が描かれている。172の土器と同じ時期のものと捉えている。

169は深鉢形土器の底部破片で、器厚が7mmと薄手である。底面にははっきりとした網代痕が認められる。底部から立ち上がる胴部の状況から、中期中葉の東海地方に観られる土器に対比している。

170も深鉢形土器の底部破片で、器厚が10～12mmを測る。

171も深鉢形土器の底部破片で、器厚が9mmを測る。底部から立ち上る胴部も薄い土器であることを考えると、中期中葉の東海地方の特徴を持つ土器と観ている。

172は深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、器厚が12～13mm程あって重量感のある厚手の土器である。口縁部に把手状になる盛り上がりの付く土器で、隆帯貼付けによる区画文様が付けられる。隆帯上には半截竹管による刺突刻みが付けられるのが特徴的で、隆帯区画の内側を区画に沿って半截竹管による沈線が添えられる。中期中葉後半の藤内式土器に観られる特徴を持っている。

173は深鉢形土器に付く把手と思われる部位破片であるが、接合状況は明確でない。破片の様子から器厚の厚い、中期中葉から後葉にかけての時期に属するものと観ている。

174も把手の付く深鉢形土器の把手部分破片である。中期後葉の時期に属するものと捉えている。

175～184は深鉢形土器で器面が無文の地文に、半截竹管による沈線が施されているものを挙げた。

175は口縁部破片で、口縁に沿って沈線が巡り、その下に逆U字状の沈線文が描かれる。器厚は薄く7mmを測る。

176は口縁部付近の土器で、口唇部が薄く剥離している。口縁部に粘土が隆帯状に貼り付けられ肥

厚している。隆帯に沿って半截竹管外皮面により沈線で縁取りしている。器厚は、7～8mmと薄手である。

177～184は深鉢形土器の胴部破片で、無文地文に半截竹管による沈線で文様を形成している。器厚は、177が11～13mmと厚手の土器で、178は12mm、179は7mm前後とやや薄い土器、180は6～7mmとやや薄手の土器、181は10～13mmとズッシリとした厚手の土器、182・183は8mmとやや薄手の土器、184は10mmでズッシリとした土器である。所属時期は幅があるが、中期中葉後半から中期後葉の時期のものと観る。

185・187～189は深鉢形土器の口縁部破片で、器面全面に縄文が施される土器である。

185は頸部から口縁にかけて内彎する器形の土器で、口唇部が平坦となる形状の土器である。実測図による口径は、外径約18cmで、内径約15cmを測る大きさで、器厚が8mmであることを考え合わせると小型の深鉢形土器である。中期後葉の時期に比定する。

187～189は胴部から真直ぐに立ち上がる土器で、口唇部が丸い形状の土器である。器厚は、187が12mm、188が11mm、189が11mmとどれもが厚手の土器になる。中期後葉に属する土器と思われる。

190・191・193・194は、深鉢形土器の口縁部破片であるが、口縁部直下が無文で、その下を半截竹管による沈線が巡り、以下を縄文施文する土器である。190・193はやや内彎する口縁部を持ち、191・194は単純に立ち上がる口縁部の形状である。器厚は、190が11mm、191が10mm、193が8mm、194が12mmを測る。中期後葉期から後期初頭の時期に属すと考える。

192は深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部にかけてやや内彎する。半截竹管により文様区画がなされ、縄文施文部と無文部に分けられる。器厚は、7mmとやや薄手の土器である。文様モチーフはよくわからないが、後期初頭の時期になるものと思われる。

186・195・196は、深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部を無文帯とする土器で、186・195がやや内彎する土器で、196は外側を観ると内彎するようだが、断面では真直ぐに立ち上がるように見える。器厚は、186が約7mmと薄手の土器で、195が10mm、196が12mmと厚手の土器である。いずれも中期後葉から後期初頭の時期に属するものと判断する。

197～200は、深鉢形土器の胴部破片である。縄文を地文とし、半截竹管外側を使用した沈線により文様を施す一群である。197は口縁部文様帯の一部で、器厚が7～8mmとやや薄手の土器である。198・199は頸部付近の破片で、器厚は約10mmとやや厚手である。200は破片上部に横位の縄文、破片下部に斜位の縄文を施したのち、半截竹管外側で縦位の沈線を施す。堅緻な焼成で、器厚11mm～12mmと厚手である。中期後葉に属する土器と考える。

201～204は深鉢形土器の胴部破片で、結節縄文を特徴とする土器である。201・202は、縦位の結節縄文による施文する。201は器厚10mm～13と厚手で、結節縄文施文後、磨り消されている。202は、器厚約11mmを測る。203・204は結節縄文による施文に加えて、隆帯または半截竹管を使用した沈線による区画を有する土器である。203は頸部から胴上部の破片で、逆U字の区画内部に2条の結節縄文を施す。器厚は約8mmと、他3個体に比して薄手である。204は、半截竹管外側を使用した縦位の沈線により区画する。区画内部は縄文を地文とし、結節縄文を縦位に施している。器厚12mmと厚手である。いずれも中期後葉に比定される。

205～211は深鉢形土器の胴部破片で、縄文の地文のみを確認した土器である。205は破片上部及び下部で器厚9mmを測るが、中央部で器厚12mmと肥厚している。不規則に縄文が施文され、縄文施文後にナデにより調整されている。206～210は縄文を斜位に施文しており、いずれも器厚10mm前後を測るが、208の器厚は下部で9mm、上部で6mmと薄手である。211は縦位に縄文が施文されるもので、器厚



第78図 出土遺物実測図 (10)

7～8mmと薄手である。

212～216は深鉢形土器の胴部破片で、いずれも胴部下半、無文の土器である。212・213・214は直線的な断面形を有しており、器厚は212が9mm、213が11mm、214は下部が8mm、上部が10mmを測る。215・216は上部に向けて内彎する土器で、器厚は215が14mm、216が下部8mm、上部10mmを測る。

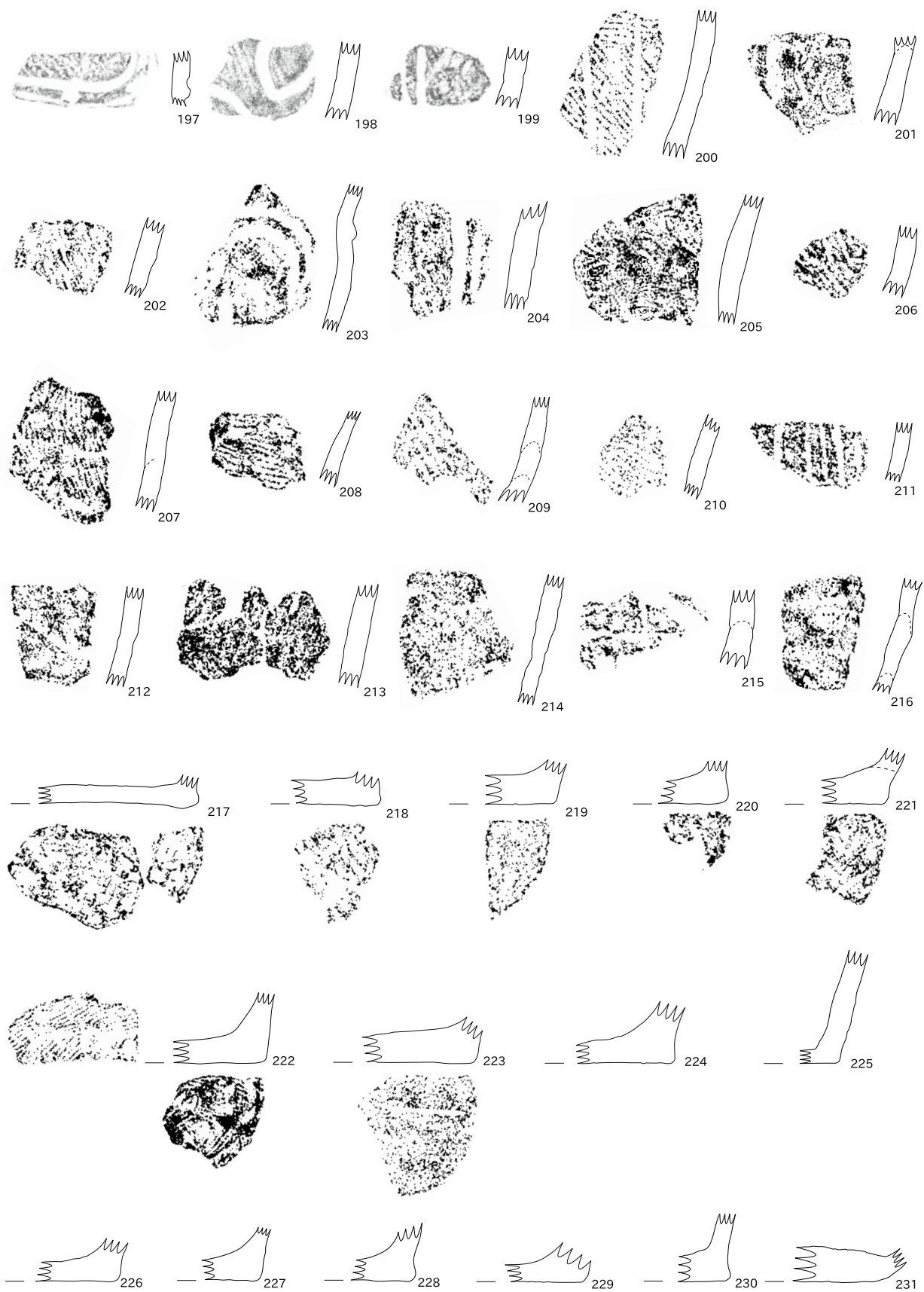
217～231は深鉢形土器の底部破片で、底部圧痕の種類ごとに記述する。217～221は、底部に網代痕を持つものである。217・218・219は、2本超え2本潜り1本送りの圧痕を持つ。また、底部の縁が肥厚することで、やや上げ底気味となっており、側面は垂直に立ち上がる。218・219は平坦な底部で、側面は垂直に立ち上がる。器厚は217が底部9mm、胴部9mm、218が底部12mm、219が底部16mm、胴部10mmを測る。220・221は網代痕を持つが、痕跡は摩滅により不鮮明である。220は側面が垂直に立ち上がり、221は外に向けて立ち上がる。器厚は220が底部12mm、胴部10mm、221が底部13mm、胴部10mmを測る。222は底部に撚りの細かい縄文の圧痕が見られる土器で、胴部にも同一の施文具による縄文が施される。立ち上がりは垂直で、丁寧な成形である。器厚は底面で11.5mm、胴部で8.5mmである。223は、底部に葉脈圧痕を持つ土器である。側面は底部から外に広がるように立ち上がると思われ、器厚は底部15mmを測る。224～231は、底面に圧痕を持たない深鉢形土器底部破片である。224は器厚が底部11mm、胴部14mmを測り、丁寧な成形である。225は器厚が底部で6mm、胴部が10mmと、胴部は厚手の土器であるが、底部はごく薄手である。226～230はいずれも側面が垂直に立ち上がる土器である。器厚は226が底部10mm、胴部11mm、227が胴部底部10mm、胴部8mm、228が底部10mm、胴部10mm、229が9mm、230が底部13mm、胴部8mmを測る、230は外側立ち上がり部分と、内側底面部分に指頭による成形時の圧痕が確認できる。231は立ち上がりが外に開く器形で、器厚は底部中央付近で18mm、底部立ち上がり付近で12mm、胴部8mmを測る。

232～251は、縄文の地文に半截竹管により施文する土器の一群である。190～194で報告した土器と施文の手法が類似するが、平行する沈線文によってモチーフを描く点で分類した。後期前葉に属する土器と考える。

232～236は、深鉢形土器口縁部破片である。232・233は同一個体で、口唇部に縄文を施し、横位沈線文が2条施される。233では縦位の沈線が確認でき、縦位の帯縄文を構成すると考えられる。234は波状口縁を呈し、口縁に平行して、帯縄文が施される。235は器厚6mmと薄手で、小型の深鉢形土器と考えられる。口唇部は丸く仕上げ、外に開く。236は摩滅が激しいが、口唇部に平行して2条の沈線文が施される。237～251は深鉢形土器、胴部破片である。237は、横位の沈線の下部に縄文を施す。238は口縁部付近の破片で、閉じた沈線により帯状の区画を施す。239は小破片であるが、縄文地文に横位2条の平行沈線文が施される。240は外反する胴部破片で、屈曲した帯縄文によりモチーフを描く。241は施文後ナデにより調整され、肉眼で確認できる施文は僅かである。暗褐色の色調と、僅かに砂粒子を含む胎土が236・243と似ることから、この一群とした。242は2条の沈線文が弧状に施されるもので、堅緻な焼成である。243は、破片中央で横位2条の沈線文が閉じ、そこから下に縦位の平行沈線文が施される。

244～246は、いずれも弧状の沈線文を持つ小破片である。247・248は縦位の沈線文が確認できるので、無文帯を逆U字状に閉じていることから、上段に横位のモチーフがあることが想像される。249は、横位の沈線文を破片中央で閉じる。250・251は胴下半部の破片で、251は、蛇行した沈線でモチーフを描く。

252～255は、無文の深鉢形土器胴部破片である。明確な時期比定は困難であるが、暗褐色の色調、金及び黒雲母の微粒子と砂粒子をごくわずかに含む胎土、直線的ないし胴部にわずかにくびれを持つ



0 S=1/3 10cm

第99図 出土遺物実測図 (11)

器形から、一つの群として報告する。252は直線的な器形であるが、上部がわずかに外に開く。器厚は8mmを測る。253は胴部にくびれを持つ器形で、器厚12mmを測る、やや厚手の土器である。254・255は直線的な器形で、器厚は254が10mm、255が8mmを測る。

256～259は半截竹管による横位の沈線により、帯縄文を施すものを1群とした。232～251で報告した群に比して、横位の施文のみが確認されること、区画の幅が広いことにより分類した。後期前葉～中葉に属する土器である。

256・257は深鉢形土器口縁部破片で、口唇部に無文帯をもち、下部に横位の沈線文と縄文を施す土器である。256は口唇部を平坦に仕上げており、器厚は口唇部で10mm、胴部で7mmを測る。257は口唇部を丸く仕上げており、器厚は11mmを測る。258・259は、深鉢型土器胴部破片である。258は外反する器形で、器厚は8mmを測る。259は、微細片で器形は不明である。器厚は10mmを測る。

260～263は、前述したいずれの群にも属さないものを個別に報告する。260は、波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。口縁に沿って半截竹管により沈線を施し、その下に弧状の沈線を施す。口唇部は内彎し、器厚は口唇部で12mm、胴部で6mmを測る。

261は、波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。半截竹管による横位の沈線を施し、その下に横位から縦位に屈曲する沈線が施される。口唇部は丸く仕上げられ、よく磨かれている。器厚は口唇部で13mm、胴部で7mmを測る。

262は浅鉢形土器の可能性が考えられる、無文の口縁部破片である。口唇部の内側と外側は膨らみをもち、丸く仕上げられている。器厚は口唇部で約14mm、胴部で6mmである。

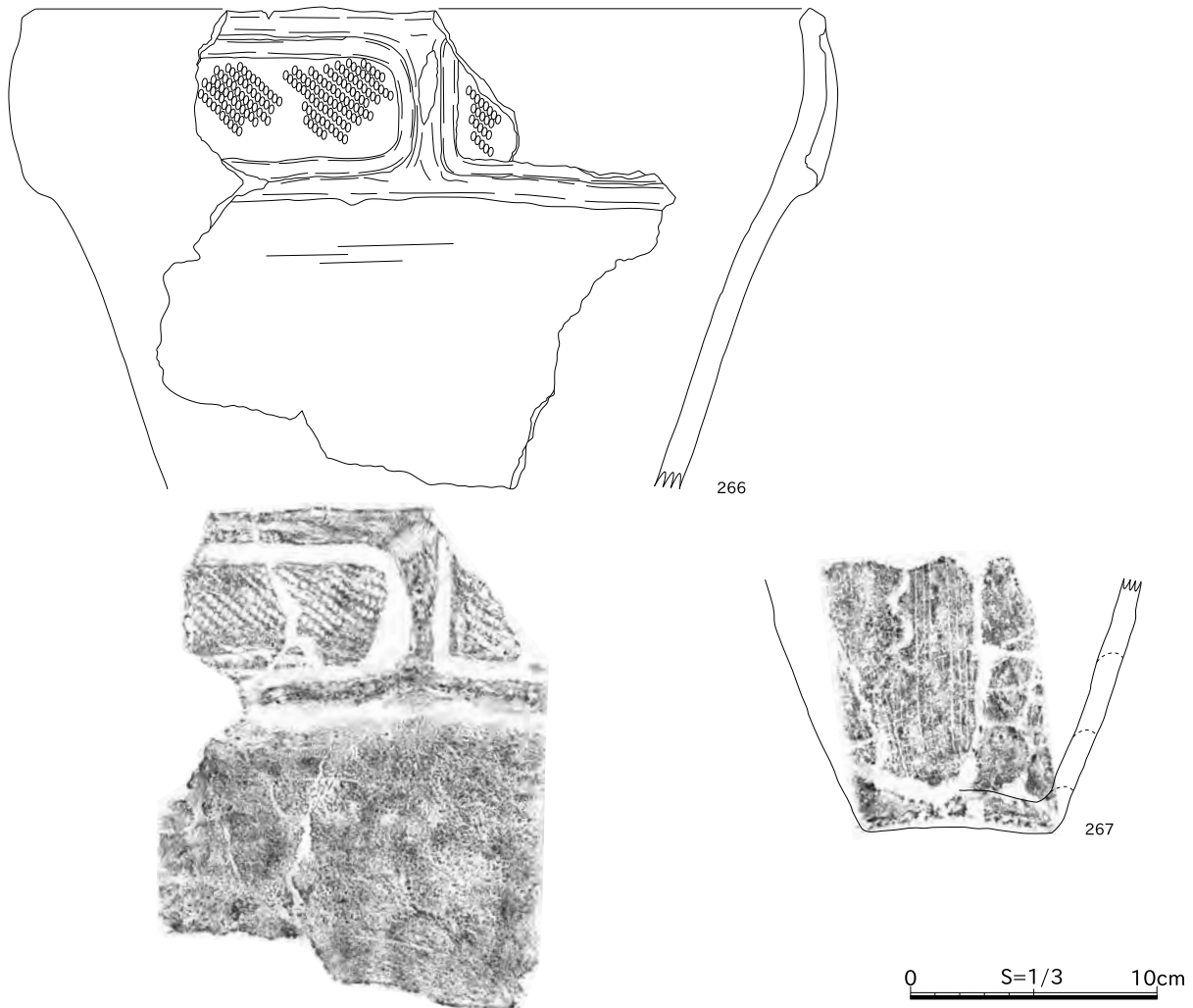
263も262と同様に浅鉢形土器の可能性が考えられる、無文の口縁部破片である。口唇部の形状は断面三角形を呈し、丁寧にナデられている。器厚は、口唇部で13mm、胴部で6mmを測る。264・265は深鉢形土器の底部破片で、底面に敷物による圧痕が無く、上げ底状を呈する土器である。いずれも胴部が外に開く器形である。264は胴部が磨かれており、器厚は底部、胴部ともに8mmを測る。265は底部径65mmを測る土器で、胴部に縄文地文が残る。器厚は底部中央で11mm、胴部で7mmを測る。

266は確認調査によって出土した深鉢形土器で、口縁部から胴部にかけての大きな土器破片である。実測図上により、口径は内径で約30cm、外径で約33cmを測る。胎土は赤褐色で、長石・石英・金雲母が少量含まれ、焼成も良く堅く締まりのある焼き上がりとなっている。口縁部文様帯を隆帯により方形と楕円形により形成している。区画内には隆帯に沿って半截竹管による沈線が巡っており、その内側には縄文が施文されている。口縁部文様帯下部の頸部から胴部にかけては無文により整えられている。口唇部は無文で、端部を断面三角形に整えられているのが特徴的である。中期後葉に比定される土器である。

267も確認調査で出土した、深鉢形土器の胴下半から底部にかけての器形のわかる土器破片である。胴部の器厚が7～10mmで、底部が15mmと厚くなる。櫛状工具による平行沈線が縦位に描かれ、シダ状の蛇行する沈線が垂下する。文様から中期後葉の時期に比定される土器である。



第80図 出土遺物実測図 (12)



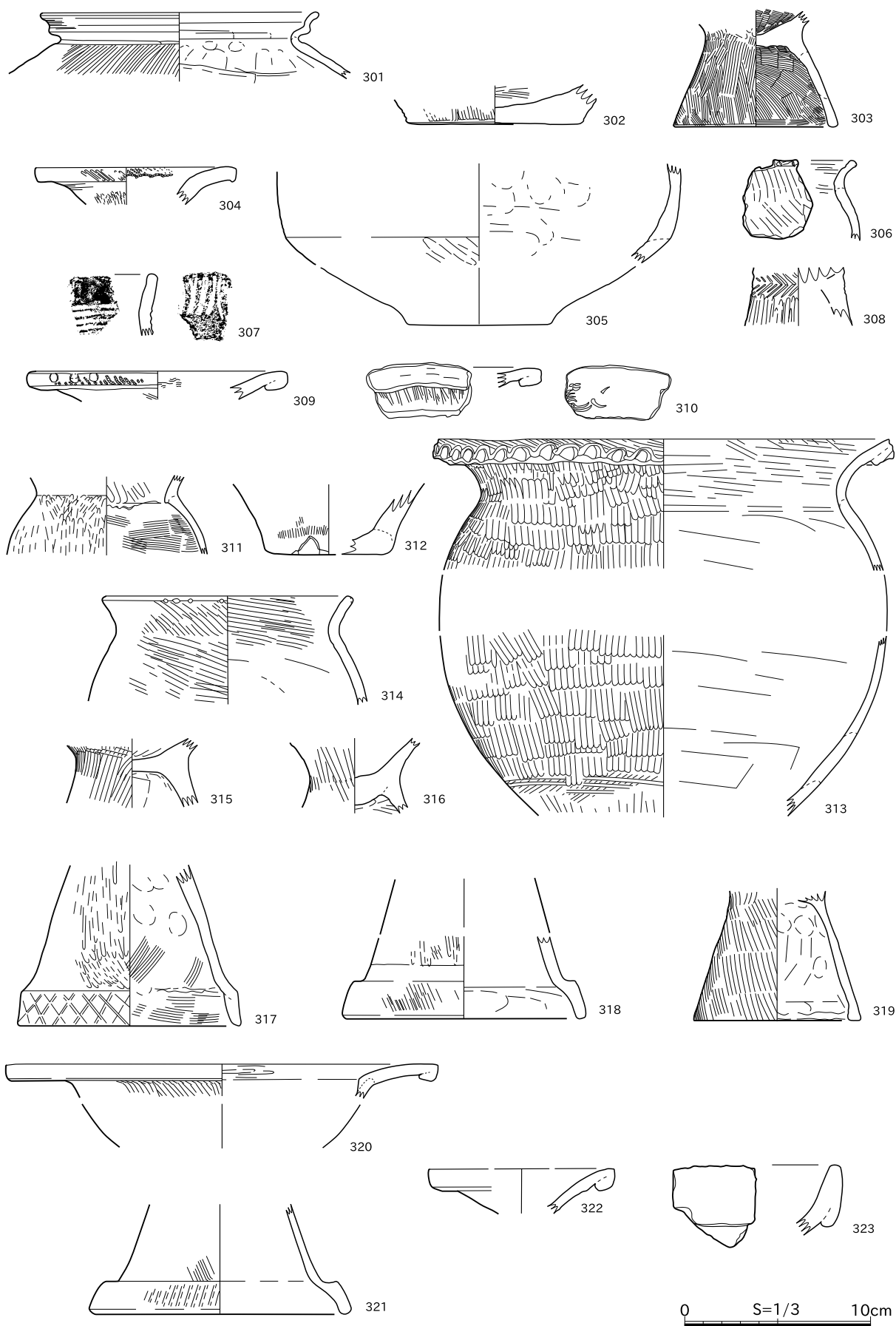
第81図 出土遺物実測図 (13)

③ 弥生土器・古式土師器

301～303は、SB02出土である。301はS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部第2段が弱く外反し端部も肥厚することからC類の古段階に比定できる。302は壺の底部片で、内外面ともにハケ目が確認できる。303は台付甕の脚台部片で、内外面ともに細かいハケが施される。

304～308は、SB03出土である。304は折返口縁壺の口縁部片で、内外面ともに摩滅が著しいが、口縁端部には縄文、頸部にはハケ目とミガキが確認できる。内面には結節縄文が確認できる。305は壺の胴部片である。胴下半に最大径をもち、そこに稜線がある。外面にはミガキ、内面にはナデが確認できる。306は台付甕の口縁部片で、口縁端部に細かいキザミ、頸部には縦位のハケが施される。307は甕の口縁部片で、外面には横位の条痕、外面には縦位の沈線が施される。308は高坏の接合部片で、櫛刺突羽状とミガキが施される。

309～318は、SB04出土である。309・310は複合口縁壺の口縁部片で、309の口縁端部外面には縄文が施され、その上に円形付文の痕跡が確認できる。内面には、櫛描波状文が認められる。310の外面折返下にはハケ、口縁内面には櫛描扇文が施される。311は小型丸底土器の頸部から胴部片で、外面にはミガキ、内面頸部ではミガキ、胴部にはハケが施される。312は壺の底部片で、比較的急角度で立ち上がり、外面にハケが施される。313は台付甕で胴部の一部と底部から脚台部を欠損する。口縁



第82図 出土遺物実測図 (14)

端部の折返しは顕著で、ハケの後にキザミを入念に施す。外面の頸部から胴部では縦位のハケが施されるが、その工具はハケ端部が幅広で丸味を帯びたものと考えられ、ミガキと見紛うばかりに丁寧に施されている。内面の口縁ではハケ、胴部では工具によるナデが施される。**314**は台付甕の口縁から頸部片で、口縁端部にはキザミが確認できる。外面にはハケ、口縁部内面にハケ、胴部内面にはナデが施される。**315・316**は台付甕の底部片で、底部の立ち上がりが**315**に比し**316**の方が急である。どちらも外面にはハケ、脚台部内面にはナデが施される。**317・318**は高坏の脚部片で、どちらも脚端部が折返される。**317**は外面の折返し部には櫛描格子文を施し、脚部は比較的丁寧にミガキを施している。内面の下方はハケ、上方はナデが施され指頭が確認できる。**318**の外面はハケ、内面はナデが施される。

319～321は、SB05出土である。**319**は台付甕の脚端部片で、端部がやや内側に肥厚する。外面には斜位のハケ、内面にはナデが施される。**320**は高坏の口縁部片で、鏝状を呈し端部が折返される。全体に摩滅気味であるが、外面の口縁折返し下部と内面口縁部にはミガキが確認できる。**321**は高坏の脚部片で端部が折返される。摩滅が著しいが、外面の折返し部に幅広のハケ、脚部にはハケが確認できる。

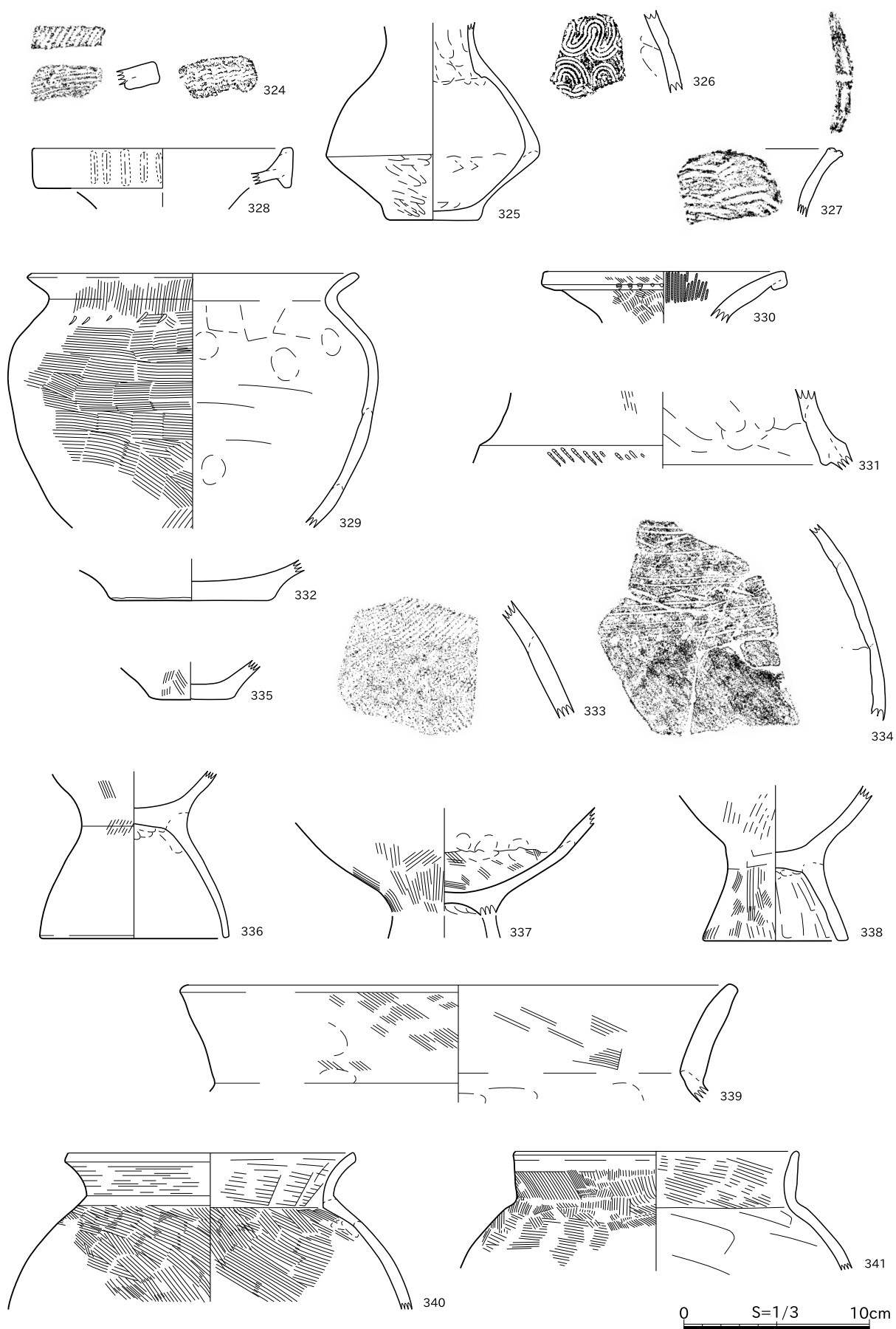
322～327は、SB06出土である。**322～324**は、折返口縁壺の口縁部片である。**323**の折返し部の幅は、広い。**324**は口縁端部に縄文、内面に櫛描波状文、外面にハケが施される。**325**は小型壺で、口縁部を欠損する。平底から一旦屈曲し逆ハの字に立ち上がり、胴下半で屈曲しそこに明瞭な陵を有しやや内彎して頸部に至る。全体に摩滅気味であるが、胴下半外面にミガキ、頸部内面と底部付近にナデが認められる。**326**は壺の胴部片で、外面に櫛描流水文が施され、内面にナデが認められる。**327**は甕の口縁端部で、端部には縦位と横位の沈線が施され、外面には羽状条痕が施される。

329はSB07出土の甕で、底部を欠損する。肩部が張りそこに最大径を有す。口縁部がくの字に屈曲し端部はわずかに面取りされるが、キザミは施されない。外面では頸部に縦位のハケ、胴部には横位のハケが施される。肩部に1cm程のキザミが施されるが、等間隔ではない。内面では口縁部に横ナデ、胴部に工具によるナデ、指頭も確認できる。近江もしくは伊勢方面の外来系土器であろう。

330～332は、SB08出土である。**330**は折返口縁壺の口縁部で、外面の端部折返しが面取りされ、その上部にハケ、下部に細かいキザミが施される。頸部にはハケが施される。内面には縄文が施される。**331**は壺の頸部から肩部片で、肩部には断面三角形の突帯を有し、そこに櫛刺突羽状文が施される。頸部にハケ目が確認できる。内面にはナデが施される。**332**は壺の底部片である。

333～338は、SB09出土である。**333**は壺の胴部片で、上部に単節LR、無文域を挟んで下部に単節RLの縄文が施される。**334**は壺の胴部片で、多条（複数）の横線文とその横線文の間に山形文が施される。**336～338**は台付甕の底部と脚台部片である。**336**は底部から内彎して脚端部に至る。摩滅が著しいが、外面にはハケ、脚台部内面にはナデが確認できる。**337**は脚台部を欠損、甕内面にはハケが施される。**338**は底部から直線的に脚端部に至るもので、摩滅気味であるが、外面にはハケ、脚台部内面にはナデが施される。

339～350は、SB10出土である。**339～341**は、甕の口縁から肩部片である。**339**は頸部から直線的に開きながら立ち上がり、口縁端部がわずかに面取りされる。内外面ともハケが施されるが、ナデ消しされる。**340**は頸部がくの字に屈曲し、外反しながら立ち上がり口縁端部が面取りされる。外面では口縁が横ナデされ、胴部では比較的細かいハケが施される。内面では口縁部で工具による横ナデ、胴部で細かいハケが施される。**341**は、頸部からほぼ垂直に口縁部が立ち上がる。外面の口縁端部付近が横ナデされる他は、縦位と横位のハケが施される。内面では口縁部でハケ、胴部では工具によるナデが施される。**342**は複合口縁壺の口縁部から肩部片で、頸部の断面三角形の突帯からくの字に屈曲し



第83図 出土遺物実測図 (15)

て口縁に至り、折返し下部で粘土を折返して複合部を形成している。口縁部に3個単位の棒状付文が口縁周に4カ所貼付される。外面では頸部が幅広の工具でミガキが施され、突帯下では多条（複数）の横線文が施される。内面では口縁部にヘラ描きの羽状文が口縁部の途中に設けられた断面三角形の突部まで施され、それ以下ではナデが施される。装飾性を有したいいわゆるパレス壺である。**343**は壺の胴部片で、中位以上を欠損する。比較的小さな底部から緩やかに立ち上がり、胴下半に最大径をもつ。外面にはミガキが施され、一部にミガキ調整前のハケ目が確認できる。内面では斜位のハケ、底部周辺ではナデが施される。**344**は小型壺で、頸部以上を欠損する。底部から外反して立ち上がり胴下半に最大径を有し屈曲、そこから内彎して頸部に至る。摩滅が著しいが、外面にはハケが確認できる。**345**は壺の底部片で、底部が窪む。内外面ともナデが施される。**346**は台付甕で、胴部から口縁部の一部を欠損する。胴上半に最大径をもち、丸味を帯びた頸部から直線的に口縁部が広がる。脚台部はやや内彎して端部に至る。外面では口縁部に縦位のハケが施され、一部ナデ消しされる。胴部から脚台部にかけては、斜位のハケが施される。内面では口縁部で横位のハケ、胴部は工具によるナデが施される。脚台部では工具によるナデが施されるが、ハケ目状の工具痕が目立つ。**347**は高坏で、脚下部を欠損する。坏底部からやや内彎気味に立ち上がり、脚部三方に円窓を有す。内画面ともにミガキが施され、内面ではミガキ調整前のハケ目が確認できる。結合部で2条の横線、脚部では縦位のミガキが施される。**348**も高坏の脚部片で、内外面ともナデが施されるが、外面には工具よる短い複数の沈線が見られる。**349**は器台の脚部片で、円窓が見られる。**350**は小型鉢の完形品で、小さな底部から内彎して立ち上がり、口縁部でわずかに開き、そこを最大径とする。外面は全体にハケが施されるが、口縁部では横ナデされる。内面では口縁部で横ナデ、胴部では工具によるナデが施される。

351は、SB14出土の壺の肩部片である。外面では上から櫛刺突羽状文、S字状結節文が施される。内面にはナデが施され、指頭痕も確認できる。

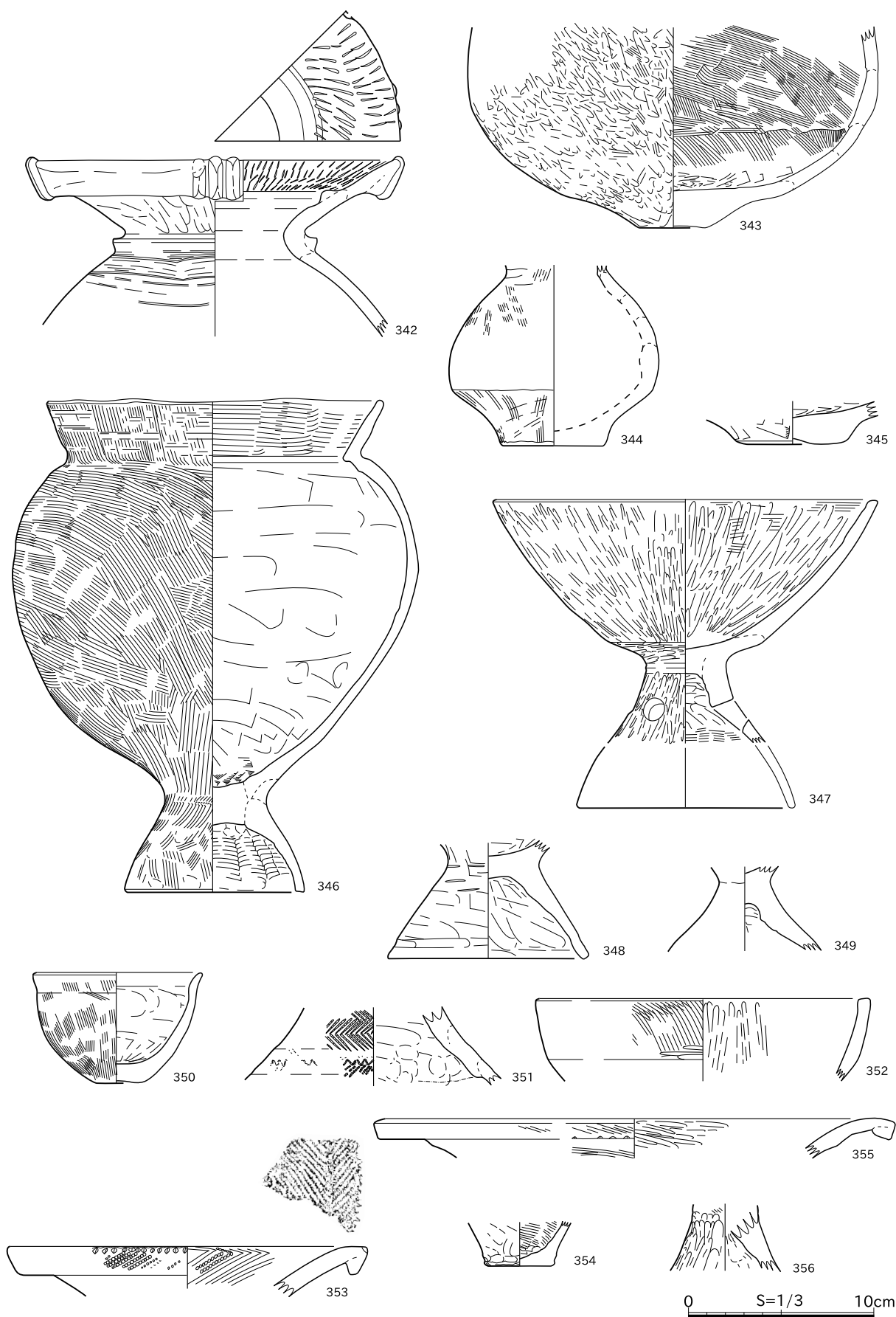
325はSB15出土の鉢の口縁部片で、胴部から口縁部に向け内彎気味に開いて立ち上がる。全体に摩滅しているが、外面にはハケとミガキ、内面は縦位のミガキが認められる。

353～356は、SB16出土である。**353**は折返口縁壺の口縁部片で、折返し下端が比較的大きく垂れ、面取りされた端部には細かいキザミと縄文が施される。内面では縄文が羽状に施される。**354**は小型壺の底部片で、外面はナデ、内面はハケと底部でナデが施される。**335**は高坏の口縁部片で、齔状を成さないが端部で大きく外反し端部を折返す。外面では、面取りされた端部にハケと下端に細かいキザミが施される。内面にミガキが施される。**356**は高坏の脚部片で、外面はミガキ、内面はナデが施される。

357は、F-8区出土（SB17であったが、遺構としては不明瞭で欠番）の折返口縁壺の口縁部片である。

358～363は、SB18出土である。**358**は壺の口縁部片で、頸部から外反しながら口縁に至る。摩滅が著しいが、内外面にハケ目が確認できる。**359**は折返口縁壺の口縁部片で、外面は面取りされ、ハケ調整後に明瞭なキザミが施される。内面には、S字状結節縄文が施される。**360・361**は壺の肩部で、**360**は櫛刺突羽状文の上に4個単位の円形付文が貼付される。**361**も櫛刺突羽状文の上に円形付文が貼付される。**362**は壺の胴部片で、大型の壺と想定される。外面には横位と縦位のハケ、内面には縦位のハケが施される。**363**は壺の底部片で、摩滅しているが、外面にはわずかにハケ目が確認できる。

364～378は、SB19出土である。**364**は折返口縁壺の口縁部片で、口縁部折返しを面取りし、さらにその下を屈曲させ面取りしている。外面では上の面取り部に縄文を施し、内面では外側から単節LRの縄文、その内側に結節縄文を施している。**365**は複合口縁壺の口縁部片で、大きく開いて立ち上がり、下部で粘土を折返して複合部を形成している。摩滅が著しいが、外面にはS字状結節縄文が施される。



第84図 出土遺物実測図 (16)

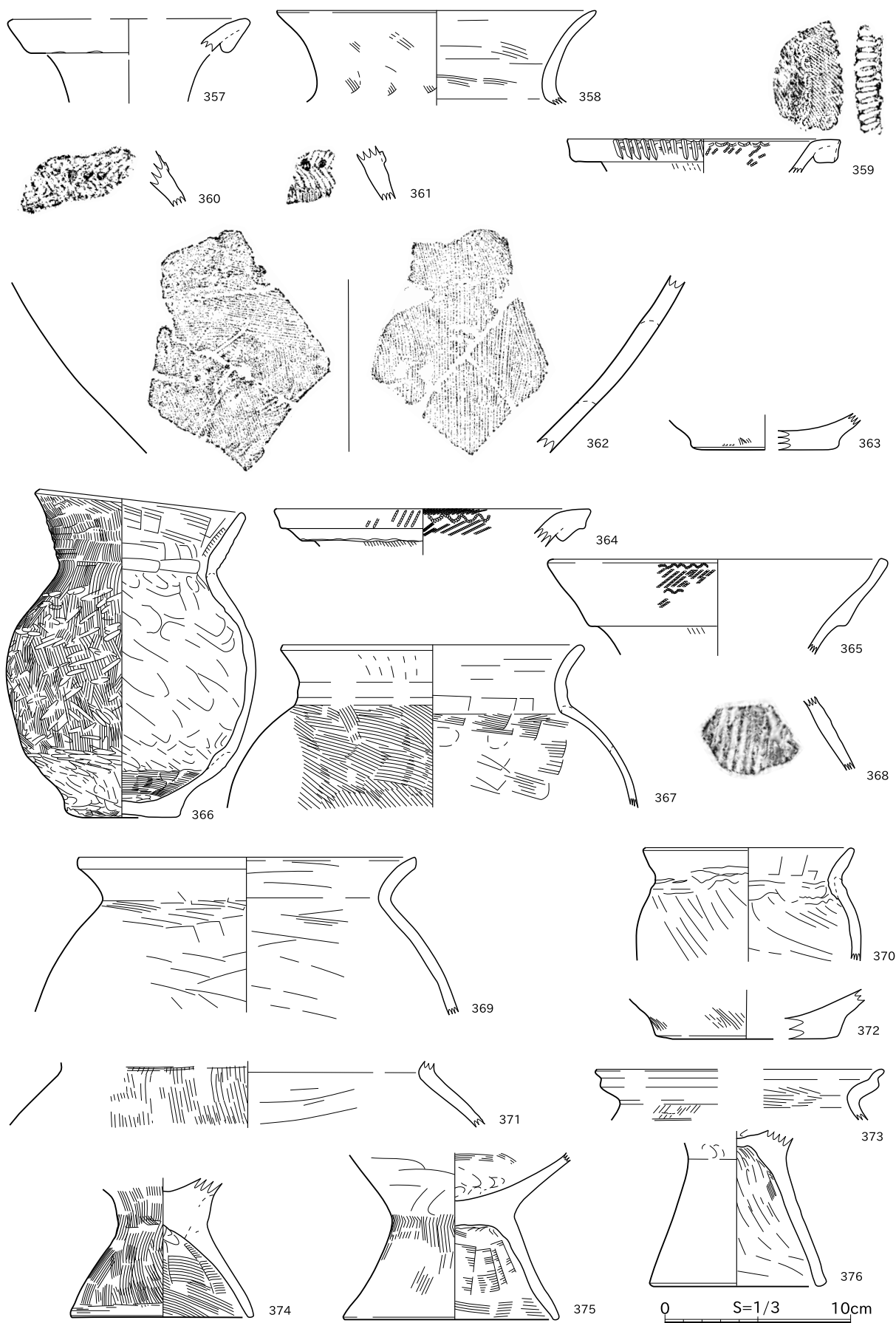
366は小型平底壺（甕）の完形品である。胴中位に最大径をもち、頸部で屈曲後、口縁部が直線的に開く。口縁部は端部は面取りされるが、著しく歪んでいる。外面では口縁部から肩部にかけ縦位のハケ、胴部ではハケ→ミガキの順で施されるが、圧倒的にハケ目が残る。底部周辺では丁寧にミガキが施される。内面では口縁部で横ナデ、頸部から胴部にかけてはナデ、底部周辺でハケが施される。367は甕の口縁部から胴部片で、胴中位に最大径をもち、頸部から一旦垂直に短く立ち上がりさらに外反しながら口縁部に至る。口縁部外面は横ナデされるが、ナデ調整前のハケ目を確認できる。胴部は比較的丁寧にハケが施される。口縁部内面は横ナデ、胴部はナデが施されるが、工具痕が目立つ。368は器種不明の条痕系土器で、外面には縦位の条痕が施される。369は甕の口縁部から胴部片で、胴中位に最大径をもち、頸部で屈曲後、やや外反しながら口縁部に至る。口縁端部は面取りされる。摩滅気味であるが、胴部外面ではナデが施され、ハケ目が残ることからナデ消しされている。内面は、口縁部で横ナデ、胴部でもナデが施される。370は小型甕で、胴下半を欠損する。胴中位に最大径をもつが、口径も広い。頸部に粘土の輪積み跡が残り、内画面ともナデが施される。371は甕の肩部片で、外面には縦位のハケ、内面はナデが施される。372は壺の底部片で、外面にはハケ目を確認できる。373はS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部第2段が小さく、胎土からも在地産による模倣品と考えられる。374～378は台付甕の脚台部片である。374は内彎する脚台部片で、内外面ともハケが施される。375はやや外反する脚台部片で、外面では底部にハケ、脚台部にハケが施される。内面では底部にハケとナデ、脚台部にハケが施される。376は直線的な脚台部片で、外面は摩滅しているが、内面はハケが認められる。377・378は脚台端部を欠き、外面にはハケが認められる。

379はSB20出土の壺の底部片で、摩滅しており調整痕は確認できない。

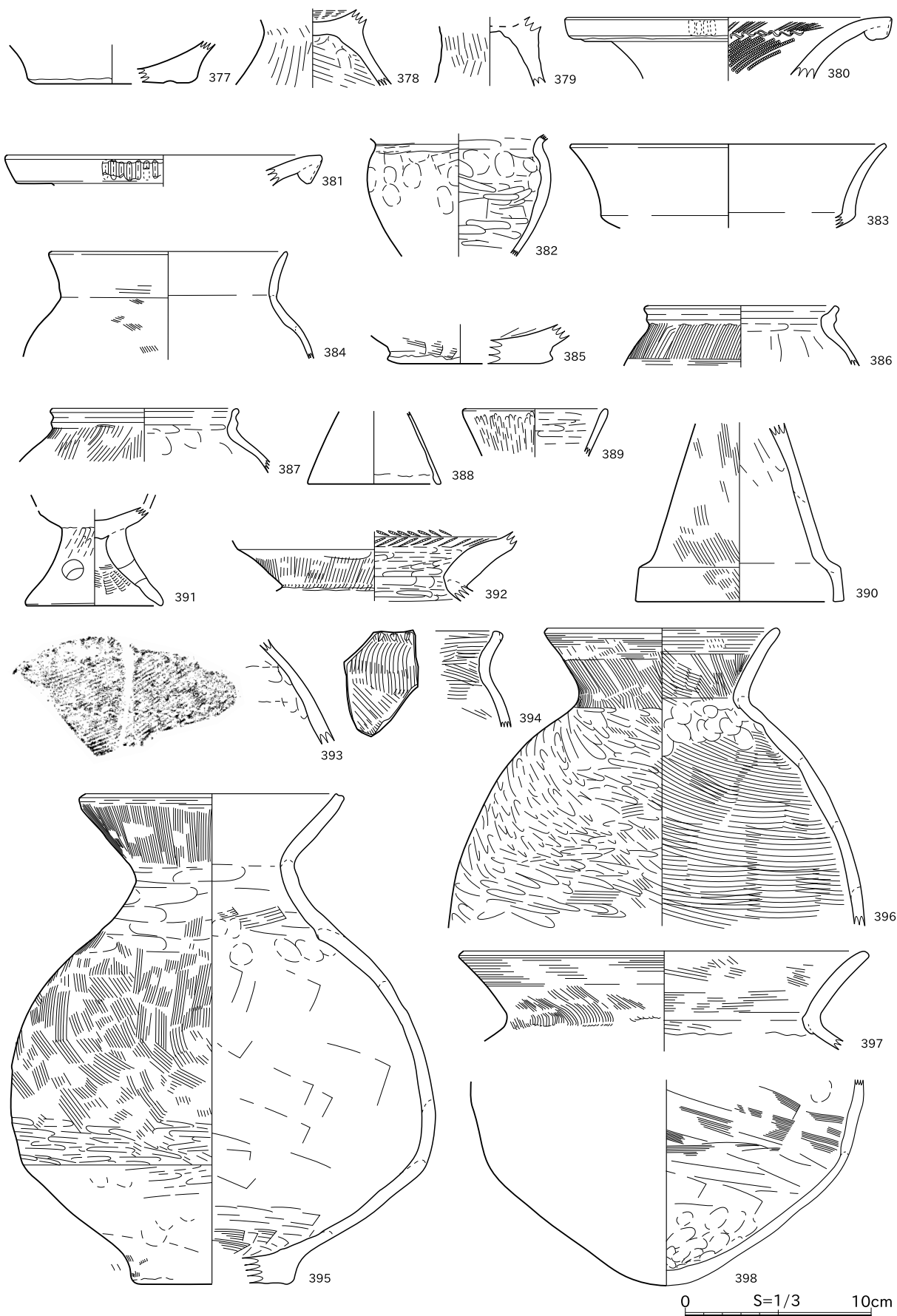
380～391は、SB21出土である。380・381は折返口縁壺の口縁部片で、折返し端部を面取りし、そこに棒状浮文を3個単位で貼付した痕跡がある。内面には外周から単節LRの縄文、S字状結節縄文が施される。381も折返し端部を面取りし、そこに棒状浮文を連続して貼付する。内面調整は不明。382は小型甕で、口縁部と底部周辺を欠損する。胴中位が張るが、口縁部に最大径を有すと考えられる。内外面ともにナデが施される。383は二重口縁壺の口縁部片で、二次口縁は外反して立ち上がる。内外面ともに摩滅している。384は甕の胴上半部片で、頸部から垂直気味に開く。外面の一部にハケ目を確認できる。385は壺底部片で、外面にはハケ目を確認できる。386・387はS字状口縁台付甕の口縁部片で、どちらも口縁部第2段が小さく、胎土からも在地産による模倣品と考えられる。388は台付甕の脚台部片で、薄手で端部をわずかに折り返す形状からS字状口縁台付甕と考えられる。389は小型丸底土器の口縁部片で、内外面ともミガキが施される。390は高坏の脚部片で、端部を折返し、外面にはハケ施され、内面はナデが確認できる。391は器台の脚部片で、脚部は太く短い。円窓があり、外面にはミガキが施され、内面にはハケが施される。

392～394は、SB22出土である。392は複合口縁壺の口縁部片で、頸部から屈曲して大きく開き一次口縁に至るが、二次口縁部を欠く。外面にはハケが施され、内面では一次口縁部と二次口縁部の屈曲部に櫛刺突羽状文が施され、それ以下はミガキが施される。形態と施文の特徴から、いわゆる柳ケ坪型壺である。393は壺の胴部片で、外面にはS字状結節縄文が施され、内面にはナデが施される。394は台付甕の口縁部片で、頸部の屈曲は弱く、口縁端部に細かいキザミ、内外面ともハケが施される。

395～401は、SB24出土である。395は壺で、底部の一部を欠損するほかほぼ完存する。胴下半部に最大径を有す下膨れ状のプロポーションを呈し、口縁部はやや内彎気味に開く。外面では、口縁上部から端部にかけ横ナデ、頸部周辺で縦位のハケ、肩部で幅広のミガキ、胴上半で縦位のハケ、胴下半でミガキが施される。内部では、口縁部で横ナデ、胴部で工具によるナデ、底部周辺でハケが施され



第85図 出土遺物実測図 (17)



第86図 出土遺物実測図 (18)

る。396は壺で、胴下半を欠く。胴下位に最大径をもち、内彎しながら立ち上がり、頸部ではやや外反しながら口縁部に至る。外面では、口縁上部から端部にかけ横ナデ、頸部周辺で縦位のハケ、胴部でミガキが施されるが、ミガキ調整前のハケ目を確認できる。内面では、口縁上部から端部にかけ横ナデ、頸部周辺でハケ、肩部でナデ、胴部で横位のハケが施される。397は甕の口縁部片で、口縁端部は面取りされ、上部で横ナデ、下部ではハケが施される。内面では横ナデされるが、ナデ調整前のハケ目を確認できる。398は丸底甕の胴下半片で、丸味の少ない底部から直線的に開き、弱い屈曲部から急角度で立ち上がる。外面は摩滅が著しいが、内面には工具痕が目立つナデが施され、底部周辺では指頭痕も確認できる。399・400は台付甕の脚台部片で、399は端部を欠損し内外面ともハケが施される。400は端部が丸味を帯び、外面にハケ、内面にナデが施される。401は小型台付甕でほぼ完存する。口径を最大径とし、球体で小ぶりの胴部に比しどっしりとした脚台部が付く。外面は、口縁部で横ナデ、胴部から脚台部はハケが施される。内面は、口縁部で横ナデ、胴部でナデ、脚台部で幅広のハケが施される。

402はSB25出土の高杯の接合部片で、外面にはミガキ、内面にはハケが施される。

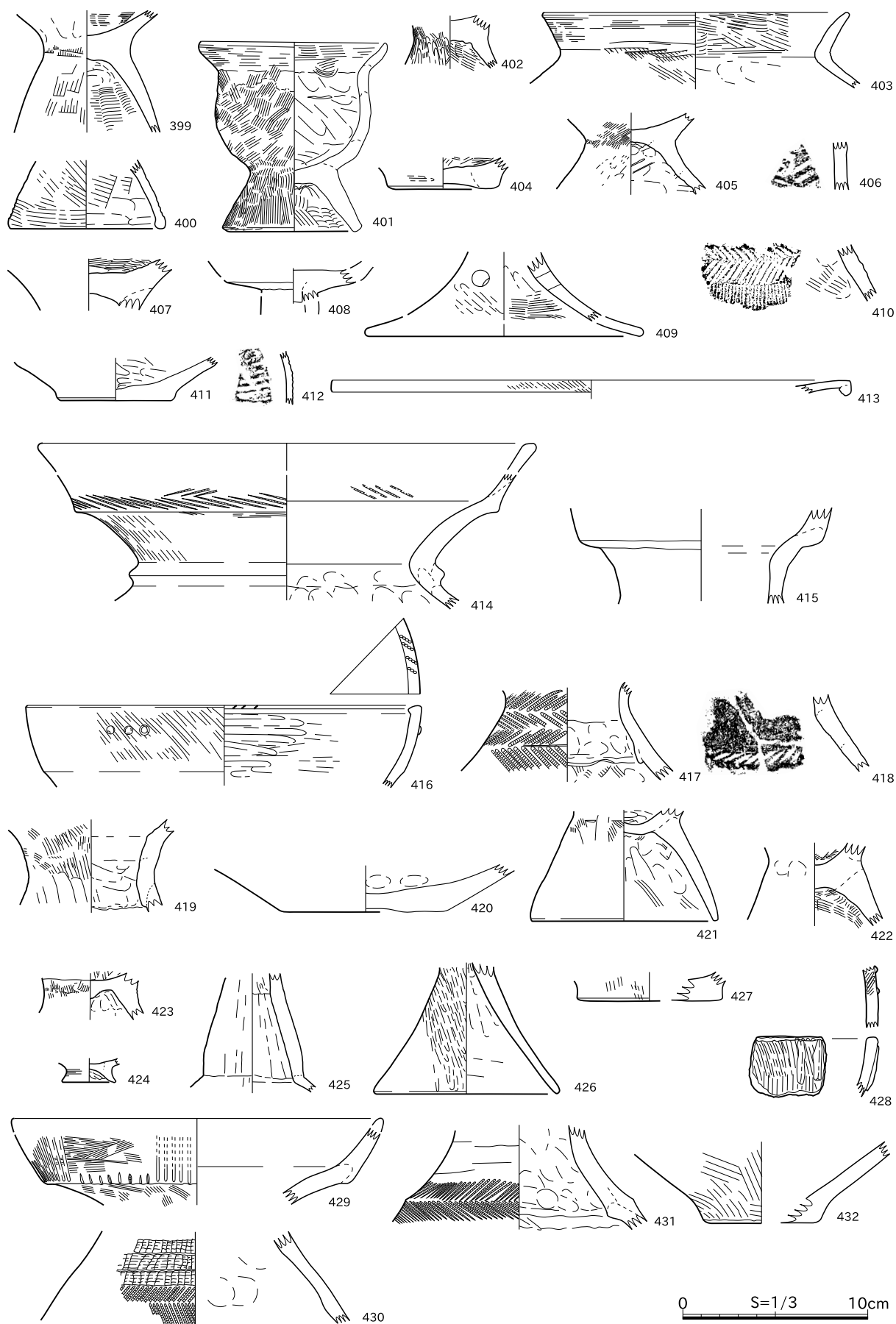
403～405は、SB27出土である。403は甕の口縁部片で、頸部がくの字を呈す。外面では口縁部で横ナデ、頸部から肩部にハケが施される。内面では口縁部にハケ、頸部以下ではナデが施される。404は壺の底部片で、内外面ともにハケ目を確認できる。405は台付甕の接合部片で、外面にはハケ、内面にはナデが確認できる。

406～409は、SB29出土である。406は甕の胴部片で、羽状の条痕が施される。407は台付甕の底部片で、底部内面にハケが確認できる。408は高杯の底部片で、想定復元であるが、平底状の底部から屈曲して立ち上がる、いわゆる有稜高杯と想定される。409は高杯の脚部片で端部を欠損するが、末広がり呈すものと考えられる。円窓をもち、外面にはミガキ、内面にはハケが施される。

410・411は、SB31出土である。410は壺の肩部片で、外面には櫛刺突羽状文とハケが施され、内面にはナデが施される。411は壺の底部片で、外面は摩滅しているが、内面にはナデが確認できる。

412・413は、SB32出土である。412は甕の胴部片で、外面には横位の条痕が施される。413は折返口縁壺の口縁部片で、折返された端部を面取りし、摩滅が著しいが、縄文が確認できる。

414～426はSB38出土である。414～416は複合口縁壺の口縁部片である。414は口縁端部を欠損するが、一次・二次口縁ともに外反して立ち上がり、頸部には断面三角形の突帯を設ける。外面では、二次口縁部に櫛刺突羽状文が施され、一次口縁部に縦位のハケが施される。内面では、二次口縁に櫛刺突文が確認でき、頸部ではナデが施される。形態と施文の特徴から、いわゆる柳ケ坪型壺である。415は一次口縁が垂直気味に立ち上がり、二次口縁にかけクランク状に屈曲するもので、二重口縁とも見える。摩滅が著しく調整痕は確認できない。416は二次口縁が内彎し、端部を肥厚させ面取りする。端部に縄文、外面にハケを施し、3個単位の円形浮文を貼付する。内面にはミガキが確認できる。417～419は、壺の頸部から肩部片である。417の外面には櫛刺突羽状文が3段程施され、内面にはナデが施される。418の外面にも櫛刺突羽状文が施される。419は外面にハケと幅広のミガキ、内部にナデが施される。420は壺の底部片で、外面は摩滅しているが、内面にはナデが確認できる。421は台付甕の脚台部で、外面にはハケ、内面にはナデが施される。422・423は台付甕の底部片で、422の外面にはナデ、内面にはハケ、423の外面にはハケ、内面にはナデがそれぞれ施される。425・426は、高杯の脚部片である。425は脚の下部で、裾部に向かい強く屈折する。摩滅が著しいが、外面にはわずかにミガキ、内面にはナデが確認できる。426はやや外反しながらハの字に開き、外面にはミガキ、内面にはナデが施される。



第87図 出土遺物実測図 (19)

427はSB41出土の壺底部片で、外面にハケ目が確認できる。

428～432は、SB42出土である。428・429は複合口縁壺の口縁部片である。428は口唇部に縄文、口縁部側面にはハケが施され、その上に2本単位?の棒状浮文が貼付される。429は、一次・二次口縁ともに外反して立ち上がる。外面では二次口縁側面にハケが施された後、4本単位の棒状浮文が貼付され、二次口縁下端では棒状浮文単位群の間にキザミが施される。一次口縁にはハケが施される。内面は摩滅している。430・431は、壺の肩部片である。430は肩部上方から櫛押引文3条、その下方に櫛刺突羽状文が施される。内面はナデが施される。431は断面三角形の突帯を設け、そこに櫛刺突羽状文が施される。内面はナデが施される。432は壺の底部片で、外面にはハケが施される。433は鉢の口縁部片で、底部から開いて立ち上がる胴部は、口縁部は垂直して立ち上がり、口縁端部をやや外反させる。口唇部に縄文、胴部にハケを施す。内面はミガキとも見えるナデが施される。

434・435は、SB44出土である。434は壺の肩部片で、櫛刺突羽状文の上に2個単位の円形浮文が貼付される。435は壺の底部片で、外面にはハケ目、内面にはナデが確認できる。

436～441は、SB46出土である。436は壺の肩部片で、沈線の上に櫛刺突文が確認できる。437は甕の口縁部片で、端部を折返し口唇部と側面を面取りしている。口縁部は横ナデ、胴部は粗いハケが施される。内面はナデが施される。438～441は台付甕で、いずれも口縁部から胴部片である。438は頸部の屈曲が緩やかで、口縁端部を面取りし、そこにキザミを施す。口縁部では縦位のハケ、胴部では横位のハケが施される。内面は横位のハケ、胴部ではナデが施される。439は全体のプロポーションが歪んでおり、口縁部が小さく屈曲も弱く、口縁端部も不揃いである。口縁端部にはキザミが施されるが、不明瞭かつ不揃いである。口縁部から頸部では縦位のハケ、胴部では横位のハケが施される。内面では、口縁部にハケ、胴部に工具によるナデが施される。440の口縁部も短く屈曲も弱い。外面では斜位のハケ、内面では口縁部が横位のハケ、胴部は工具によるナデが施される。441は439や440に比し、口縁部が小さく屈曲も弱い。胴部の張りも弱く瓜実状を呈すと考えられる。摩滅気味であるが、外面にはハケが施される。

442・443は、SB48出土である。どちらも壺の肩部片で、442は縦位の条痕、443は縦位・斜位の条痕が施される。

444～447は、SB49出土である。444は折返口縁壺で、胴部以下を欠損する。折り返された口縁端部を面取りし、そこに3個単位の棒状浮文を貼付する。頸部上方にはハケ、下方にはミガキが施され、肩部に円形浮文を巡らせ、その下方に単節LRの縄文が施される。445は複合口縁壺の口縁部片で、面取りされた口唇部に櫛刺突文、側面には櫛刺突羽状文が施される。内面にはハケが施される。446は鉢の口縁部片で、外面にハケ、内面にミガキが施される。447は高坏の口縁部片で、口縁部はやや外反して大きく開き、端部を肥厚させ、その下部にキザミを施す。胴部はハケが施される。内面は摩滅している。

448はSB50出土の高坏で、脚部を欠損する。鐔状の口縁部を呈し、口縁端部を折返し、その下部にキザミが施される。胴部上方にはハケが確認できるが、その他では摩滅している。

449は、SB55出土の高坏の口縁部片である。鐔状を呈し、折返しが厚く、面取りされた端部に櫛刺突文が細かく施される。胴部は丁寧にミガキが施される。内面では、外周から櫛刺突羽状文、続いて竹管文がランダムに施される。

450は、SB58出土の折返口縁壺の口縁部片である。端部を下方に肥厚させている。胴部にハケ、内部に縄文もしくは櫛刺突文が施される。

451・452は、SB60出土である。451はS字状口縁台付甕の口縁部片で、端部を欠損する。胎土から

見て在地産と考えられる。**452**は小型高坏で、外面は丁寧にナデが施されているが、一部にナデ調整前のハケ目を確認できる。内面も工具と指頭によるナデが施される。胎土も精製され緻密であり、その形態からも祭祀用と考えられる。

453～455は、SD02出土である。**453**は甕の口縁部片で、胴の張らない肩部からやや頸部で屈曲し、やや外反しながら口縁部に至る。口縁部は内外面ともに横ナデされ、胴部外面ではミガキ、内面ではナデが施される。**454**は台付甕の口縁部片で、口縁端部にキザミ、外面に斜位のハケ、内面に横位のハケが施される。**455**は複合口縁鉢（壺？）の口縁部片で、面取りされた口唇部と側面に縄文が施される。

456はSH04（SP1183）出土の台付甕の脚台片で、端部が内側に折り返されることから、S字状口縁台付甕と考えられる。

457～460は、SH07出土である。**457・458**は折返口縁壺の口縁部片で、**457**は折返された端部を面取りし、そこにキザミを施す。**458**は端部が丸味を帯びる。**459**は壺の胴部片で、扇文が確認できる。**460**はSP780出土の台付甕の口縁部片で、頸部を弱く屈曲させ、口縁端部にキザミを施す。外面では細かい縦位のハケ、内面では横位のハケが施される。

461はSK04（SP99）出土の甕？の口縁部片で、口縁端部に連続してキザミが施され、外面には条痕が施される。

462～465は、SK05出土である。**462**は壺の胴部片で、平底の底部から球体状の胴部に至る。外面ではミガキが施され、ミガキ調整前のハケ目を確認できる。内面では工具によるナデ、底部ではハケが施される。**463**は壺の底部片で、外面にはミガキが確認できる。**464**は台付甕の底部片で、外面にハケ、内面にナデが施される。**465**は台付甕の脚台部片で、端部が内側に折り返されることから、S字状口縁台付甕と考えられる。

466はSK06出土の台付甕の口縁部片で、端部にキザミ、内外面ともにハケが施される。

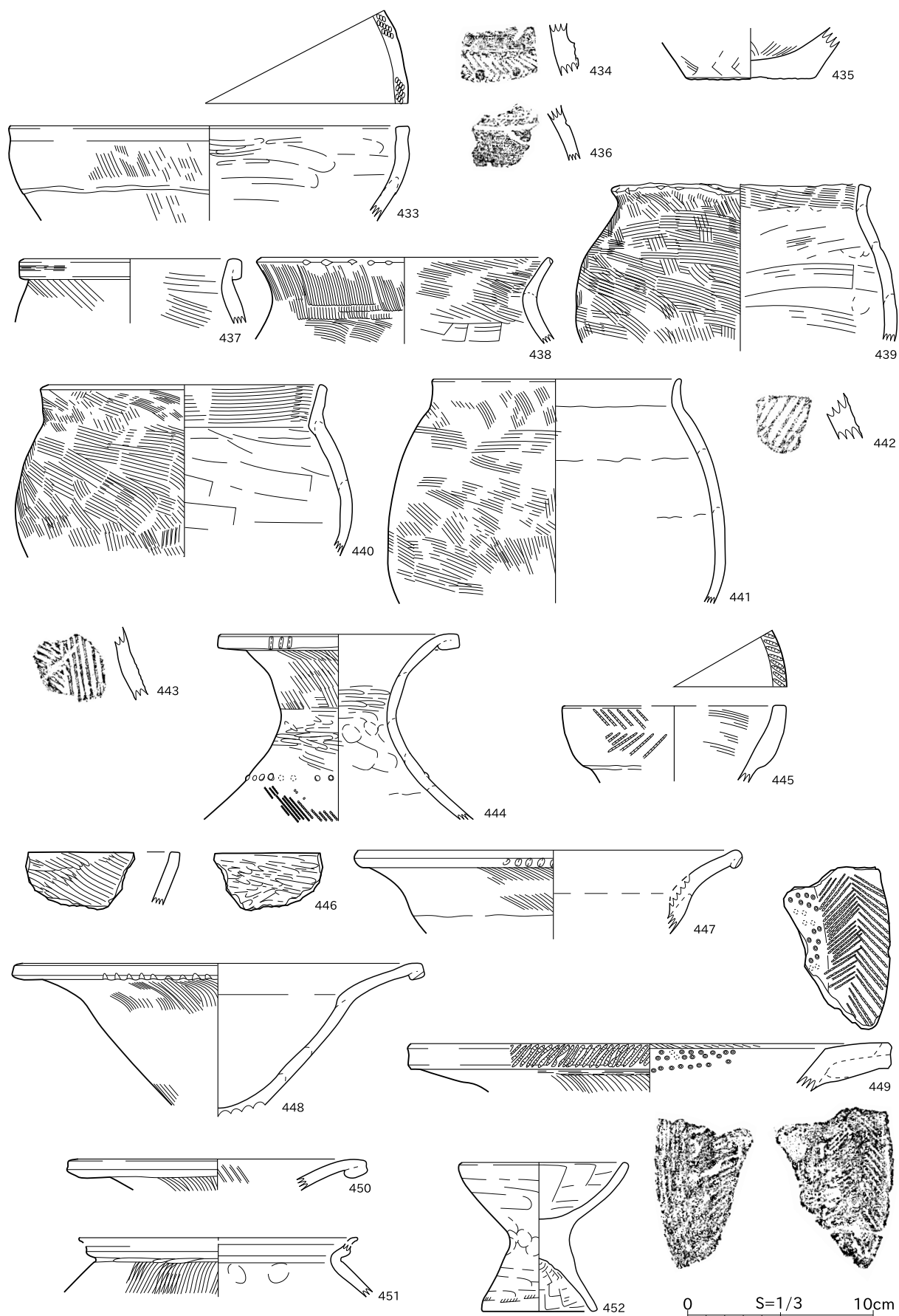
467はSP248出土の高坏の脚部片で、端部を欠損する。外面は摩滅しているが、内面はハケとナデが確認できる。

468はSP312出土の壺の底部片で、外面にミガキが施され、ミガキ調整前のハケ目を確認できる。

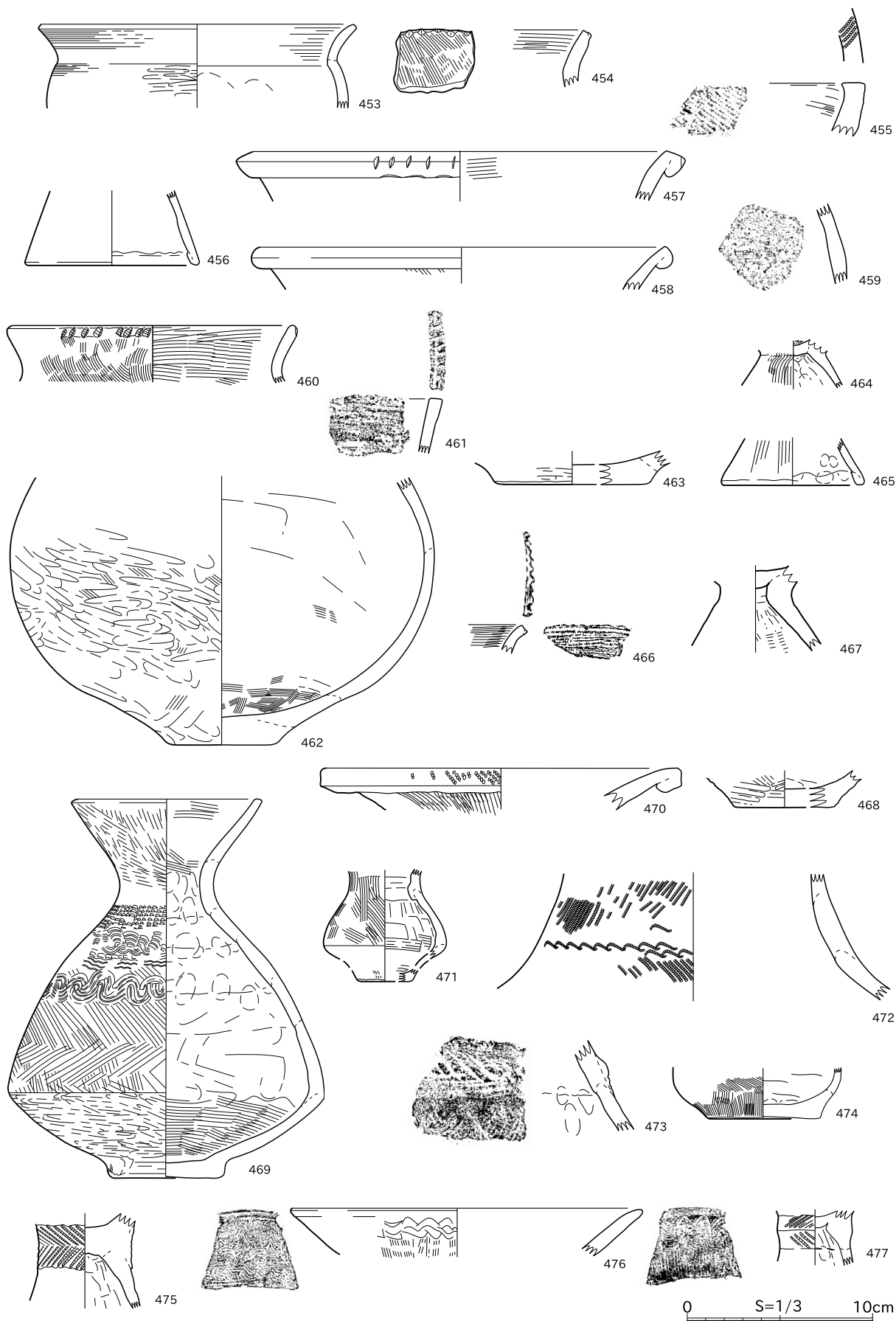
469～475は、SP395出土である。**469**は壺で、ほぼ完存する。平底の底部から短く屈曲した後、内彎して開く胴下半が形成され、陵をもつ屈折部から胴上半が内彎して立ち上がり、緩やかに屈曲する頸部を経て直線的に開く口縁部に至る。口縁端部は面取りされ、外面では口縁部でハケ、頸部でナデ、肩部から胴上半にかけては上方から細かい櫛描簾状文→櫛描波状文→櫛描簾状文→櫛描流水文の順に施される。胴中位から下半にかけてはハケが大きく羽状に施される。胴下半ではミガキが施される。**470**は折返口縁壺の口縁部片で、折返された端部を面取りし、縄文を施す。折返し下部ではハケが施される。**471**は小型壺で、口縁部と底部を欠損する。胴下半に最大をもち、そこでくの字状に屈曲する。頸部から胴上半にかけてはハケが施される。内面は、頸部で横ナデ、胴部でナデとハケが施される。**472**は壺の頸部片で、外面には上方から単節LRの縄文、続いてS字状結節縄文が施される。内面は摩滅している。**473**は壺の肩部片で、断面三角形の突帯に櫛刺突羽状文が施される。**474**は壺の底部片で、平底の底部から胴部が内彎して立ち上がる。外面にはハケ、内面にはナデが施される。**475**は高坏の接合部片で、櫛刺突羽状文が施される。

476はSP409出土の壺の口縁部片で、外面は、口縁端部から横ナデ、櫛描波状文、ハケの順で施される。内面は、数段に亘り櫛描波状文が施される。

477はSP628出土の高坏の接合部片で、櫛刺突羽状文が施される。



第88図 出土遺物実測図 (20)



第89図 出土遺物実測図 (21)

478は、SP647出土の壺の口縁部片である。直線的に開く口縁で、端部は内側に小さく折返す。外面では、端部に横ナデ、口縁部にハケが施される。内面ではミガキが施される。

479はSP683出土の壺の肩部片で、断面三角形の小さな突帯に櫛刺突羽状文が施され、その下方にS字状結節縄文が施される。内面はナデが施される。

480はSP678出土の甕の口縁部片で、端部にわずかな屈曲がみられる。外面は縦位のハケ、端部で横ナデが施される。内面は横位のハケが施される。

481はSP718出土の小型坏で、厚い底部から口縁部が直線的に開く。外面にはハケとナデが施される。

482はSP721出土の小型壺の胴部片で、胴下半に最大径の陵をもつ。肩部に櫛描横線文、中位に櫛描波状文が施される。内面はナデが施される。

483はSP721出土の甕の口縁部片で、口唇部に縄文、外面に条痕が施される。

484はSP741出土の甕の口縁部片で、外面には条痕が施される。

485はSP741出土の台付甕の口縁部片で、頸部の緩やかな屈曲から口縁部に至る。端部を面取りし細かいキザミ、外面に縦位のハケ、内面に横位のハケが施される。

486・487は、SP917出土である。486は壺の底部片で、外面にミガキ、内面にハケが施される。487は台付甕の脚部片で、脚が直線的に開く。外面に縦位のハケ、内面にナデが施される。

488はSP986出土の折返口縁壺の口縁部片で、折返された端部を面取りし、そこにキザミを連続して施す。内面には縄文と竹管文が施される。

489はSP987出土の折返口縁壺の口縁部片で、折返された端部を面取りし、そこに縄文を施す。内面では、縄文が羽状に施される。

490はSP990出土の壺の底部片で、外面にミガキ、内面に工具によるナデが施される。

491はSP1023出土の壺の頸部片で、櫛刺突羽状文が施され、櫛刺突調整後に4個単位の円形浮文が貼付される。

492・493は、SP1039出土である。492は台付甕の脚台部片で、直線的に開く。外面にはハケ、内面にはハケとナデが施される。493は壺の頸部片で、外面には櫛描簾状文が施され、内面には一部にナデが確認できる。

494はSP1048出土の高坏の口縁部片で、わずかに齔状を呈し、端部を折返す。外面は摩滅しているが、内面にはミガキが確認できる。

495はSP1050出土の壺の頸部片で、外面にはハケが施されるが、口縁部と頸部との境はナデ消される。肩部には櫛刺突文が確認できる。

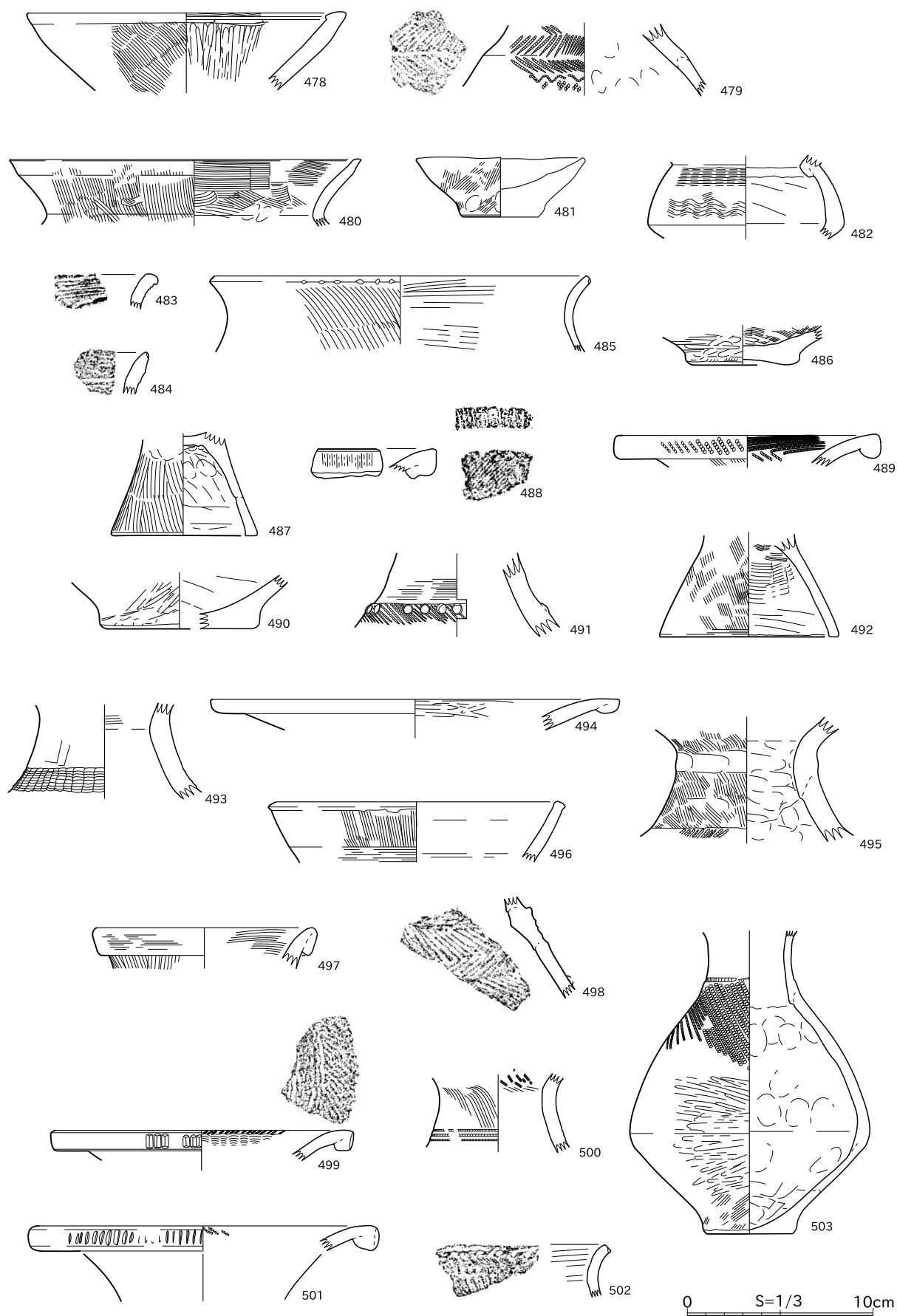
496はSP1054出土の壺の口縁部片で、端部が面取りされ、外面はハケ、下部ではナデ消しされる。内面は摩滅が著しい。

497と498は、SP1110出土である。497は折返口縁壺の口縁部片で、折返された端部は横ナデされ、外部はハケが施される。内面は横ナデされる。498は壺の肩部片で、小さな突帯下に櫛描波状文が施され、櫛描調整後に円形浮文が貼付される。

499はSP1115出土の折返口縁壺の口縁部片で、折返された端部は面取りされ、そこに3個単位の棒状浮文が貼付される。内面は外周から内側に向かって単節LRの縄文、櫛描扇文が施される。

500はSP1141出土の壺の頸部片で、外面は上方からハケ、櫛刺突横線文が施される。内面の上方には縄文が確認できる。

501はSP1144出土の折返口縁壺の口縁部片で、折返された端部は面取りされ、そこに連続してキザミが施される。内面には縄文が確認できる。

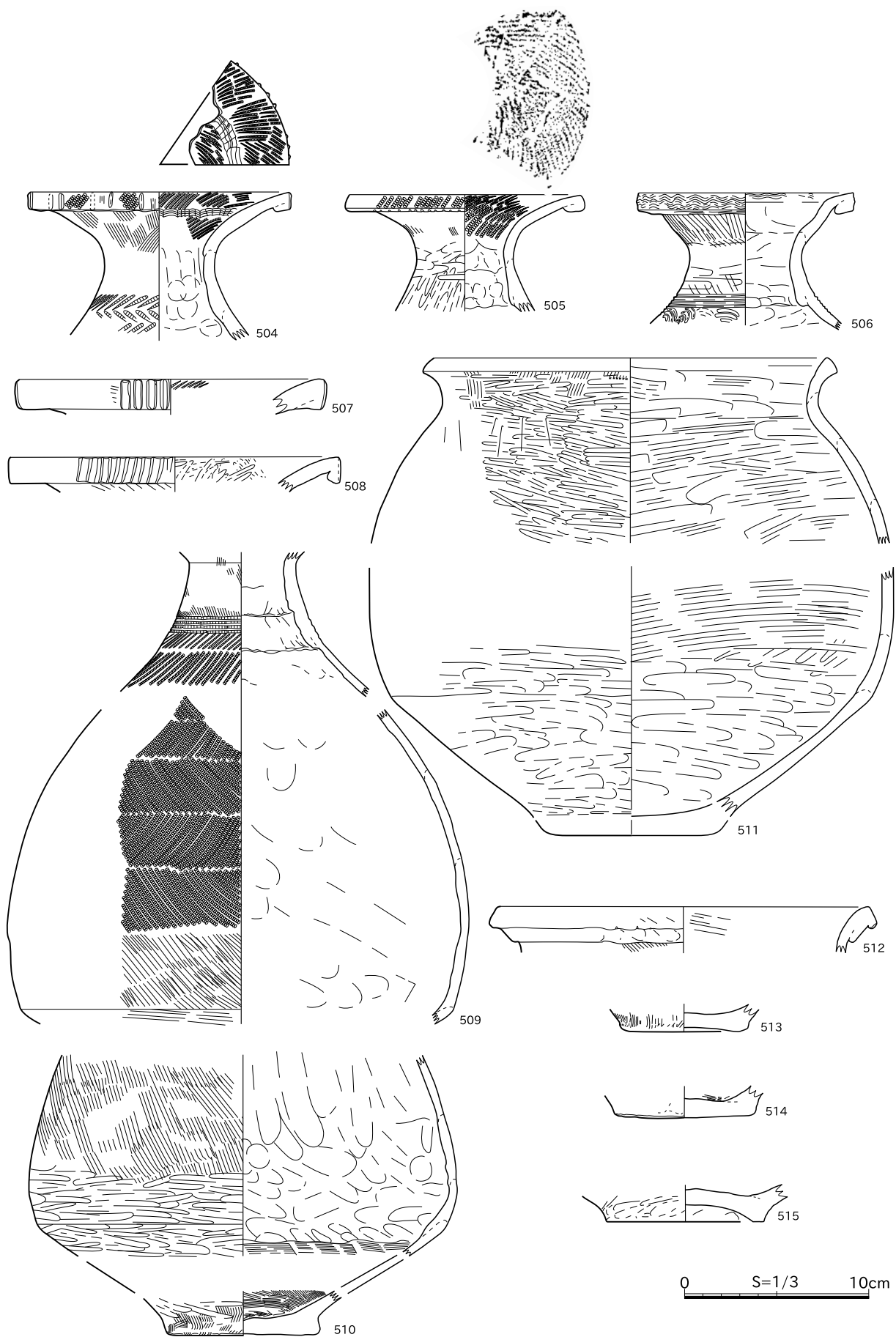


第90図 出土遺物実測図 (22)

502はSP1149出土の台付甕の口縁部片で、端部にキザミ、外面に縦位のハケ、内面に横位のハケが施される。

503はSP1204出土の壺で、口縁部を欠損する。平底の底部から開いて立ち上がり、胴下半で屈折しそこに陵を有し、そこから緩く内彎する胴上半を経て頸部に至る。頸部に櫛刺突横線文、肩部から胴上半にかけ単節RLの縄文、中位から底部にかけミガキが施される。底部周辺ではミガキ前のハケ目を確認できる。内面はナデが施され、胴部には指頭痕が目立つ。

504～542は、SX04出土である。504～508は折返口縁壺の口縁部片である。504は折返された端部が面取りされ、3個単位の棒状浮文と単節LR縄文を交互に施す。外面では、口縁部にハケ、頸部に櫛刺突羽状文が施される。内面では、口縁外周から縄文→櫛描簾状文（波状）→縄文の順に施される。頸部でナデが施される。505は、面取りされた折返しの端部に単節LR縄文が施される。外面では、口縁上方から頸部にかけ、ナデ（ハケのナデ消し）→横位のミガキ→縦位のミガキの順で施される。内面では、口縁部で縄文、頸部でナデが施される。506は頸部上位、口縁部との境に屈曲がみられる。面取りされた折返しの端部に櫛描波状文が施される。外面では、口縁上方からハケ→ナデ→ミガキ（ミガキ調整前のハケが残る）が施され、肩部に櫛描横線文3条、扇文が施される。内面では、口縁部で横ナデ、ナデが施される。507は面取りされた折返しの端部に4個単位？棒状浮文が貼付され、その他にもハケもしくは縄文が施されるが、摩滅により明確でない。内面には櫛刺突文を確認できる。508は、面取りされた折返し端部に棒状のキザミが連続して施される。内面はミガキが施される。509は壺で、口縁部と底部を欠損する。口縁部と頸部との境に弱い屈曲があり、緩やかに内彎しながら胴部を形成し、胴下半に最大径を有す。さらにその下方を屈曲させ底部に至る。外面では、頸部でナデとナデ調整前のハケが残る。頸部では上方から櫛刺突横線文3条、櫛刺突文（羽状の片方）が施される。胴部には単節LRとRLの縄文6段が羽状を成すように交互に施される。屈曲部までの5cm程の間には斜位のハケが施され、屈曲下ではミガキが施される。内面は、全体にナデが施され、頸部では輪積み痕を確認できる。510は、壺の胴部から底部片である。胴下半に最大径と弱い屈曲もった下膨れ状を呈す。外面では上半に斜位のハケ、下半から底部に横位のミガキが丁寧に施される。底部周辺では、ミガキ調整前のハケ目を確認できる。内面では上半にナデ、下半から底部にかけてハケが施される。511は、広口壺で胴部の一部を欠損する。胴下半に最大径をもち、そのやや下方が弱く屈曲し底部に至る。胴上半から内彎して立ち上がり頸部で緩やかに屈曲し口縁部に至り、口縁端部は面取りされる。外面はほぼ全面にミガキが施されるが、一部にミガキ調整前のハケ目を確認できる。また、胴部に比べ底部周辺のミガキは幅広である。内面は基本的にハケ→ナデ消しで、胴部ではハケ目が目立つが、底部周辺ではナデが丁寧である。512は折返口縁壺の口縁部片であるが、端部が2段に折り返され、上段は面取りされ、下端が段をもって垂れる。下段にはナデの指頭痕を確認できる。内面も摩滅気味であるが、ハケを確認できる。513～515は壺の底部片で、513と515には底部に彎曲がみられ、515は著しい。513の外面にはハケ、514にはナデ、515にはミガキが施される。516は壺の口縁部片で、頸部からくの字に屈曲し、口縁部は直線的に開く。外面では、端部付近で横ナデ、それ以外では縦横にナデが施される。内面も端部付近で横ナデが認められる。517は鉢の口縁部片で、胴部から弱く屈曲して口縁部が開く。外面では、口縁部にハケ、胴部にミガキが施される。内面は、比較的丁寧にミガキが施される。518～533は台付甕である。その内、518～530が口縁端部にキザミが施されるもので、531・532はキザミのないものである。調整は、外面でハケ、口縁部内面でハケ、胴部内面でナデを概ね基本とするが、口縁端部と頸部に差異が見られるため、以下では番号順にその特徴を述べる。518は頸部の屈曲は緩やかで、口縁端部を折返し面取りし、そこに明瞭なキザミとハケが施される。519



第91図 出土遺物実測図 (23)

も518同様端部が折返され、明瞭なキザミが施されるが、ハケは施されない。520は端部の折返しはないが、口唇部が面取りされ、明瞭なキザミが施される。頸部の屈曲が518や519より目立つ。521は520同様端部を面取りし、明瞭なキザミが施される。口唇部にはハケが施される。522は端部が面取りされ、キザミがやや小さいが、頸部の屈曲は目立つ。523は端部に面取りされ小さいキザミとハケが施される。524は器形が一回り小さくなるが、口縁端部の面取部にキザミとハケが比較的明瞭に施される。525は頸部の屈曲が明瞭で、口縁端部の面取り部に小さいキザミとハケが施される。526は他に比べ口縁部が立ち上がり気味になり、口縁端部は狭く、キザミも小さい。527は頸部に屈曲があり、口縁端部の面取りは明瞭でなく、キザミも小さい。528は頸部の屈曲は弱く、口縁端部の面取りも明瞭でなくキザミも小さい。529は頸部の屈曲が認められ、口縁端部は面取りされ、キザミが施される。530は口縁部がやや開き気味で、口縁端部の面取りはあまく、キザミは細い。531・532は、口縁端部にキザミが施されないもので、531は頸部の屈曲は弱く、口縁端部がやや丸味を帯びる。他に比べ胴上半の張りが強い。532の口縁端部も丸味を帯びる。533は台付甕の胴部片で、肩部以上と脚台部を欠損する。外面には全面にハケが施され、内面には工具によるナデが施される。534～537は、高坏の口縁部片である。いずれも鐔状を呈し、口縁端部の折返しを面取りし、そこにハケ、その下部にキザミを施す。内面にはミガキが施される。538は高坏で、口縁部と底部以下を欠損する。逆ハ字状に開いた坏部から屈曲して鐔状の口縁部に至る。内外面ともに摩滅気味であるが、ミガキが確認できる。539と540は高坏の脚部片で、端部が明瞭に折返される。539は折返し部に斜位のハケ、脚部にミガキが施される。540は摩滅しているが、折返し部にハケ目が確認できる。541は高坏の接合部片で、断面三角形の突帯がめぐる。全体に摩滅気味であるが、外面と坏部内面にはミガキが確認できる。脚部内面にはハケが施される。542は高坏で、口縁端部と底部以下を欠損する。逆ハ字状に開いた坏部から屈曲して鐔状の口縁部に至る。外面は、口縁部にハケ、坏部にミガキが施される。内面は、ミガキが施される。

543は、SX06出土の鉢の底部片である。外面にはミガキが施され、内面にはナデが施され、指頭痕が確認できる。胎土や色調から縄文土器の可能性が高い。

544～547は、SX07出土である。544は複合口縁壺の口縁部片で、第2口縁部は内彎して立ち上がる。外面にはハケが施され、その上に3個単位？棒状浮文が貼付される。また、円形浮文の剥離痕が確認できる。内面は摩滅しているが、口縁端部周辺にハケ目が確認できる。545は壺の胴部片で、櫛刺突文とハケが施される。546は台付甕の口縁部片で、口縁端部にキザミ、外面に縦位のハケ、内面に横位のハケが施される。547は壺の口縁部片で、外面は赤彩が施され、調整としてはハケ→ミガキが施され、ミガキ調整前のハケ目が残る。

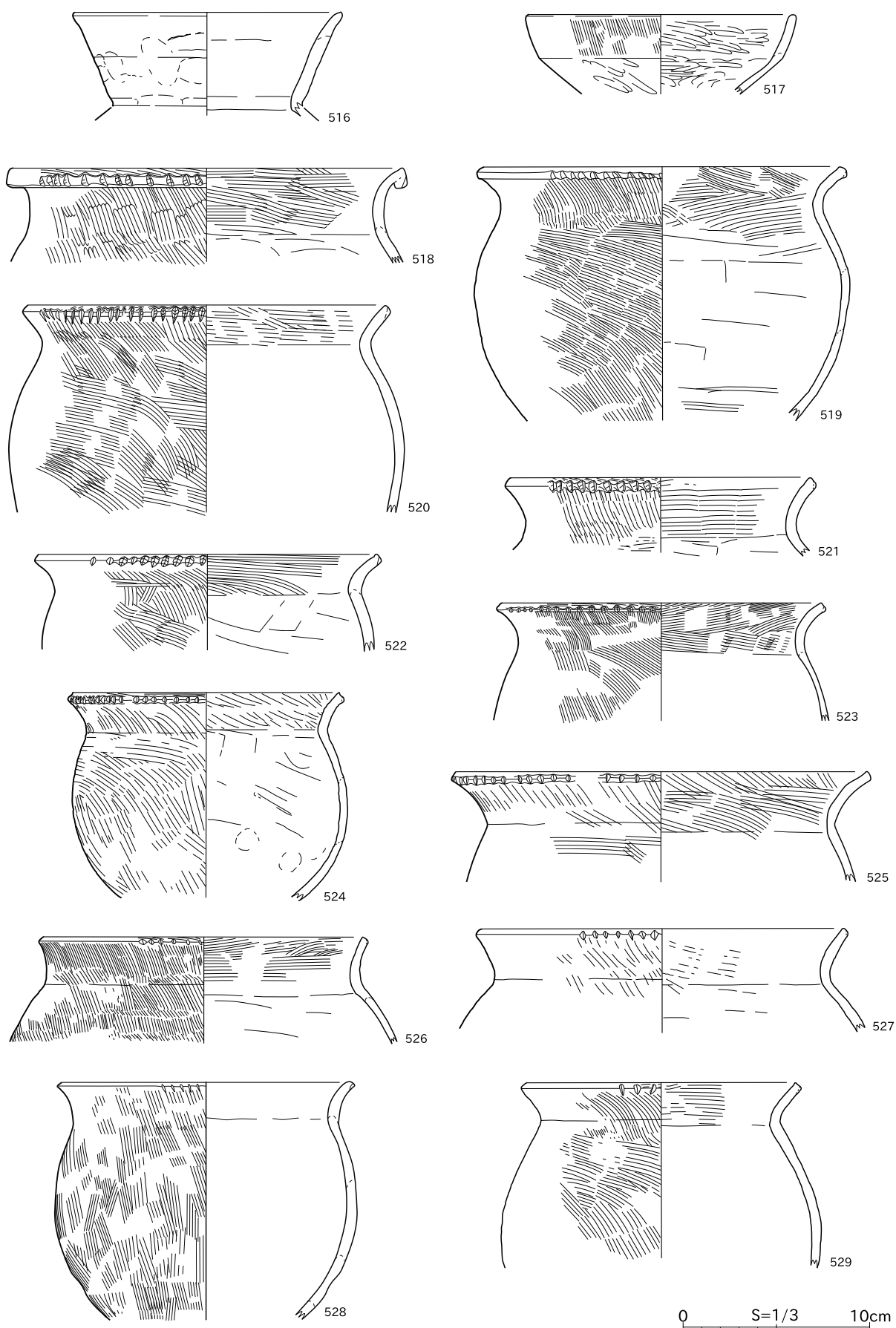
548・549は、SX09出土である。548は台付甕の底部片で、外面にハケ、内面にナデが施される。549は高坏の脚部片で、三方に円窓をもつ。外面は裾部を除き縦位のミガキが施され、裾部では横位のミガキが施される。内面は上部でハケ、下部ではナデが施される。

550はSX10出土の壺の口縁部片で、端部を肥厚させる。外面に単節LRの縄文、内面にミガキが施される。

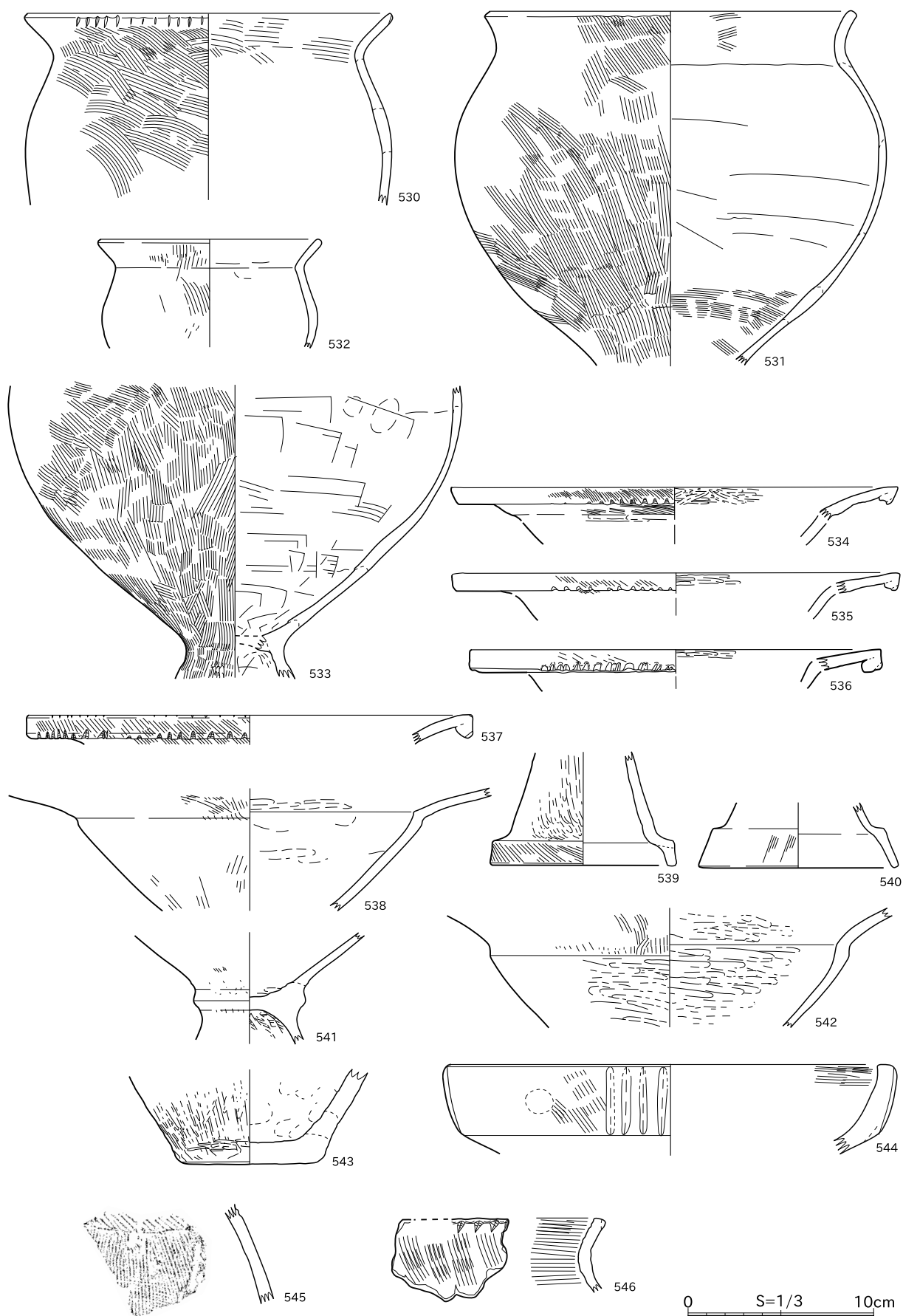
551～553は、SX12出土である。551は壺の頸部片で、外面上方から順にハケ、櫛刺突文、単節RL縄文が施される。内面には、ハケとナデが施される。552は甕の口縁部片で、頸部から屈曲して口縁部が立ち上がる。全体に摩滅しているが、頸部外面にハケ、内面のナデとハケ目が確認できる。

以下は遺構外出土で、出土グリッド順に報告する。

554～556は、D-8区の出土である。554と555は台付甕の脚台部片で、どちらも直線的に開き、外面にハケ、内面にナデが施される。556は台付甕で脚台部を欠損する。頸部の屈曲は弱く、口縁端部



第92図 出土遺物実測図 (24)



第93図 出土遺物実測図 (25)

を面取りしキザミを施す。外面には全面に縦位もしくは斜位のハケが施される。内面は摩滅しているが、底部周辺でハケが施される。

557は、D-11区出土の台付甕の口縁部から胴上半部片である。頸部の屈曲は弱く、口縁端部は丸味を帯び、小さなキザミが間隔を空けて施される。外面は口縁部で縦位のハケ、胴部で斜位のハケが施される。内面は全面に横位のハケが施される。

558はE-9区出土の高坏で、口縁部と底部以下を欠損する。鐔状を呈し、内面には坏部と口縁部の境に陵をみられる。内外面ともに摩滅が著しいが、外面の一部にはミガキが確認できる。内面にもミガキが認められる。

559はE-10区出土の壺の口縁部片で、緩やかに屈曲する頸部から直線的に開き、口縁端部は丸味をもってやや肥厚する。内外面はハケが施されるが、内面ではナデ消しされる。

560はE-9区出土の高坏で、脚部を欠損する。坏部は直線的に開き、鐔状を呈す口縁部はやや外反気味に開き、端部を折り返し面取りする。そこにハケを施し、下方に小さなキザミをめぐらせる。外面では口縁部にミガキが確認できるが、坏部は摩滅が著しくかすかにミガキが確認できる程度である。内面は摩滅している。接合部では、櫛刺突横線文と羽状文が確認できる。

561はE-10区出土の高坏の脚部片で、接合部に櫛刺突横線文が6条めぐる。外面は摩滅が著しいが、ミガキが認められ、内面はナデが施される。

562・563は、F-8区出土である。562はF-8区出土の複合口縁壺の口縁部片で、口縁部は折返し下部で粘土を折返して第2口縁部を形成している。5本単位？棒状浮文を貼付している。その他は摩滅が著しく調整痕は確認できない。563は壺の口縁部片で、端部外面には櫛描横線文、端部内面にはヘラ状工具による列点文が施される。

564・565は、F-9区出土である。564は複合口縁壺の口縁部で端部を欠損する。外面では、第2口縁部に長い櫛刺突文が施され、第1口縁部では縦位のハケが施される。内面では、第2口縁部に櫛刺突羽状文、第1口縁部にナデが施される。形状と施文の特徴から、いわゆる柳ヶ坪型土器である。565は甕の口縁から胴部片で、口縁部が短く、丸味を帯びた端部を呈す。全体に摩滅しているが、外面では頸部にハケ、内面ではナデが確認できる。

566はF-10区出土の壺の胴部片で、櫛描扇文（斜位）と櫛描文（横位）が施される。

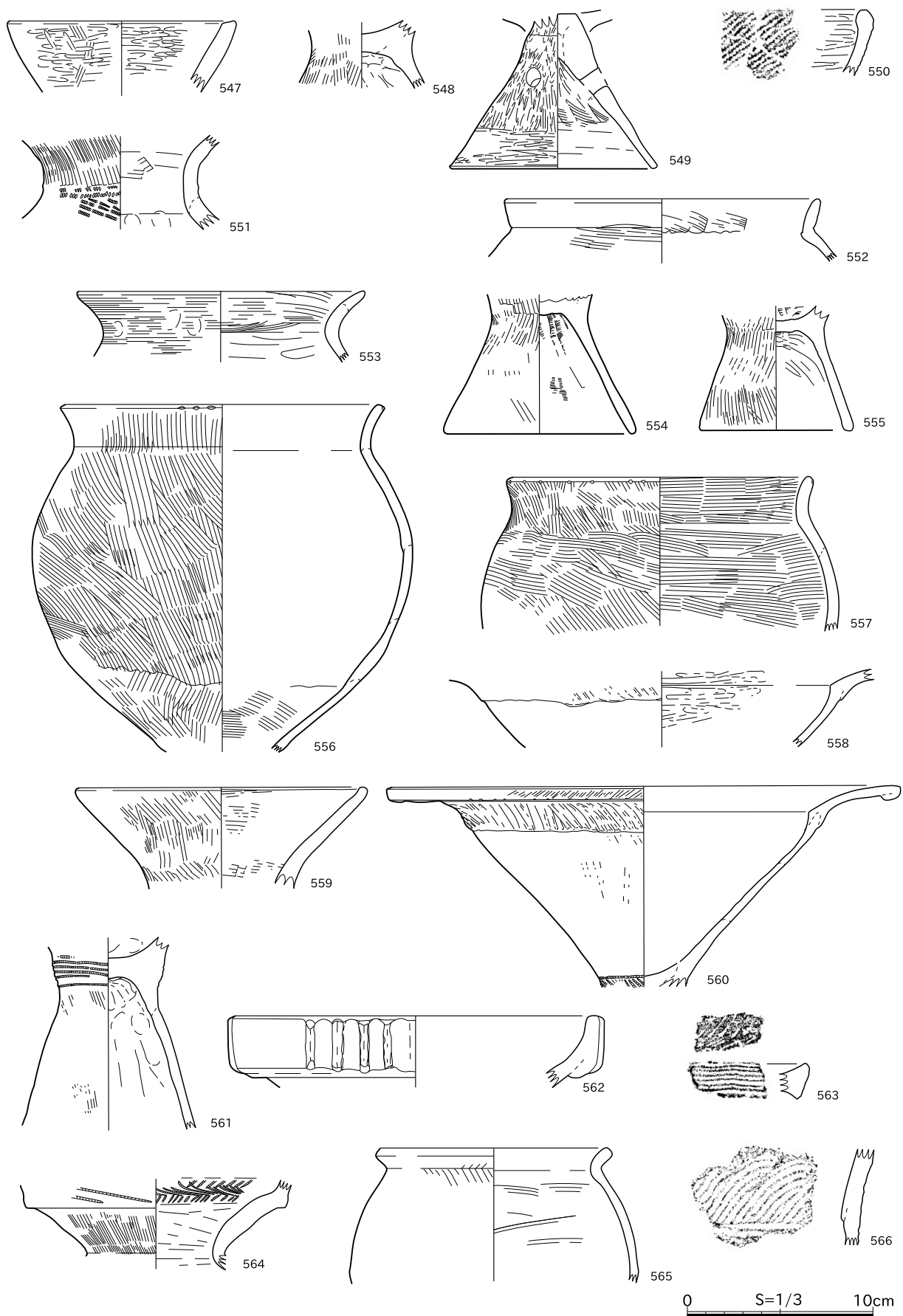
567はG-7区出土の壺の口縁部片で、端部を面取りしナデが施され、外面に縄文、内面にナデが施される。

568はG-7区出土の壺の底部片で、摩滅気味であるが、外面にはナデが確認できる。

569はG-10区出土の用途不明の土製品で、直径4cm、1.5cm程の断面形円錐状、平面形は歪な円盤状を呈す。中央に直径1cm程の円窓がありドーナツ状を呈す。本来は何らかの本体となるものに取り付いていたものが剥離したものである。全面にナデが施されるが、歪な形状含め丁寧な作りではない。

570は、H-10区出土の壺の底部片である。底端部が小さく突出し、そこから短く垂直に立ち上がりやや屈曲して胴部に至る。外面にハケ、内面にナデが施され、底部には木葉痕が確認できる。

571はH-8区出土のS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部2段目がやや外に張り出したB類の特徴を有すが、胎土からみて在地産と考えられる。



第94図 出土遺物実測図 (26)

572・573は、I-8区出土の台付甕の脚台部片である。どちらもやや内彎する脚台部で、572は外面にハケ、内面にナデ、573は内外面ともにハケが施される。

574は高坏の脚部片で、端部を欠損するが、筒状に伸び屈曲して裾が広がる形状を呈すと考えられる。外面にミガキ、内面にナデが認められる。

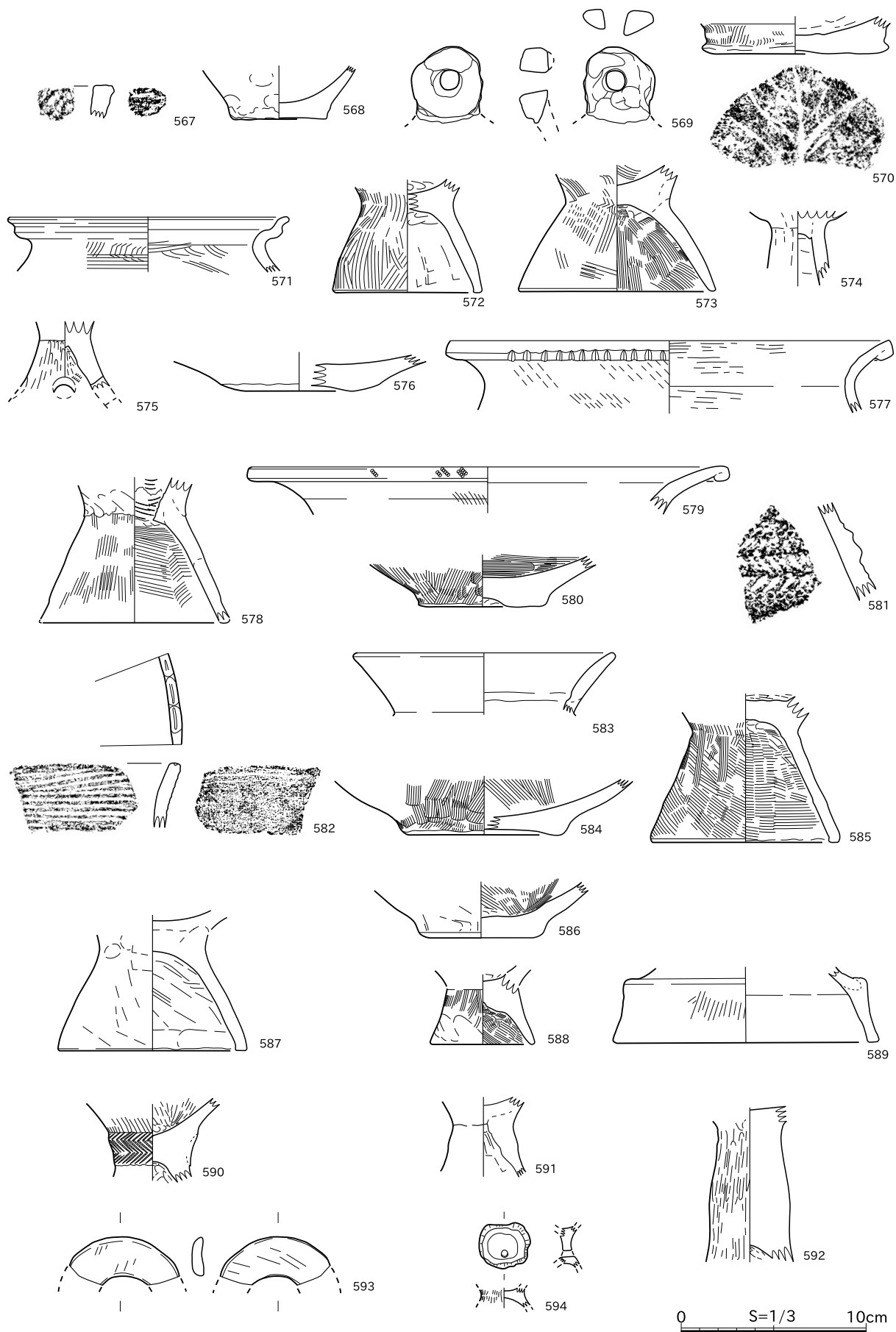
575はH-12区出土の高坏の脚部片で、三方に円窓をもつ。外面にミガキ、内面に絞り痕が確認できる。

576～578は、J-8区出土である。576は壺の底部片で、内外面ともに摩滅しており調整痕は確認できないが、緩やかに立ち上がる壺と考えられる。577は台付甕の口縁部片で、口縁端部を折返し、面取りする。面取りした下部にキザミを施す。頸部外面にハケ、内面は横ナデが施される。578は台付甕の脚台部片で、脚台は直線的に開く。外面では、底部周辺にナデ、脚台部にハケが施される。内面では、脚台部にハケが施される。甕と脚台の接合部が剥離しており、接合部に入念なハケ目が確認できる。

579はK-9区出土の高坏の口縁部片で、口縁部は緩やかに外反するが鐙状を呈さない。折返された端部を面取りし、そこに縄文を施す。内外面ともに摩滅が著しいが、外面にはハケ目が確認できる。

580はK-10区出土の壺の底部片で、底が凹む。内外面ともに丁寧にハケが施される。

以下は、表採、重機による表土掘削時に出土したものである。581は壺の肩部片で、断面三角形に小さな突帯を設け、そこに櫛刺突羽状文、その上下に竹管文が施される。582は甕の口縁部片で、端部に短線文、内外面に横位の条痕が施される。583は壺の口縁部片で、頸部が屈折し直線的に開く。内外面ともに摩滅している。584・585は壺の底部片で、584は内外面ともに丁寧なハケが施される。585は外面にナデ、内面にハケが施される。586・587は、台付甕の脚台部片である。586は直線的に開き、内外面とも丁寧なハケが施される。587はやや内彎気味に開き、内外面ともにナデが施される。588は小型台付甕の脚台部片で、脚台部は短い。外面にハケ、裾付近でナデ、内面にハケが施される。589は高坏の脚部片で、裾が折返されるもので、屈曲が強い。摩滅しているが、外面にハケ目が確認できる。590は高坏の接合部片で、櫛刺突羽状文が施される。坏部内面はミガキが施される。591は高坏の脚部で、摩滅している。592は高坏の脚部片で、細長い棒状を呈すが、中央部にやや張りがある。外面は比較的丁寧にミガキが施される。593は用途不明の土製品で、直径7cm（推定）、厚さ0.7cm、円窓径3cm（推定）を測るドーナツ状の円盤であるが、2/3程を欠損する。胎土は緻密かつ焼成も良好で硬質である。表面には擦痕が認められる。594は台付甕の底部片を再利用した土製品であるが、用途は不明。円形に整えようと割れた箇所を整形し、底部中央よりやや外れて穿孔されている。胎土には花崗岩粒が含まれることから、三河産と考えられる。



第95図 出土遺物実測図 (27)

④ 山茶碗・陶器

595はSB06出土の山茶碗で、口縁端部を欠損する。体部はほぼ直線的に立ち上がり、潰れた高台をもち、粉殻痕が確認できる。

596はSB46出土の山茶碗の口縁部片で、口縁端部がやや外反し、自然釉が確認できる。

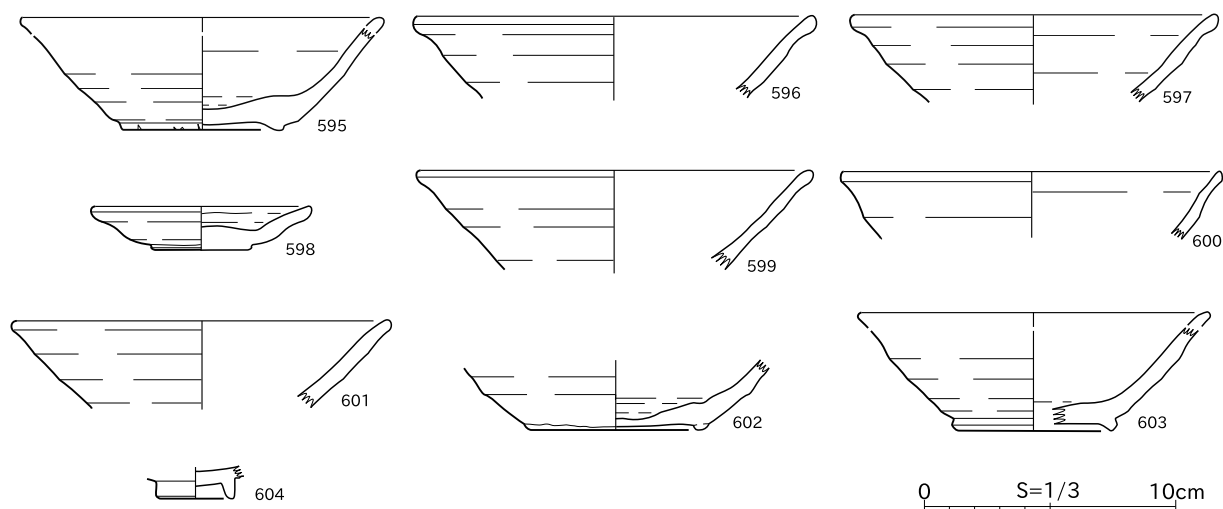
597はSP240出土の山茶碗の口縁部片で、口縁端部がやや外反する。

598・599は、SP246出土である。598は山茶碗小皿で、口縁端部がやや外反する。599は山茶碗の口縁部片で、体部から口縁端部までほぼ直線的に立ち上がる。

600～602は、SP252出土である。600は山茶碗の口縁部片で、口縁端部がやや外反する。601は山茶碗の口縁部片で、ほぼ直線的に開く。602は山茶碗の底部片で、低い高台をもつ。

603はF-10区出土の山茶碗の胴部から底部片で、口縁端部と底部の一部を欠く。高台からほぼ直線的に開き、口縁部で若干外反する。

604はJ-8区出土の瀬戸産の小碗の高台部片で、内面には灰釉薬が施される。



第96図 出土遺物実測図 (28)

(3) まとめ

各時代の報告は前章のとおりであるが、今回は事実報告のみであり、詳細な分析が行われていないため、成果の整理とともに今後の課題をあげ、まとめとしたい。

瀬戸山Ⅰ遺跡では、これまでに押型文土器や、中期初頭から中期中葉、中期後葉から後期前葉に比定される土器の出土が確認されているが、遺構の検出件数及び出土土器の総量は決して多いものではない。

7次調査地点から約40m北の地点で行われた1986年の調査では、約500㎡の範囲を調査し、中期後葉に比定される土器片6点と若干の石器の出土を見たのみである。また、本書発刊段階で未報告であるが、7次調査地点南西に隣接する地点において、2020年に8次調査が行われている。8次調査では押型文土器が比較的まとまって出土しているが、7次調査で中心的に出土する、中期後葉から後期前葉に属する土器はほとんど出土していない。このことから、中期後葉から後期前葉に比定される遺跡の面的広がりを、7次調査区域南端から北に約70mないし100mと捉えることができる。はたして同時期の遺跡分布が8次調査以南、あるいは1986年調査地点以北に断続的に展開しているのか、今後の調査が待たれるところである。

次に7次調査地点から西に目を向けると、7次調査地点から北西約70mの地点で、2008年に3次調査が実施されている。調査では結節縄文施文を特徴とする中期後葉に属する土器を中心に、少量の中期前葉、後期前葉の土器が出土している。出土遺物の総量は、およそテンバコ（650×450×210mm）1箱分で、7次調査に較べやや中期色が強い傾向にあるが、概ねの時期としては並行が認められそうである。

これらの事例を踏まえ7次調査の成果をみると、瀬戸山Ⅰ遺跡における中期後葉から後期前葉の遺跡の面的広がりは、7次調査地点を東端に、東西及び南北方向100m以内に収まるものと考えられる。さらに周辺域のこれまでの調査との遺構と遺物の多寡やあり方を比較すると、周辺域では量質ともに断片的であったが、今回は量もさることながらその質においても居住域の様相をうかがい知ることのできる好資料が提示されたと評価できる。そのため今回の調査地点が集落の中心的位置にあたることも考えたいが、土器をはじめ資料の詳細な分析が行われていない現段階では早計であろう。基本的な分析含め今後の課題としたい。

今回の調査において検出された遺構と遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世と時代は多岐にわたるが、遺構と遺物の出土量において最も充実していたのが弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落にかかる遺構と遺物である。和田岡原の河岸段丘上に展開する遺跡にあっては、取り立て言及するまでもない時代の遺構と遺物であるが、今回の調査においては竪穴住居跡を中心とした遺構の密度が非常に高いことが特徴としてあげられる。

確認された竪穴住居跡は55軒であるが、実際には60軒を下らない軒数であったと推定される。調査区東（12区以東）は著しい攪乱によりほとんど遺構は検出されなかったが、攪乱等により消滅した遺構数を勘案すればさらに多くの竪穴住居が存在したことは間違いない。

わずかだが丸子式に比定される条痕文土器片が出土していることから、弥生時代の当集落の萌芽、弥生時代集落の開始は弥生時代中期にさかのぼる。中期段階から後期までの集落の動態は明確にし得ないが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけ集落が拡大することも間違いない。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡の分布について、竪穴住居跡は調査区内に比較的まんべんなく展開しているのに対し、掘立柱建物跡は3ヶ所の範囲（B～D-9～10区、I・J-10・11区、L～N-6区）に集中もしくは重複して展開していることがわかる。どうやら、掘立柱建物の立地については、場が踏

襲されていたとみることができる。一方、吉岡下ノ段遺跡第12次調査では、古墳時代前期の集落で竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡（小型倉庫）1棟から成る単位群が認められている。両集落の動態の差異もあることから一概な比較はできないが、掘立柱建物のあり方の差異とも考えられる。集落動態の中で竪穴住居跡と掘立柱建物跡との関係等の分析がされていないため、付会に過ぎずこれ以上の言及は避ける。課題としておきたい。

13世紀後半代に比定される土坑群は、その形状や被熱の痕跡などから土坑墓と想定した。和田岡原において、中世墓をはじめとする中世遺構がこれ程まとまって検出された事例はほとんどない。同じ吉岡地区の林遺跡では、12世紀後半から13世紀前半にかけての土坑墓を伴った集落が確認されている。林遺跡の土坑墓の規模と形状は、長径1.1～1.5m程、短径1.1m程の方形、隅丸方形、円形とバラエティがみられ当遺跡のような規格性はみられない。また、掘立柱建物と区画溝による居住区と土坑墓による墓域が分けられているが、土坑墓同士の重複があり、配置においては作為性や規則性は認められない。

多くの事例を集成ならびに分析を行っているわけではないが、林遺跡のあり方の方は一般的と考えられ、相対的にも当遺跡の土坑墓群にみる形状の規格性と、配列と並びにみる作為性と規則性はあらためて稀有な事例だと言える。その具体相の解明については、類似事例の収集とともに検討していきたい。



吉岡下ノ段遺跡 調査区遠景（南東から）



吉岡下ノ段遺跡 東側調査区全景



吉岡下ノ段遺跡 西側調査区全景



吉岡下ノ段遺跡 SH01・02 完掘状況（北から）



瀬戸山Ⅰ遺跡 調査区遠景（南から）



瀬戸山Ⅰ遺跡 調査区遠景（北西から）



瀬戸山Ⅰ遺跡 東側調査区全景



瀬戸山Ⅰ遺跡 西側調査区全景



瀬戸山Ⅰ遺跡 SB29～32・34, SH06～08 他 完掘状況（北から）



瀬戸山Ⅰ遺跡 SB47・49～51・57 他 完掘状況（東から）



SB01 完掘状況（西から）



SB03 完掘状況（南から）

図版2



SB05 完掘状況（西から）



SB06 完掘状況（東から）



SB07 完掘状況（西から）



SB10 東半部完掘状況（南から）

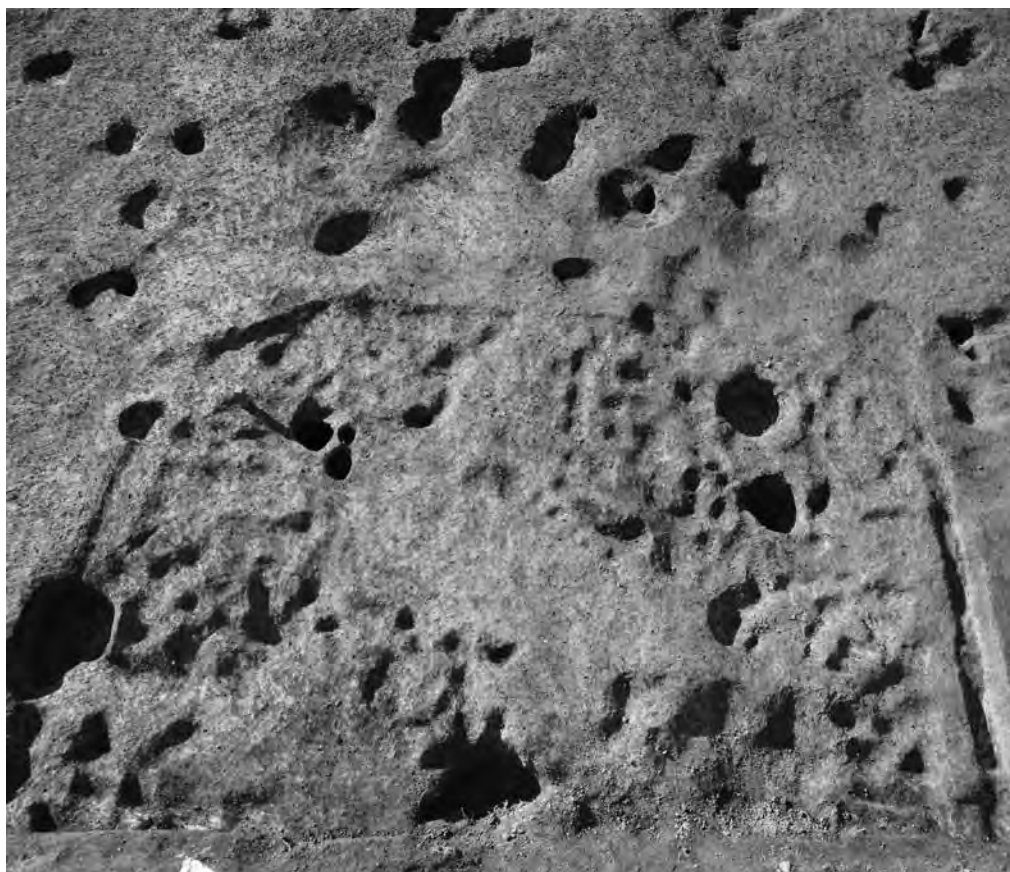
図版4



SB10 西半部完掘状況（北から）



SB11 東半部完掘状況（東から）

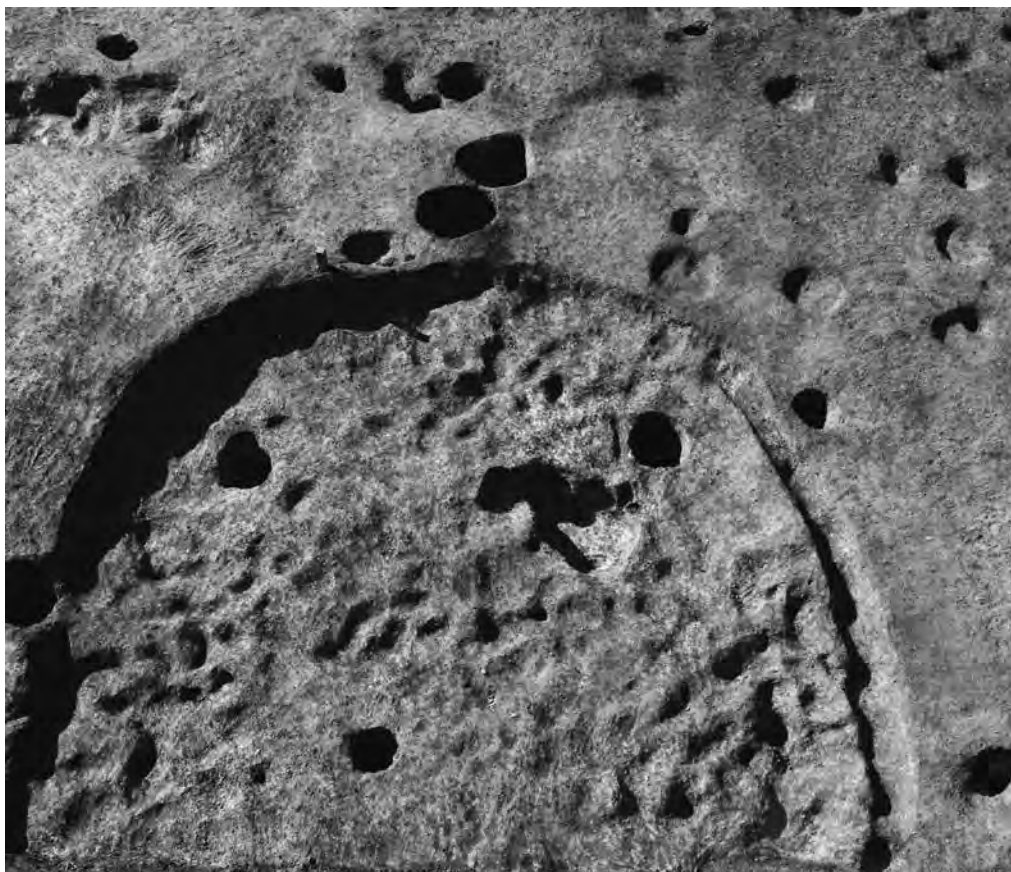


SB11 西半部完掘状況（東から）

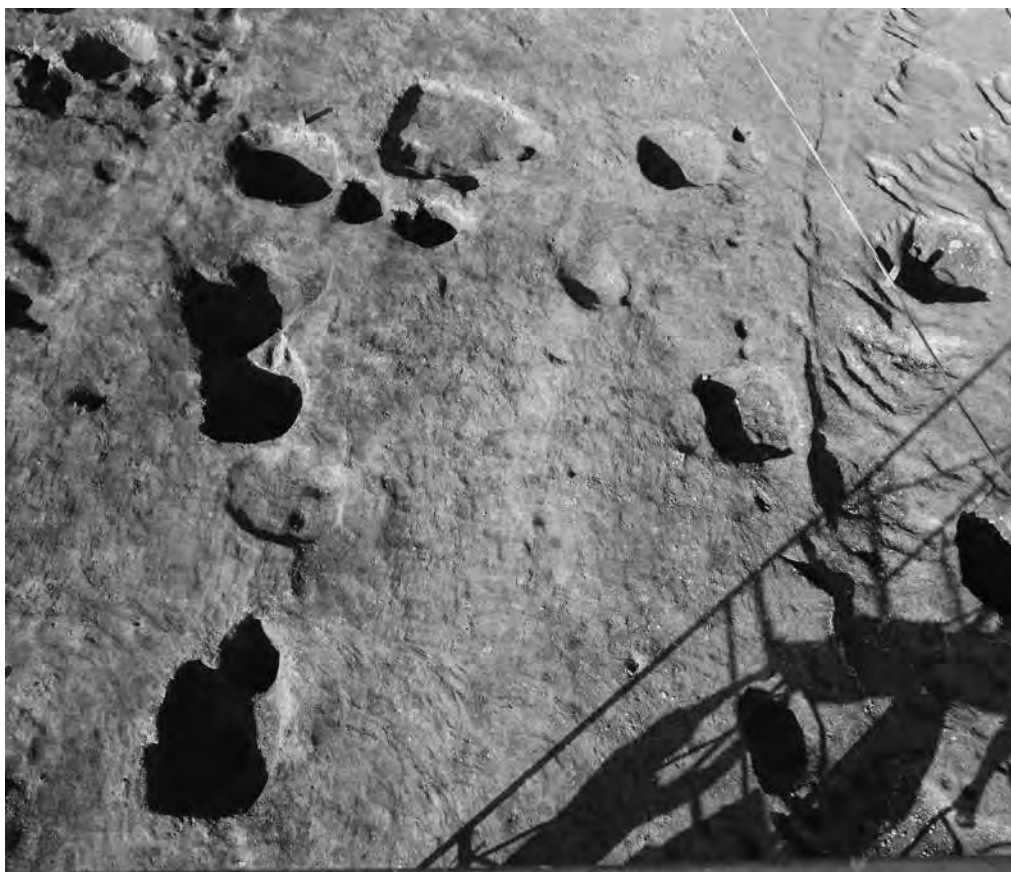


SB08・12 東半部完掘状況（東から）

図版6



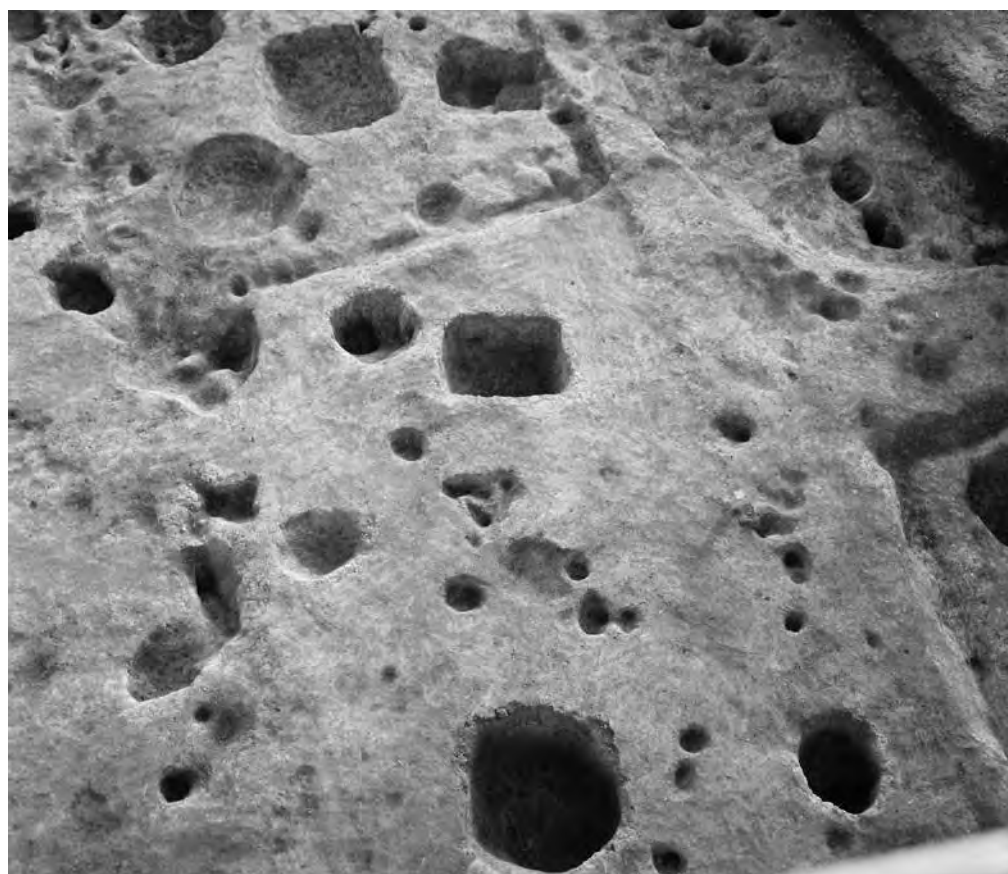
SB12 西半部完掘状況（東から）



SH01 完掘状況（南から）



SH02 完掘状況（南から）



SH03 東半部完掘状況（北から）

図版8



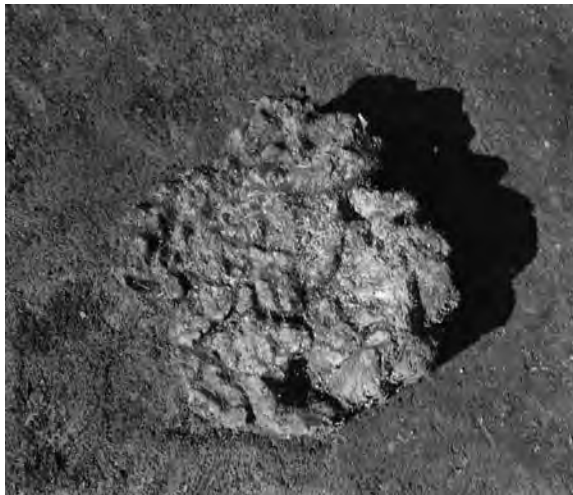
SH04 西半部完掘状況（東から）



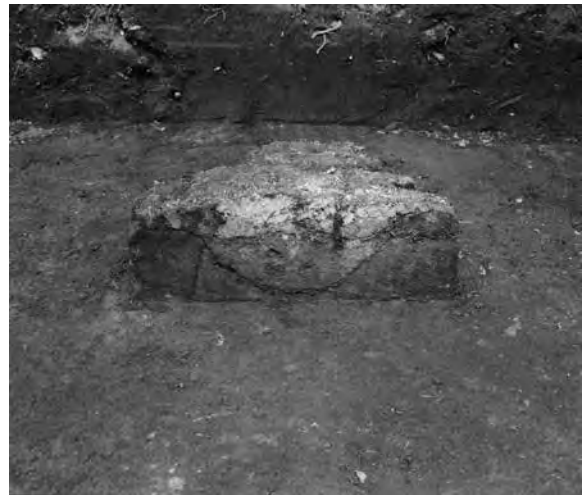
SB01 貼床検出状況（西から）



SB03 出土状況（北から）



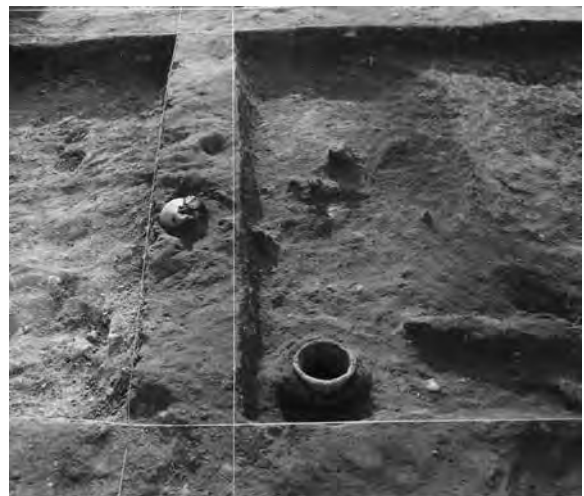
SB04 炉検出状況（南から）



SB04 炉断面（南から）



SB06 出土状況（南から）



SB06 出土状況（東から）

図版10



SB10 出土状況



SB11 貼床検出状況（東から）



SB11 出土状況（西から）



SB12 貼床検出状況（東から）



SP95 出土状況（東から）

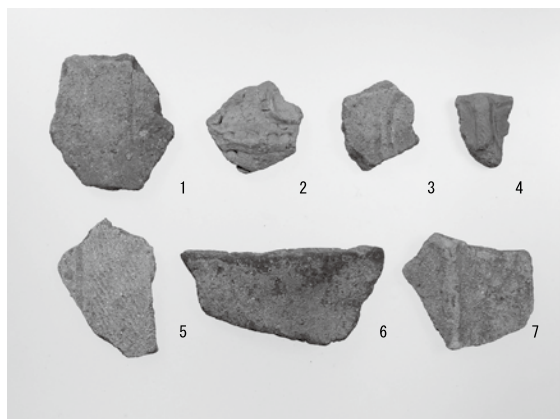


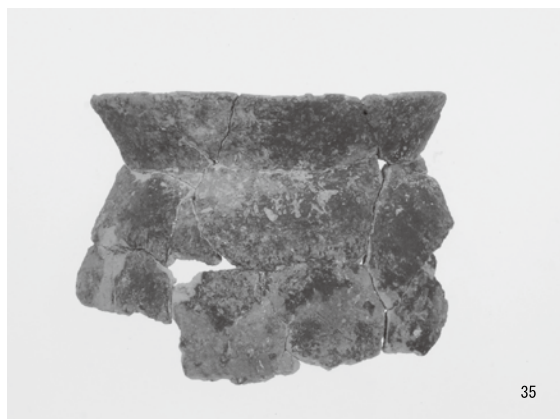
SP97 出土状況（南から）



D4 区出土状況（南から）

图版12





图版14





图版16



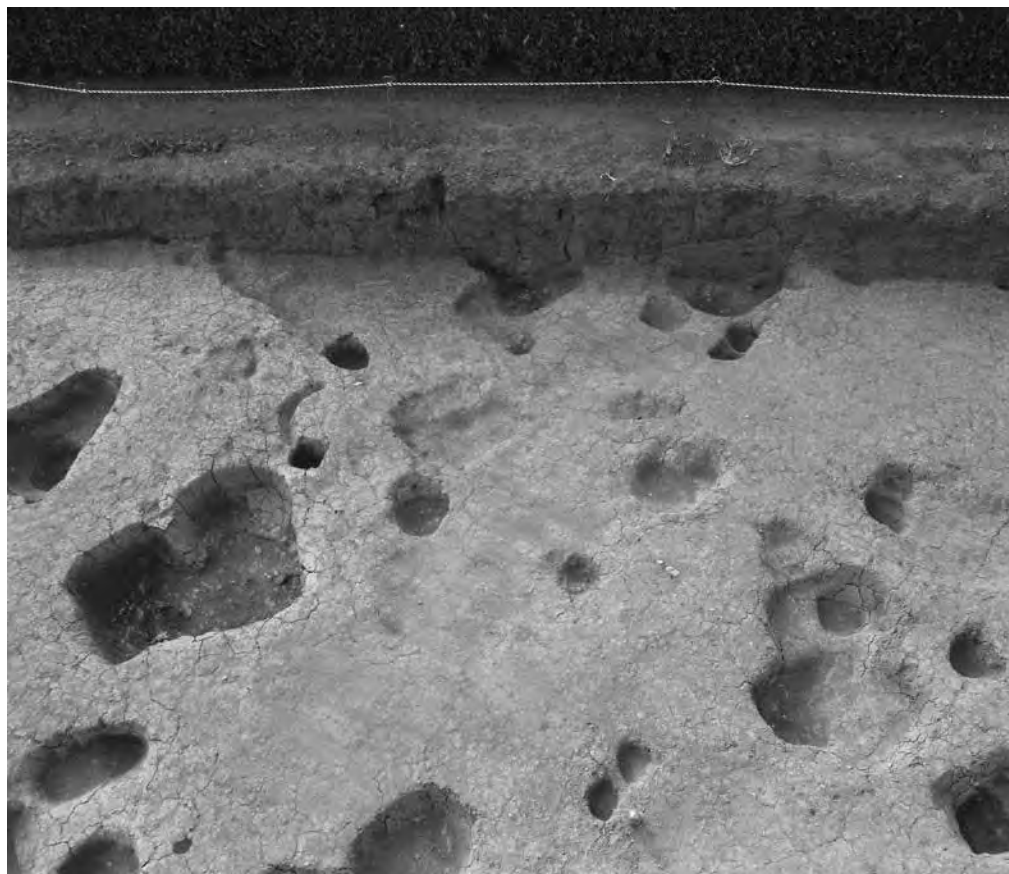


图版18





SB02 完掘状況（北西から）



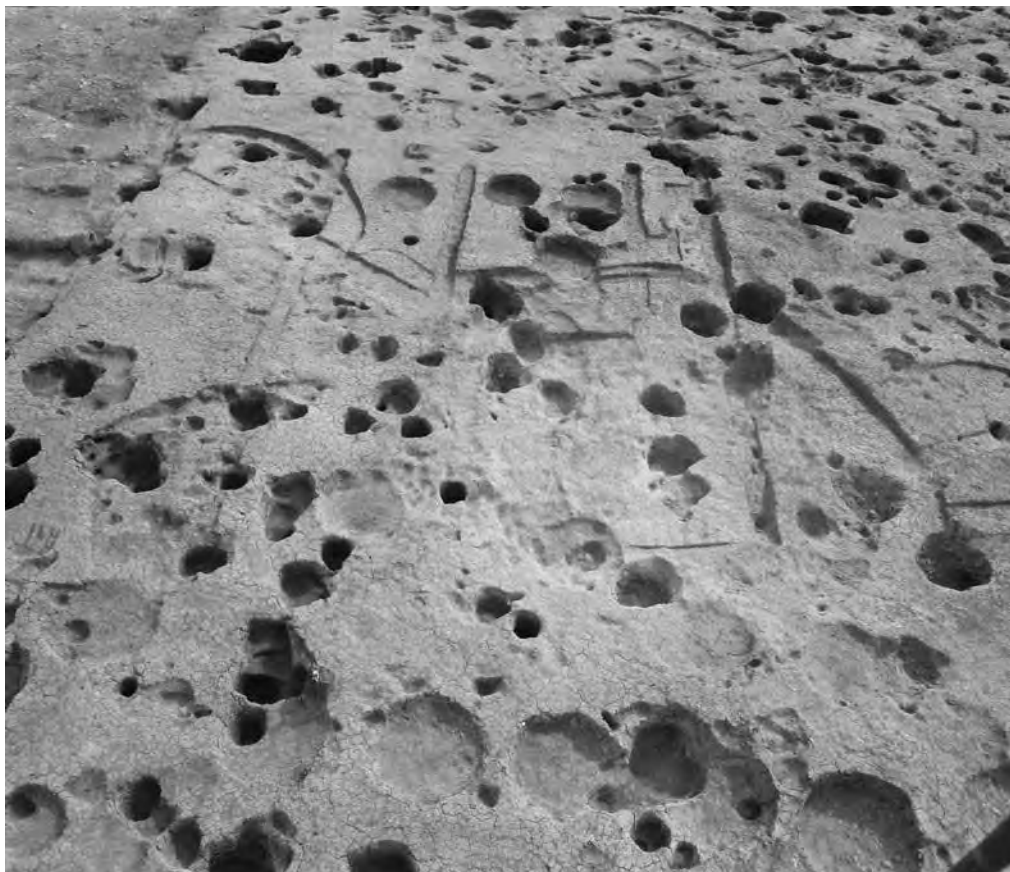
SB04・05 完掘状況（東から）



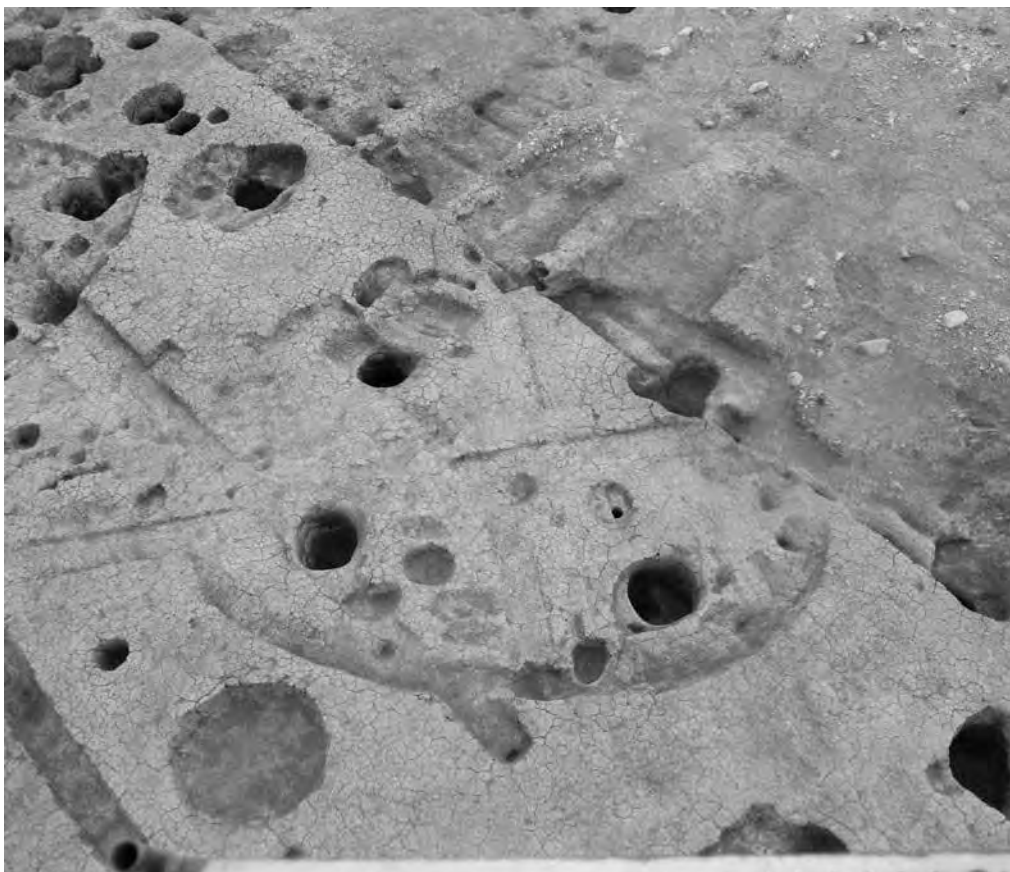
SB06・07 完掘状況（北から）



SB08・09・11・12 完掘状況（南から）



SB09・10・13・14 完掘状況（北から）



SB14 完掘状況（南西から）



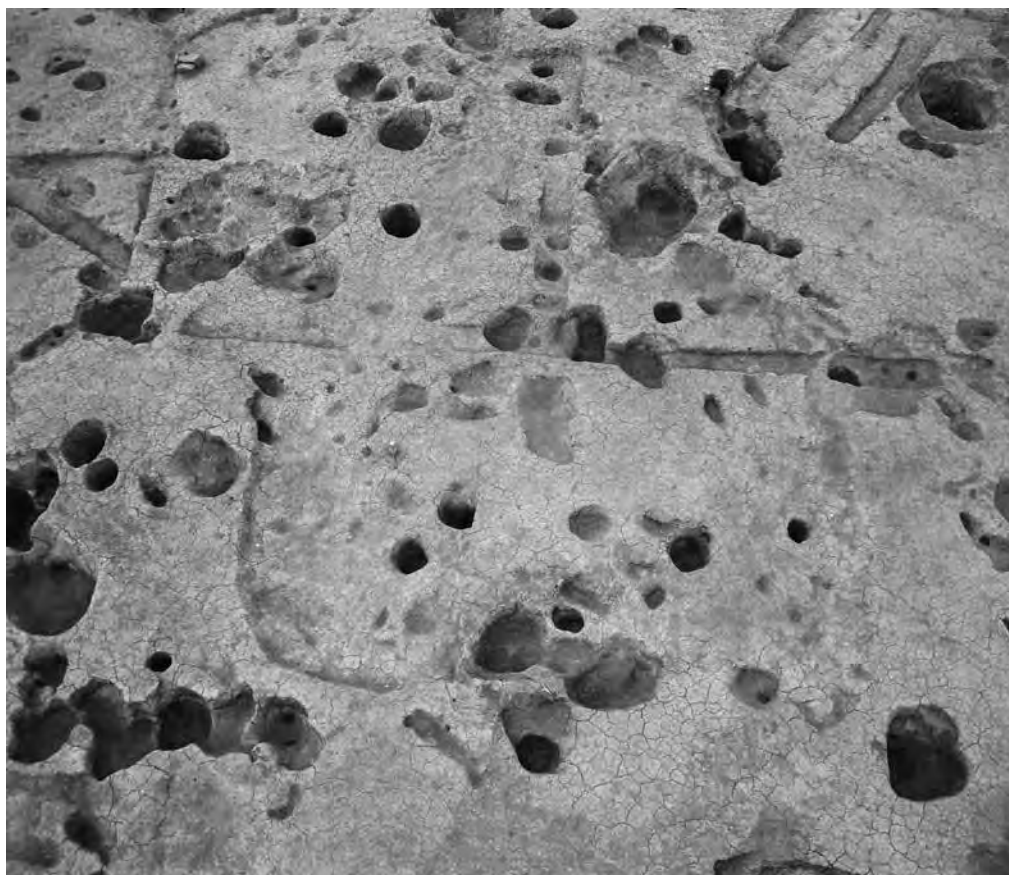
SB18 完掘状況（北西から）



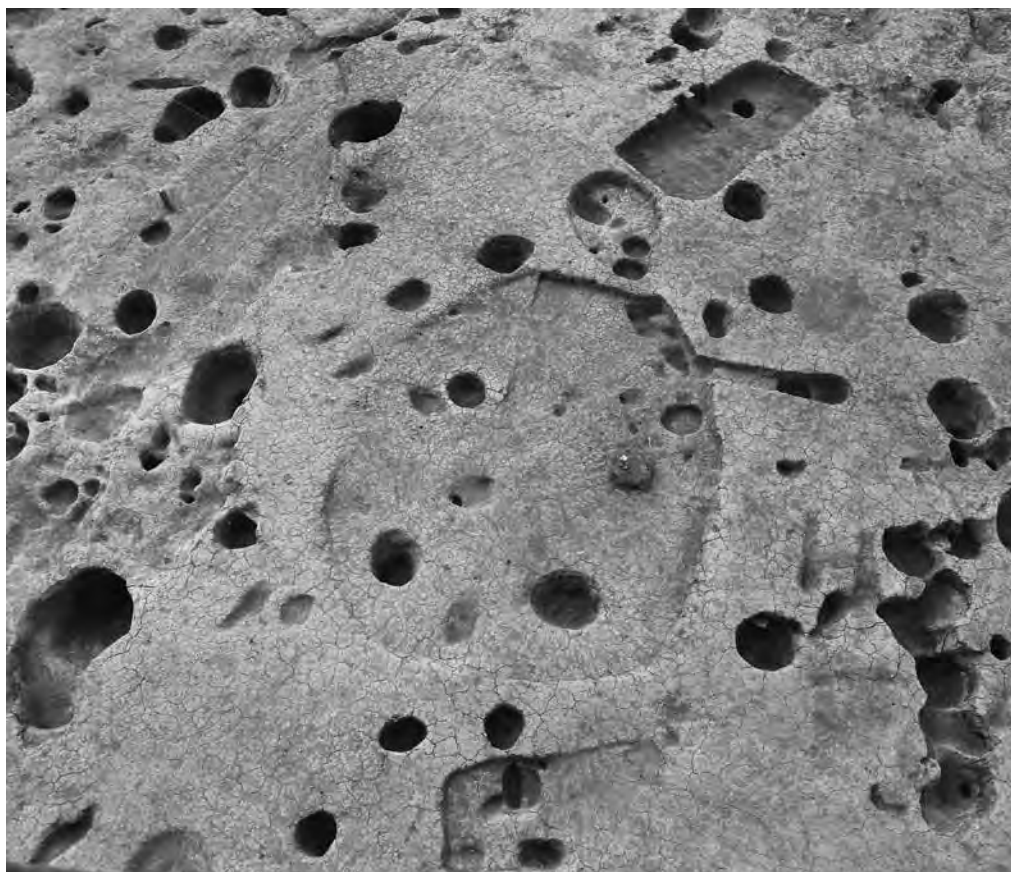
SB19・22 完掘状況（東から）



SB15・21・44・45 完掘状況（東から）



SB24 完掘状況（南東から）



SB25 完掘状況（東から）



SB27 完掘状況（北から）



SB28~32・34, SH06~08 完掘状況（北から）



SB38 完掘状況（北西から）



SB41 完掘状況（北から）



SB44 完掘状況（南から）



SB46 完掘状況（東から）



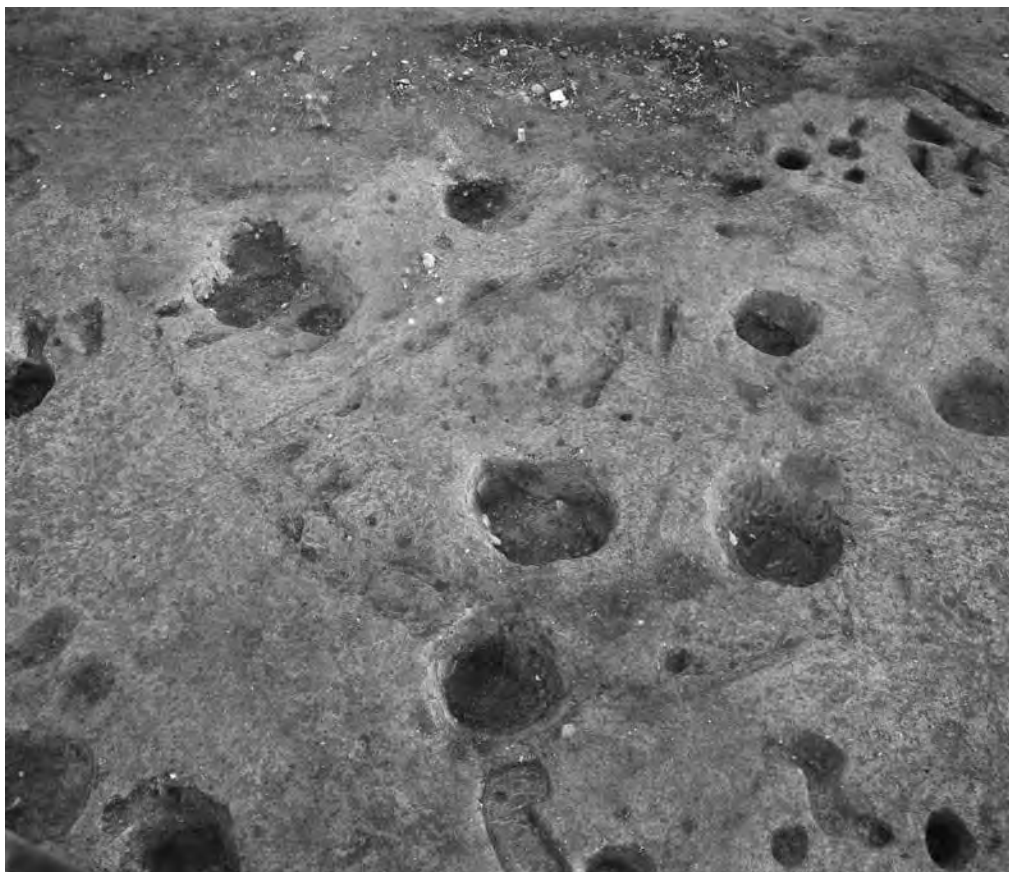
SB48・52～55 完掘状況（東から）



SB47・49～51・57 完掘状況（東から）



SB60 完掘状況（東から）



SB61・62 完掘状況（西から）



SB63 完掘状況（東から）

図版30



SH01・02 完掘状況（南から）



SH03～05・09 完掘状況（南から）



SK05 完掘状況（南から）



SK08 完掘状況（南から）



SP695 完掘状況（南から）

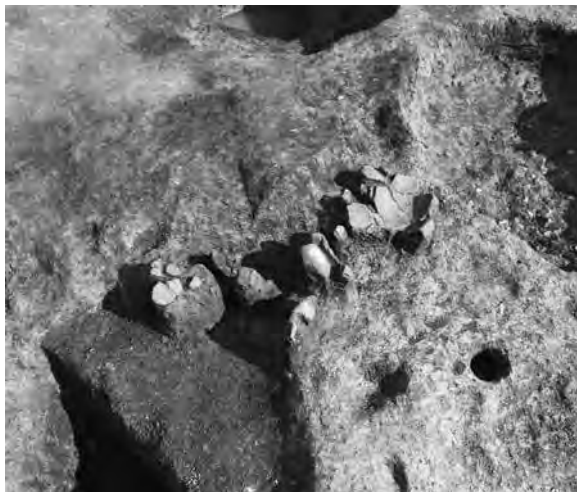


SP1205 完掘状況（東から）



SX13 完掘状況（東から）

図版34



SB07 出土状況（西から）



SB10 出土状況（西から）



SB10 出土状況（北から）



SB19 出土状況（西から）



SB27 炉検出状況（東から）



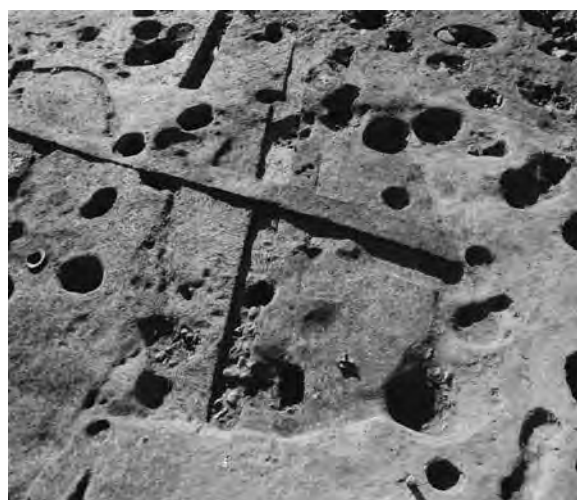
SB37 出土状況（北から）



SB46 出土状況（南から）



SB48 出土状況（東から）



SB49 出土状況（東から）



SB50 出土状況（東から）



SB60 貼り床検出状況（東から）



SK08 出土状況（北から）

図版36



SP395 出土状況（南から）



SP695 出土状況（西から）



SP1205 出土状況（南から）



SX03 出土状況（南西から）



SX04 出土状況（南から）

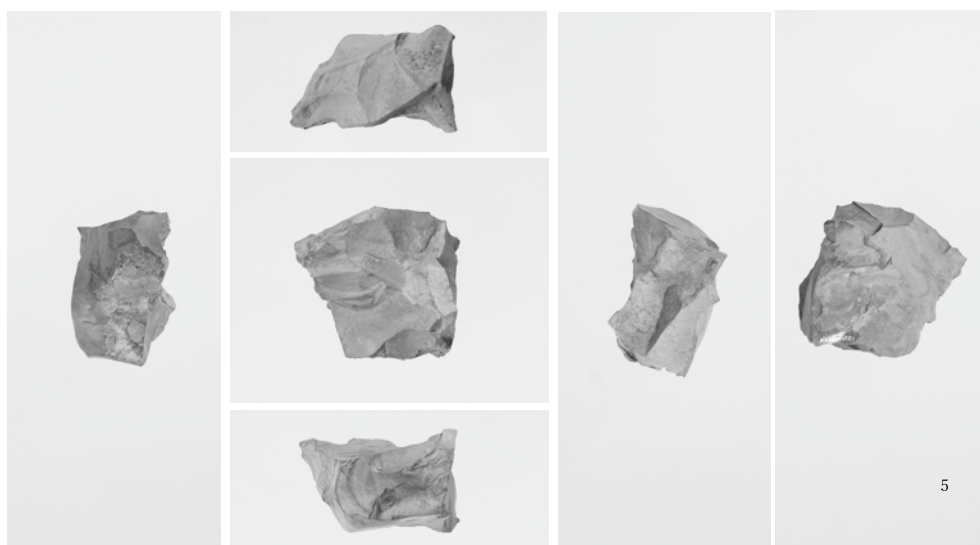
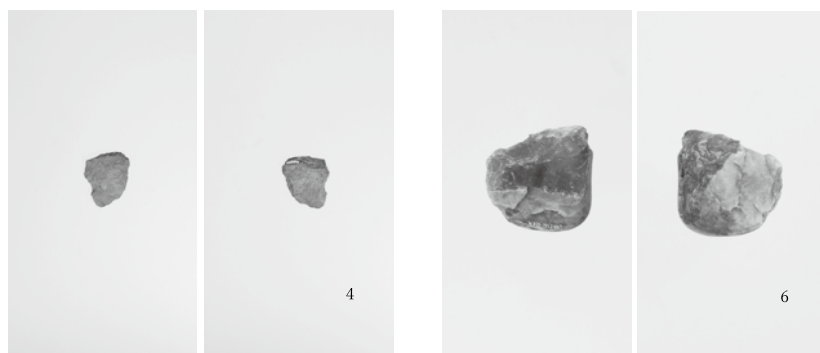
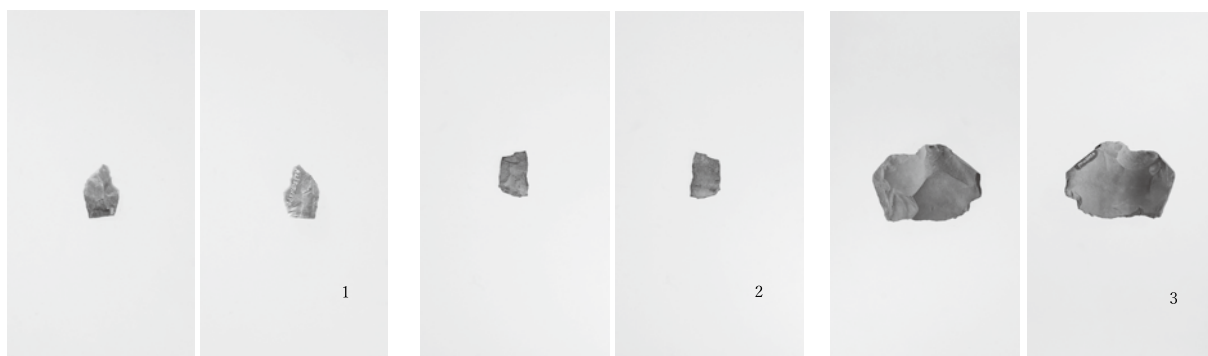


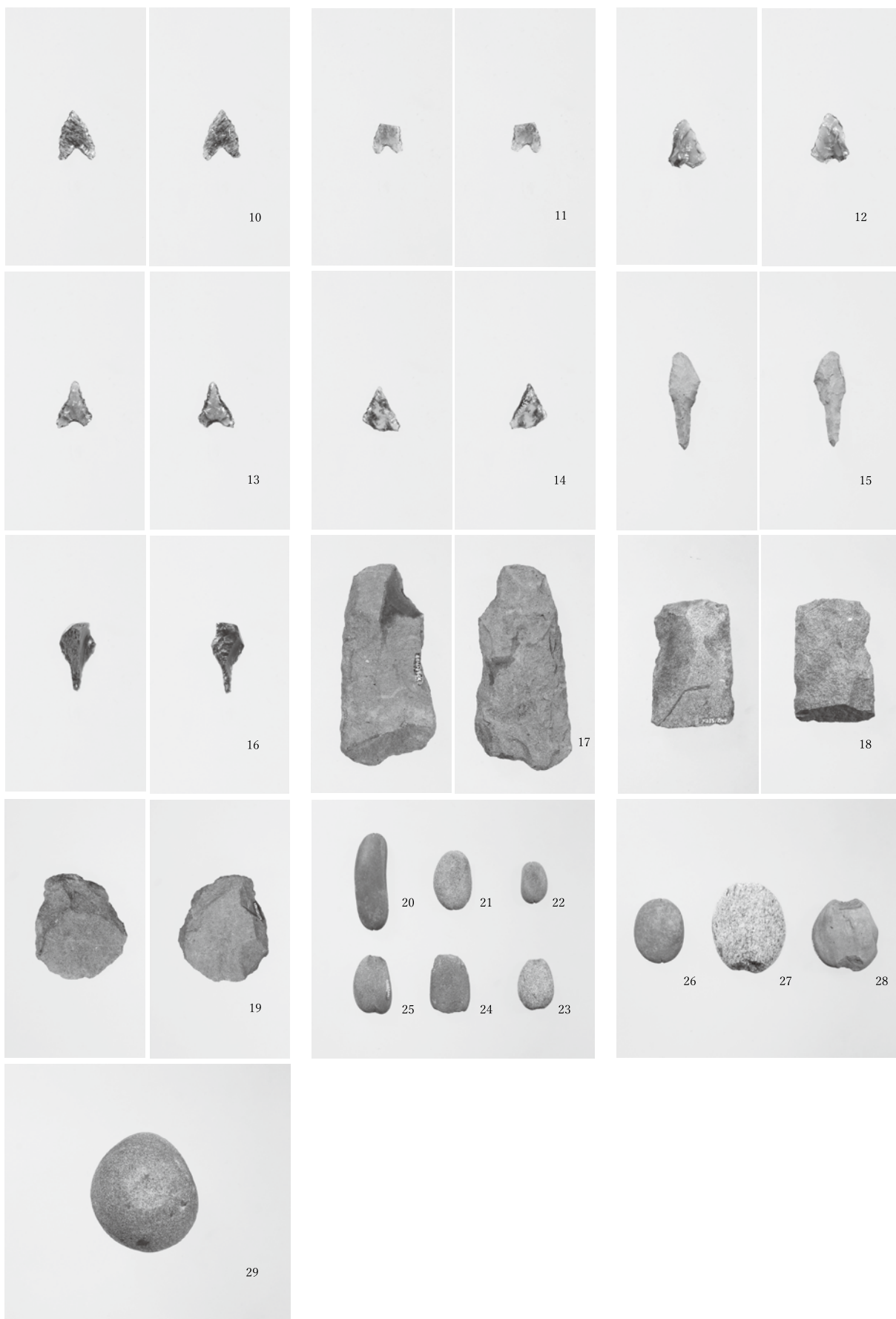
SX09 出土状況（東から）



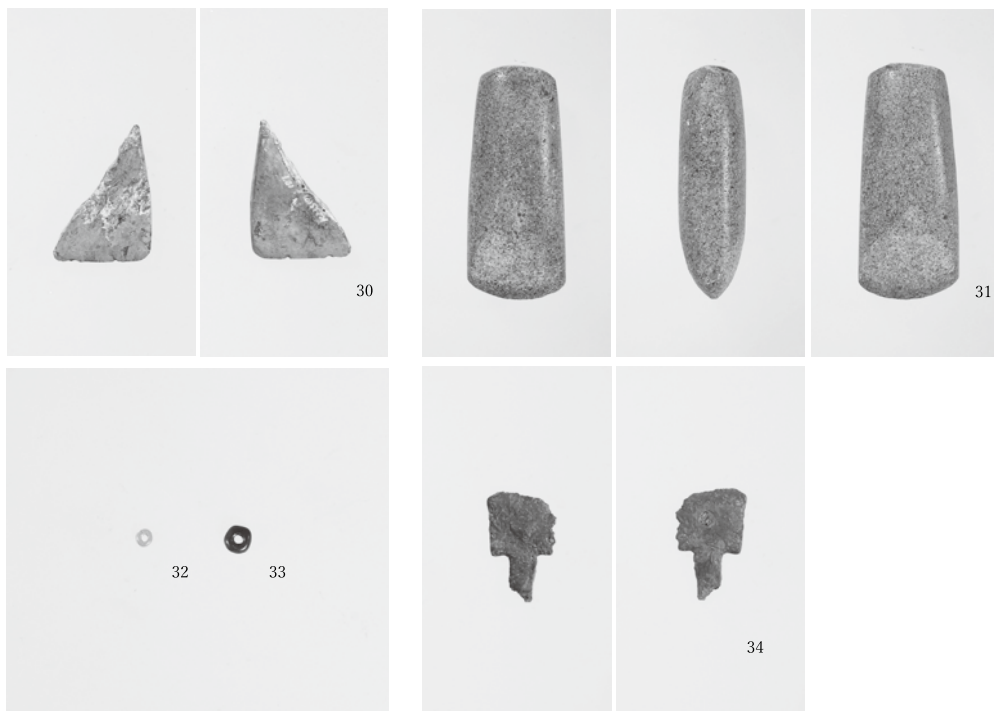
SX18 出土状況（南から）

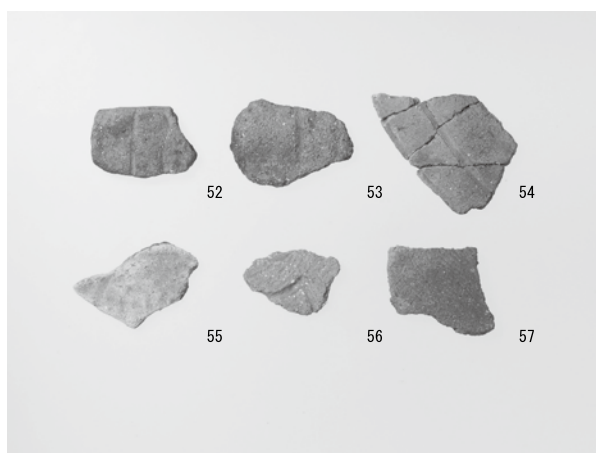
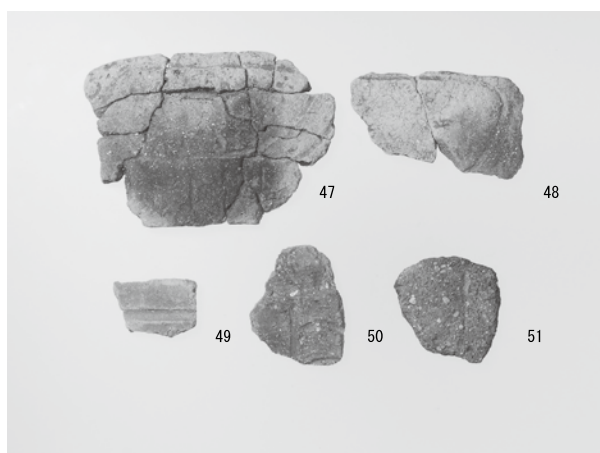
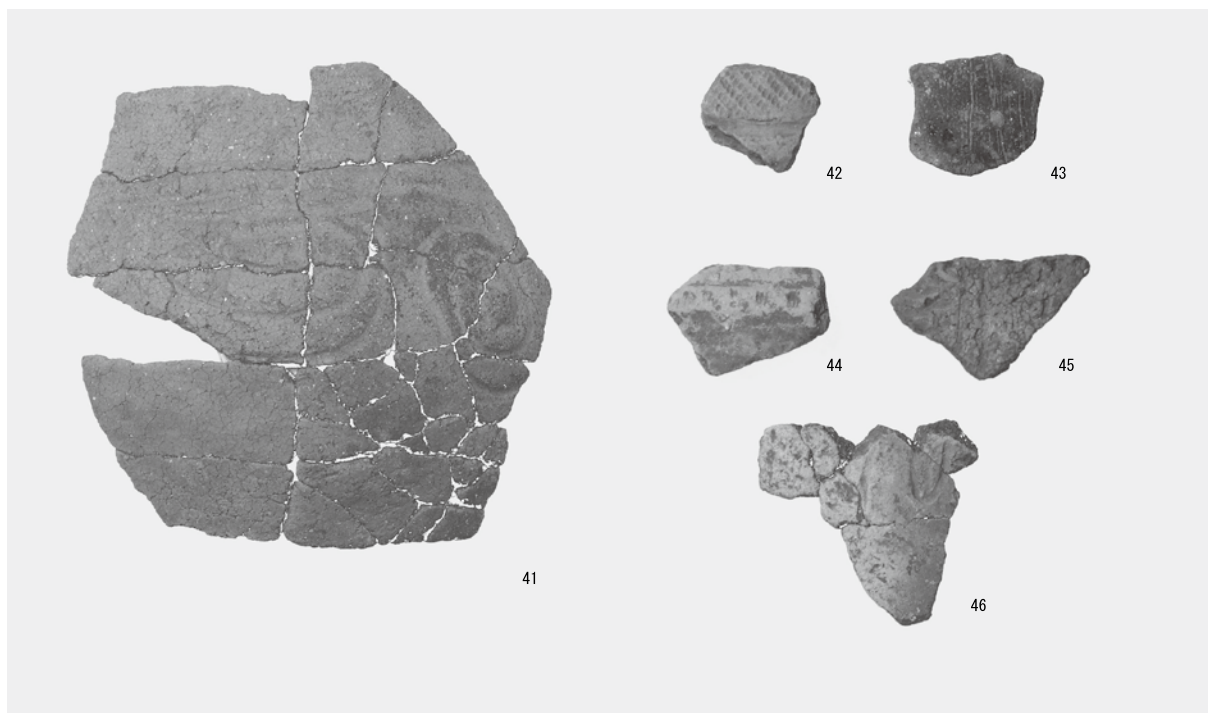
图版38



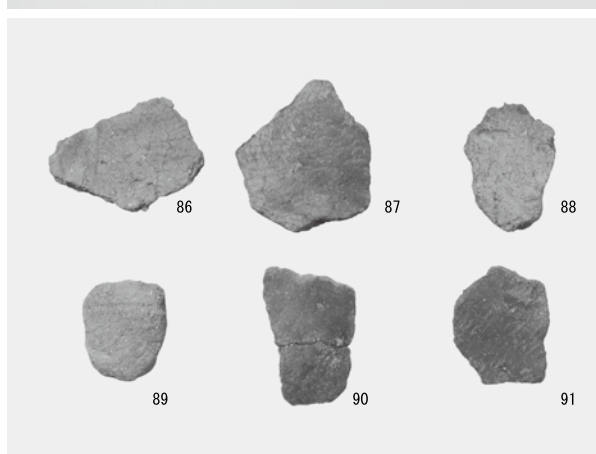
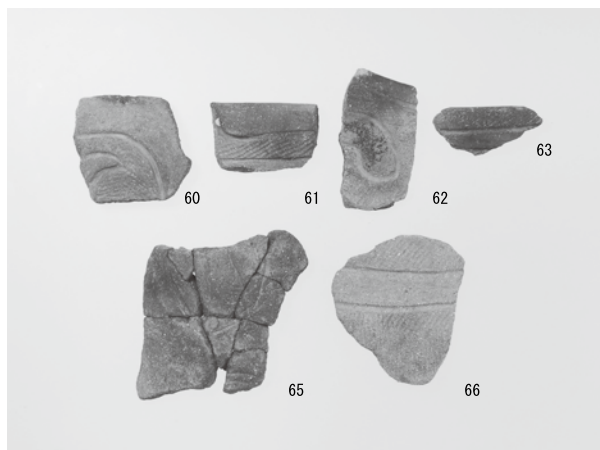


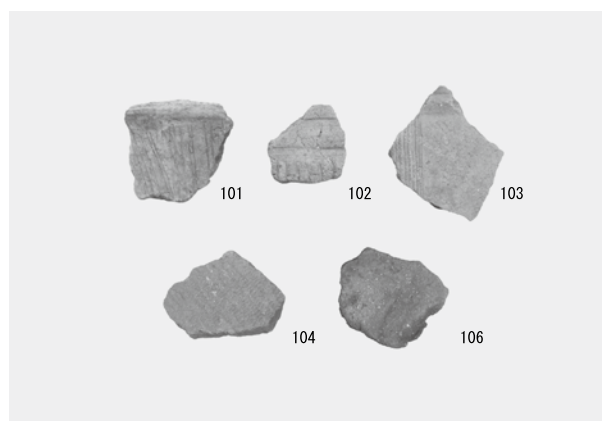
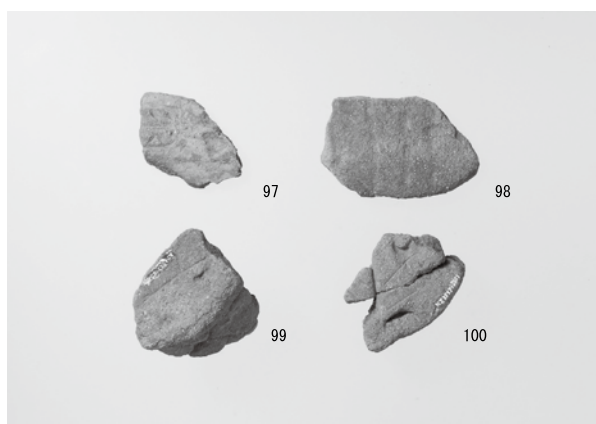
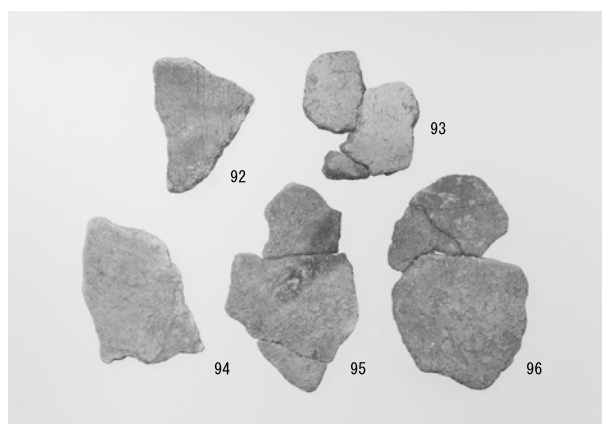
图版40



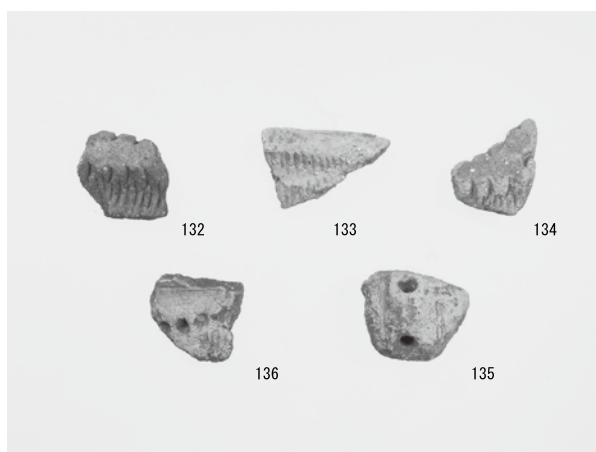
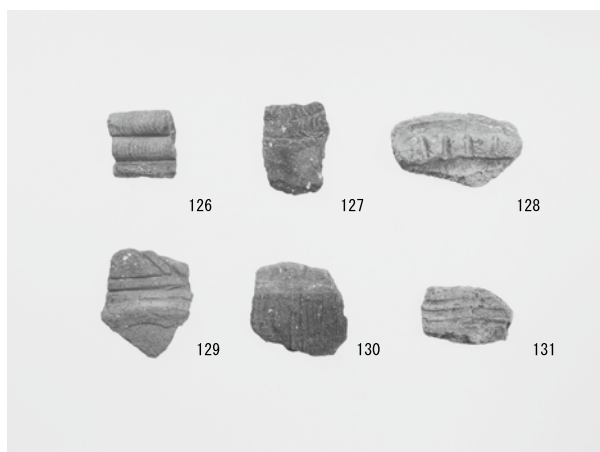
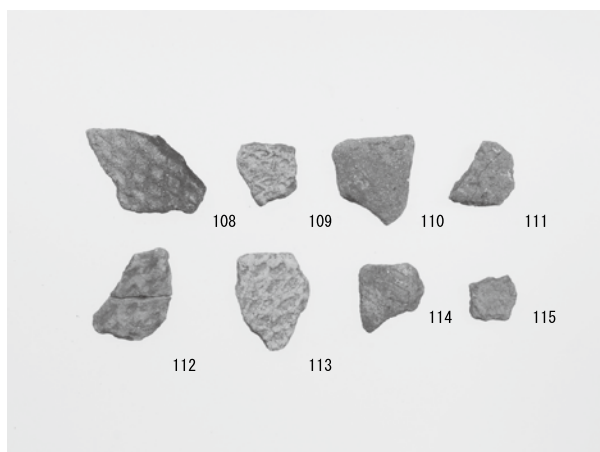


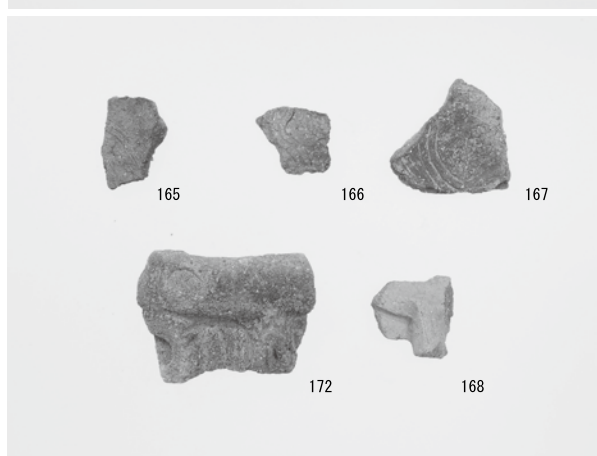
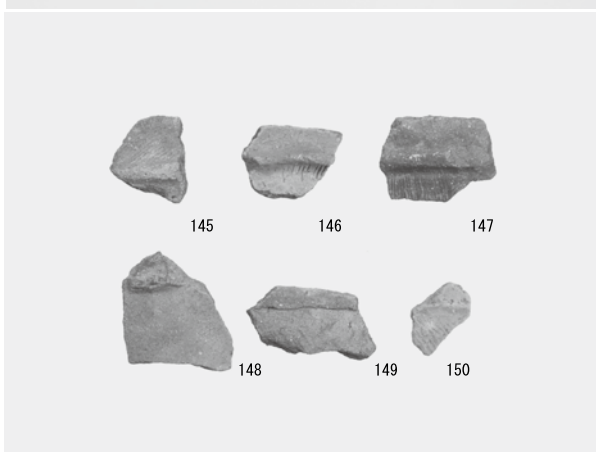
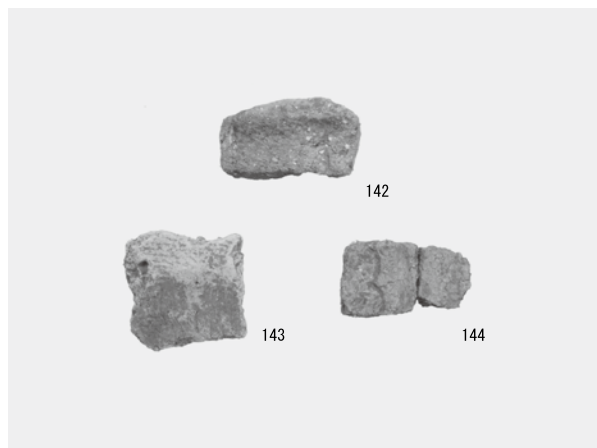
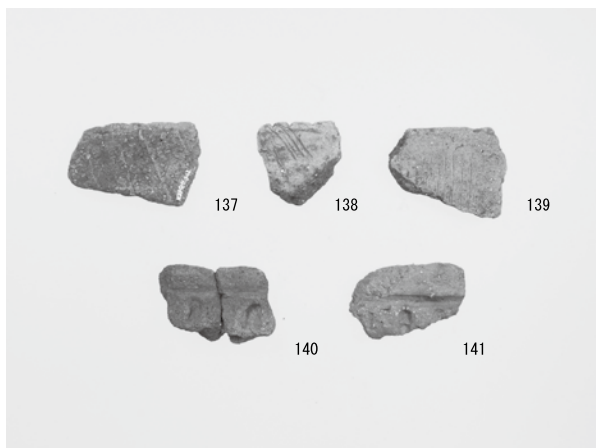
图版42



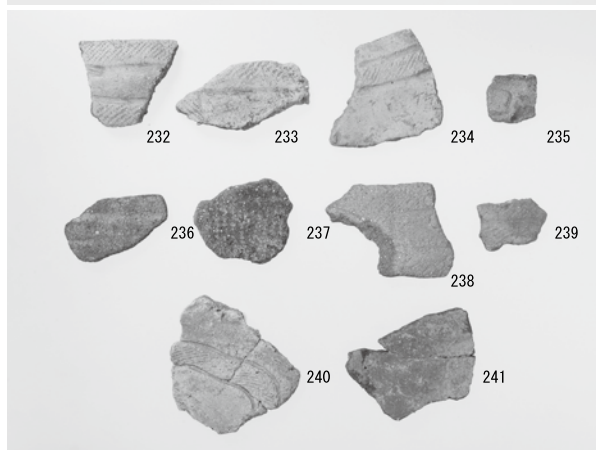
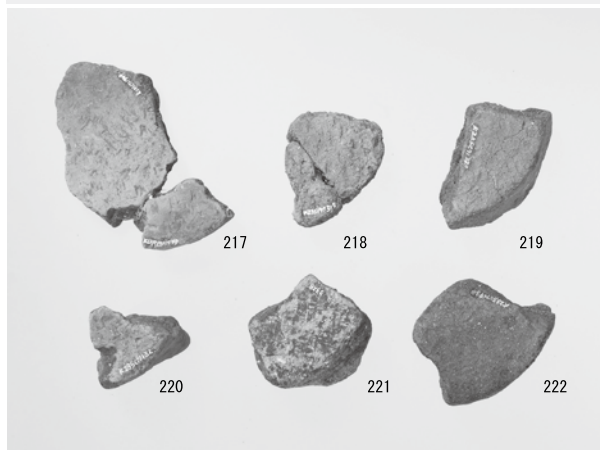
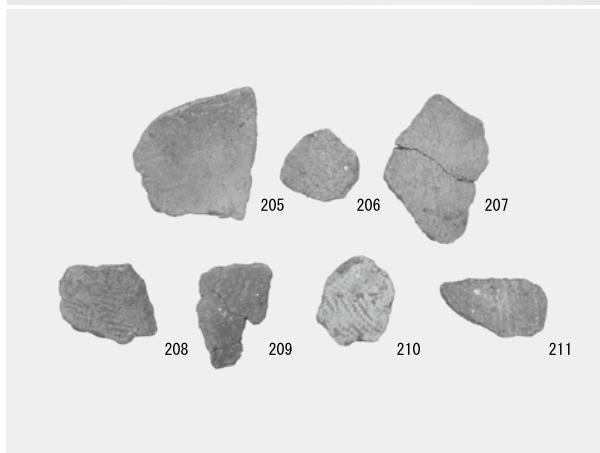
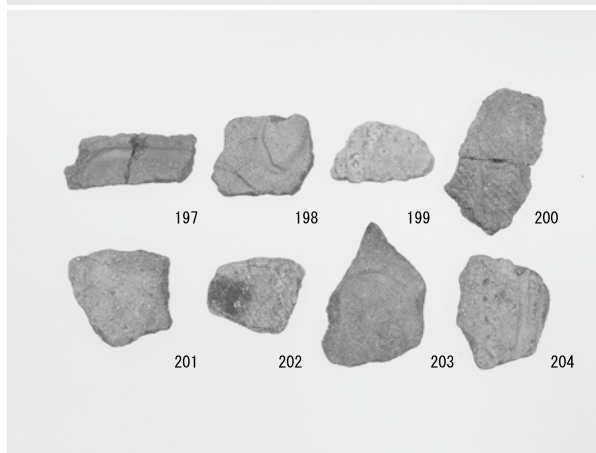
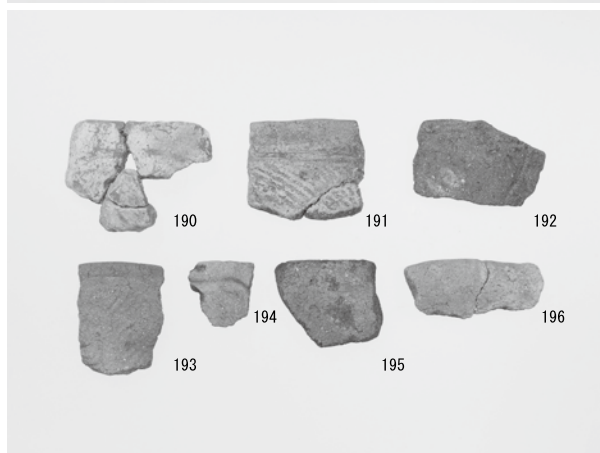
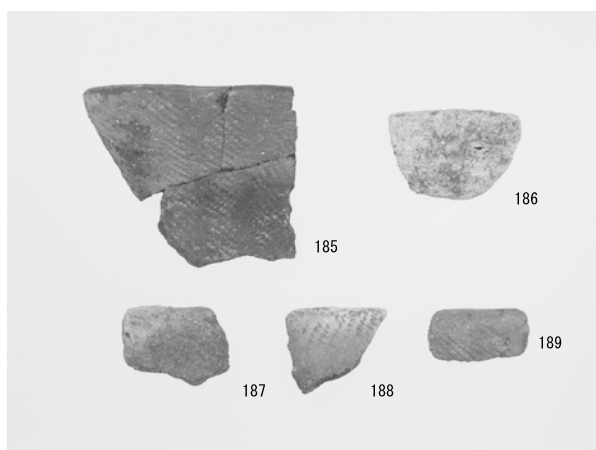
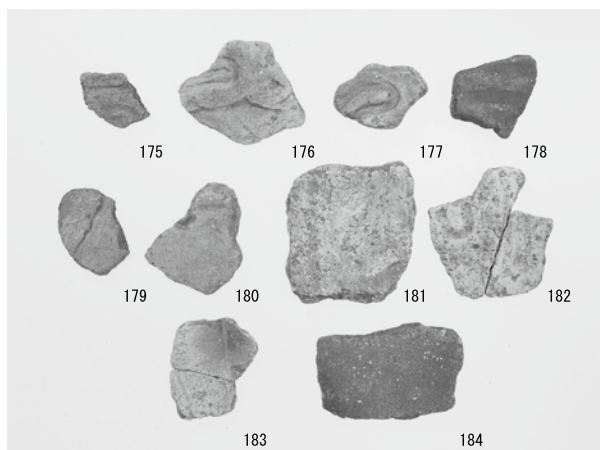


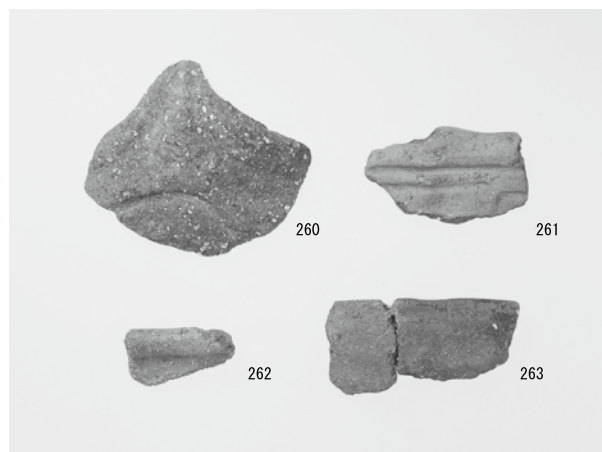
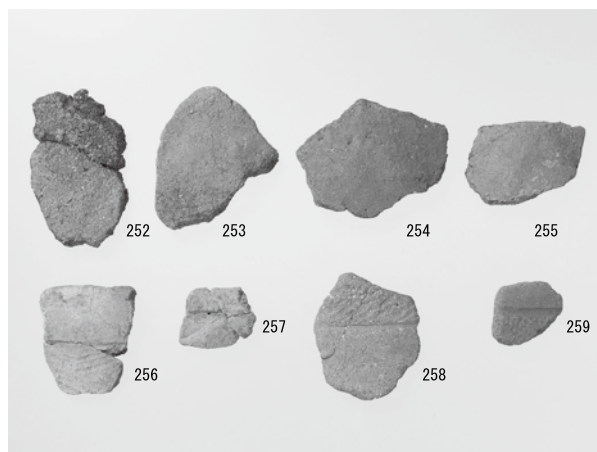
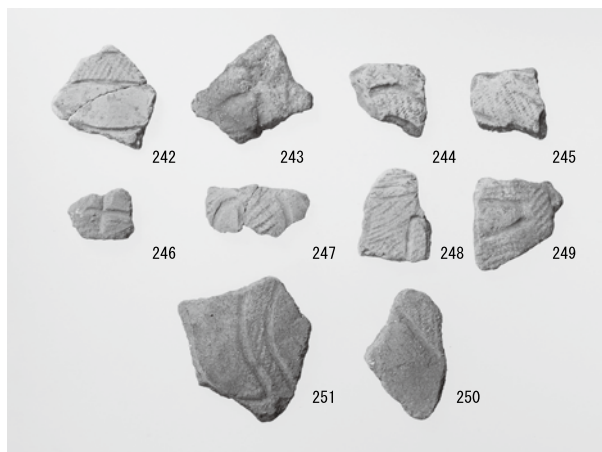
图版44





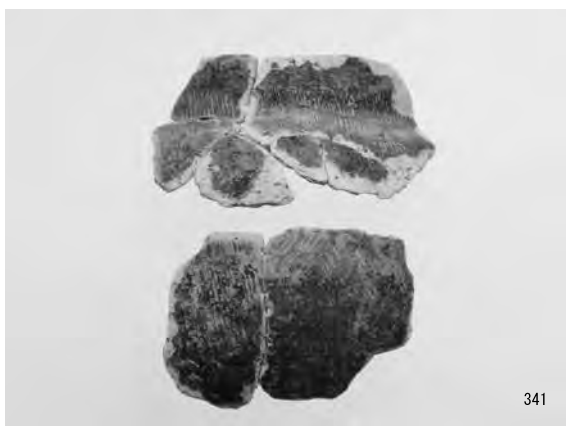
图版46



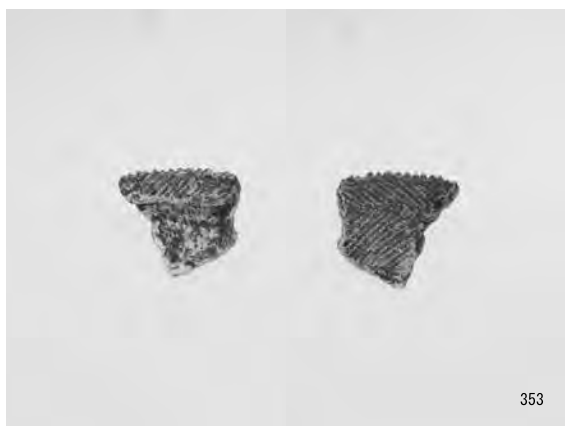


图版48



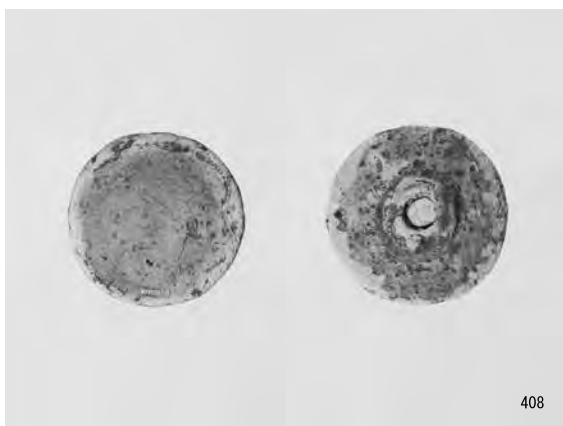


図版50





图版52



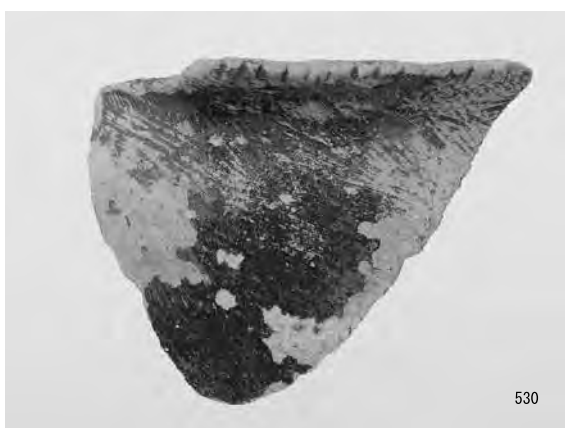


图版54





图版56





图版58





图版60



報告書抄録

ふ り が な	よしおかしたのだんいせきだい17じちょうさ・せどやま I いせきだい7じちょうさ はっくつちょうさほうこくしょ					
書 名	吉岡下ノ段遺跡第17次調査・瀬戸山 I 遺跡第7次調査 発掘調査報告書					
編 著 者 名	長井郁織・戸塚和美・井村広巳・大熊茂広・松本一男・夏目不比等・柴田慎平					
編 集 機 関	掛川市					
所 在 地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷1-1-1 TEL0537-21-1158					
発 行 機 関	掛川市					
発 行 年 月 日	2022年（令和4年）3月28日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
吉岡下ノ段遺跡	静岡県掛川市吉岡	50度 48分 00秒	133度 43分 00秒	2019年(令和元年) 7月29日 ～ 2019年(平成元年) 12月12日	2,140㎡	茶園改植
瀬戸山 I 遺跡	静岡県掛川市吉岡	50度 76分 00秒	134度 40分 00秒	2019年(令和元年) 5月7日 ～ 2019年(平成元年) 12月27日	2,600㎡	茶園改植
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
吉岡下ノ段遺跡	集落	旧石器時代		石器		
		縄文時代		土器・石器		
		弥生時代	竪穴住居跡	土器		
		古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土器		
		古代			和田岡原の河岸段丘上では、稀有な平安時代の土器が出土。市内においても、出土事例のない搬入品である甲斐型土器が出土。	
瀬戸山 I 遺跡	集落 墓地	旧石器		石器		
		縄文時代	竪穴住居跡	土器・石器		
		弥生時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土器・土製品	弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の重複が著しく、高い密集度を示す。	
		古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土器		
		中世	土坑群	山茶碗	何らかの規則性をもって群在する鎌倉時代の土坑群。	

吉岡下ノ段遺跡第17次
瀬戸山Ⅰ遺跡第7次
発掘調査報告書

2022年（令和4年）3月28日 発行

編集・発行 掛川市

〒436-8650

静岡県掛川市長谷1-1-1

TEL 0537-21-1111

印刷・製本 松本印刷株式会社

静岡県榛原郡吉田町川尻1282

TEL 0548-32-9451

